静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第95集

# 小笠山総合運動公園内遺跡群

平成6・7・8年度小笠山総合運動公園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

居村古墳群
居村遺跡
若作古墳群（Ｆ地区）
上石野古墳群

１９９７

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第95集

# 小笠山総合運動公園内遺跡群

平成6･7･8年度小笠山総合運動公園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

居村古墳群
居村遺跡
若作古墳群(Ｆ地区)
上石野古墳群

１９９７

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

本書は、小笠山総合運動公園建設事業に伴い実施された、計画地内に所在する居村古墳群・居村遺跡・若作古墳群・上石野古墳群の4遺跡の発掘調査の報告書である。

小笠山総合運動公園の計画地は、掛川・袋井両市の南部地域、小笠山丘陵北西麓に相当する地域であるが、計画地内にはいわゆる周知の遺跡はこれまで確認されておらず、遺跡の分布・実態は明らかにされていなかった。今回の調査により、居村遺跡において弥生時代後期に丘陵上に営まれた集落跡、若作古墳群・上石野古墳群において木棺直葬の円墳からなる群集墳、また、居村古墳群においては円礫積み横穴式石室を主体部とする群集墳など、弥生時代・古墳時代の特色ある遺跡が明らかにされ、当地域の歴史を解明するうえでの新たな資料を検出することができた。

居村古墳群は、7世紀中頃に築造された石室墳であるが、掛川市南部ではこれまで石室墳の所在はあまり知られておらず、後期群集墳の墓制として、横穴墓の分布が卓越している当地域での調査事例として重要な位置を占めるものである。また、石室は攪乱・崩落を一部受けてはいたものの、天井石も残存しており、比較的良好な状態で発見されたのは幸いであった。

また、若作古墳群・上石野古墳群は古墳時代中期に造墓の開始されたいわゆる初期群集墳の調査事例となったわけであるが、当地域の初期群集墳に関しては愛野向山古墳群などほぼ同時期に形成された群集墳の調査事例と併せ、その被葬者集団の性格等に関する論議も活発に行われてきている。

居村遺跡においては、弥生時代後期の住居跡や掘立柱建物跡、土器棺墓等が検出され、当地域で多くみられる丘陵上に営まれた集落跡の様相が明らかとなった。これら4遺跡の調査の成果が今後の当地域の歴史研究の一助となれば、幸いである。

現地調査および資料整理、本書の作成にあたり、静岡県都市住宅部公園緑地課・静岡県小笠山総合運動公園建設事務所・掛川市教育委員会・袋井市教育委員会・静岡県教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関および関係者の方々、また地元の皆様には、多大な御協力、御理解をいただき深く感謝申し上げる。また、遺跡の解釈について多くの助言・指導をいただいた方々、現地での発掘作業、また整理作業にあたられた方々に厚く御礼申し上げたい。

1997年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

# 例　　言

1．本書は、静岡県掛川市平野に所在する居村古墳群および居村遺跡、ならびに袋井市愛野に所在する若作古墳群（Ｆ地区）および上石野古墳群の発掘調査報告書である。

2．調査は小笠山総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財調査として、静岡県小笠山総合運動公園建設事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、掛川市教育委員会・袋井市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3．調査は、平成５年度に実施された掛川市・袋井市の両教育委員会の踏査に基づき、平成６年度に一部確認調査を実施、平成７年９月から平成８年10月まで確認調査と並行する形で現地発掘調査を実施した。また整理作業は、現地調査に引き続き平成９年３月まで行った。

4．調査体制は次のとおりである。

平成６年度（確認調査）

所長　斎藤　忠　　常務理事　鈴木　勲

調査研究部長　小崎　章男　　調査研究部次長　栗野　克巳

調査研究三課長　渡瀬　治　　調査研究員　加藤　理文・岩本　貴

平成７年度（確認調査・本調査）

所長　斎藤　忠　　副所長　池谷　和三　　常務理事　三村田　昌昭

調査研究部長　小崎　章男　　調査研究部次長　栗野　克巳

調査研究三課長　渡瀬　治　　調査研究員　長谷川　睦

平成８年度（確認調査・本調査・資料整理）

所長　斎藤　忠　　副所長　池谷　和三　　常務理事　三村田　昌昭

調査研究部長　石垣　英夫　　調査研究部次長　栗野　克巳

調査研究三課長　渡瀬　治　　調査研究員　飯塚　晴夫・柴田　睦・長谷川　睦

5．平成７年度の現地調査では井鍋誉之(当研究所技術作業員)の協力を得た。

6．本書の執筆は長谷川がおこなった。

7．石材の鑑定については、伊藤通玄氏（静岡大学名誉教授）に依頼した。

8．赤色顔料の鑑定については、肥塚隆保氏（奈良国立文化財研究所)、降旗順子氏（京都大学大学院生）に依頼した。

9．玉類・耳環の材質分析については、望月明彦氏（沼津工業高等専門学校助教授）に依頼した。

10．遺物の撮影は、４×５判について楠本真紀子氏（写房　楠華堂）に委託し、６×７判については杉山すず代（当研究所技術職員）が実施した。

11．現地調査および本書の作成に当たっては、次の方々に有益な御指導・御助言をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。(敬称略)

市原壽文・長田實・田辺昭三・向坂鋼二

12．本書で使用した遺構の表記は次の通りである。

ＳＢ　住居跡　　ＳＨ　掘立柱建物跡　　ＳＦ　土坑　　ＳＸ　不明遺構　　ＳＰ　ピット

13．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

14．発掘調査の資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

# 目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　発掘調査の経過 …… 3
第II章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第III章　居村古墳群の調査
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　遺構と遺物 …… 11
　　１．居村１号墳
　　２．居村２号墳
　　３．居村３号墳
　第３節　まとめ …… 33
第IV章　居村遺跡の調査
　第１節　調査の概要 …… 36
　第２節　遺構と遺物 …… 36
　第３節　まとめ …… 60
第Ⅴ章　若作古墳群（Ｆ地区）の調査
　第１節　調査の概要 …… 63
　第２節　遺構と遺物 …… 64
　　１．若作Ｆ１号墳
　　２．若作Ｆ２号墳
　第３節　まとめ …… 71
第VI章　上石野古墳群の調査
　第１節　調査の概要 …… 73
　第２節　遺構と遺物 …… 74
　　１．上石野１号墳
　　２．上石野２号墳
　　３．上石野３号墳
　　４．上石野４号墳
　第３節　まとめ …… 93

# 挿 図 目 次


第 1 図　調査地点および周辺地形図 …… 1
第 2 図　周辺遺跡分布図 …… 7
第 3 図　居村古墳群全体図 …… 12
第 4 図　居村１号墳墳丘図 …… 13
第 5 図　１号墳墳丘断面図 …… 14
第 6 図　１号墳天井石および閉塞の状況 …… 15
第 7 図　１号墳石室実測図 …… 17-18
第 8 図　１号墳墓坑および石室断面図 …… 19
第 9 図　１号墳石室基底石・墓坑実測図 …… 20
第 10 図　１号墳石室完掘図 …… 21
第 11 図　１号墳遺物出土状況図 …… 22
第 12 図　１号墳出土土器 …… 23
第 13 図　１号墳出土大刀 …… 25
第 14 図　１号墳出土鉄製品 …… 26
第 15 図　１号墳出土装身具 …… 26
第 16 図　居村２号墳石室実測図 …… 27-28
第 17 図　２号墳遺物出土状況図 …… 30
第 18 図　２号墳出土土器 …… 31
第 19 図　２号墳出土金属製品 …… 31
第 20 図　居村３号墳石室実測図 …… 32
第 21 図　３号墳出土遺物 …… 33
第 22 図　居村遺跡遺構全体図 …… 37-38
第 23 図　ＳＢ１、ＳＢ５実測図 …… 39
第 24 図　ＳＢ２実測図 …… 40
第 25 図　ＳＢ３実測図 …… 41
第 26 図　ＳＢ４実測図 …… 42
第 27 図　ＳＦ１、ＳＦ２実測図 …… 43
第 28 図　ＳＦ４、ＳＦ５、ＳＦ６、ＳＦ７、ＳＦ８実測図 …… 44
第 29 図　ＳＦ９、ＳＦ10、ＳＦ11実測図 …… 45
第 30 図　ＳＰ１、ＳＰ２、ＳＰ３実測図 …… 46
第 31 図　ＳＨ１実測図 …… 46
第 32 図　ＳＸ１実測図 …… 47
第 33 図　ＳＸ２実測図 …… 48
第 34 図　ＳＸ３実測図 …… 48
第 35 図　居村遺跡出土遺物実測図（１） …… 51
第 36 図　居村遺跡出土遺物実測図（２） …… 52
第 37 図　居村遺跡出土遺物実測図（３） …… 53
第 38 図　居村遺跡出土遺物実測図（４） …… 54
第 39 図　居村遺跡出土遺物実測図（５） …… 55

第 40 図　居村遺跡出土遺物実測図（6）…… 56
第 41 図　若作古墳群Ｆ地区調査区全体図 …… 64
第 42 図　若作Ｆ１号墳墳丘図 …… 65
第 43 図　Ｆ１号墳主体部実測図 …… 66
第 44 図　若作Ｆ２号墳墳丘図 …… 67
第 45 図　Ｆ２号墳主体部上面集石実測図 …… 68
第 46 図　Ｆ２号墳主体部実測図 …… 69
第 47 図　Ｆ２号墳出土遺物 …… 70
第 48 図　上石野1・２号墳周辺地形図 …… 73
第 49 図　上石野１号墳墳丘図 …… 74
第 50 図　１号墳主体部実測図 …… 75
第 51 図　１号墳出土大刀 …… 76
第 52 図　１号墳出土鉄製品 …… 77
第 53 図　１号墳出土鉄鏃 …… 78
第 54 図　上石野２号墳墳丘図 …… 79
第 55 図　２号墳主体部実測図 …… 80
第 56 図　２号墳出土遺物 …… 80
第 57 図　上石野３・４号墳周辺地形図 …… 81
第 58 図　上石野３号墳墳丘図 …… 82
第 59 図　３号墳主体部実測図 …… 83
第 60 図　３号墳鉄鏃出土状況図 …… 84
第 61 図　３号墳出土大刀 …… 84
第 62 図　３号墳出土鉄鏃 …… 85
第 63 図　３号墳出土馬具 …… 85
第 64 図　３号墳出土馬具（復原図） …… 86
第 65 図　３号墳墳丘周辺出土土器 …… 86
第 66 図　上石野４号墳墳丘図 …… 87
第 67 図　４号墳第１主体部実測図 …… 88
第 68 図　４号墳第２主体部実測図 …… 89
第 69 図　４号墳第１主体部出土鉄剣 …… 90
第 70 図　４号墳第１主体部出土鉄鏃・刀子 …… 91
第 71 図　４号墳第２主体部ガラス小玉・刀子出土状況図…… 91
第 72 図　４号墳第２主体部出土ガラス小玉・刀子 …… 92

# 挿表目次

表１　調査工程表 …… 3
表２　周辺遺跡地名表 …… 8
表３　居村古墳群出土土器観察表 …… 24
表４　居村遺跡出土土器観察表（1） …… 57
表５　居村遺跡出土土器観察表（2） …… 58

表６　居村遺跡出土土器観察表（3）…… 59

# 図 版 目 次

図版１　居村古墳群
１．居村古墳群調査区全景（南より）
２．１号墳墳丘調査前（南西より）
図版２　居村古墳群
１．１号墳墳丘全景（南より）
２．１号墳天井石検出状況（南より）
図版３　居村古墳群
１号墳石室全景（南より）
図版４　居村古墳群
１．１号墳玄室内（奥壁付近・南より）
２．１号墳石室（奥壁付近より）
３．１号墳羨道部（玄室より）
図版５　居村古墳群
１．玄室内左壁石積みの状況（奥壁より）
２．玄室内右壁石積みの状況（奥壁より）
３．立柱石および石室右壁石積み（東より）
図版６　居村古墳群
１．１号墳石室全景および墳丘断面（南より）
２．１号墳石室裏込めの状況（玄室右壁・南より）
３．１号墳墳丘盛土の状況（右壁立柱石付近・南西より）
図版７　居村古墳群
１．１号墳玄室遺物出土状況（玄室中央より左壁立柱石付近）
２．１号墳玄室須恵器坏出土状況（南より）
３．１号墳玄室平瓶・勾玉出土状況（南東より）
図版８　居村古墳群
１．１号墳玄室刀子出土状況（南より）
２．１号墳玄室大刀出土状況（南西より）
３．１号墳玄室装身具類出土状況（南東より）
図版９　居村古墳群
１．１号墳玄室耳環出土状況
２．１号墳玄室棗玉出土状況
３．１号墳玄室ガラス小玉出土状況
図版10　居村古墳群
１．１号墳玄室切子玉出土状況（南東より）
２．１号墳墳丘南斜面須恵器出土状況（南東より）
３．１号墳石室墓坑および基底石（南より）
４．１・２号墳墓坑および基底石検出状況（南より）

図版11　居村古墳群

1．　2号墳石室全景（西より）

2．　2号墳左壁石積みの状況（西より）

図版12　居村古墳群

1．　2号墳玄室内耳環出土状況（南東より）

2．　2号墳石室内土器出土状況（西より）

3．　2号墳全景および基底石・墓坑検出状況（南より）

図版13　居村古墳群

1．　2号墳完掘状況（南より）

2．　3号墳石室検出状況（南より）

3．　3号墳石室耳環出土状況（西より）

図版14　居村遺跡

1．　調査区全景

2．　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ５検出状況（南より）

図版15　居村遺跡

1．　ＳＢ１検出状況（東より）

2．　ＳＢ１土器出土状況（東より）

3．　ＳＢ２検出状況（南西より）

図版16　居村遺跡

1．　ＳＢ３検出状況（南西より）

2．　ＳＢ４検出状況（南より）

3．　ＳＢ４土器出土状況（南東より）

図版17　居村遺跡

1．　ＳＨ１検出状況（西より）

2．　ＳＦ９・ＳＦ10・ＳＦ11検出状況（南西より）

3．　壺形土器（No23）出土状況（南東側斜面、西より）

図版18　居村遺跡

1．　ＳＦ１検出状況（南より）

2．　ＳＦ２検出状況（西より）

3．　甕形土器（No21）検出状況（南より）

図版19　若作古墳群

1．　若作古墳群（Ｆ地区）調査区全景（北西より）

2．　Ｆ１号墳墳丘全景（南より）

図版20　若作古墳群

1．　Ｆ１号墳墳丘全景（東より）

2．　Ｆ１号墳主体部（南西より）

図版21　若作古墳群

1．　Ｆ１号墳第１主体部（東より）

2．　Ｆ１号墳第２主体部（南東より）

3．　Ｆ１号墳第３主体部（東より）

図版22　若作古墳群

1．　Ｆ２号墳墳丘全景（北西より）
2．　Ｆ２号墳主体部上面集石の状況（南より）
3．　Ｆ２号墳墳丘全景（南より）

図版23　若作古墳群
1．　Ｆ２号墳主体部検出状況（北東より）
2．　Ｆ２号墳刀子出土状況（主体部上面集石下、西より）
3．　Ｆ２号墳刀子出土状況（主体部床面、北より）
4．　Ｆ２号墳主体部完掘状況（南より）

図版24　上石野古墳群
1．　上石野古墳群調査区全景（南西より）
2．　上石野古墳群調査区全景（北より）

図版25　上石野古墳群
1．　１号墳墳丘全景（北東より）
2．　１号墳主体部検出状況（北東より）

図版26　上石野古墳群
1．　１号墳主体部検出状況（西より）
2．　１号墳主体部西側小口遺物出土状況（南東より）

図版27　上石野古墳群
1．　１号墳主体部大刀・鉄鏃出土状況（主体部東側、北より）
2．　１号墳主体部大刀出土状況（主体部西側、南より）
3．　１号墳主体部鉄鏃・鎌出土状況（東より）
4．　１号墳墳丘南側周溝状遺構（東より）

図版28　上石野古墳群
1．　２号墳墳丘全景（北より）
2．　２号墳主体部検出状況（北より）
3．　２号墳第１主体部完掘状況（南東より）
4．　２号墳主体部完掘状況（南より）

図版29　上石野古墳群
1．　３号墳・４号墳調査区全景（北西より）
2．　３号墳墳丘全景（西より）

図版30　上石野古墳群
1．　３号墳墳丘全景（南東より）
2．　３号墳主体部全景（南東より）

図版31　上石野古墳群
1．　３号墳主体部全景（南西より）
2．　３号墳主体部東側小口の状況（北西より）
3．　３号墳主体部西側小口の状況（南より）

図版32　上石野古墳群
1．　３号墳主体部木棺痕跡（西より）
2．　３号墳主体部東側小口断面（西より）
3．　３号墳主体部西側小口断面（東より）

図版33　上石野古墳群

1．　3号墳主体部遺物出土状況（南より）

2．　3号墳大刀出土状況（南東より）

3．　3号墳鉄鏃出土状況（南より）

4．　3号墳主体部完掘状況（北東より）

図版34　上石野古墳群

1．　4号墳墳丘全景（西より）

2．　4号墳墳丘全景（南より）

図版35　上石野古墳群

1．　4号墳主体部検出状況（北西より）

2．　4号墳第1主体部検出状況（東より）

図版36　上石野古墳群

1．　4号墳第1主体部鉄剣・鉄鏃出土状況（南西より）

2．　4号墳第1主体部鉄鏃出土状況（南より）

3．　4号墳第1主体部東側小口断面（西より）

図版37　上石野古墳群

1．　4号墳第2主体部検出状況（西より）

2．　4号墳第2主体部刀子・ガラス小玉出土状況（北より）

3．　4号墳主体部完掘状況（東より）

4．　4号墳墳丘断面（北側斜面・西より）

図版38　居村古墳群出土遺物　　1～7、9・10（1号墳）

図版39　居村古墳群出土遺物　　11～14（1号墳）　46・47・51･52（2号墳）

1～7、11～14集合（1号墳石室）

図版40　居村古墳群出土遺物　　15･16・17～24・25～27・28・29・35～40・41・42・30～33

（1号墳）　55～57・54（2号墳）　58・59・60（3号墳）

図版41　居村遺跡出土遺物　　1～3（ＳＢ１）　4（ＳＢ２）　6～9（ＳＢ４）

図版42　居村遺跡出土遺物　　10（ＳＢ４）　11・14・15（ＳＢ５）　16・17（ＳＸ２）

28（包含層）

図版43　居村遺跡出土遺物　　18（ＳＦ１）　20（ＳＦ４）　21・22・32・33（包含層）

図版44　居村遺跡出土遺物　　23～26・29～31（包含層）

図版45　居村遺跡出土遺物　　40～51（包含層）

図版46　若作古墳群・上石野古墳群出土遺物

1～4（若作Ｆ2号墳）　3～9・1・2（上石野1号墳）

図版47　上石野古墳群出土遺物　10～25・26～41（上石野1号墳）

図版48　上石野古墳群出土遺物　42～44（上石野2号墳）

64・50～58・59・60～63（上石野3号墳）

図版49　上石野古墳群出土遺物　49（上石野3号墳）

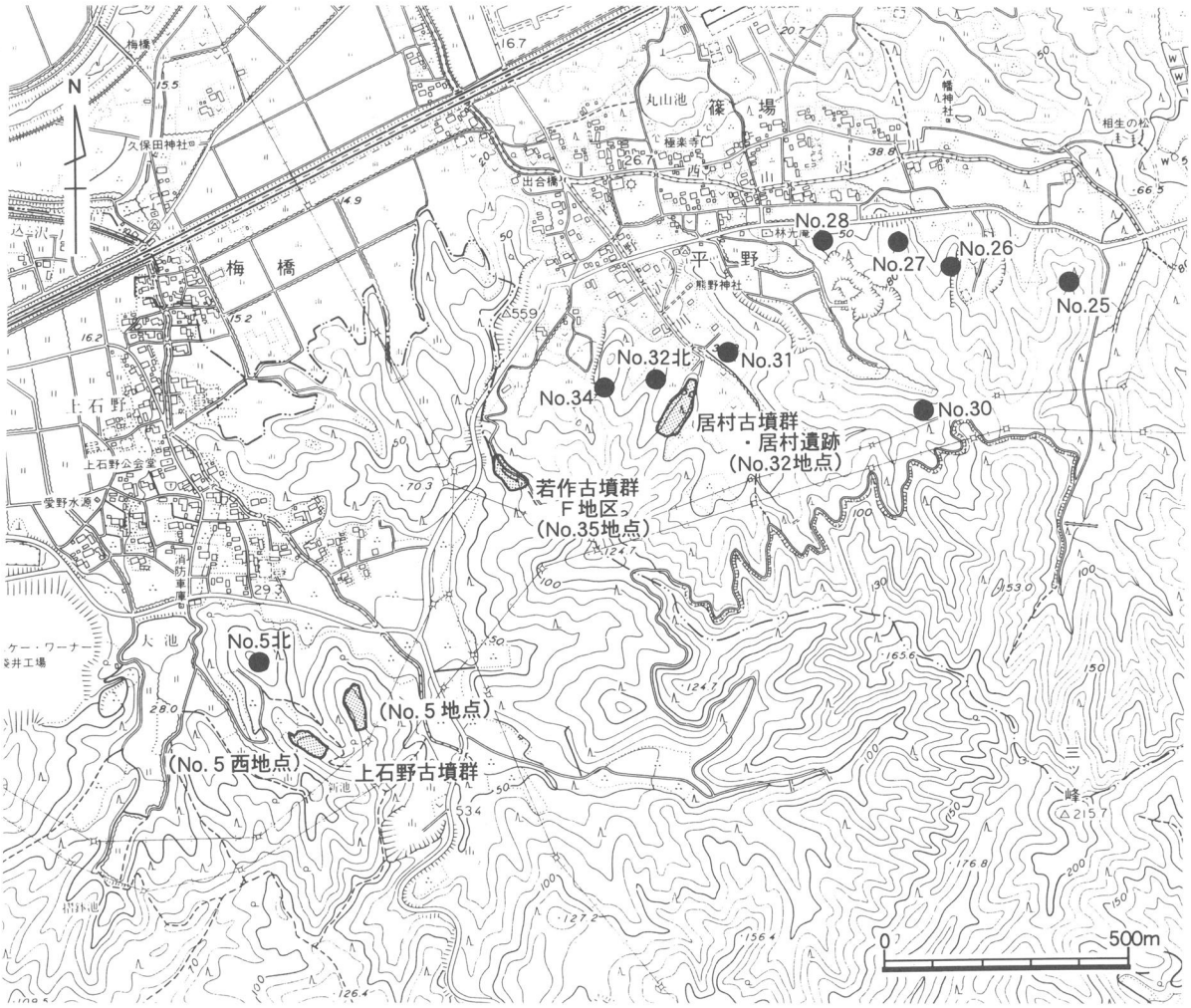
67・68～75（上石野4号墳第1主体部）

143・76～142（上石野4号墳第2主体部）

# 第Ⅰ章　調査の経過

## 第１節　調査に至る経緯

平成４年６月、掛川市・袋井市両市にまたがる小笠山北西麓を中心とする地域に県営スポーツ公園建設の計画が示された。当公園は「健康とスポーツと自然」をテーマとし、21世紀における県民の生涯スポーツの拠点として、また、2002年開催予定のワールドカップサッカーや2003年開催予定の国民体育大会の会場として、整備が進められることとなった。この公園建設計画に伴い、建設計画地内の埋蔵文化財の有無について、県都市住宅部大規模公園建設課から県教育委員会文化課に照会がおこなわれた。計画地内には遺跡地図に掲載されているいわゆる周知の遺跡が存在しないものの、計画地の総面積が269haと広大で、周辺の遺跡分布の状況や地形的な条件から、遺跡の所在する可能性が指摘された。そこで、掛川市・袋井市の両市教育委員会により、小笠山総合運動公園本体部分、県道掛川インター線（仮称）の施工対象地内の遺跡分布調査が実施され、工事着工前に確認調査が必要となる地点がリストアップされた。このうち13地点について、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査主体となり確認調査およびその結果に伴う発掘調査を、県教育委員会文化課の指導のもと、県都市住宅部大規模公園建設課（平成７年４月より小笠山総合運動公園建設事務所）の委託を受ける形で実施す




第１図　調査地点および周辺地形図　　※No.は確認調査実施地点を示す

ることとなった。民有地の買収交渉の進展に合わせる形で、県有地への所有権移転完了、あるいは確認調査に対する地権者の同意を得られた地点から確認調査を実施していくこととなった。そのため、平成６年度は７箇所の確認調査を実施し、２箇所の遺跡の所在を確認したものの、その２箇所の本調査および残る６地点の確認調査については、用地交渉の進展を待って翌年平成７年９月より実施することになった。平成７年度は４箇所の確認調査と、居村遺跡・居村古墳群の本調査を実施した。調査開始時期の遅れと石室をもった古墳、弥生時代の遺構が発見されたことから、平成８年度も継続して調査を実施することとなった。平成８年度は残る２箇所の確認調査を実施、その結果いずれの地点も遺跡の所在が確認されたため、３箇所（上石野古墳群・若作古墳群）の本調査を実施することとなり、現地調査を同年10月３日まで実施した。

## 第２節　調査の方法

確認調査予定地点は、掛川市平野地区の谷地形に所在する調査地点１箇所を除き、そのほとんどが丘陵上が対象である。丘陵頂部の高まりおよび斜面に所在する可能性のある古墳・横穴墓の確認を主眼として実施した。丘陵頂部の高まりに数条のトレンチを設定、最終的には基盤層まで掘り下げをおこない、遺構および採取された遺物から、遺跡の所在の認定をおこなった。

確認調査の結果を受けて、本調査実施箇所については、調査区の樹木伐採をおこなったのち、表土除去を実施、また抜根作業等には一部重機を用いて作業の効率化を図った。調査地点までは、かなりの急斜面であるため、作業道の設置と併せ、資機材運搬用のモノレールを設置した。

古墳の遺構確認は、確認調査で掘削したトレンチ埋土の再掘削ののち、平面的に検出を行った。古墳の墳丘については墳丘の構築過程を確認するため、十字のトレンチを設定、土層帯を残しながら、古墳築造時の墳丘を検出した。居村１号墳については古墳築造前の旧表土、その上の整地層、盛土を確認しながら、最終的には平面的に旧表土層まで墳丘の解体作業を行った。主体部の調査は、石室墳については天井石・側壁が崩落し、内部に石材・土砂が落ち込んだ状態であったため、開口部からの調査は無理と判断し、天井石を除去し、上方から石材・土砂の除去を行い、平面的に調査を実施することとした。木棺直葬墳については、主体部の平面プランを検出ののち、土層帯を残しながら墓坑内の埋土の除去を行った。各遺跡の古墳主体部から出土した遺物はウレタンによる取り上げを行い、また、床面に残された遺物小片の採取のため、床面近くの排土はフルイによる選別を実施した。また、弥生時代の遺構の検出は平面的に行い、検出された順に仮の遺構番号を付け、整理作業時に遺構の性格別に番号を決定した。なお、遺構の性格による表記は例言に掲げたとおりである。

遺構平面図の作成は、古墳主体部については1/10、古墳墳丘および地形測量は1/40、また弥生時代の遺構については1/20を基本として実測作業を行った。調査区には10m方眼のグリッドを設定した。居村古墳群・居村遺跡ではその主軸線を国土座標にあわせ、上石野古墳群・若作古墳群では主軸を丘陵の主軸に合わせた任意の方向にとり、後日国土座標への変換をおこなった。

遺構および景観写真の撮影には６×７判（モノクロ）と35mm判（モノクロ・カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、遺構全景写真や、古墳の俯瞰写真撮影には、ラジコンヘリによる空中写真撮影も実施した。

# 第３節　発掘調査の経過

公園建設予定地内の遺跡推定地の確認調査は、平成６年５月より開始した。現地プレハブを設置後、掛川市篠場、平野両地区のNo.25、27、30地点のトレンチ調査を実施した。用地交渉の進捗状況により、その後一時中断、11月になりNo.26、32、34、５地点の調査をおこなった。このうちNo.32、５地点で古墳の存在が明らかとなったが、本調査は次年度以降に繰り越されることとなり、資機材・現地プレハブを撤収し、平成６年度の調査を完了した。

平成７年度は遺跡推定地No.28、31、32北、５北地点の確認調査を実施、また古墳の所在が明らかになっていたNo.32地点（居村古墳群・居村遺跡）について、本調査を実施した。調査は９月に現地プレハブを設置、作業員の確保、資機材の準備ののち、確認調査を開始、11月上旬まで実施した。この間に本調査をおこなうNo.32地点の雑木伐採、測量用の基準杭打設、調査区への登山ルートの整備等をおこない、完了した時点で確認調査と並行して本調査を開始した。

No.32地点（居村古墳群・居村遺跡）の調査は11月中旬より開始した。この地点では先年度の確認調査により、古墳の所在が１基確認されていたが、丘陵頂部の平坦な地形がこの古墳の南西側に連続していたため、この平坦部にトレンチを新たに設定し、弥生時代の遺構と、丘陵斜面に包含層が形成されていることを確認した。古墳についても横穴式石室墳であることが確認されたため、調査区を当初計画より大幅に拡大して調査を実施することとなった。丘陵上の堆積は比較的薄く、古墳の盛土もかなり流失していたことから、古墳の調査と同時に弥生時代の遺構の検出作業を行った。古墳（１号墳）は主体部の遺存状況が比較的良好であったため、天井石を平面的に検出、実測作業をおこなったのち、天井石と崩落した礫および土砂を除去し、床面までの精査をおこなった。石室・遺物の出土状況の写

**表１　調査工程表**

| 年度 | 内容 | 遺跡 | 地点 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H６年度 | 確認調査 | | No.25 | | — | | | | | | | | | | | |
| | 〃 | | No.27 | | | — | | | | | | | | | | |
| | 〃 | | No.30 | | | — | | | | | | | | | | |
| | 〃 | | No.26 | | | | | | | | — | | | | | |
| | 〃 | | No.32 | | | | | | | | — | | | | | 居村古墳群・居村遺跡 |
| | 〃 | | No.34 | | | | | | | | — | | | | | |
| | 〃 | | No.５ | | | | | | | | — | | | | | 上石野１・２号墳 |
| H７年度 | 確認調査 | | No.28 | | | | | | | — | | | | | | |
| | 〃 | | No.31 | | | | | | | — | | | | | | |
| | 〃 | | No.32北 | | | | | | | — | | | | | | |
| | 〃 | | No.５北 | | | | | | | | — | | | | | |
| | 本調査 | 居村古墳群・居村遺跡 | (No.32) | | | | | | | 伐採・表土除去 | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 発掘調査 | | | | | |
| H８年度 | 確認調査 | | No.35 | — | | | | | | | | | | | | 若作古墳群 |
| | 〃 | | No.５西 | — | | | | | | | | | | | | 上石野３・４号墳 |
| | 本調査 | 若作古墳群 | (No.35) | | 伐採・表土除去 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | 発掘調査 | | | | | | | | | | |
| | 本調査 | 上石野古墳群 | (No.５) | | 伐採・表土除去 | | | | | | | | | | | 上石野１・２号墳 |
| | | | | | 発掘調査 | | | | | | | | | | | |
| | | | (No.５西) | | 伐採 | 表土除去 | | 発掘調査 | | | | | | | | 上石野３・４号墳 |
| | 整理作業 | | | | | | | | | | | | | | | |

真および図面による記録、副葬品の取り上げ作業をおこなったのち、石室の解体作業を実施した。墳丘の調査は確認調査時のトレンチが、石室の主軸方位と異なっていたため、新たに主体部に合わせたトレンチを設定し、断面で盛土の状況を確認、その後主体部の調査の完了を待って墳丘の解体をおこなった。２号墳、３号墳はかなり破壊を受けており、また墳丘も失っていたが基本的には１号墳と同様な方法での調査を実施した。弥生時代の遺構は基盤層を掘り込むものであり、基盤層上面での平面的な遺構検出をおこなった。また、丘陵斜面には包含層が形成されており、斜面で検出された住居跡の検出と同時に、土器を中心とする遺物の取り上げ作業を行った。調査は調査区全域の写真撮影・測量を終えた３月末に完了した。この間３月９日には、地元の平野地区、篠場地区の方々を対象とした現地説明会を開催した。なお、用地交渉中であった残る確認調査予定地２地点については、次年度に作業を繰り越すこととなった。

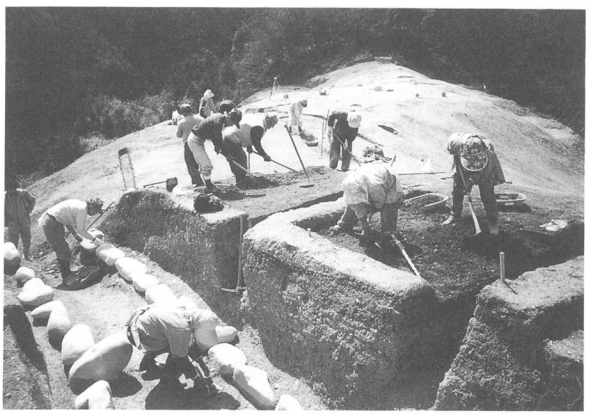
平成８年度は、４月に残る遺跡推定地No.35、No.５西地点の確認調査を実施し、それぞれ遺構の所在を確認した。その結果、No.５地点の調査と併せて３地点の丘陵上の本調査を実施することとなった。また、掛川市平野に置かれていた現地事務所は、工事の工程上移動する必要が生じたため、６月中旬に袋井市愛野に移転した。

No.５地点（上石野１・２号墳）の調査は、雑木伐採、測量用の基準杭打設、調査区への登山ルート整備、表土除去、抜根作業を終えた４月上旬から開始した。平成６年度の確認調査時のトレンチを再発掘し、トレンチに合わせた土層帯を残しながら、平面的に主体部・周溝等の遺構確認をおこなった。墳丘の調査は１号墳、２号墳ともに規模、平面形、周溝の確認をおこない、また、主体部は墓坑内の精査によって、鉄製品の副葬品を検出、実測・取り上げをおこなった。写真撮影、実測等の記録を実施したのち、７月上旬に調査を完了した。

６月からはNo.35地点（若作古墳群）の調査を実施した。確認調査では丘陵頂部の鞍部を挟んだ２箇所の高まりで、古墳の所在を確認した。雑木伐採、基準杭打設後、墳丘の規模・平面形・周溝等関連する遺構および主体部の検出を、土層帯を残しながら平面的におこなった。Ｆ１号墳では３基の主体部を検出、墳丘は削りだしによるものであったため、基盤層上面の傾斜変換点を押さえながら、墳丘の確認をおこなった。主体部からは副葬品の出土はみられなかったが、排土のフルイによる選別を実施した。Ｆ２号墳周辺では、地山中の礫が露出していたため、検出された礫が自然の露頭であるか、遺構であるかの確認をおこないながら遺構検出をおこなった。上面の礫の集中箇所を古墳の遺構の一部と認定し、実測作業を行いながら礫の取り上げ作業を行った。この礫の下層から主体部が検出され、床面から鉄製品が出土した。墳丘は基盤層上面で平面的な検出をおこない、その平面形、規模を確認した。２基とも写真撮影、実測作業を完了、７月末に調査を終了した。

No.５西地点（上石野３・４号墳）では、２基の古墳の所在が確認された。調査は７月中旬より開始

確認調査トレンチ掘削作業



居村１号墳調査状況

した。なお、８月27日には地元の住民を対象とした公園建設事務所主催による工事区域内の見学会が開催され、その際に上石野３・４号墳の調査の概要についての説明会を実施した。

調査区の雑木伐採、基準杭打設後、主体部の墓坑プランの確認、土層帯を残しながらの墳丘の検出作業をおこなった。３号墳の主体部は、墓坑の小口部分および埋土中の灰色粘土を追いながらプランの検出につとめ、床面からは鉄製品の副葬品が出土した。木棺の痕跡も検出されたため、土層帯の観察、記録も慎重におこなった。実測作業終了後、ウレタンによる鉄製品の取り上げをおこなった。墳丘の調査では周溝、土器片の検出もあった。基盤層上面での墳丘規模、平面形の確認をした後、記録をおこなった。４号墳では２基の主体部を検出、精査により、鉄製品・玉類の副葬品が出土した。写真撮影、図面による記録後、ウレタンによる鉄製品の取り上げ作業を実施した。墳丘は土層帯を残しながら墳丘規模、平面形の確認をおこなった。３号墳・４号墳は完掘後、写真撮影、測量をおこなって、10月上旬に調査を終了した。同時に発掘機材・遺物等を搬出、現地事務所を撤収し、現地におけるすべての作業を完了した。

上石野３号墳主体部調査状況

鉄器取り上げ作業

# 第II章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

調査対象となった４遺跡の所在する掛川市・袋井市は、静岡県の西部地方を南流する東海型の大河川である大井川と天竜川とに挟まれた地域に隣り合って位置する。いわゆる中遠地方と呼ばれる地域であり、旧国名の遠江国の中央部に相当する地域である。両市を地形的に概観すると、現在の市街地の所在する平野部分からみて、北側には赤石山系から南下してきた尾根が迫り、南には小笠山丘陵が広がっている。平野部分は、掛川市八高山に源を発し西流する原野谷川、粟ヶ岳の東谷を源流とし西流する逆川が貫流、やがて合流し、さらに太田川に合流して南流し、遠州灘に注いでいる。流域にはこれらの河川によって形成された沖積地が広がっているが、調査対象地付近の逆川左岸の沖積地は、総じて自然堤防が未発達であり、しばしば洪水に悩まされてきた地域でもある。

調査対象の４遺跡は、この逆川左岸地域の平野を望む小笠山丘陵の北西麓に位置する。小笠山丘陵は東西約16km、南北約13kmの範囲、袋井市・掛川市・大須賀町・大東町にまたがる丘陵で、標高264ｍの最高点を中心として、緩やかな峰が放射状に延び、一連の丘陵地帯をなしており、あたかも山頂から南西方向に向けて扇を広げたような形状をしている。その南西方向は緩やかに傾斜した丘陵性の山地となっているのに対し、北側斜面、東側斜面は急斜面となっていて、対照的である。また小笠山は、その大部分が小笠山礫層と呼ばれる大井川系の河川に由来すると考えられる硬質砂岩の石礫を主体とした層からなり、小笠山を水源とする多くの小河川により浸食を受けて、小さな谷と樹枝状に延びたやせ尾根が連続する複雑な地形となっている。

## 第２節　歴史的環境

今回調査を実施した４遺跡が所在する小笠山北西麓周辺の歴史的環境について、逆川・原野谷川流域に展開する弥生時代・古墳時代の遺跡を中心に、時代を追いながらその様相を概観しておくことにする。

静岡県における縄文時代開始期の遺跡の分布は、東部に偏在する傾向にあり、県西部の逆川・原野谷川流域においては、縄文時代早期から前期にかけての遺跡は数遺跡が知られているにすぎない。遠江地方における数少ない押型文土器の出土した遺跡として知られる萩ノ段遺跡や、瀬戸山遺跡がこの時期にあたる遺跡である。前期末頃から中期にかけて遺跡数は徐々に増え、県中・西部にも遺跡の増加の傾向がみられるようになる。この時期の遺跡としては中期前半（勝坂式期）の集落遺跡である中原遺跡や、上ノ段遺跡等がある。後期から晩期にかけての遺跡は、原野谷川上流域の段丘上にみられるが、上ノ段遺跡・萩ノ段遺跡では晩期末から弥生時代中期前葉まで継続的に遺物が確認されている。逆川・原野谷川左岸に目を転じると、遺跡の状況は明らかではないが、愛野向山II遺跡や愛野向山Ａ４号墳の盛土中から黒耀石剝片・頁岩製石鏃・中期後半の縄文土器片等が若干量出土している。

弥生時代の集落は、稲作を生産基盤とする文化の定着により、比較的開田が容易で、より生産域に近い低地の自然堤防や微高地などにその生活の場を移すようになる。東山遺跡・金鋳原遺跡・山下遺跡など、縄文時代以来の集落景観を踏襲して営まれた段丘上・丘陵上の集落がある一方で、原川遺跡・

第２図　周辺遺跡分布図

坂尻遺跡・領家遺跡・梅橋北遺跡などの、沖積地の集落遺跡が展開している。自然堤防上に立地する原川遺跡では、掘立柱建物跡、土器棺墓が検出されており、弥生時代中期前葉の集落跡と考えられている。また、坂尻遺跡では中期後葉以前に遡る可能性のある当地域最古の水田跡も検出されており、生活の場を沖積地に求めた人々の営みが明らかにされている。また、このような水田耕作や居住の安全性から最も条件が良い場所に営まれた集落は、中期後葉の段階になると拠点的な集落としてその規模を拡大し、長く継続されるようになる。

後期になると、遺跡数、密度ともに急激に増加する。また、遺跡の規模も大きくなり、拠点的な集落を中心に、周辺に中小の集落もみられ、母村と分村という有機的なつながりを持った集落のあり方となってくる。しかし、原野谷川・逆川流域についてみると、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落の多くが、平野を望む台地上や丘陵上、丘陵斜面に立地しているという特徴がある。愛野向

**表２　周辺遺跡地名表**

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 種別 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 種別 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | **居村古墳群・居村遺跡** | 弥生（中）～古墳（後） | 集落・古墳 | 41 | 井守塚古墳群 | 古墳（中・後） | 古墳 |
| 2 | **若作古墳群（Ｆ地区）** | 古墳（中・後） | 古墳 | 42 | 大門山古墳群 | 古墳（中・後） | 古墳 |
| 3 | **上石野古墳群** | 古墳（中・後） | 古墳 | 43 | 渋垂神社上古墳群 | 古墳（中・後） | 古墳 |
| 4 | 中原遺跡 | 縄文（中）～古墳 | 集落 | 44 | 金山A･B古墳群･横穴群 | 古墳（中・後） | 古墳 |
| 5 | 瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 縄文～古墳、近世 | 集落 | 45 | 愛野向山遺跡 | 縄文～弥生、古代、中近世 | 集落 |
| 6 | 吉岡原遺跡 | 縄文（中）～古墳（前） | 集落 | 46 | 愛野向山古墳群・横穴群 | 古墳（中・後） | 古墳 |
| 7 | 女高Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 縄文（晩）～古墳（前） | 集落 | 47 | 上石野遺跡 | 弥生、近世 | 墳墓 |
| 8 | 東原遺跡 | 縄文～古墳 | 散布地 | 48 | 上石野１号墓 | 弥生 | 墳墓 |
| 9 | 金鋳原遺跡 | 弥生（中）～古墳（前） | 集落 | 49 | 若作古墳群・若作遺跡 | 弥生～古墳（後） | 古墳・集落 |
| 10 | 高田上ノ段 | 弥生（後）～古墳（前） | 集落 | 50 | 上山古墳群・横穴群 | 古墳（後） | 古墳・横穴 |
| 11 | 東山遺跡 | 弥生、古墳 | 集落 | 51 | 篠場古墳群 | 古墳（後） | 古墳 |
| 12 | 山下遺跡 | 弥生（中）～古墳 | 集落・墳墓 | 52 | 金兵谷田横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 13 | 吉岡大塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 53 | 八幡神社脇古墳 | 古墳（後） | 古墳 |
| 14 | 春林院古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 54 | 大谷代横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 15 | 行人塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 55 | 谷切横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 16 | 瓢塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 56 | 岡津横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 17 | 各和金塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 57 | 本村横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 18 | 石ノ形古墳・石ノ形遺跡 | 弥生～近世 | 古墳・集落 | 58 | 前坪古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 19 | 権現山古墳群 | 古墳（中） | 古墳 | 59 | 浅間神社古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 20 | 宇佐八幡宮１号墳 | 古墳（後） | 古墳 | 60 | 山麓山横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 21 | 座王権現神社古墳 | 古墳（前） | 古墳 | 61 | 宇洞ヶ谷横穴 | 古墳（後） | 横穴 |
| 22 | 東山古墳群 | 古墳（中・後） | 古墳 | 62 | 堂前横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 23 | 東別所１号墳 | 古墳（中） | 古墳 | 63 | 高代山古墳群 | 古墳（中） | 古墳 |
| 24 | 久努大塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 64 | 甚佐ヶ谷横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 25 | 菅ヶ谷古墳群・横穴群 | 古墳（後） | 古墳・横穴 | 65 | 十五ヶ谷横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 26 | 不入斗Ⅰ遺跡 | 古墳、中世 | 散布地 | 66 | 天段古墳群 | 古墳（後） | 古墳 |
| 27 | 坂尻遺跡 | 弥生（中）～近世 | 集落・官衙 | 67 | 別所横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 28 | 国本遺跡 | 弥生（後）～近世 | 散布地 | 68 | 鰯原横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 29 | 原川遺跡 | 弥生（中）～近世 | 集落 | 69 | 岩谷横穴群 | 古墳（後） | 横穴 |
| 30 | 梅橋北遺跡 | 弥生（中）～中世 | 集落 | 70 | 谷坂古墳群 | 古墳（中～後） | 古墳 |
| 31 | 領家遺跡 | 弥生（中）～近世 | 散布地 | 71 | 団子塚遺跡・古墳群 | 弥生（中）～古墳（後） | 墳墓・古墳 |
| 32 | 曽我後遺跡 | 弥生～古代 | 散布地 | 72 | 北原遺跡 | 弥生（後） | 集落 |
| 33 | 梅橋遺跡 | 弥生（後）、古代 | 散布地 | 73 | 高尾向山６号墳 | 古墳 | 古墳 |
| 34 | 下貫名遺跡 | 弥生～古墳 | 散布地 | 74 | 高尾向山遺跡・古墳群 | 弥生（後）～古墳（後） | 墳墓・古墳 |
| 35 | 掛ノ上Ⅰ遺跡 | 縄文～古墳、中世 | 集落・墳墓 | 75 | 雲座Ｄ古墳群 | 古墳（後） | 古墳 |
| 36 | 大門Ⅰ遺跡 | 縄文～近世 | 集落 | 76 | 長者平古墳群 | 古墳（後） | 古墳 |
| 37 | 御所森古墳 | 古墳（後） | 古墳 | 77 | 山本山古墳群・横穴群 | 古墳（後） | 古墳 |
| 38 | 大門大塚古墳 | 古墳（後） | 古墳 | 78 | 古新田遺跡 | 弥生（後）～中世 | 集落 |
| 39 | 狐塚古墳 | 古墳（中） | 古墳 | 79 | 五ヶ山Ｂ－１号墳 | 古墳（中） | 古墳 |
| 40 | 地蔵ヶ谷古墳群・横穴群 | 古墳（中・後） | 古墳 | 80 | 五ヶ山Ｂ－２号墳 | 古墳（中） | 古墳 |

山遺跡・原新田遺跡・峰山遺跡・踊り原遺跡・金鋳原遺跡・瀬戸山遺跡など、平野部分からの標高差が30～40ｍもある場所に集落が営まれている。このような立地の集落について、畿内や瀬戸内地域等でみられるいわゆる「高地性集落」と同様に、争乱の時代の防御的・軍事的な性格を持った集落ではないかとの見方がある。しかし原野谷川・逆川流域は自然堤防が未発達であるという自然的な要因から、丘陵上に集落を営んだと考えるのが妥当であろう。愛野向山遺跡では、北面する急斜面と舌状に伸びた小支陵の先端付近で、斜面を階段状に削り出した150基を超える竪穴住居跡や、掘立柱建物群、方形周溝墓群、木棺墓、土坑墓などが検出され、また小銅鐸も出土している。集落の時期は、弥生時代中期の遺構が若干みられるが、後期後半の菊川式土器を伴うものがその大半であり、比較的短期間に集中して営まれた集落遺跡の良好な事例となっている。

古墳時代になっても、集落の立地、生産基盤等には大きな変化はみられない。ここでは当時の社会情勢、権力者の動向を端的に示す古墳についてみていくことにする。古墳時代前期の遠江地域で、太田川西岸磐田原台地東縁地域に新豊院Ｄ２号墳、太田川西岸磐田原台地南東地域に松林山古墳といった前方後円墳が出現するのは４世紀中頃である。しかし原野谷川・逆川流域においては前期の首長墓は、今のところ未発見であり、前期の首長の動向は明らかでない。しかし、中期になると、原野谷川西岸の和田岡原に各和金塚古墳・瓢塚古墳・吉岡大塚古墳・春林院古墳・行人塚古墳といった大型の首長墓が相次いで築造されるようになる。各和金塚古墳は全長60ｍを超える規模をもつ前方後円墳であり、礫石積みの竪穴式石室からは多くの鉄製武器・武具や石製模造品を中心とした副葬品が出土しており、眼下に広がる原野谷川流域平野を支配した首長墓としてふさわしい内容となっている。この各和金塚古墳をはじめとするこれらの和田岡原を中心とした首長墓は５世紀後半になると急速に衰退し、南流する原野谷川が西にその流れを変える付近から袋井市南東部にかけての地域に、その系譜に連なるものと考えられる首長墓が分布する状況となる。５世紀後半から６世紀前半にかけて築造された宇佐八幡境内１号墳・権現山古墳・浅間山古墳・石ノ形古墳・岡津奥ノ原古墳・狐塚古墳などがこれに相当する。またこのころ、木棺直葬の小円墳からなる群集墳が原野谷川左岸丘陵や岡津丘陵に展開される。最近ではこの木棺直葬墳の調査事例も多く、５世紀後半に造墓が開始された例として愛野向山古墳群、若作古墳群、６世紀代の例として高尾向山古墳群、金山古墳群、雲座古墳Ｄ古墳群、団子塚古墳群、地蔵ヶ谷古墳群、井守塚古墳群、谷坂古墳群などの古墳群の内容が発掘調査により明らかとなっている。

６世紀前半には、当地域に横穴式石室を主体部にもつ古墳が出現する。円礫積み横穴式石室の採用、金銅装馬具や鏡、直刀、玉類、多量の須恵器などの豊富な副葬品といった、当地域の経済基盤を背景にした首長墓と考えられる大門大塚古墳である。これ以降、６世紀後半頃からは、横穴式石室を採用した古墳群と、横穴群の数が急増し、群集墳の時代となる。原野谷川・逆川左岸地域は、県内でも有数の後期群集墳の分布する地域となっているが、石室墳による群集墳の分布の顕著な地域と、横穴墳が際だった分布を示す地域、また両者が混在する群集墳が展開する地域とがあるようである。

横穴式石室墳を採用する古墳群の例として、袋井市域では６世紀後半に造墓開始、７世紀前半に盛期を迎える長者平古墳群がある。小笠沢川中流域の段丘南縁に展開する古墳群で、56基が確認されている。また小笠沢川流域にはこのほか団子塚古墳群・山本山古墳群がある。山本山古墳群は石室墳、横穴が併存する古墳群であり、６世紀中頃から７世紀前半にかけて造墓がなされ、７世紀前半に石室墳から横穴墳へと移行していく状況が明らかにされている。掛川市域では原野谷川上流域や、家代川、垂木川、倉真川流域に単独墳あるいは群を構成する基数の少ない群集墳が点在するが、横穴墳の分布に比べ非常にその数が少ない。逆川・原野谷川左岸地域では、横穴墳と併存する上山古墳群の例がある。

一方横穴群は、山麓山横穴・宇洞ヶ谷横穴といった単独立地の横穴が初現期（6世紀前半から中頃）のものとされ、鏡や金銅装馬具など首長墓と何ら変わりない豊富な副葬品を持つものである。これ以降、この周辺地域に横穴群が次々と築造され、県内でも有数の横穴群集地帯として際だった分布を示す。原野谷川中流域から上流にかけての地域には菅ヶ谷横穴群・堂前横穴群・甚佐ヶ谷横穴群といった横穴群の分布がみられ、逆川左岸地域の横穴群と並ぶ横穴群集地帯となっている。逆川左岸地域には本村横穴群・岡津横穴群・大谷代横穴群・十二ヶ谷横穴群・上山横穴群などがあり、7世紀前半を盛期として築造された横穴の密集地域となっている。袋井市域では地蔵ヶ谷横穴群・愛野向山横穴群などの大規模な横穴群のほか、金山横穴群・菩提山横穴群・山本山古墳群（横穴群）などの小規模な横穴群も分布する。

またこれ以外の墓制として、横穴式木室を採用した古墳が、袋井市南部の団子塚古墳群・高尾向山古墳群などにみられ、磐田原台地以東では比較的集中する地域となっている。掛川市域でも首長墓である堀ノ内13号墳でこの墓制が採用されており、石室墳・横穴墳と並んで当地域の後期群集墳を考える上で重要な事例となっている。

以上のように逆川・原野谷川流域の古墳群は、中期以降木棺直葬墳からなる初期群集墳が比較的多くみられる地域であること、後期には、引き続いて木棺直葬墳、横穴式石室墳、横穴墳、横穴式木室といった墓制のバリエーションがみられる地域となっており、首長墓の系譜や被葬者集団の階層制など、古墳時代中期から後期にかけての政治的・社会的状況を解明する上で重要な課題を包括している地域であるといえる。

## 引用・参考文献


槇山次郎・坂本亨1957『5万分の1地質図幅説明書（見附・掛塚）』地質研究所

静岡県1977『小笠山の自然環境保全と利用に関する調査報告書』

加藤芳朗1988「原川遺跡をめぐる地形・地質・土壌学的背景」『原川遺跡Ⅰ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

袋井市1983『袋井市史　通史編』

袋井市教育委員会1993『袋井の前方後円墳―袋井の首長墓を考える―』

袋井市教育委員会1996『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』

掛川市教育委員会1984『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』

掛川市教育委員会1989『天段古墳・東沢遺跡発掘調査報告書』

静岡県1990『静岡県史　資料編1考古一』

静岡県1990『静岡県史　資料編2考古二』

静岡県1994『静岡県史　通史編　原始・古代』

中嶋郁夫1990「2東海　2東部（静岡）」『古墳時代の研究11地域の古墳Ⅱ東日本』

中嶋郁夫1995「遠江」『全国古墳編年集成』雄山閣

平野吾郎1992「第1章　位置と環境」『坂尻遺跡　本文編』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

平野吾郎1992「静岡県内の弥生時代遺跡―その概観と近年の調査―」『静岡県考古学研究』24

平野吾郎1980「原野谷川流域の古墳群について」『古代探叢』

松井一明1988「静岡県における囲郭集落と高地性集落について」『マージナル』8　愛知考古学談話会

松井一明1994「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』

松井一明1996「原野谷川中流域における初期群集墳の終末と後期群集墳（横穴群）の成立について」『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』

# 第Ⅲ章　居村古墳群の調査

## 第１節　調査の概要

居村古墳群は掛川市の南西、小笠山丘陵北西麓にあたる掛川市平野に所在する。付近の地形は、小笠山丘陵から派生する尾根が南から北に向かって伸び、北側に広がる沖積平野に臨むあたりで複雑に枝分かれしているが、分岐したこれら小支陵の突端付近が当古墳群の立地となっている。古墳群の南東側には平野沢川という小河川によって形成された小扇状地が形成されている。この小支陵は最も高い部分で標高55ｍであり、尾根の南東に広がる小扇状地のレベルからの比高差は約18ｍを測る。

調査地点の尾根頂部では、概して堆積は薄く、古墳の盛土部分を除いた箇所では表土を除去するとほどなく基盤層に至る。基盤層は小笠山礫層に属するものであるが、古墳の石室の墓坑は、この基盤層を掘り込む形で掘削されている。尾根の南東および北西斜面は地形図においても等高線が比較的密で急斜面となっているが、斜面には若干赤みを帯びた暗黄褐色土が比較的厚く堆積している。この堆積層は遺物包含層となっており、古墳時代の遺物のほか、弥生時代中期から後期を中心とした遺物を含んでいる。なお、このことについては章を改め、「第Ⅳ章　居村遺跡」として述べることとする。

調査では横穴式石室を主体部にもつ３基の古墳が検出されている。尾根の最も高い標高点に１号墳が、その南西に２号墳、さらに南西に３号墳が存在する（第３図）。平成６年度に実施した確認調査では、１号墳墳丘部分の高まりに十字のトレンチを掘削し、古墳の存在を確認したが、この段階では石室墳であるとの結論には至らなかった。本調査において表土除去後、墳丘頂部と南側斜面に円礫の集中箇所が確認されたため、横穴式石室墳であることを確認した。確認調査時のトレンチは土層観察用に残し、石室の主軸方位が明らかになった段階で、改めて主軸にあわせたトレンチを十字に設定することとした。また、確認調査時に、１号墳の南西側に比較的平坦な地形が広がっているとの報告があり、ここにも古墳もしくは関連の遺構の存在が想定されたため、調査範囲を西へ大きく広げ調査を実施、これにより２号墳・３号墳を検出している。なお、この尾根の先端部分は十数年前に採石工事のため切り落とされているが、地元の方の話では、その工事の際に丘陵頂部付近で大型の円礫が集中して検出されたとのことである。これは調査された３基以外にも、丘陵先端付近に横穴式石室墳が存在したことを示唆するものである。

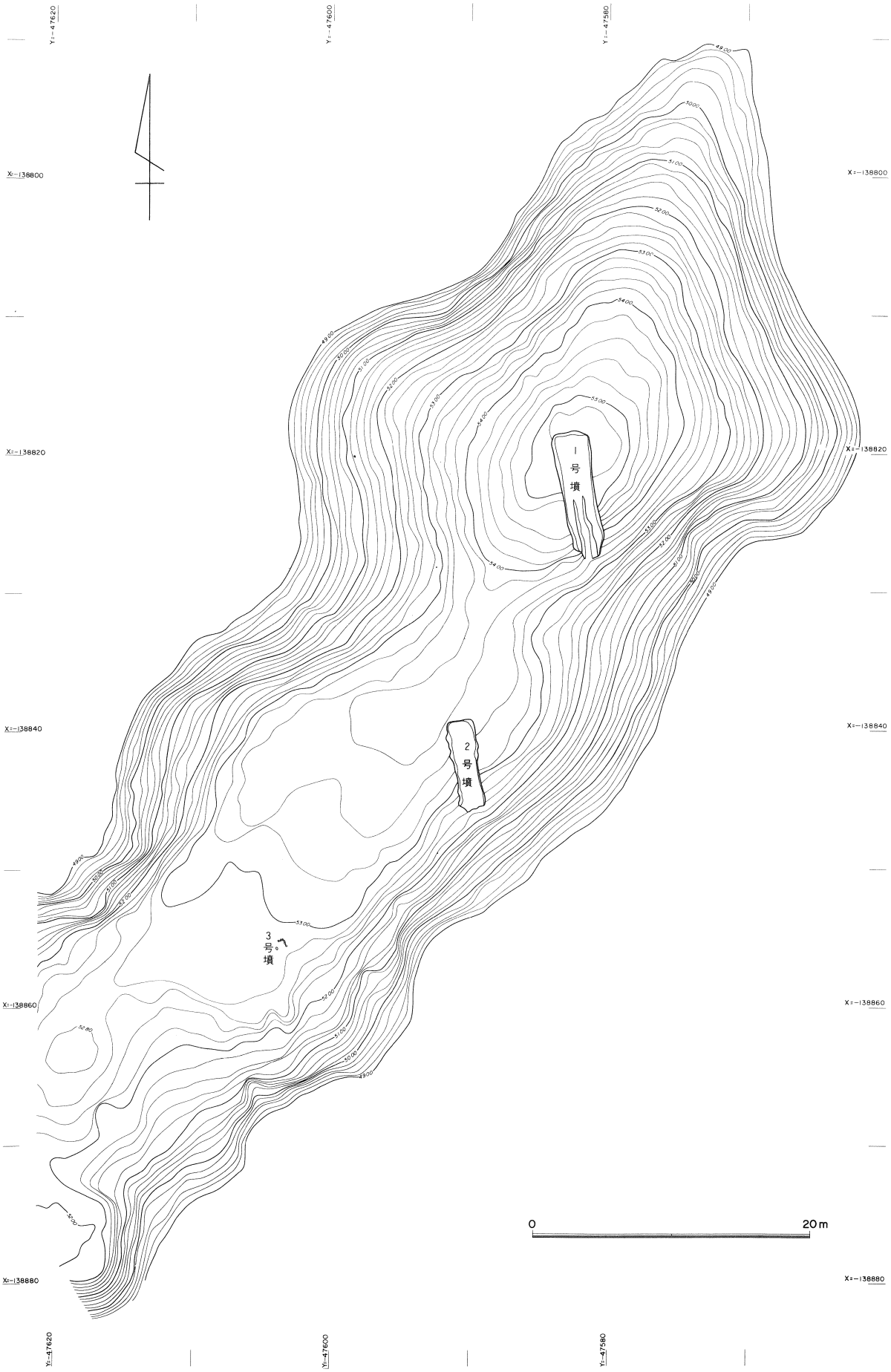
## 第２節　遺構と遺物

### １．居村１号墳

(1) 墳丘

**立地・調査前の状況**

居村１号墳は標高55ｍに立地する古墳である。調査前の地形観察では、明瞭な瘤状の高まりが確認でき、古墳であるとすれば比較的旧状を保ったものであるという印象であった。小笠山丘陵の北側に広がる沖積平野からこの古墳の立地をみると、小河川である平野沢川が流れる狭い谷をやや入ったかなり奥まった場所に位置しているという感がある。しかし、調査に先立って実施した調査区の立木の伐採後、墳丘頂部から北側に広がる沖積地を眺めると、隣接する丘陵に若干視界を遮られるものの、平野を広く見渡すことができる立地であることがわかる。また、古墳の所在する尾根は先述のように



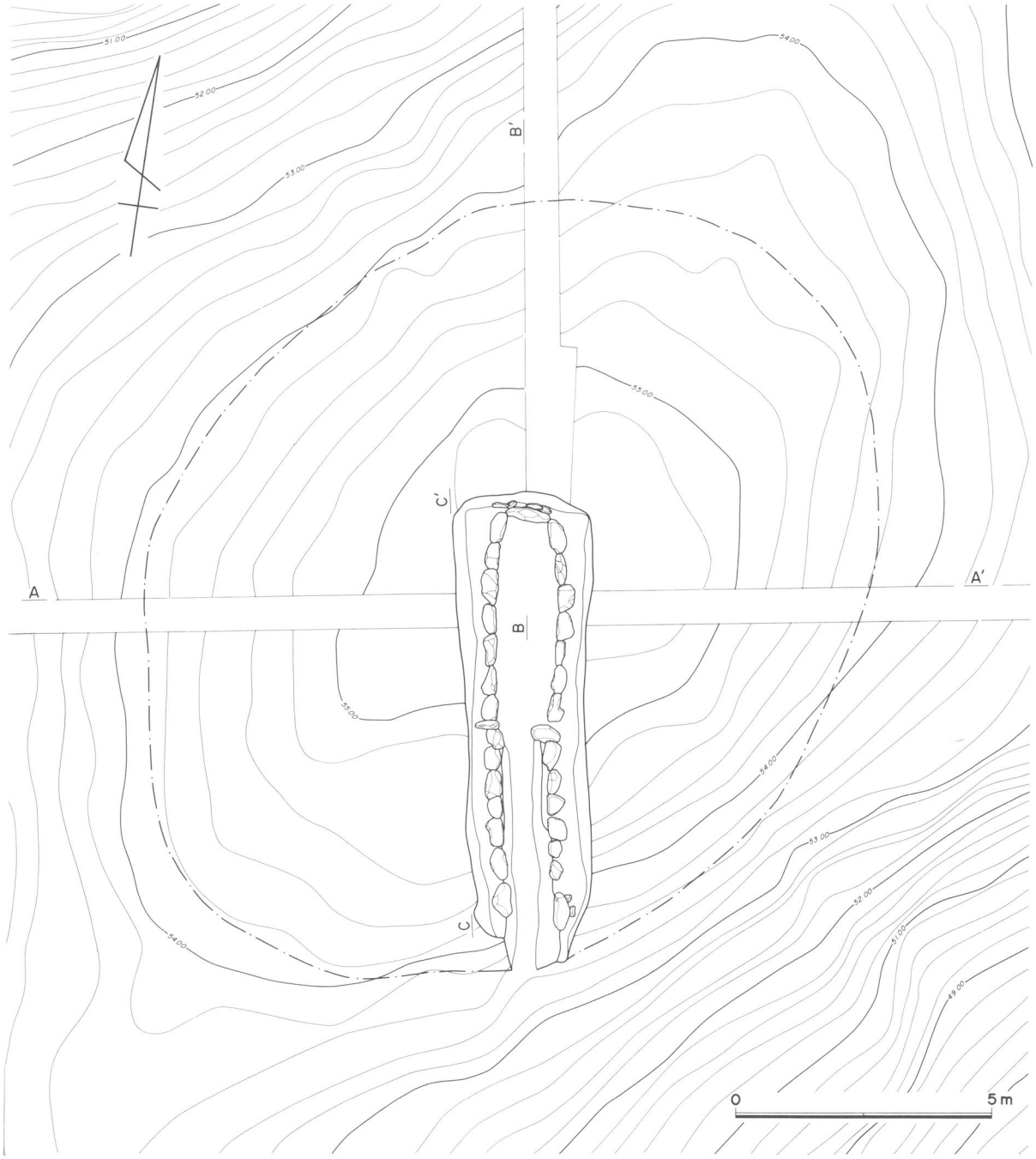

第3図　居村古墳群全体図

細い痩せ尾根であるため、墳丘から谷に向かう南東側、北西側は急峻な斜面となっている。調査前には石室石材等も全く露出しておらず、また、表面観察においても土器片等の遺物は全くみられなかった。

**墳丘規模・平面形**

墳丘は、谷に面した南東・北西側は先述の通り急斜面であるため、築造時の盛土は一部を残し流失してしまっているようである。また、尾根の主軸方向の北東・南西側についても、基盤層から表土までの堆積の厚みはなく、やはり盛土の流失の状況が見受けられる。

墳丘のトレンチ掘削時には、地形的に墳丘裾部と考えられる箇所で周溝の検出につとめたが、トレンチの断面観察でも周溝状の落ち込みは認められず、また丘陵を切断して墳丘を造りだしている状況もみられなかった。後述する墳丘の盛土の状況からみても、古墳築造の際の工事量は最小限に止めた




第 4 図　居村 1 号墳墳丘図

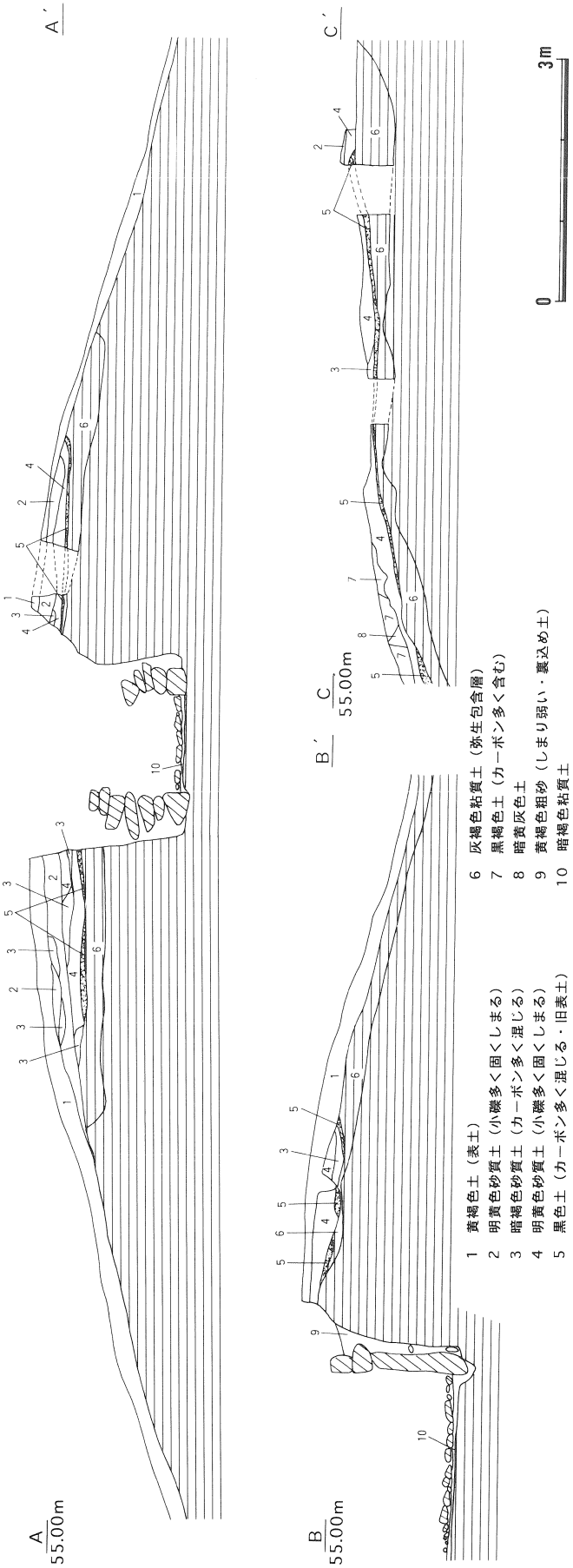
ものであったことが想定されるため、墳丘を区画する施設や周溝については全くなかったか、あるいは墳形を整える程度のものであったと考えられる。

このようにやせ尾根上の高まった地形を利用して構築された古墳であることから、古墳の平面形は自然地形に制約されたものとなっており、丘陵の主軸方向に長い楕円形を呈している（第4図）。墳丘の規模は尾根の主軸に沿った北東―南西方向のラインで長径17m，流失の激しい谷部に面した南東―北西方向で短径13.3mを測る。

**墳丘盛土**（第5図）

墳丘盛土は、墳丘全体ではなく、石室部分とその周辺を覆う程度の比較的狭い範囲で確認されている。盛土は墓坑の上面とその周辺にしまりの強い明黄色砂質土で覆った後、その上層に炭化物を多量に含む暗褐色砂質土と、明黄色砂質土とを交互に盛り上げている。盛土の下層には、弥生時代の遺構・包含層が存在するが、その上面で炭化物と、焼けて赤化した礫を含んだ黒色土層が検出されている。この層は面的な広がりがみられ、また、墳丘構築前の旧表土に相当する層と考えられることから、古墳築造前に草木の焼き払いの行為が行われたものと考えられる（註1）。

石室を納める墓坑はこの旧表土面からではなく、その上に盛土された層である明黄色砂質土（第8図）から掘り込まれている。つまり、旧表土面の焼き払いの後、若干の盛土および整地を行うことによって若干傾斜した平坦な墳丘基底面を造り出し、その面から下は墓坑掘削、その上には盛土という工程を行うことによって墳丘構築を行っている。また、墳丘盛土中には焼き払いの際に生じた炭化物と、弥生土器片




第5図　1号墳墳丘断面図

が多く含まれているが、墳丘盛土は墓坑掘削の際の排土を利用しているものと考えられる。

(2) 主体部（第７図）

１号墳の主体部は、南に開口する横穴式石室である。主軸方位はＮ－８°－Ｅをとる。これは丘陵の主軸方向を意識することなく、開口部は南に広がる谷地形の奥を向いている。これは北に広がる沖積地を望む眺望の良い方向とは全く逆方向である。墳丘の構築には自然地形を利用し、また制約を受けている一方、主軸方位のみは南北方向を優先させた結果となっている。検出時の天井石の並びは玄室中央部分が乱れた状況が見られ、また、東側の壁（左壁）を中心に崩落が激しい。

**墓坑**

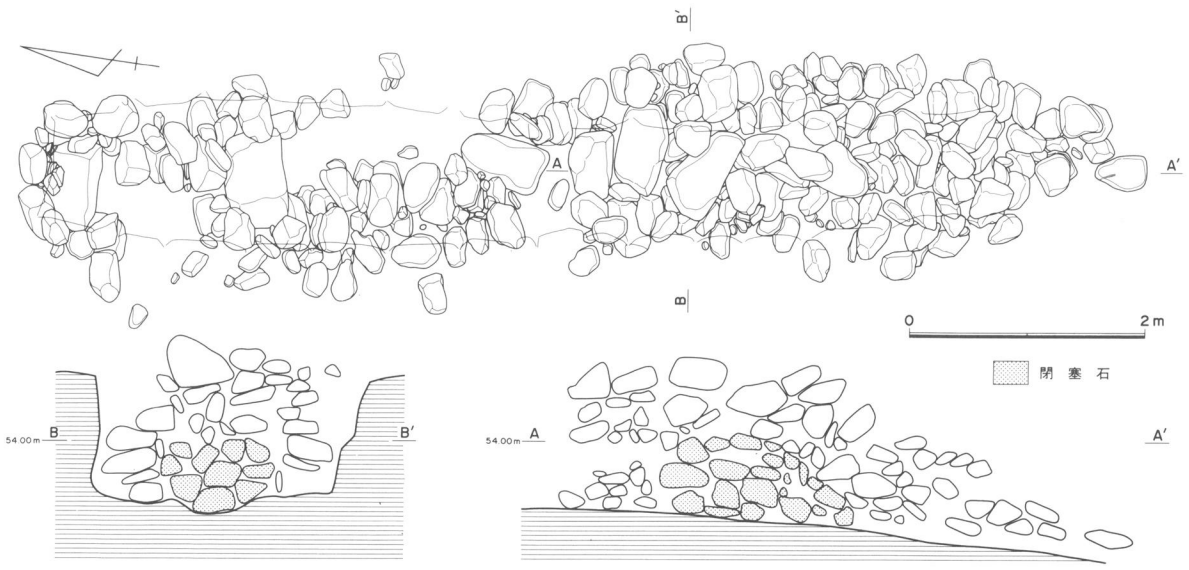
石室の構築された墓坑は、その下半は旧表土上の整地層上面（墳丘基底面）から基盤層を深く掘り込み、上半は盛土によって空間を造り出している。盛土の高さに比べ、掘り込みの部分がかなり深いものとなっており、盛土にかかる労働力の省力化を図った結果であると考えられる。

石室の構築は、最初にその床面に基底石を配し、石室石材を積み上げると同時に墓坑の埋め戻しを行い、墓坑掘り込み面より上半は墳丘の盛土と並行して石材を積み上げていったと思われる。

墓坑の掘り込まれている部分の整地層上面（墳丘基底面）は、奥壁部分に相当する北側から、開口部に相当する南側にかけて緩やかに傾斜している。掘り込みの深さは最も深い奥壁部分で1.8m、石室中央部分で1.2m、石室南端の羨門部付近で0.6mと、南の開口部に近づくにつれ浅いものとなり、掘削量を減じている。墓坑平面形はほぼ長方形であり、その規模は墳丘基底面で、奥から開口部までの長さ9.2m、奥壁付近の幅2.7mを測る。その幅は奥から開口部にかけてわずかではあるが少しずつ狭くなっている。玄室部分の床面はほぼ水平につくられているが、羨道部は床面をさらに溝状に掘りくぼめ、開口部に向かって約５°の傾斜をつけて排水施設としている。

**天井石**

天井石の検出状況を第６図に示した。全体的に自然作用の崩落等の影響による乱れがみられる。玄室の上部に相当する部分で一部天井石を失っている箇所がみられるが、この部分から盗掘あるいは攪乱を受けているものと思われる。天井石は石室内に落ち込んでいたものも含めて10枚を確認したが、




第６図　１号墳天井石および閉塞の状況

構築時には玄室部分と羨道部北半部分（奥壁から約7.5m付近まで）にまで並べられていたものと考えられる。天井石には整形痕のない比較的偏平な自然石が用いられており、一枚の大きさは、いずれも長さ１ｍに満たないもので、石室の幅に比して小さいものである。

**平面形**

石室は胴張り形を呈する玄室部と、玄室長とほぼ同じ長さをもつ羨道部からなる。その境界部分には縦長の立柱石を縦位に置き玄門部としている。立柱石は側壁の並びよりも若干内側に迫り出させて置かれており、擬似的な両袖型の平面形を持つものである（第７図、註２）。石室全長は8.1ｍを測り、約１ｍ程度のその石室幅から考えると非常に狭長な印象を与える石室である。

**玄室**

玄室は先述の通り、その平面形は玄室中央部が若干外側に張り出す胴張り形を呈している。その空間は奥壁・東側の壁（以下「左壁」と呼ぶ）・西側の壁（以下「右壁」と呼ぶ）・床面・天井石で構成されている。規模は長さ4.1ｍ、幅は奥壁の手前付近で0.86ｍ，玄室中央部分で1.2ｍ，立柱石の内側付近で1.0ｍをそれぞれ測る。

奥壁には縦1.2ｍ、幅0.33～0.87ｍ、厚さ0.25ｍの大型の偏平な台形を呈する縦長の鏡石を用いており、その上に小型の礫を二段積み重ねた構造になっている。鏡石の設置には、墓坑床面を約25cmほど掘りくぼめ、さらに安定を図るため、石材下部に小さな礫を置き固定している（第10図）。この三段の奥壁の上に天井石が乗ることになるが、この部分の床面（敷石上面）からの高さ約1.65ｍが玄室の空間として確保されていたことになる。天井の構造は、崩落等の影響で明確でない。

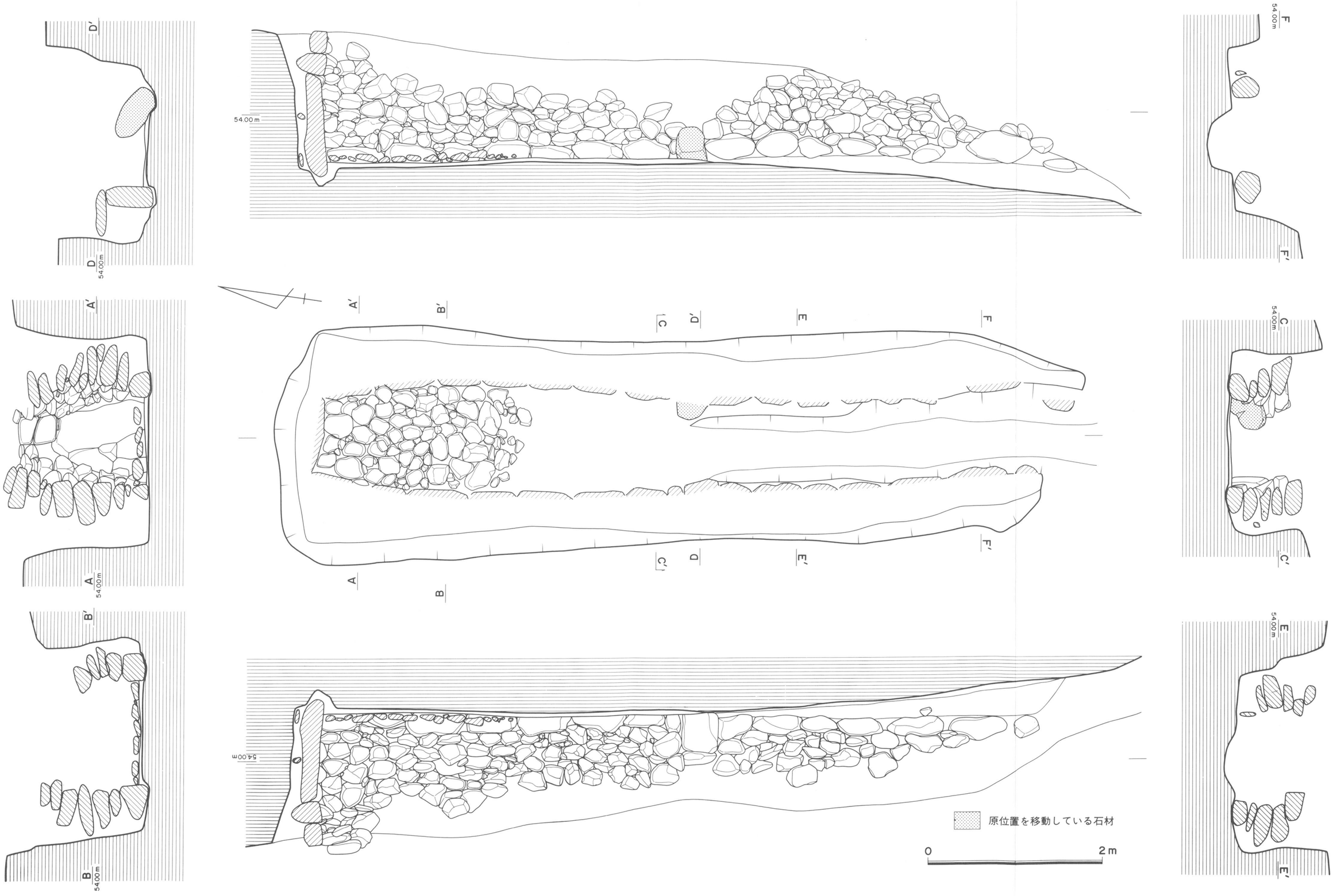
左壁および右壁は天井石およびその一部が石室内に崩落した状態で検出された。特に左壁側は盛土部分の側方からの土圧でかなり崩落が激しく、立柱石も内側に半ば倒れた状態で検出されている。左右両壁の基底石は、比較的大きさの揃った自然石を選択的に用いているが、50～60cmの長さをもつ細長い石材を、玄室内側に弧状のラインを造りながら横長に配置している。配置の順序としては奥壁・立柱石の位置を最初に決め、その間に基底石を並べていき、右壁の立柱石の脇に生じた隙間には小さな石材を小口面を玄室内に向けて充填している。基底石の重なりを観察すると（第９図）、左壁側は立柱石→奥壁方向、右壁側は奥壁→立柱石方向に順番に石材を据えていった状況が見られる。

右壁、左壁に用いられている石材は、面を作り出すなどの加工は一切施されていない丸みをもった自然石である。積み上げていく際に比較的安定がよいように、やや細長い石材を小口積みで積み上げている。特に右壁に顕著であるが、奥壁に近い方が大きめの石材を使用するという傾向がみられる。両側壁は天井に近づくにつれて内傾しており、いわゆる「持ち送り」の技法で積み上げられている。第７図のＡ－Ａ′断面において、石室最上部の幅は床面部分の幅よりも約48cmもその幅を減じている。長さ１ｍに満たない天井石を、安定の悪い曲面を多く持った自然石の上に架構することは、かなり急激な角度の持ち送りをせねばならず、構造上かなり無理のあるものであったろう。石材の積み上げは、墓坑の埋め戻しと同時に行われたものと考えられ（註３）、裏込め土の堆積状況をみると（第８図）、側壁の石材を１～２段積み上げるごとに埋め戻した土をつき固め、それを繰り返して石材を積み上げていった状況が見受けられる。

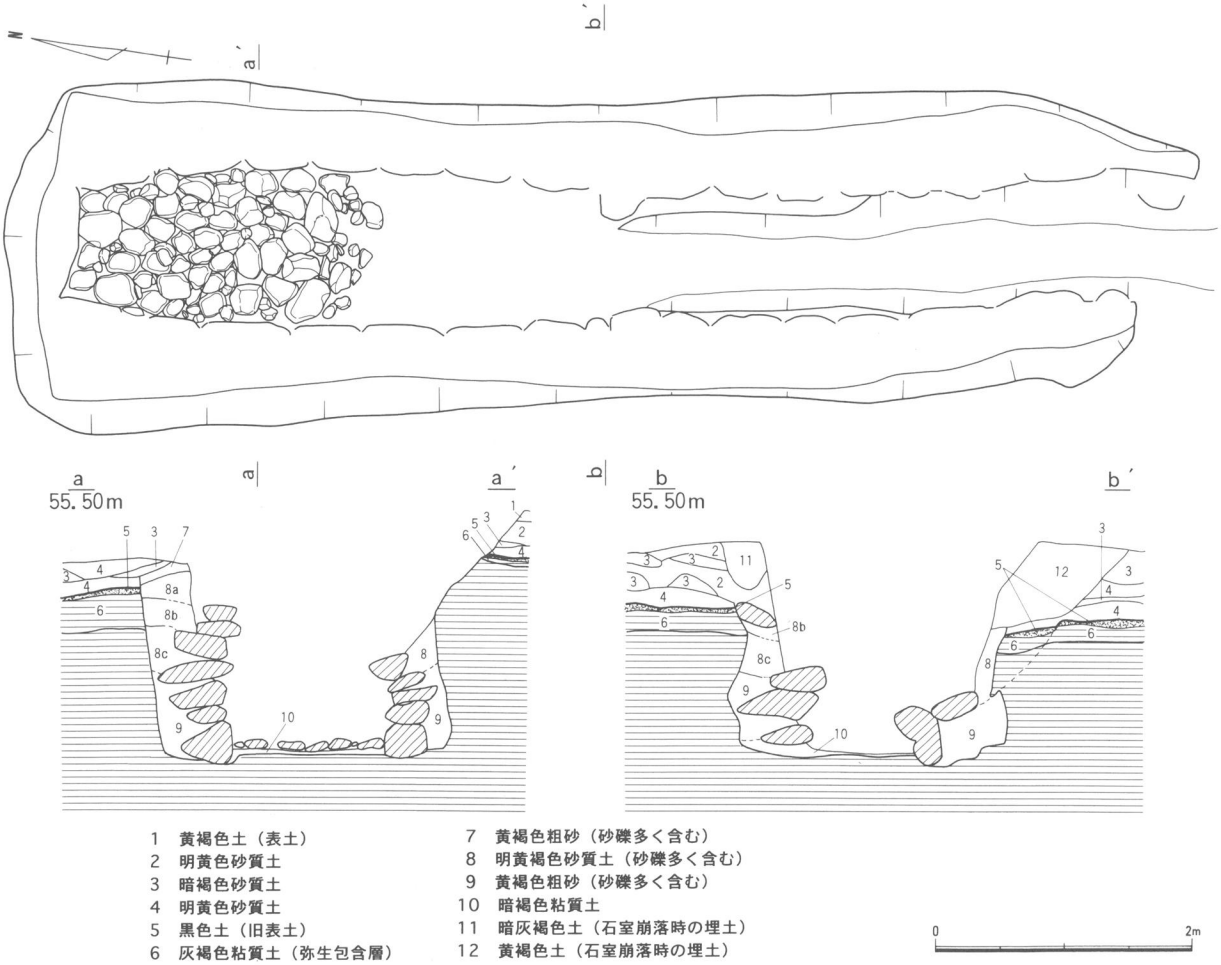
平坦に掘削された墓坑の床面上には、貼床状に暗褐色粘質土が敷かれ、奥壁から手前2.4m付近までの部分にはさらにその上に敷石が配されていた。敷石は偏平な円礫であり、装身具類・鉄器を中心とする遺物がこの敷石上から検出されている。被葬者の納められた棺を安定させ、かつ墓坑底面より上に置かれることで棺の浸水を防ぐという効果が考えられよう。

**羨道部**

石室の開口部の両壁には、他の基底石よりも大型の石材を横置きにしている。これらの石と立柱石




第7図　居村1号墳石室実測図




第８図　１号墳墓坑および石室断面図

の間を、玄室と同様に羨道を挟んで左右が平行になるように並べている。開口部の石材を羨道の入り口部分（羨門部）としてその規模を計測すると、長さ3.7m、幅は0.9mを測る。墓坑の項目でもふれたが、床面はその断面がU字形の、緩い傾斜を持った溝となっており、排水施設として機能していたものと考えられる。両壁は玄室と同様の石積みがなされているが、玄室と比較すると使用されている石材は若干小振りである。天井石は羨道部にも架構されていたが、残存していた天井石の状況を見ると、開口部付近の約1.2mほどは天井石は架構されていなかったものと考えられる。

**閉塞の状況**（第６図）

石室は羨道部で閉塞石により封鎖されていた。調査時には羨道部内に崩落した側壁の石材と閉塞石との見極めが困難であり、閉塞の状況を平面的に押さえることはできなかった。しかし床面近くで、乱雑でなく、面をそろえて配置された状況の石材がみられたこと、また主軸方向断面および横断面から、閉塞の状況を確認することができた。閉塞石は立柱石の手前0.9mの位置から、ちょうど天井石のとぎれるあたりの2.7mまでの位置に、偏平な円礫が３～４段積みあげられていた。

**使用石材について**（註４）

石室に用いられている石材は、入手しやすい付近の地山中より採取されたものと考えられる。石室の左右側壁、閉塞石、床面の敷石は、旧大井川の運搬・堆積作用によって小笠山周辺に運ばれ堆積した小笠層群中の硬質砂岩である。天井石についても比較的大型ではあるものの、やはり小笠山で普遍的にみられる地山中の礫である。奥壁に用いられている鏡石については、他の石材同様砂岩塊ではあ

るが、大型であることから、小笠山基盤層中のものではなく、別の場所から運搬されてきたものの可能性も考えられる。

(3) 遺物の出土状況（第11図）

居村１号墳の調査によって出土した遺物は、石室内のものと、墳丘およびその周辺から出土したものとがある。以下、その出土地点ごとに出土状況の概略を述べる。

**玄室内敷石西側**

西側隅で須恵器の平瓶と勾玉が、敷石上では勾玉・棗玉・切子玉・ガラス小玉・耳環がある。なお、勾玉１点（第15図39）が敷石の直下より出土している。状況からみて礫の隙間に落ち込んだものとは考えられない。また複数の遺物が同様に検出されれば、追葬のある主体部の第１次床面との考えもできようが、全くこの１点のみであり、後述の土器の時期からみても敷石の下面が第１次床面であるとは考え難い。

装身具類は比較的集中して出土しており、被葬者、棺はおそらくこの敷石部分の西側寄りに安置されていたものと考えられる。

**玄室内敷石東側**

大刀・刀子がある。大刀は左壁に沿う形で検出されているもので、鋒を奥壁側、刃部を玄室中央に向けている。また倒卵形の鍔も伴っている。刀子は３点出土している。

**玄室中央**

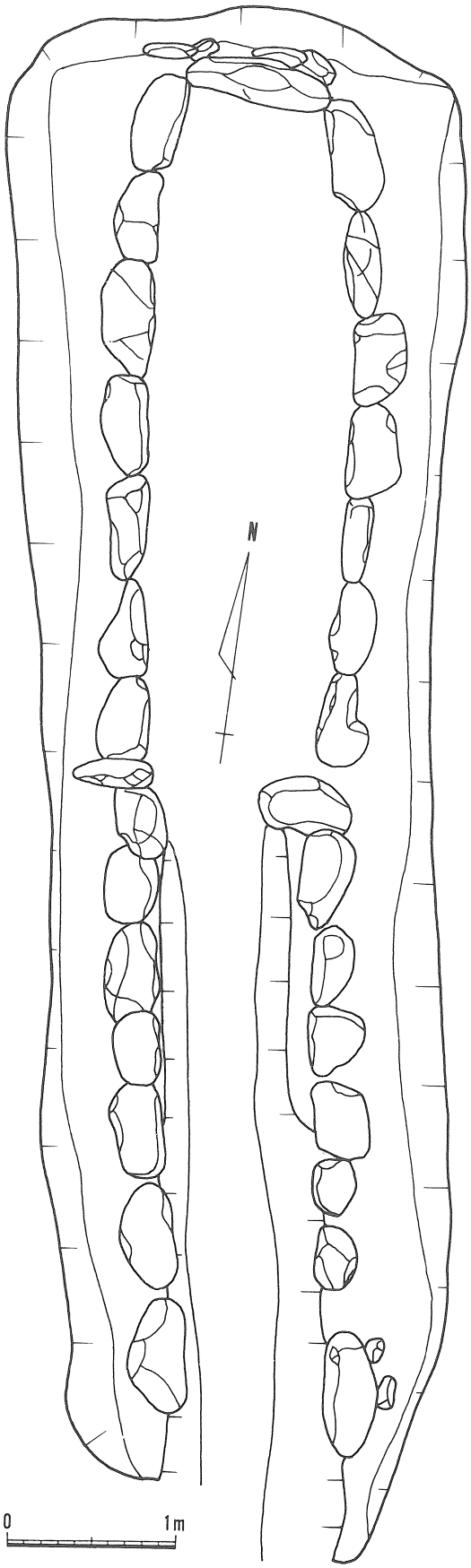
敷石のとぎれた玄室中央付近で須恵器坏身が１点出土している。

**玄室内立柱石付近東側**

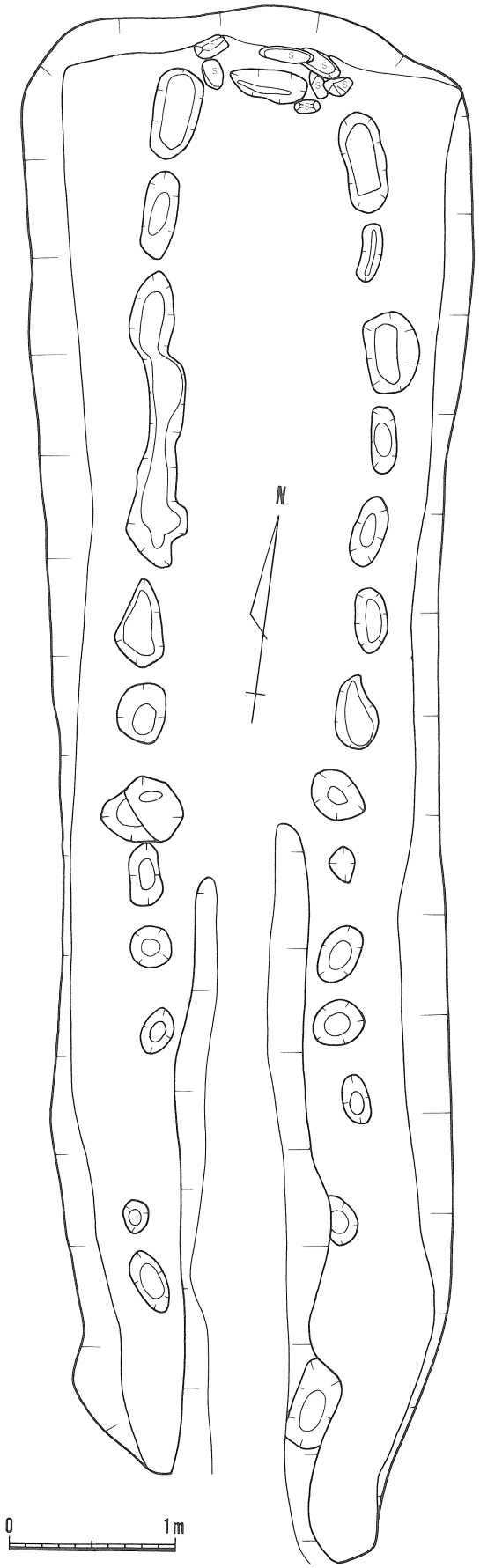
須恵器・土師器と、鉄鏃が出土している。土器類は石室石材の崩落により細かく破砕されてしまっているが、攪乱を受けた様子や片づけの行為を想定させるような状況ではなく、ほぼ原位置を止めているものと考えられる。鉄鏃はいずれも細根鏃であり、８点が出土している。

**墳丘周辺**

表土除去時に墳丘の南西側裾部より坏蓋１点、また、南側斜面の２号墳との間の谷状にくびれた部分の斜面から、広口短頸壺が２点、さらに




第９図　１号墳基底石・墓坑実測図




第10図　1号墳石室完掘図

墳丘上の表土直下からは、甕の破片が出土している。

(4) 遺物

ａ.土器（第12図）

**須恵器**（1～10、43）

1～7は玄室内から出土したものである。このうち奥壁西隅に置かれていた6、玄室中央部から出土した1を除いては、すべて玄門部、左壁立柱石付近の床面上から出土している。1は坏身である。口縁部に強い横ナデ調整が施され、直立気味に立ち上がる形状のもので、全体的には半球状を呈する。口縁部と体部との境には一条の沈線が巡っており、底部はケズリにより平坦に仕上げられている。口径は8.7cm、器高は3.7cmを測る。2は瑯である。上位に最大径を持つ球形の体部に、細長く外反しながら立ち上がる頸部が取り付く。口縁部は外反し、さらに口縁端部は水平に開く。体部下半の底部近くに回転ヘラケズリを施し、注口は粘土を貼り付けたのち穿孔されている。口縁部、頸部、体部にそれぞれ二条の沈線を巡らせている。3の脚付長頸瓶は、体部は球形で、体部下半にヘラケズリ調整を施し、体部上半には列点文の施文のみられるものである。頸部中位と列点文の下にそれぞれ二条の沈線が施されている。脚部は失われているが、体部との接合部の径は3.5cmと比較的小さい。他の須恵器との産地の違いを示すものであろうか、胎土中に砂粒が多く含まれるなど、胎土・色調は他の須恵器と比べて印象が異なる。4・5は無蓋の高坏である。坏部は半球状を呈し、口縁部端をつまんで外傾させている。脚部は裾広がりで端部を折り曲げている。全面横ナデ調整を施している。6は平瓶である。体部は肩部より下1／2に回転ヘラケズリ調整が施され、丸みを持って立ち上がる。口頸部中位には二条の沈線が巡る。口縁端部は丸く仕上げられている。7はフラスコ形長頸瓶である。偏球形の体部を持ち、そこから頸部が外反しながら立ち上がる。外反した口縁部の上下端に強い横ナデ調整を施し、口縁部直下には突帯を巡らせて

いる。

8～10、43は墳丘周辺から検出されたものである。8の蓋は、半球形を呈し口縁部をやや内彎気味に垂直におろす。天井部と口縁部との境界に一条の沈線を巡らす。9・10は、広口短頸壺である。9は口径9.7cm、器高4.5cmを測るもので、回転ヘラケズリにより平坦に仕上げられた底部から、丸みを帯びつつ外反する口頸部に移行する。また口頸部と体部との境界は、鈍い稜となっている。10は口径9.2cm、器高4.6cmを測るもので、半球状の体部から口頸部は横ナデにより強く屈曲しながら立ち上がる。口頸部と体部との境界には沈線が巡っている。43は墳丘上で採取された甕の破片である。

**土師器**（11～14）

いずれも玄室玄門部付近から出土している。11はつまみを持つ蓋であるが、つまみはその先端が牛角状に水平方向に屈曲する形態をもつ。袋井市・金山横穴群等で類例がみられるが（註5）、在地色の強い土器といえよう。12・13・14は坏身である。このうち14は口縁端部を内側に屈曲させるものである。

b．鉄製品

**大刀**（第13図15）

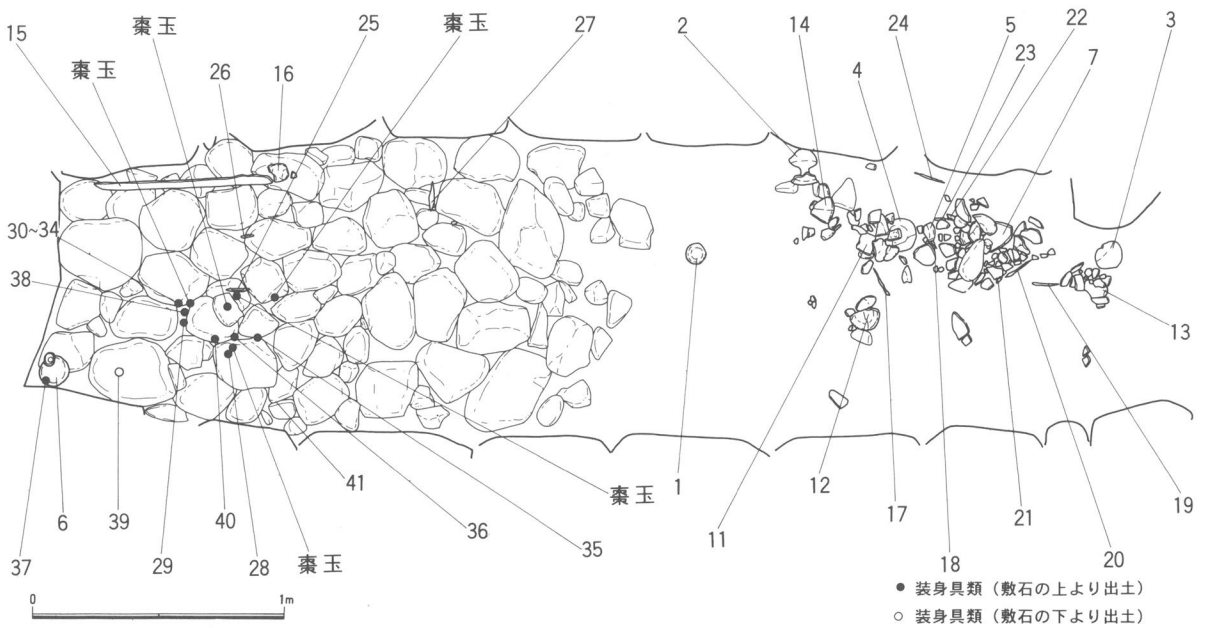
不均等両関一文字尻細茎（註6）に分類される平造りの鉄刀である。鋒は直線的にカットされたいわゆるカマス鋒となっている。茎尻から3.6cmのところに目釘穴が貫通している。関には鎺（はばき）が遺存する。全長79.4cm、刀身の最大幅2.8cmを測る。

**鍔**（第13図16）

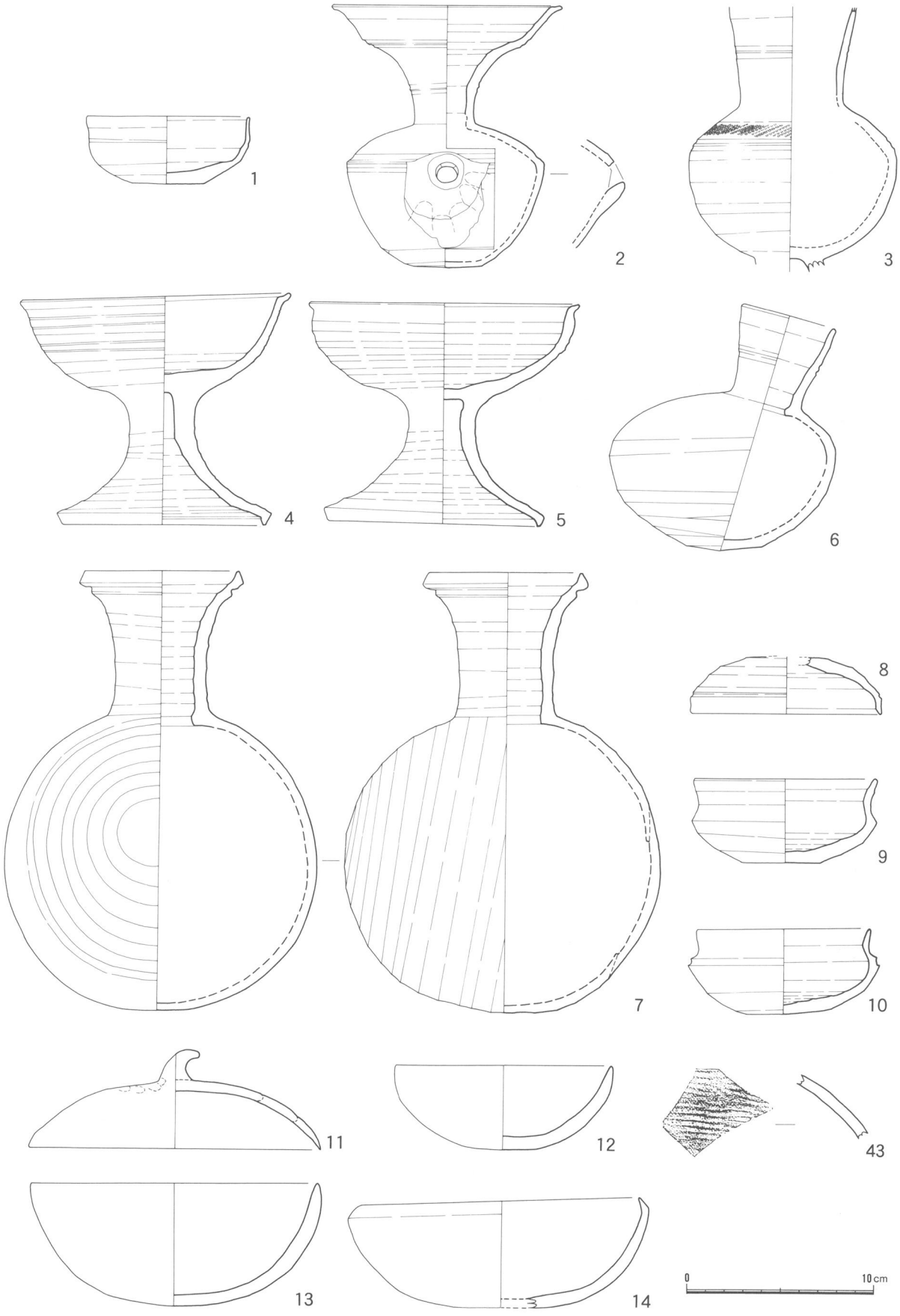
15の茎が中央の孔に通った状態で検出された。長径6.6cm、短径5.8cmを測るもので、円形に近い倒卵形を呈する。外縁の厚さは6mm、内縁では4mmを測る。

**鉄鏃**（第14図17～24）

図示したものは破片13点であるが、検出状況および接合関係から、総出土点数を8点と判断した。これらの鉄鏃はすべて棘状箆被を持つ細根系の鉄鏃であり、鏃身部は鏃身関の無い片刃のものである。




第11図　1号墳石室遺物出土状況図




第12図　1号墳出土土器

## 表３　居村古墳群出土土器観察表

| No. | 種別・器種 | 出土位置 | 計測値（cm） | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　8.7<br>底径　3.8<br>器高　3.7 | 半球形を呈し、口縁部は直立気味に立ち上がる。 | 口縁部は強いヨコナデ。口縁部・体部境界に沈線底部はケズリにより平坦に整形。 | 灰白色<br>黒色粒子・白色石英・砂粒含 | 口縁端部一部欠損<br>ほぼ完形 | 38-1 |
| 2 | 須恵器<br>瓶 | 1号墳<br>石室内 | 口径　12.3<br>胴部最大径 10.5<br>器高　14.1 | 上位に最大径のある球形の体部に外反する頸部が付き口縁はさらに開く | 底部近くの体部に回転ヘラケズリ。注口は粘土を貼り付けた後穿孔。 | 淡灰色<br>約2mmの長石含 | ほぼ完形品 | 38-2 |
| 3 | 須恵器<br>脚付長頸壺 | 1号墳<br>石室内 | 胴部最大径 11.2 | 球形の体部。体部と脚部の接合部の径3.5cmと小さい。 | 体部下半にヘラケズリ。体部上半に列点文。列点文下と頸部に二条の沈線。 | 灰白色<br>白色石英多 | 脚部・口縁端部欠損 | 38-3 |
| 4 | 須恵器<br>高坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　14.5<br>脚部径　11.5<br>器高　12.5 | 坏部は半球状で、口縁部端は外傾。脚部は裾広がりで、端部を下方に折り曲げる。 | 内外面ヨコナデ。 | 青灰色<br>長石わずかに含 | 脚部一部欠損 | 38-4 |
| 5 | 須恵器<br>高坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　14.3<br>最大径　14.5<br>底径　11.3<br>器高　12.0 | 坏部半球状、口縁部端は外傾。4よりも若干直立気味にたちあがる。脚部裾広がりで端部を下方に折り曲げる。 | 内外面ヨコナデ。 | 青灰色<br>長石わずかに含 | ほぼ完形<br>歪み大きい | 38-5 |
| 6 | 須恵器<br>平瓶 | 1号墳<br>石室内 | 口径　5.25<br>胴部最大径 12.1<br>器高　13.3 | 体部は若干偏平な球状。 | 体部は肩部より下1/2に回転ヘラケズリ。頸部に二条の沈線。 | 暗青灰色<br>微砂粒含 | 口縁1/4欠損 | 38-6 |
| 7 | 須恵器<br>長頸瓶 | 1号墳<br>石室内 | 口径　8.8<br>胴部最大径 16.8<br>器高　23.6 | 球状の体部から頸部が外反しながらたちあがる。口縁部直下に突帯。 | 口縁部の上下端に強いヨコナデ。 | 淡灰色<br>微砂粒含 | 口縁端部2/5、<br>体部一部欠損 | 38-7 |
| 8 | 須恵器<br>蓋 | 1号墳<br>墳丘<br>南西側裾部 | 口径　(10.3)<br>器高　(3.1) | 半球状を呈し、口縁部をやや内湾気味に垂直におろす。 | 天井部と口縁部との境界に沈線。 | 黒灰色<br>砂粒含 | 1/3残存 | — |
| 9 | 須恵器<br>小型広口<br>短頸壺 | 居村1～2号<br>墳間谷部<br>南側斜面 | 口径　(9.7)<br>底径　4.3<br>器高　4.5 | 外反する口頸部と、体部との境界に沈線。 | 回転ヘラケズリによる平坦な底部。 | 灰色<br>黒色粒子・長石・石英多 | 口縁部1/3強<br>坏部2/3残存 | 38-9 |
| 10 | 須恵器<br>小型広口<br>短頸壺 | 居村1～2号<br>墳間谷部<br>南側斜面 | 口径　(9.2)<br>器高　4.6 | 半球状の体部。 | 口頸部はヨコナデにより強く屈曲しながらたちあがる。 | 灰色<br>黒色粒子・長石・砂粒多 | ほぼ完形 | 38-10 |
| 11 | 土師器<br>蓋 | 1号墳<br>石室内 | 口径　15.6<br>器高　5.3 | 牛角状に曲がったつまみを有する。 | つまみ接合時の指頭痕残る。 | 橙色<br>黒色粒子多 | ほぼ完形 | 39-11 |
| 12 | 土師器<br>坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　11.5<br>器高　4.5 | 半球状の坏 | 内外面磨滅のため不明瞭 | 黄橙色<br>橙色粒子多 | ほぼ完形 | 39-12 |
| 13 | 土師器<br>坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　15.4<br>器高　6.6 | 半球状の坏 | 内外面磨滅のため不明瞭 | 橙色<br>黒色粒子多 | 口縁部1/3欠損 | 39-13 |
| 14 | 土師器<br>坏 | 1号墳<br>石室内 | 口径　14.8<br>最大径　16.1<br>器高　6.6 | 口縁端部を内側に屈曲させている。 | 内外面磨滅のため不明瞭 | 外面橙色・内面にぶい黄橙色<br>橙・灰色粒子多 | 口縁部1/3欠損 | 39-14 |
| 44 | 須恵器<br>長頸瓶 | 2号墳<br>石室内 | 頸部径　(4.8) | 頸部が体部から外反しながらたちあがる。 | 頸部に二条の沈線 | 灰白色　微砂粒含 | 口縁端部・胴部欠損 | — |
| 45 | 須恵器<br>長頸瓶 | 2号墳<br>石室内 | 体部最大径　(15) | 球状の体部。 | 体部ヘラケズリのちナデ | 黒灰色<br>黒色砂粒含 | 体部1/3残存 | — |
| 46 | 須恵器<br>蓋 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(8.6) | 全体的に丸みのある半球形の蓋。口縁部はやや内湾気味 | | 灰色　長石微粒子・灰色微粒子・黒色小礫含 | 口縁部1/3弱残存 | 39-46 |
| 47 | 須恵器<br>坏 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(7.8)<br>最大径　(9.4) | やや偏平な半球形。たちあがりは短く内傾。 | | 灰色　長石微粒子・灰色微粒子多<br>黒色粒子含 | 口縁部1/3残存 | 39-47 |
| 48 | 須恵器<br>坏 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(6.8)<br>最大径　(8.8) | 半球形の坏。たちあがりは短く内傾。 | | 灰色<br>長石微粒子・灰色微粒子・黒色粒子含 | 口縁～坏部1/6残存 | — |
| 49 | 須恵器<br>長頸瓶 | 2号墳<br>南斜面包含層 | 口径　(9.2) | 口縁部直下に段を有し、頸部には一条の沈線が巡る。 | 口縁端部は回転ナデにより面をなす。 | 黒灰色<br>砂粒含 | 口縁1/4残存 | — |
| 50 | 須恵器<br>無蓋高坏 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(15.2) | 口縁端部内面はヨコナデにより沈線状に凹む。 | | 黄灰色<br>砂粒わずかに含 | 坏部1/3残存 | — |
| 51 | 土師器<br>高坏 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(9.0)<br>底径　(6.5)<br>器高　6.0 | 椀型を呈する坏部。短い脚部が取り付く。 | 内外面磨滅のため不明瞭 | 浅黄橙色<br>褐色粒子多 | 坏部1/6<br>脚部1/2残存 | 39-51 |
| 52 | 土師器<br>高坏 | 2号墳<br>石室内 | 口径　(9.2)<br>底径　(7.8)<br>器高　5.7 | 椀型を呈する坏部。短い脚部が取り付く。 | 内外面磨滅のため不明瞭 | 黄橙色<br>褐色・灰色粒子多<br>長石含 | 坏一部欠損<br>脚部2/3残存 | 39-52 |

完形の17は長さ16.6cmを測る。

**刀子**（第14図25～27）

3点が出土している。25は撫角、片関の刀子であり、刀身には鞘木が残存する。26・27は撫角の両関の刀子であり、26の茎には木質が遺存している。

c．装身具

**耳環**（第15図28、29）

2点が出土している。2点とも、玄室床面の敷石上の近い位置から検出されている。28は長径2.6cm、短径2.4cmを測り、断面は楕円形を呈する。29は長径2.7cm、短径2.5cmを測り、断面形は楕円形である。これらは銅芯を曲げた環体に、金属箔を付着させたものである。蛍光X線分析による成分分析によると、表面の金属箔の成分はそのほとんどが銀であるが、わずかに金を含んでいる。また水銀の成分も検出されており、水銀アマルガム法によって金属箔をメッキして製作されたものであろう。（註7）

**ガラス小玉**（第15図30～34）

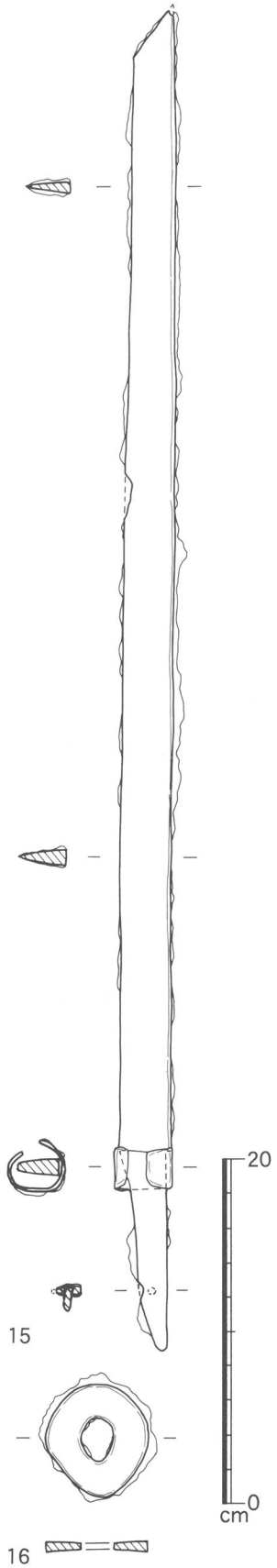
10点が確認されているが、いずれも風化が激しく、図化できたものは5点のみである。乳白色を呈するいわゆる丸玉であり、外径はいずれも9mm前後である。31の小玉についての蛍光X線分析による成分分析によると、鉛および珪酸（SiO2）を多く含むことから、鉛ガラスであると考えられる。また、発色元素としての銅がわずかながら検出されていることから、風化する前の状態では緑色を呈していたものと考えられる。

**棗玉**

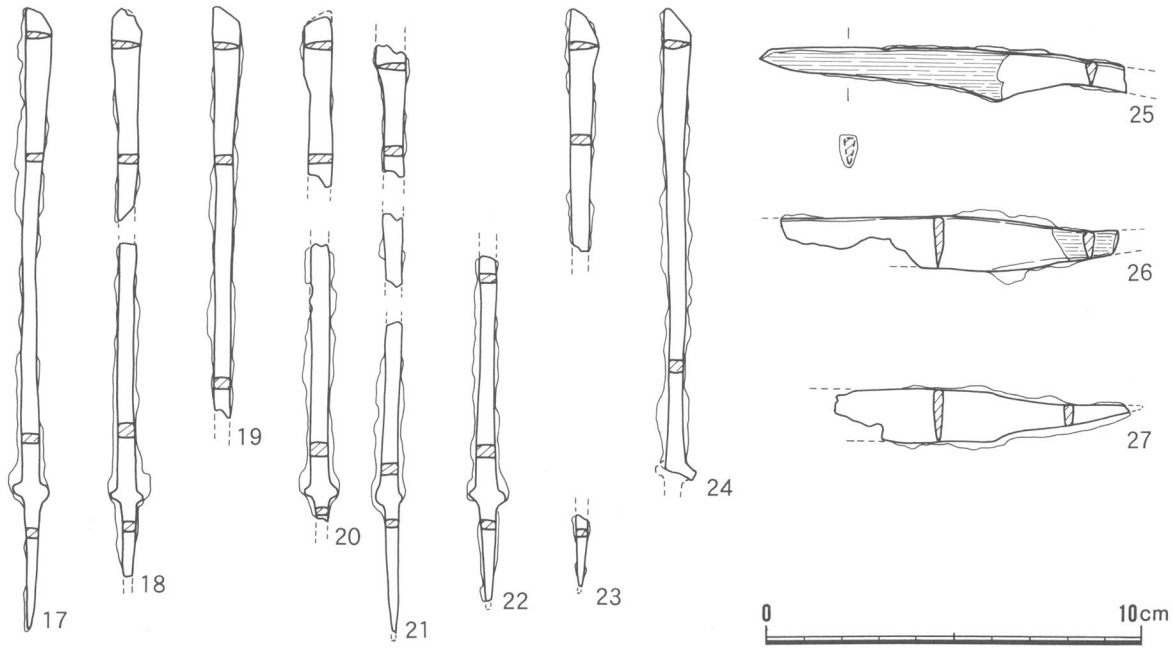
琥珀製の棗玉である。残存状況が悪く、また取り上げ後の風化の進行が予想以上に早かったため、図化することができなかったが、5点が検出されている。いずれも玄室床面の敷石上から出土している。現地で観察、計測できたもの（図版9－2）の大きさは、長さ3.2cm、最大径2cmを測るものであった。

**勾玉**（第15図35～40）

大きさ、色調の異なる勾玉が6点出土した。35は緑色チャート製の勾玉である。長さは3.6cm、比較的大型ものである。形態的には背部が丸みを持ち、腹部のカーブも比較的緩い。尾部に比べ頭部を大きく造り、頭部、尾部の端部はそれぞれ研磨によって面取りされている。36は瑪瑙製の勾玉である。小型で形状はC字形をなし、長さは2.9cmを測る。37は白色の長石製と考えられるものである。長さは2.8cmと、6点中最も小型のものである。造りは丁寧で、研磨の方向の違いによって生ずる稜もみられず表面はきわめて滑らかである。形状はC字形を呈する。38は緑色を呈する黒色チャート製のものである。コの字形を呈する。頭部、尾部の大きさにあまり差はなく、頭部端、尾部端ともに




**第13図　1号墳出土大刀**

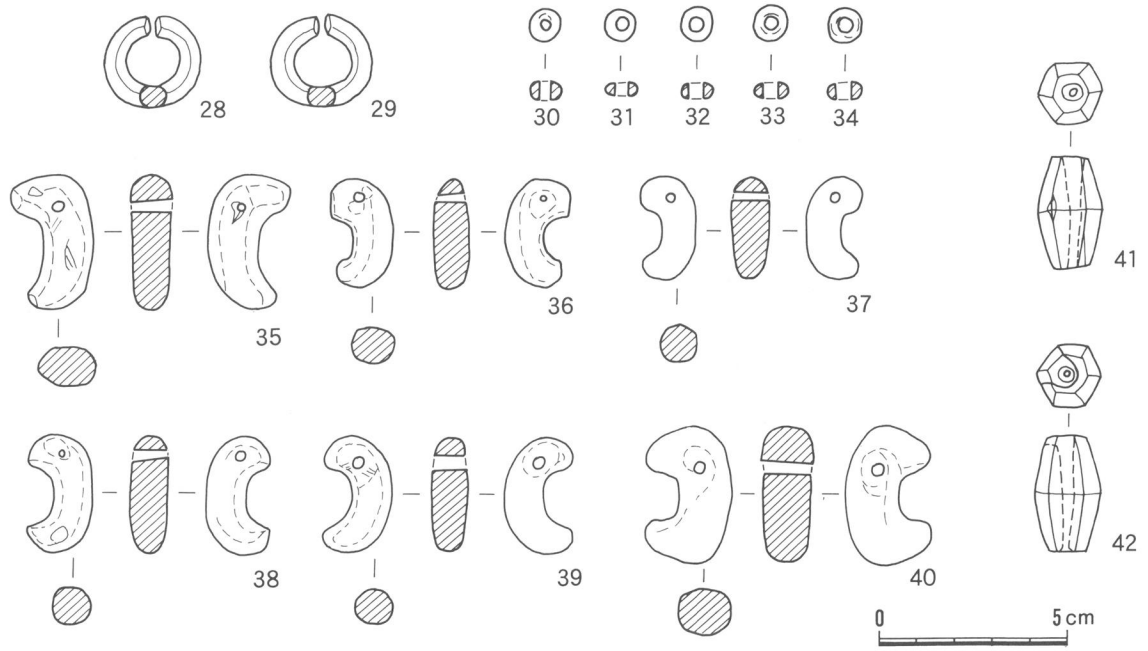



第14図　1号墳出土鉄製品

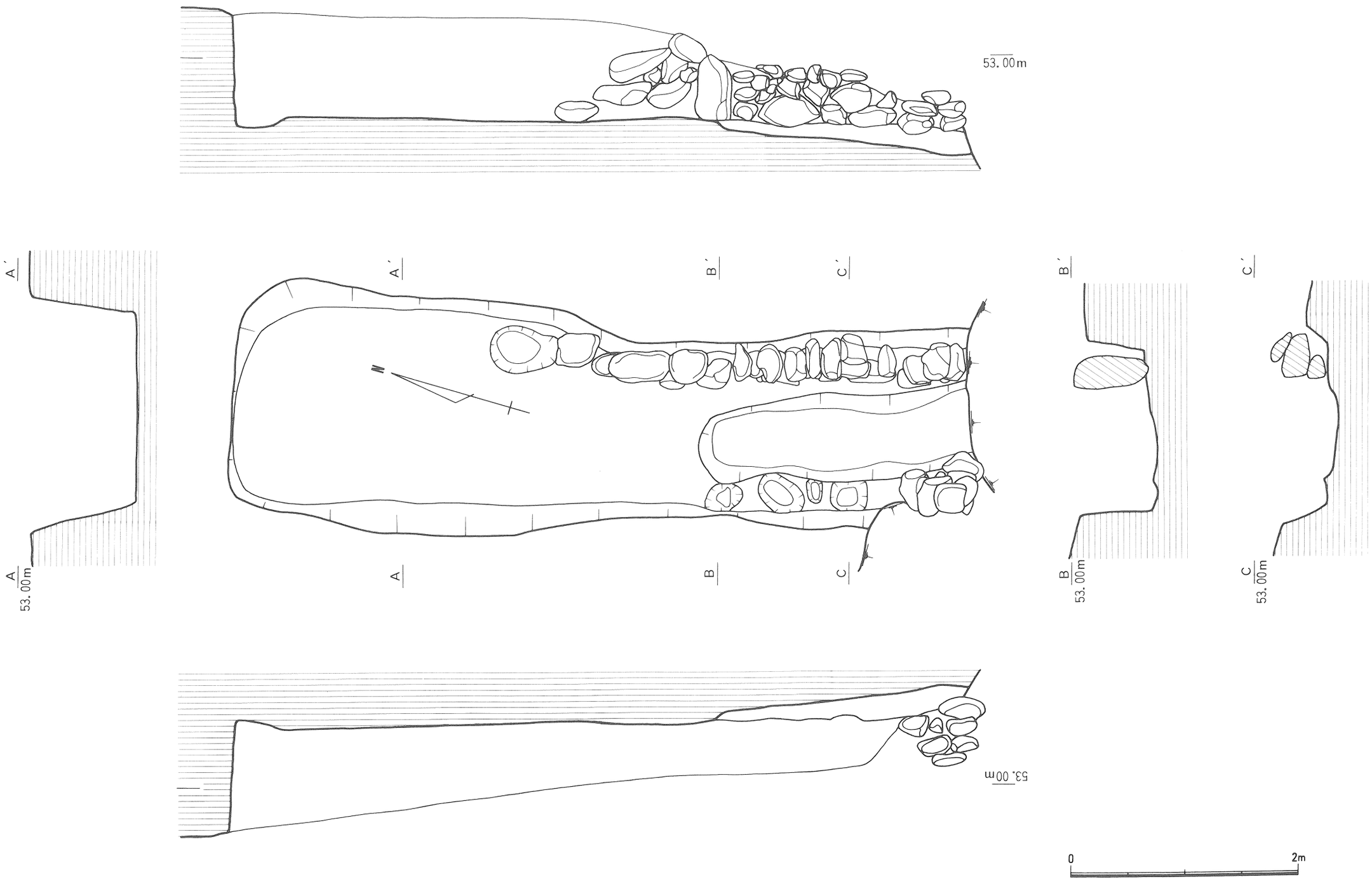
尖っている。39は緑色と赤色の粒子が混在する斑模様の蛇文岩製と考えられるものである。形状はC字形を呈する。40は6点中最も大型のもので、蛇解石製と考えられるものであり、コの字形を呈する。

**切子玉**（第15図41・42）

水晶製の切子玉で玄室内より2点出土している。いずれも六角の面取りがなされ、稜は比較的明瞭である。片側から穿孔され、貫通前に反対側から抉りを入れ貫通させている。長さはそれぞれ41が3.0cm、42が3.1cmを測る。




第15図　1号墳出土装身具




第16図　居村 2 号墳石室実測図

2．居村2号墳

(1) 墳丘

**立地・墳丘規模・平面形**

1号墳の南西約20mの位置に立地する(第3図)。1号墳より南西側は、丘陵の頂部が平坦な地形が続いており、確認調査時にも、何らかの遺構の存在が推定されていた。もちろん1号墳が石室を持つ古墳であることが確認されたため、複数の石室墳が検出されるであろうことは予想されたが、調査前の地形をみる限りでは、1号墳のような明瞭な円墳状の高まりも何ら確認できず、古墳の位置も推定できなかった。表土除去時に、南側斜面に向かう傾斜変換点付近で、1号墳の石室石材と同様の円礫が集中する箇所を確認したため、石室の存在を予想することができた。

2号墳は1号墳同様、基盤層の上に盛土をすることによって墳丘を造り出していたものと思われるが、調査時には表土を除去するとすぐに基盤層があらわれ、墳丘の盛土部分は、完全に流失してしまっている。また、1号墳同様南側、北側の斜面は急傾斜であり、このため石室の開口部付近まで流失・崩壊が及んでいた。さらに、石室は後世の攪乱が床面にまで及んでおり、石室に用いられていた石材もそのほとんどが抜き取られてしまっていた。検出面である基盤層上面の標高は53.5mと1号墳よりも標高の低い地点に立地していること、石室規模も1号墳に劣ることから、1号墳よりも若干小規模な、やはり自然地形を利用した円墳であったものと考えられる。なお、2号墳についても周溝はみられない。

(2) 主体部 (第16図)

2号墳の主体部も南に開口する横穴式石室であり、主軸方位はN－8°－Eをとるが、これは1号墳の主軸と全く同方位であり、1号墳を意識して設計・構築されたことがうかがえる。2号墳は攪乱・破壊を受けており、墓坑内には石室石材である円礫が乱れた状態で検出され、最終的に現位置を留める石材は羨道部左壁と、右壁の一部のみであった。また、羨道部南側の羨門部付近は崩落により失われている。なお、使用されている石材は1号墳同様、地山中の硬質砂岩の円礫を用いている。

**墓坑**

1号墳同様、深く基盤層を掘り込んでいる。墓坑プランの検出面から床面までの深さは、奥壁部分で1.0mを測る。玄室部分の床面は南側の開口部に向かって僅かに傾斜しており、また、羨道部には1号墳同様床面を掘りくぼめた排水を目的とする溝が設けられている。羨門部は崩落のため失われているが、墓坑の残存部長6.45m、幅は奥壁付近で2.0m、玄室中央部分で2.1m、玄門部付近で1.6m、羨道部中央付近で1.7mを測る。

**石室**

羨道部右壁、羨道部左壁の一部の石材のみが残存している。奥壁に用いられたものと思われる大型の円礫が奥壁付近で1点みられた他は、墓坑内に落ち込んだ石材中に、天井石として用いられたような大型のものはみられない。

羨道部左壁には細長い円礫を立てて置いた立柱石がみられること、立柱石の北に置かれた石材がやや外側に配置されていること、また、羨道部の石材の配列・積み上げられた状態から、1号墳同様、擬似両袖形のプランを持つ石室であったことが考えられる。奥壁付近には、鏡石状の偏平なものではないが、比較的大型の石材が原位置を移動した状態で確認されており、おそらく奥壁の石材として用いられていたものと考えられる。

床面上には直径5cm程度の小礫が多く散乱しており、これらの小礫がバラス状に床面に敷かれていた可能性もある。

**羨道部**

左壁と右壁の一部、および基底石の抜き取り痕が検出されている。左壁・右壁ともに直線的に配置され、その間には排水を目的としたであろう溝状の凹みがみられる。羨道部の復原幅は石材の内側で0.8mを測る。玄室との境界には、床面を若干掘りくぼめて立てられた立柱石がある。また、石積みは基底石に大きめの石材を横長に配し、２段目からは、大きさもあまり揃っていない石材を、小口を内側に向けて比較的乱雑に積み上げている。

(3) 遺物の出土状況（第17図）

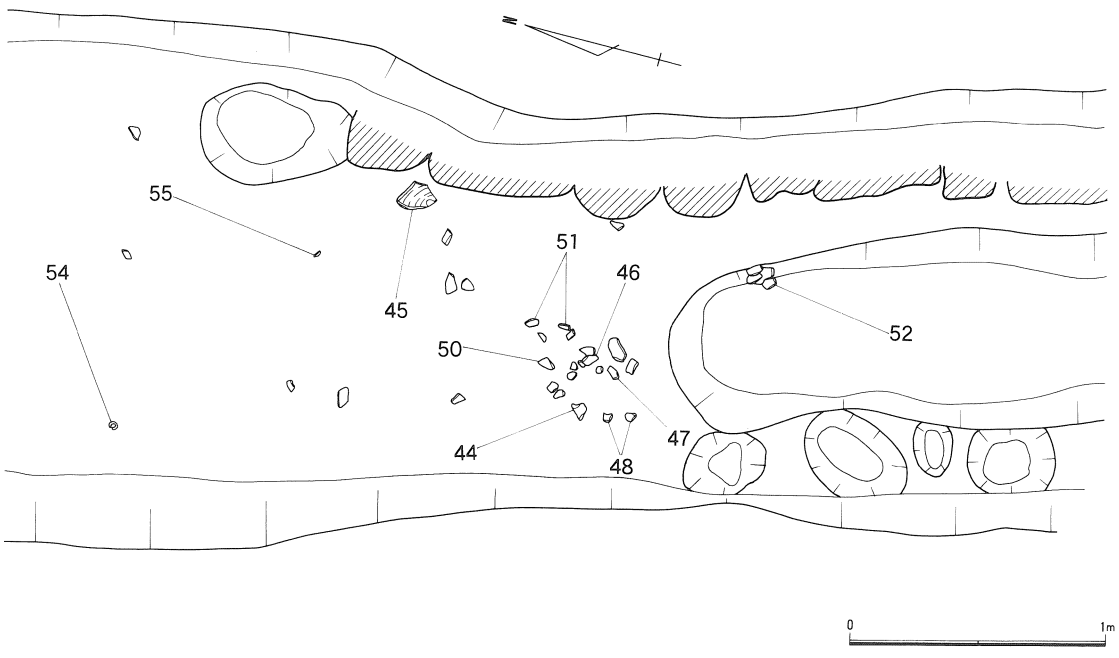
石室内は攪乱を受けているため、遺物は石室内覆土、床面、石室南側の斜面に散乱した状態で出土している。床面上の遺物についても、同一個体の破片が数十センチのレベル差で検出されるなど、原位置を留めている遺物は少ないものと考えられる。石室内床面からは、耳環１点と、須恵器・土師器片が出土している。耳環は玄室中央右壁寄りの床面上から、鉄製大刀の破片は玄室羨道部よりのやや左壁寄りの床面で、また土器片は玄室でも羨道部に近い位置で比較的まとまって出土している。玄室覆土中からは大刀破片、須恵器・土師器片、大刀に装着されていたものと考えられる鉄製の鍔が出土している。石室外の南側斜面からも、須恵器・土師器片を採取している。

(4)遺物

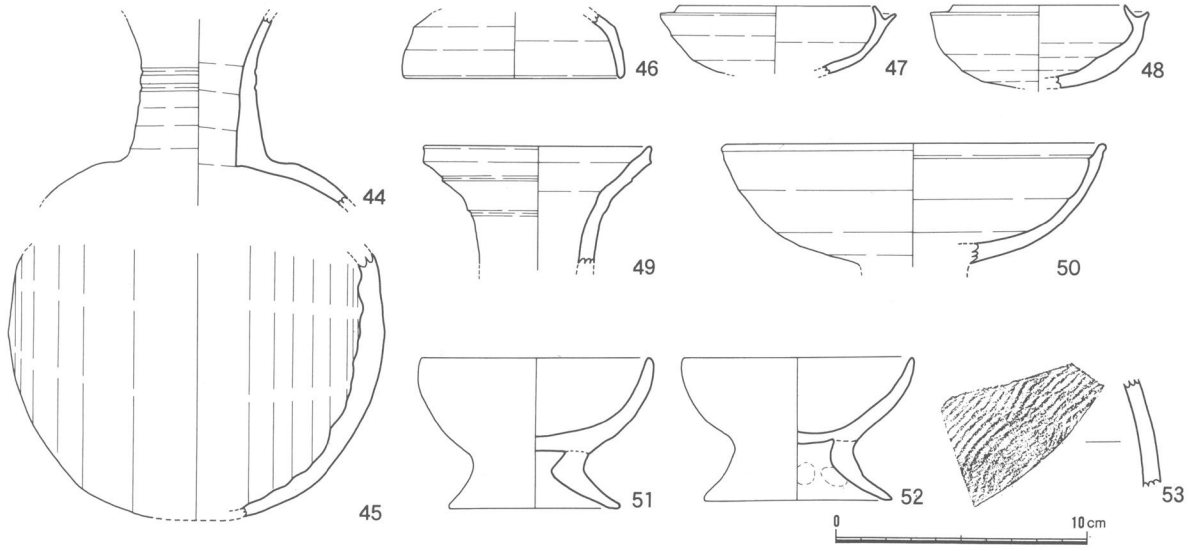
ａ．土器（第18図）

**須恵器**（44～50、53）

49・53を除いて石室床面から出土したものである。44・45はフラスコ形長頸瓶である。44は頸部に二条の沈線が巡るものである。46は坏蓋である。口径は8.6cmと小型であり、全体的に半球形を呈する。47・48は坏身である。丸底で受け部を持つ形態であり、いずれも最大径で９cm前後を測る。49は長頸壺の頸部であるが、44・45と同様なフラスコ形長頸瓶であると思われる。口縁部直下に段をもち、頸部には一条の沈線がめぐる。50は無蓋高坏の坏部である。口縁端部内面は横ナデにより沈線状に凹




第17図　２号墳石室遺物出土状況図




第18図　2号墳出土土器

んでいる。53は、石室墓坑西側の表土中で採取されたタタキ目が明瞭に残る甕の破片である。

**土師器**（51・52）

いずれも石室床面上から出土した小型の高坏である。坏部の口径より若干小さな径をもつ低い脚部が取り付くものである。

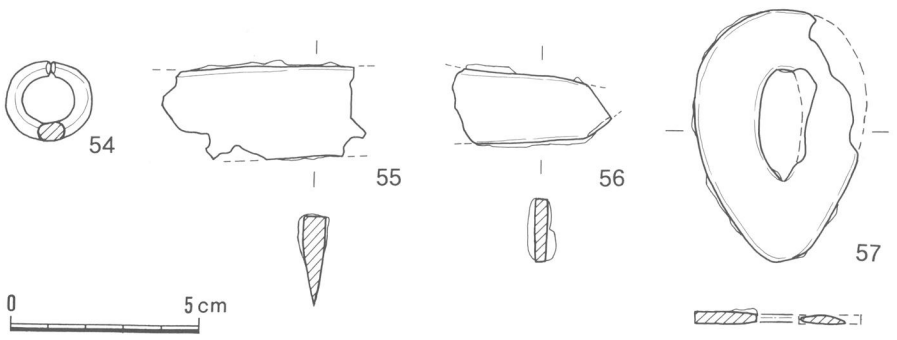
b．鉄製品（第19図）

**大刀**（55・56）

刀身の幅2.5cmをはかる大刀の破片である。56は茎尻の部分であるが、下部を斜めにカットした隅切尻のものである。

**鍔**（57）

倒卵形の大刀の鍔である。内径からみて55・56の大刀に取り付いていたものと考えられる。残存部分で長径6.7cm、短径4.4cmを測る。




第19図　2号墳出土金属製品

c．装身具（第19図）

**耳環**（54）

1点出土している。玄室中央右壁寄りで検出されている。長径2.3cm、短径2.2cmを測り、断面は楕円形である。銅芯金張りであり、金色に輝く表面の金属箔の残存状況も良好である。金属箔の成分分析によると、金の純度はかなり高いものである。

### 3．居村３号墳

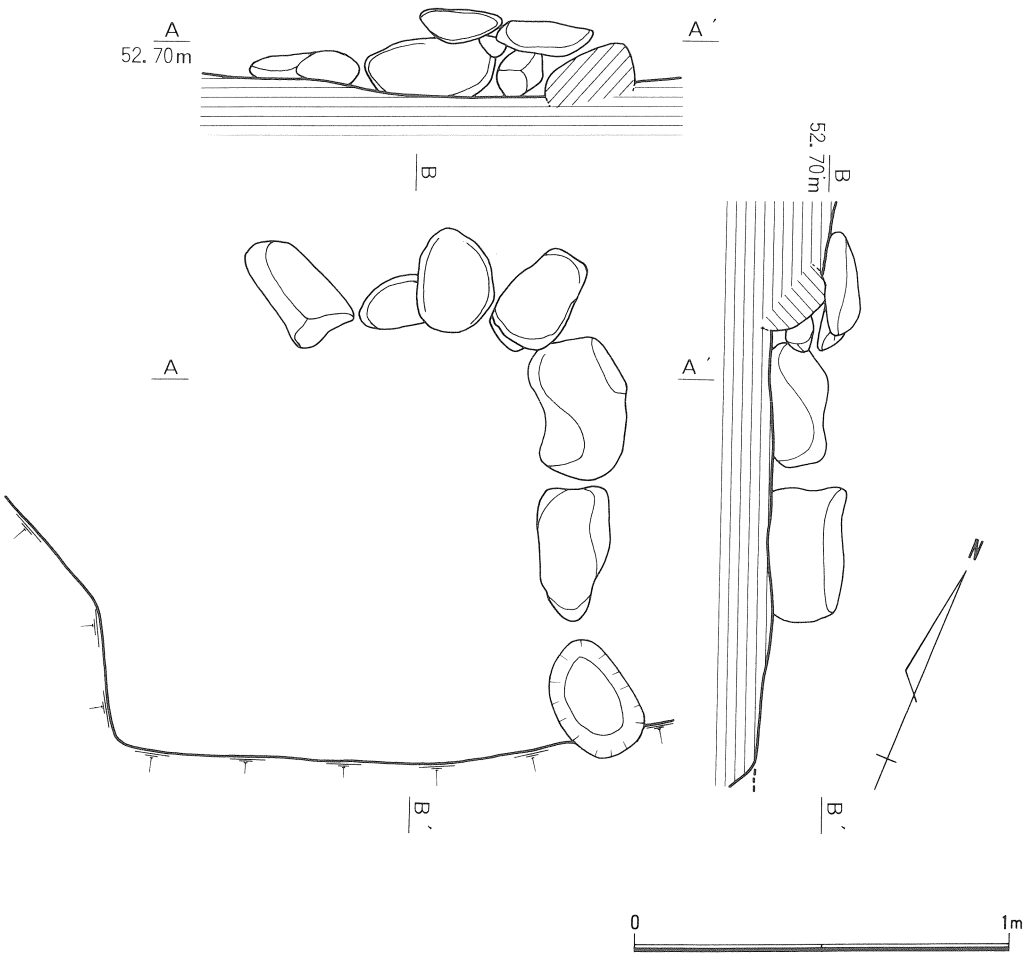
(1) 遺構の状況（第20図）

規模、構造からみて小石室であると考えられる。墳丘、墓坑はみられない。

尾根頂部から南斜面に向かう位置で、表土除去時に並ぶ礫を検出した。１、２号墳のように墓坑の掘り方はみられず、平坦な基盤層直上に、礫がＬ字形に並んだ状況が検出されている。礫は、二段が残存しているが、使用されている石材は１、２号墳同様の硬質砂岩の円礫であり、基底石は基盤層を若干掘り込んで据え置かれている。規模を推定するため、基盤層に残る基底石の痕跡の検出につとめたが左壁の１箇所で確認されたのみである。主軸を南に向けていると仮定すれば、北側の石積みは奥壁部分に相当するが、ここに大きな石材を用いていない点、墓坑の掘り込みがみられない点が１、２号墳とは状況が異なる。このことから、３号墳は小石室であった可能性も考えられる。

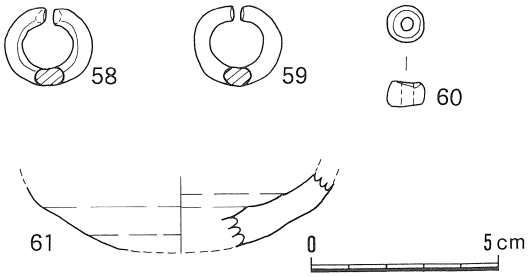
(2) 遺物の出土状況

床面で耳環、覆土中から臼玉、須恵器小片が検出されている。耳環は二点出土している（第21図58・59）。58は長径2.3cm、短径2.0cm、59は長径2.3cm、短径2.1cmを測り、断面はいずれも楕円形である。水銀アマルガム法により銅芯に金属箔が貼り付けられたものである。表面の金属箔は蛍光Ｘ線照




第20図　居村３号墳石室実測図

射による成分分析によると主たる成分は銀であるが、金もかなりの割合で含まれている。60は黒耀石製の臼玉である。61は須恵器坏身の小片である。




第21図　3号墳出土遺物

## 第3節　まとめ

これまで述べたように居村古墳群は、掛川市域でこれまで調査事例の少ない横穴式石室を埋葬主体に持つ古墳群であり、貴重な一事例を提供するものとなった。比較的遺存状況の良好であった1号墳を中心に、調査の成果についてまとめておく。

**1．墳丘・石室の構造について**

1号墳は舌状に延びる丘陵頂部の、瘤状に高まった自然地形を利用して築造された、直径17mの円墳である。墳丘は、焼き払い・整地・墓坑掘削・盛土という手順で構築されており、墳丘を画する周溝状の施設や葺石等の外部施設はみられない。

造墓当時の墳丘と石室の構築過程を復原してみると、まず旧表土の地形が南に緩く傾斜した平坦な地形を選地している。墳丘は、旧表土上面で検出された炭化物層の存在から、最初に草木の焼き払いが行われ、その後旧表土上面に盛土を行い平坦面を造り出す整地（墳丘基底面）を行っている。次に墓坑を掘削することになるが、もともと南に傾斜した地形であるため、石室の奥壁近くは深く掘削する必要が生ずるが、羨門部に近づくにつれ、掘削量は少なくてすむことになる。石室を納める墓坑は、その空間を上半は盛土、下半は地山掘り込みによってつくり出している。石室の石材の積み上げは、最初に墓坑底面に奥壁・立柱石・羨門の石材を配し、次にその間の基底石を並べる。その上に側壁の石材を小口積みで積み上げていくが、その際同時に石室内外に土を充填しながら積み上げ、墳丘基底面のレベルに達したところで、さらに石室積み上げと同時に墳丘の盛土を行っていく。石室が積み上がると天井石を載せ、最後に石室内に充填された土を除去し、石室内の空間が完成する。さらに天井石の上に石室が隠れるように盛土をし、墳丘の完成をみる。このように、居村1号墳の墳丘・石室の構築には、掘削・盛土で動かす土量を抑え、自然地形を利用することによって、古墳築造にかかる労働力の省力化を図ったものとなっている。

**2．石室の規模と形状**

1号墳の石室の形態的な特徴についてまとめると、①玄室と羨道部とを、若干内側に迫り出させた立柱石で区画したいわゆる「擬似両袖形」に分類される石室であること、②玄室は平面形が胴張り形を呈する、③石室は単室構造であり、羨道部が玄室長とほぼ同じ長さを持つ、狭長な石室であること、④玄室の奥側1/2に敷石がみられる、⑤奥壁に大型の鏡石を用いている、等が挙げられる。平面形態を特徴づける①・②・③についてみると、豊岡村押越6・8号墳、社山2号墳、磐田市寺谷5号墳など、遠江地方では6世紀後半以降一般的にみられるものである（鈴木1988b）。この形態の石室については、近年の横穴式石室の編年・系譜研究（加納1988・鈴木1988b・土生田1991）から、遠江地域で6世

紀後半に出現、6世紀末から7世紀前半にかけて群集墳の盛行期に主体となる形態であり、三河で盛行していたものを受容し、徐々に在地化したものと考えられており、東海地方西端部に系譜の源流を求めうるものとされている。

### 3．古墳の年代について

今回の調査では、1号墳玄室内において須恵器・土師器の出土をみたが、これらの土器の年代について検討し、古墳群の造墓の時期についてみていくことにする。

1号墳の玄室から出土した須恵器は、脚付長頸壺（第12図3）1点を除いて、ある程度限定された時期幅を有するものと考えられる。脚付長頸壺は、胎土・焼成ともに他の須恵器とはその印象が異なり、形態的にも比較的古相の特徴を備えており、7世紀初頭から7世紀前半の年代が与えられそうである。それ以外の須恵器はすべて7世紀中頃(陶邑編年TK217型式併行期、湖西編年第II期第5～6小期）に該当するものと考えられ、型式差は見受けられない。古相の須恵器が1点のみであること、それ以外の須恵器とも大きな時期差ではないことから、1号墳は追葬がなされず、造墓の時期は7世紀中頃であると考えられる。また2号墳の石室内外からも須恵器・土師器片が出土しているが、すべて7世紀中頃（陶邑編年TK217型式併行期、湖西編年第II期第5～6小期）に相当し、その段階よりも大きく遡ったり、降ったりする型式のものはみられず、この時期が造墓の時期と考えて良いだろう。3号墳出土須恵器は小片であり、石室の構造等他の要素でも時期検討の情報は乏しいが、1・2号墳と造墓時期はそう大きく離れていないものと考えられる。1・2・3号墳の相対的な造墓の時期の先後関係を示すものはないが、同一丘陵上での選地からみて、1号墳が最も早い段階で造られたものと推定される。

遠江地域では、古墳の築造は8世紀はじめまで行われてはいるが、7世紀中頃といえば、群集墳の衰退期にあたり、墳丘・石室の小型化、単次葬化（水野1970）がみられるようになる時期である。居村1号墳は、石室は比較的大型で、しっかりとした造りをしてはいるものの、一方で上記のような省力化や、追葬がみられない点、また副葬品も量的にはさほど多いとはいえず、内容も一般の群集墳のものと変わりない。さらに3号墳が小型石室である可能性も考え併せると、群集墳の終末への動きが、当古墳群にも反映されているといえよう。古墳築造に対する人々の意識が次第に変化していることの現れといえようか。

### 註

1.旧表土上の炭化物層の検出事例は愛知県・京ヶ峰1号墳などで多く確認されている。これを古墳構築過程の障害となる草木の焼き払いと考える以外に、何らかの古墳築造に関わる儀礼的な行為であるとの考えもある。（石野1985・土生田1995）

2.石室平面形の分類・名称は、加納俊介氏、鈴木敏則氏の論考中の分類による。（加納1988・鈴木1988b）

3.金谷町教育委員会1983『駿河山2号墳発掘調査報告書』、袋井市教育委員会1994『山田原遺跡群I』

4.石材については伊藤通玄氏（静岡大学名誉教授）の御教示による。

5.袋井市教育委員会1996『金山古墳群・金山横穴群I・II』

6.鉄製品の分類・部位の用語等については、（臼杵1984・末永1941・杉山1988）の各氏の論考による。

7.望月明彦氏（沼津工業高等専門学校助教授）の分析、御教示による。

## 引用・参考文献


田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

後藤健一1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡　本文編』静岡県教育委員会

後藤健一1995『須恵器集成図録第３巻　東日本編Ⅰ』雄山閣

水野正好1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』５

向坂鋼二1994「第４章　第二節　群れ集まる古墳」『静岡県史　通史編１原始・古代』

鈴木敏則1988a「遠江における群集墳の終末について」『静岡県考古学研究21』静岡県考古学会

鈴木敏則1988b「遠江の横穴式石室」『転機』２号

土生田純之1988「西三河の横穴式石室」『古文化談叢』20巻上　九州古文化研究会

土生田純之1991『日本横穴式石室の系譜』学生社

土生田純之1995「古墳構築過程における儀礼―墳丘を中心として―」『古墳文化とその伝統』

石野博信1985『古墳文化出現期の研究』

服部哲也1993「横穴式石室の地域性―東海地方」『季刊考古学』第45号

加納俊介1988「西三河の横穴式石室について―石室の形状」『西三河の横穴式石室　資料編』愛知大学日本史専攻会考古部会

三河考古学談話会1994『東三河の横穴式石室　資料編』

末永雅雄1941『増補　日本上代の武器　本文編』

臼杵　勲1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号

杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８

伊藤通玄1987「大門大塚古墳石室材の産地について」『大門大塚古墳―昭和61年度基礎資料収集調査報告書―』袋井市教育委員会

掛川市教育委員会1989『天段古墳・東沢遺跡発掘調査報告書』

袋井市教育委員会1994『山田原遺跡群Ⅰ』

金谷町教育委員会1983『駿河山２号墳発掘調査報告書』

豊岡村教育委員会1983『押越・社山古墳群調査報告書』

豊岡村教育委員会1993『豊岡村史　資料編三考古・民俗』

豊田市教育委員会1995『京ヶ峰１号墳・谷下古墳』

豊橋市教育委員会1993『上寒之谷１号墳』

# 第Ⅳ章　居村遺跡の調査

## 第１節　調査の概要

居村遺跡は、第Ⅲ章で報告した居村古墳群の下層で検出された遺跡である。調査の契機としては、調査前の地形観察で、居村１号墳の南西側に不自然な平坦面が所在することが確認され、その性格の確認のため設定した斜面のトレンチ内において、弥生土器が検出されたことによる。平坦な丘陵上の堆積が薄いため、実質的には遺構の検出は居村古墳群の調査と並行して実施した。遺構が比較的明瞭に検出できたこと、土器の量も比較的まとまったものとなったことから、古墳群とは別に居村遺跡として報告する。

調査区は南西から北東に向けて延びる標高約53ｍの小丘陵上であり、比較的な平坦面をもつ頂部から、南東・北西に向かって急傾斜面となっている。表土は暗褐色土で、上面は腐葉土である。頂部の堆積は非常に薄く、場所によっては十数センチほどで基盤層に到達するほどである。基盤層は小礫を多く含む黄褐色土であるが、場所によって礫の大きさ、含まれる比率は異なる。特に北東の丘陵先端部では、基盤層の間層である白色粘土が露出している箇所もみられ、基盤層であるか否かのの認定は色・しまり具合等で総合的に判断することとした。上記のような堆積の状況から、遺構検出は基盤層上面でおこなうこととし、湿気を含んだ際の色調・土質・しまり具合の僅かな違いで検出した。覆土は基本的に黄灰褐色土である。

遺構は丘陵頂部の平坦部付近のものは比較的残りがよいが、丘陵斜面の傾斜にかかる部分に近づくにつれ、流失が激しい。また、斜面については地山削り出しによる住居跡等の遺構が検出されたが、かなりの急傾斜であるため、床面を一部失った状況で検出されている。また、丘陵上からの土砂の流失の際に形成された包含層が南北斜面に形成されている。

## 第２節　遺構と遺物

### １．遺構

検出された遺構は、住居跡５、掘立柱建物跡１、土坑11、その他ピット、不明遺構がある。(第22図)伴出した土器から、これらの遺構は弥生時代中期末から古墳時代前期のものと考えられる。以下、遺構の種類別にその概要を記述する。

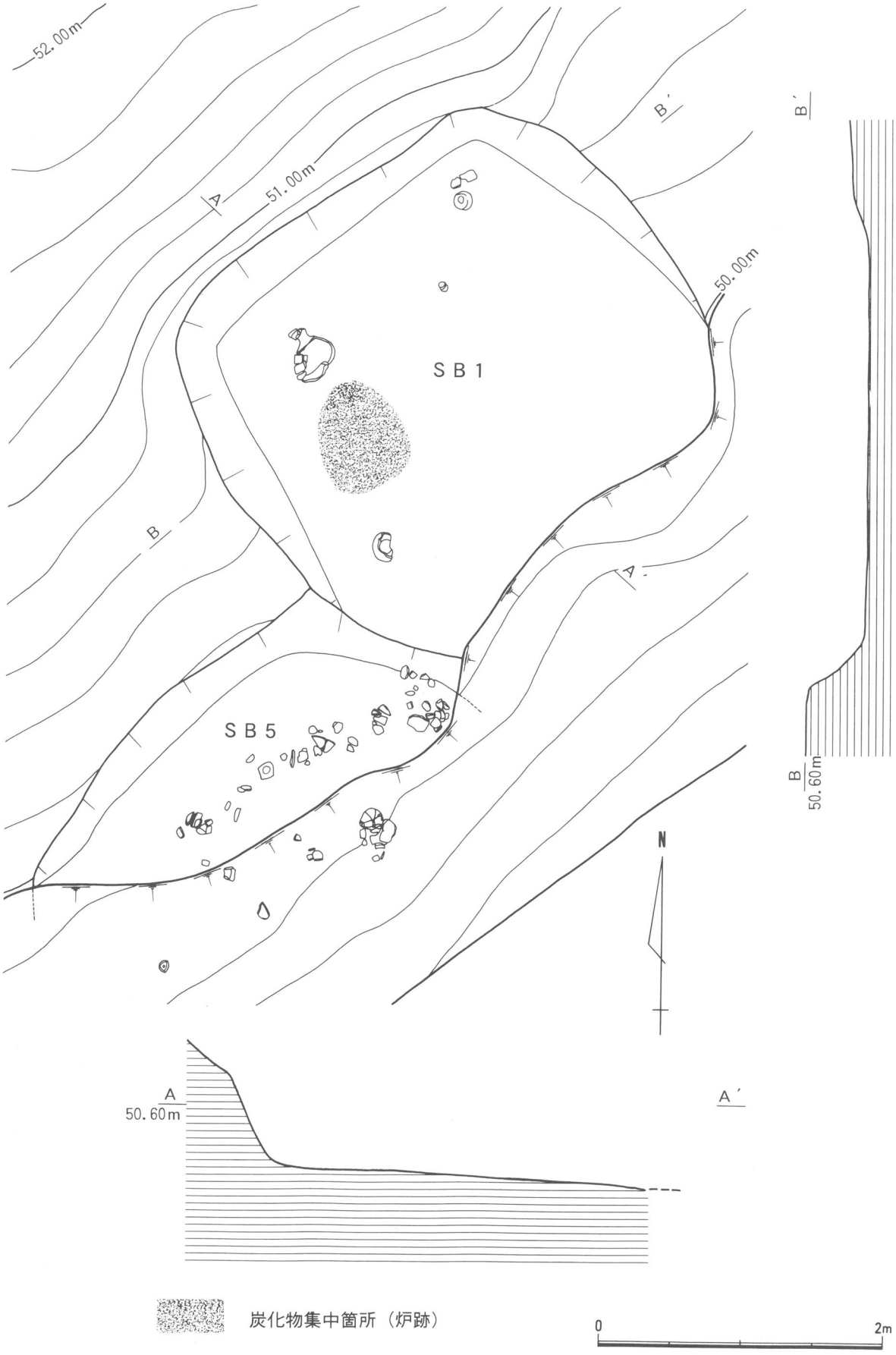
(1) 住居跡

丘陵の南東側斜面を削り出して造られているもの３基と、頂部付近の比較的平坦な場所に造られているもの２基の計５基が検出されている。前者についてはその立地が急傾斜地であることから、後世の土砂の流失により、どの遺構も床面南半を失った状態で検出されている。なお、時期差を示す切り合いが認められるのは斜面で検出されたＳＢ１、ＳＢ５の２基のみである。

ＳＢ１（第23図）

丘陵南東斜面にテラス状に削りだされた住居跡である。残存する床面の南西部分がＳＢ５を切って造られている。床面の標高は残存する床面の中央部付近で50.2ｍである。これは丘陵頂部の平坦部分のレベルから約２ｍ下位にあたる。覆土はやや赤みがかった黄褐色土であるが、丘陵頂部からの流れ

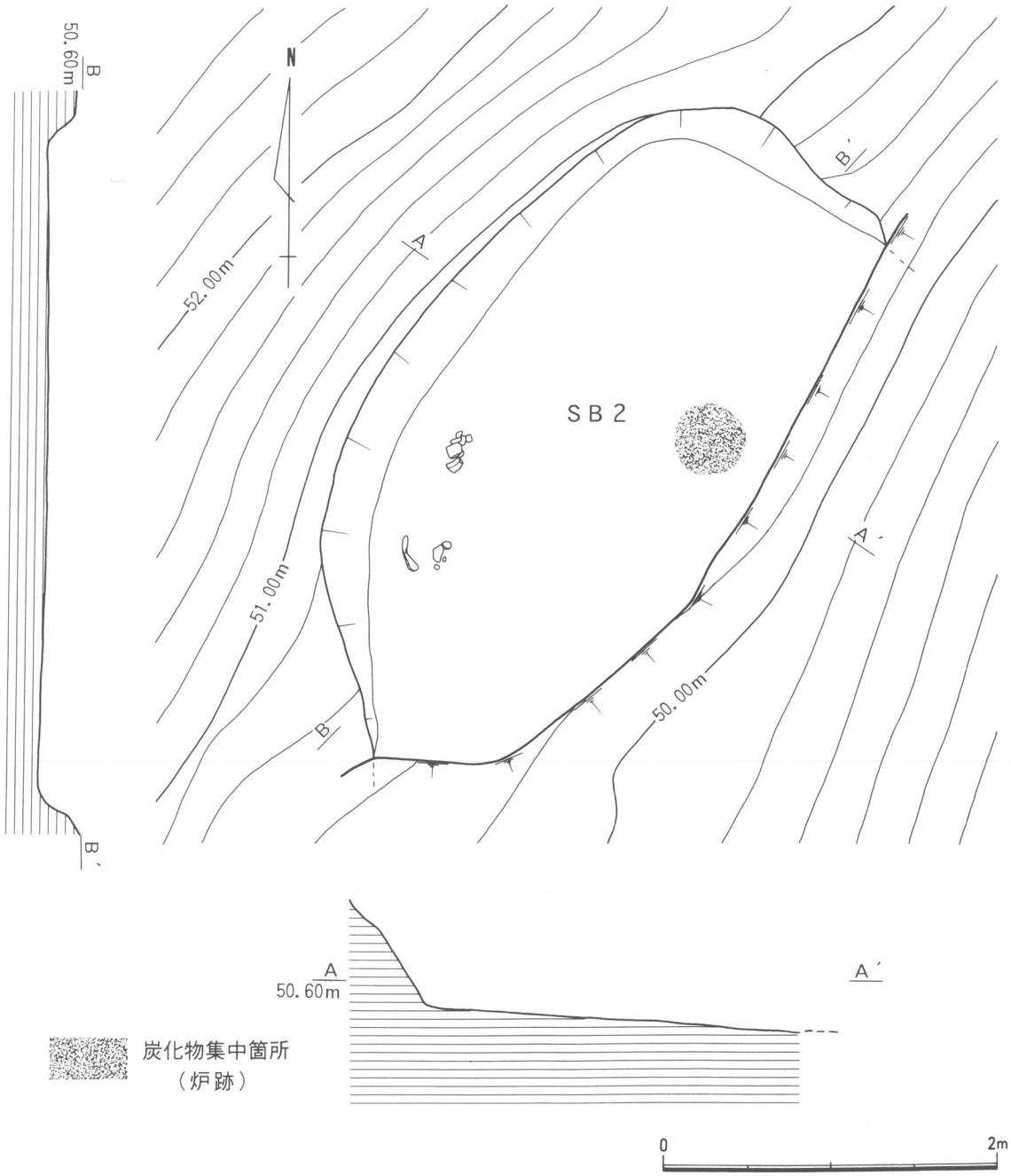
第22図　居村遺跡遺構全体図




第23図　ＳＢ１、ＳＢ５実測図

込みによる斜面堆積となっており、斜面上位から流れ込んだ土器が覆土中に多く混じっている。

平面の形状は北側の壁を１辺とする隅丸方形あるいは隅丸長方形であると考えられるが、奥の壁からから南に向かってその間口幅が開き気味となっている。床面は東西の最大幅3.2m、奥行き2.7mが遺存する。削り出しによる床面は北壁部分から南に向かって緩やかに傾斜している。残存する三辺の壁の下端には、いずれも壁溝は確認されなかった。また、残存部分の床面からは柱穴も検出されておらず、上屋の構造を推測できるものは検出されなかった。床面はそれほど硬化しておらず、また、貼床もみられない。床面中央やや西寄りに炭化物の集中する箇所が炉跡と推定される。遺物は土器(壺・甕・鉢）が出土している。



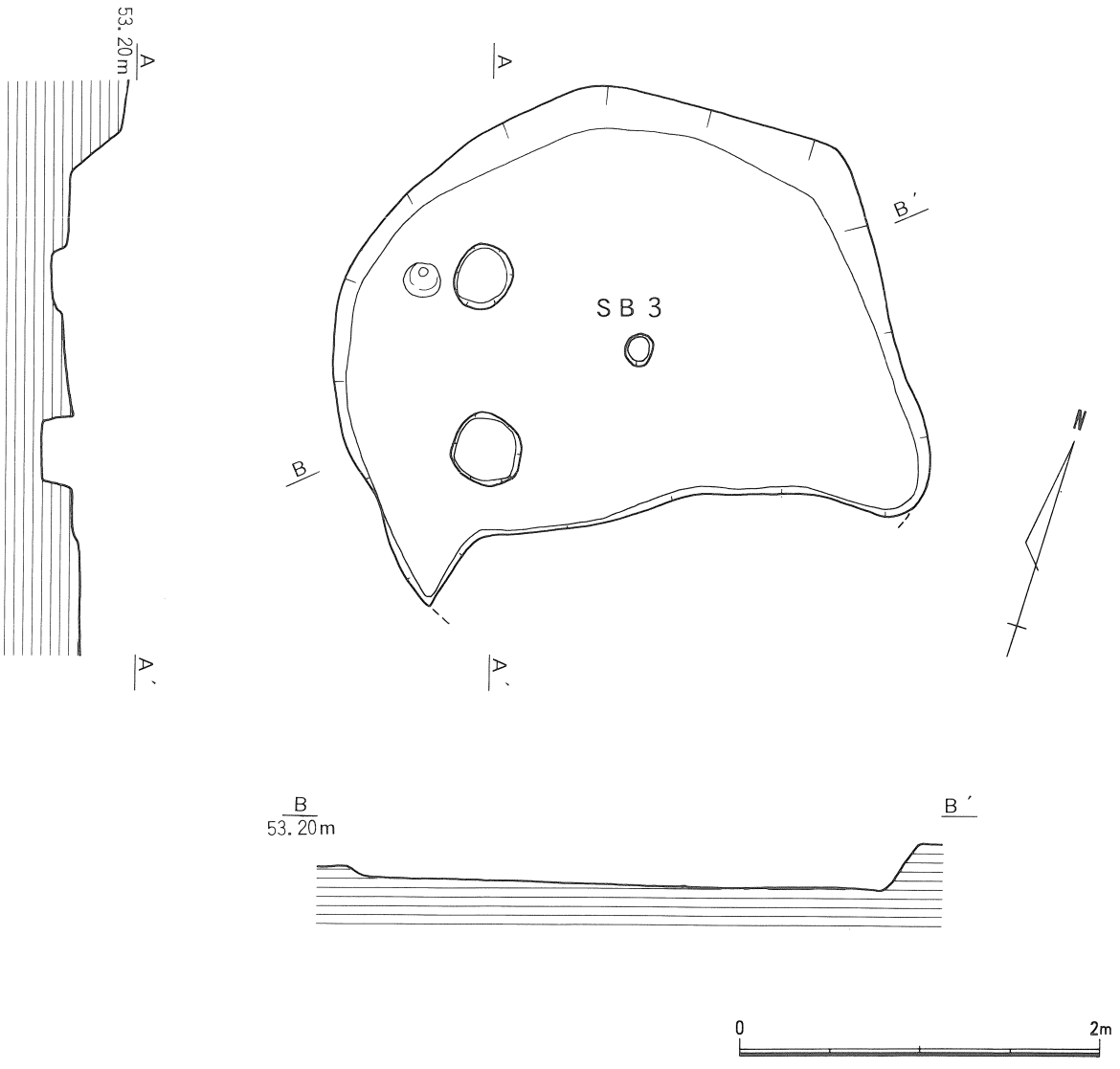

第24図　ＳＢ２実測図

ＳＢ２（第24図）

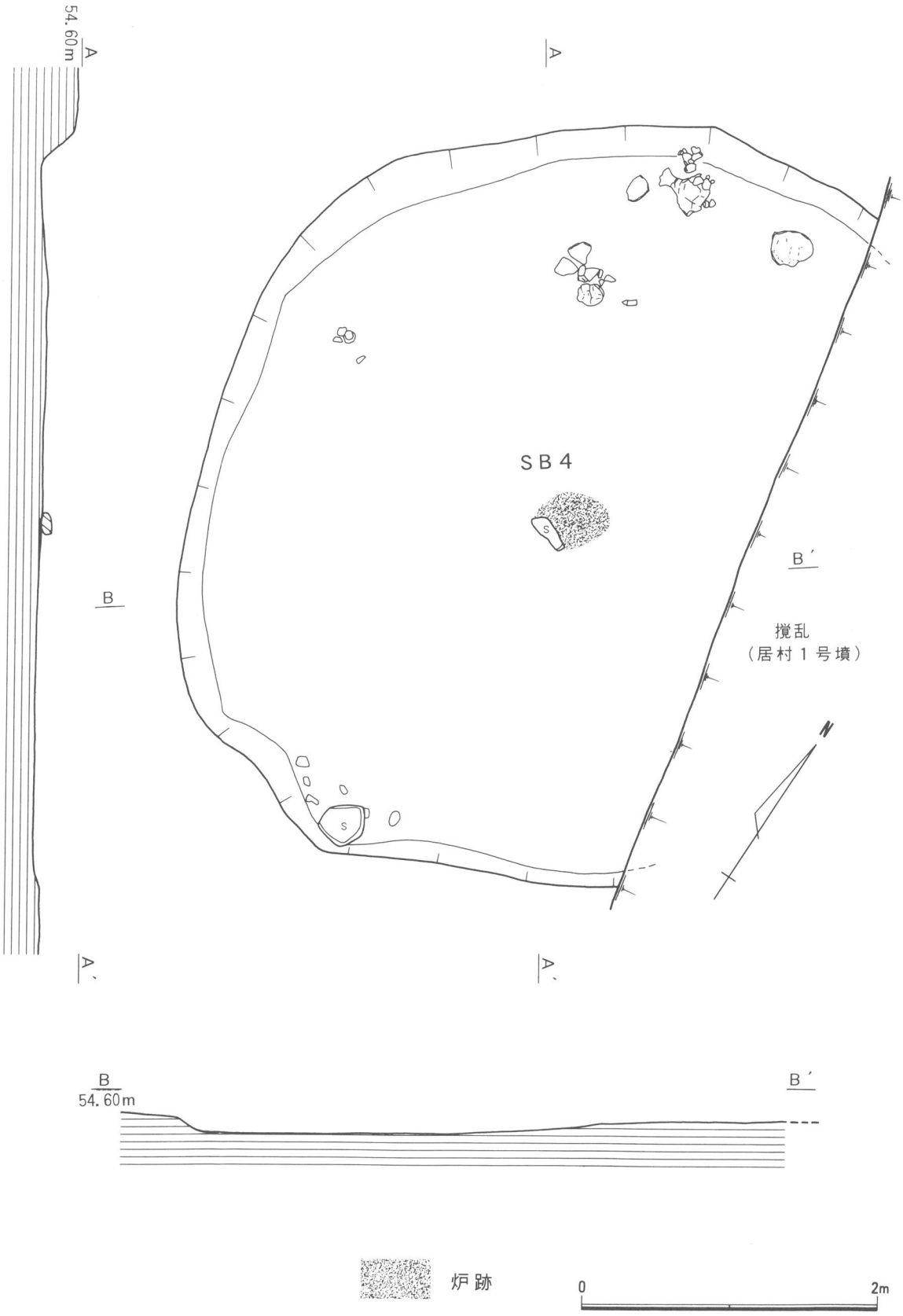
ＳＢ１の東側に位置する住居跡で、やはり斜面をテラス状に床面を削り出して造られている。床面のレベルはＳＢ１よりも約30cm高い位置に造られている。覆土は赤みがかった黄褐色土である。遺存する床面の形状から平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形であったと考えられる。残存部分の間口（削り出しによる西壁から東壁の幅）は4.3m、奥行きは2.0mを測る。床面はＳＢ１同様に奥の壁から外側に向かって緩く傾斜させている。床面には炉跡と考えられる炭化物の集中箇所がみられる。壁溝・柱穴は確認されていない。遺物は奥の壁近くの床面上で壺形土器１点が出土している。

ＳＢ３（第25図）

丘陵頂部の平坦部、南に緩く傾斜する部分で検出された竪穴住居跡である。平面形は遺構の南側の壁が流失しているため、やや不整形の隅丸方形を呈する。残存部分で東西2.9m、南北2.1mの規模をもつ。覆土は炭化物混じりの黄褐色土である。覆土中に炭化物がみられるものの、床面に焼土・炭化物の集中する状況はみられず、炉跡の位置は明確でない。床面には小穴が３つ検出されているが、いずれも掘り方が浅く、柱穴とは断定できない。出土土器は台付甕が１点、床面の西側隅で出土してい




第25図　ＳＢ３実測図




第26図　ＳＢ４実測図

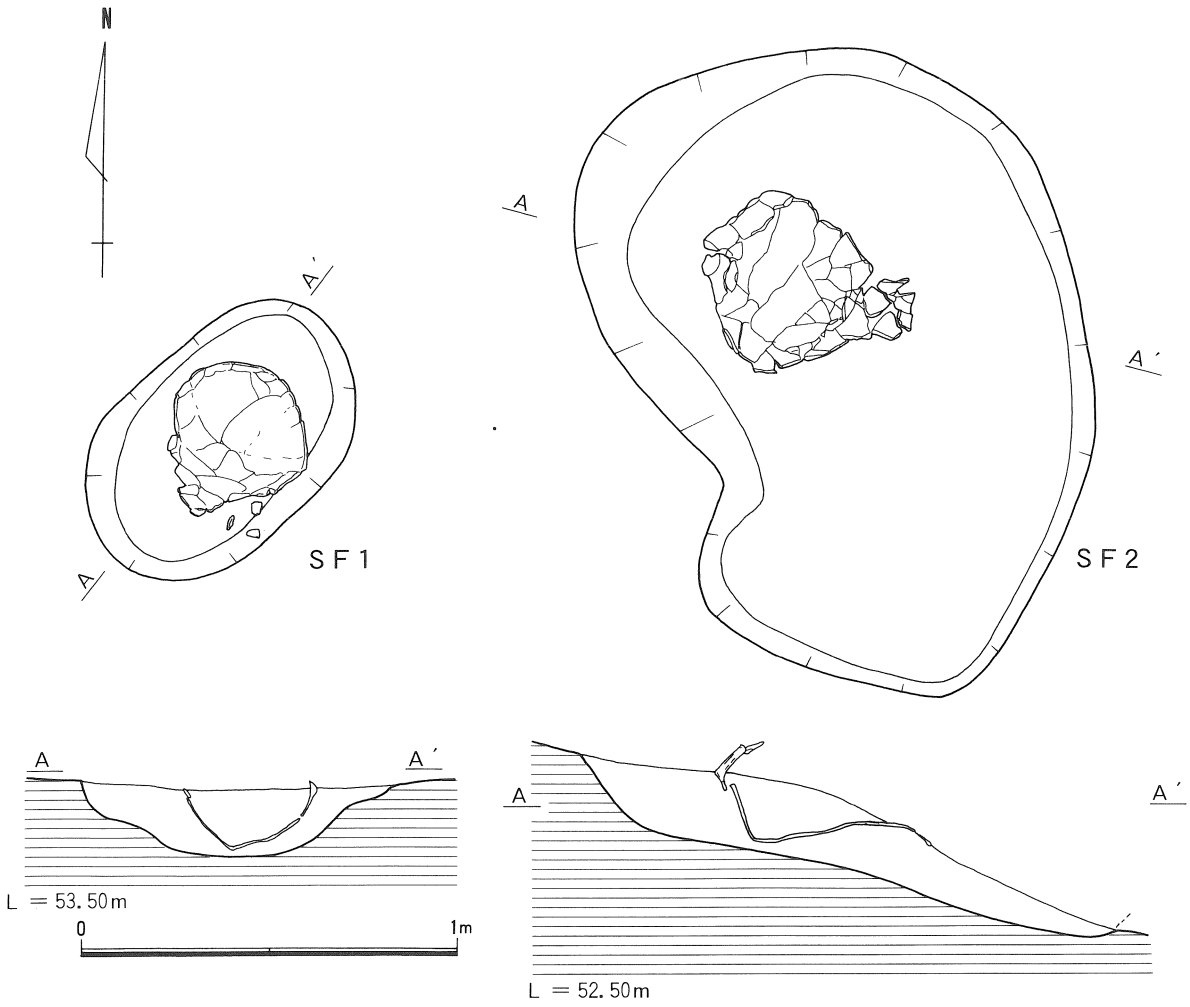
る。

ＳＢ４（第26図）

居村１号墳の墳丘盛土下で検出された竪穴住居跡であり、古墳の墓坑掘り方により東半部を失っている。今回検出された住居跡中では、最も規模の大きいものである。標高54mの、丘陵頂部の瘤状に高まった位置に造られており、その平面形は円形に近い隅丸方形である。遺存する部分の規模は東西3.5m、南北4.9mを測り、検出面から床面までの深さは25cmである。覆土はやや粘質の灰褐色土であり、炭化物を多く含んでいる。床面中央には礫１個を伴った、50cm×40cmの範囲の赤化した部分がみられ、炉跡と考えられる。柱穴・壁溝等の痕跡は検出することはできなかった。出土遺物は北壁付近で土器が集中して検出されている。

ＳＢ５（第23図）

斜面を削り出して造られた住居跡で、ＳＢ１に東側の壁を切られている。流失が激しく、奥の北側の壁および床面の一部が遺存するのみであり、平面形は不明である。床面は間口が3.2m、奥行きは1.0mのみが遺存する。床面はＳＢ１の床面とほぼ同レベル（標高50m）に造られている。遺物はすべて土器であるが、床面とほぼ同じレベルに比較的集中してみられたことから、いずれもこの遺構に伴うものと判断した。




第27図　ＳＦ１、ＳＦ２実測図

(2) 土坑

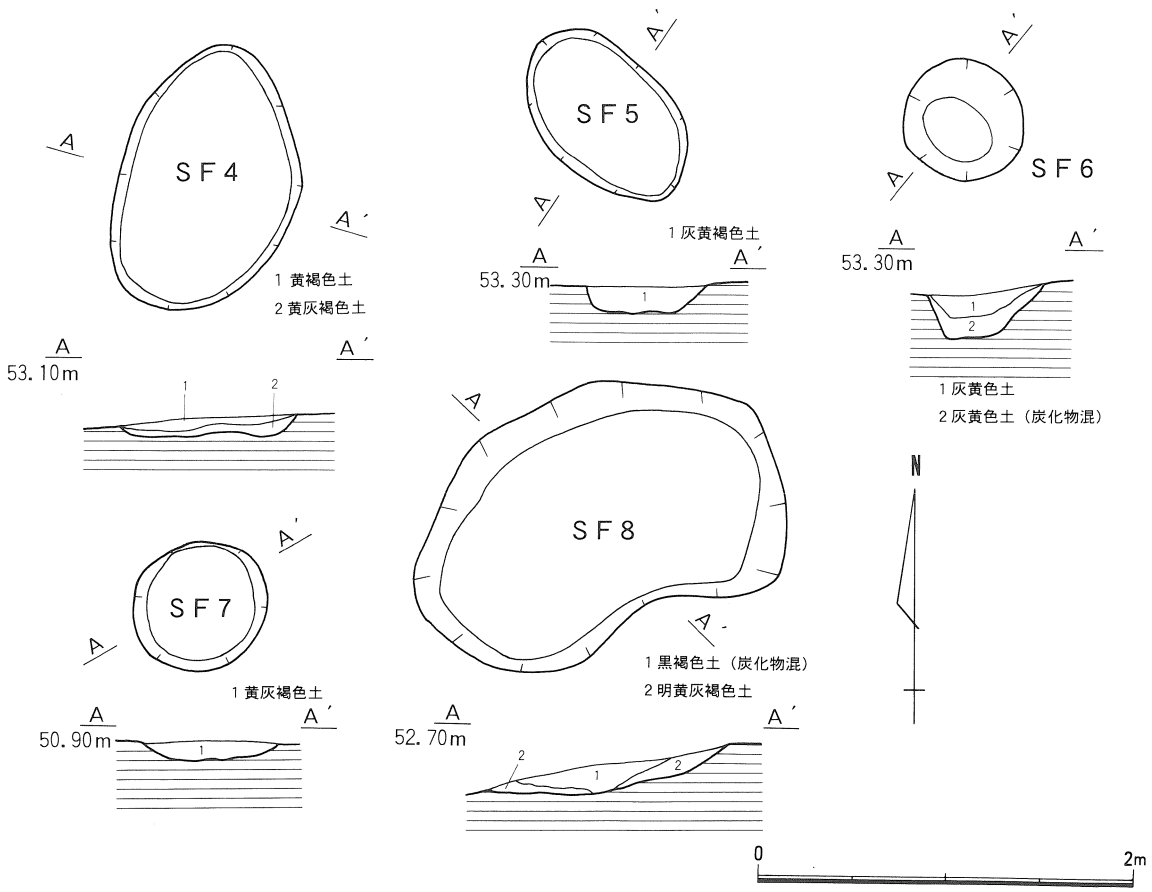
土坑は全部で11基検出されている。このうちＳＦ１・ＳＦ２の２基については、土坑内に大型の土器が伴うもので、土器棺墓であると考えられる。また、遺構が流失してしまっており、大型の土器のみが検出されたものもみられたが、これも土器棺として使用されていた可能性が高い（第37図21・22・32・33）。また、ＳＦ９・ＳＦ10・ＳＦ11の３基は、方位、規模、平面形も共通し、近接した位置で検出されている。

ＳＦ１（第27図）

土坑はやや長い楕円形を呈し、長径0.83m、短径0.54mを測るものである。深さは検出面から18cmである。断面形は皿状を呈し、緩く立ち上がっている。覆土は黄褐色土である。納められた土器は大型の壺であり、口縁と底部をほぼ水平な状態で横に倒した状態で納められていた。単棺の土器棺であると考えられる。

ＳＦ２（第27図）

土坑は、納められた土器の大きさに比べかなり大きい、不整楕円形を呈するものである。丘陵上の平坦部から斜面にかかる傾斜変換点付近に掘削されているため、掘り方の上半部は流失しているものと考えられる。検出面から床面までの深さは17cmで、覆土は黄褐色土である。単棺の土器棺であると考えられる。土器は土坑の中央よりやや北西寄り、口縁部を斜面の下位に向け、底部に比べ口縁部を下位にやや傾斜させた状態で納められていた。




第28図　ＳＦ４、ＳＦ５、ＳＦ６、ＳＦ７、ＳＦ８実測図

ＳＦ３

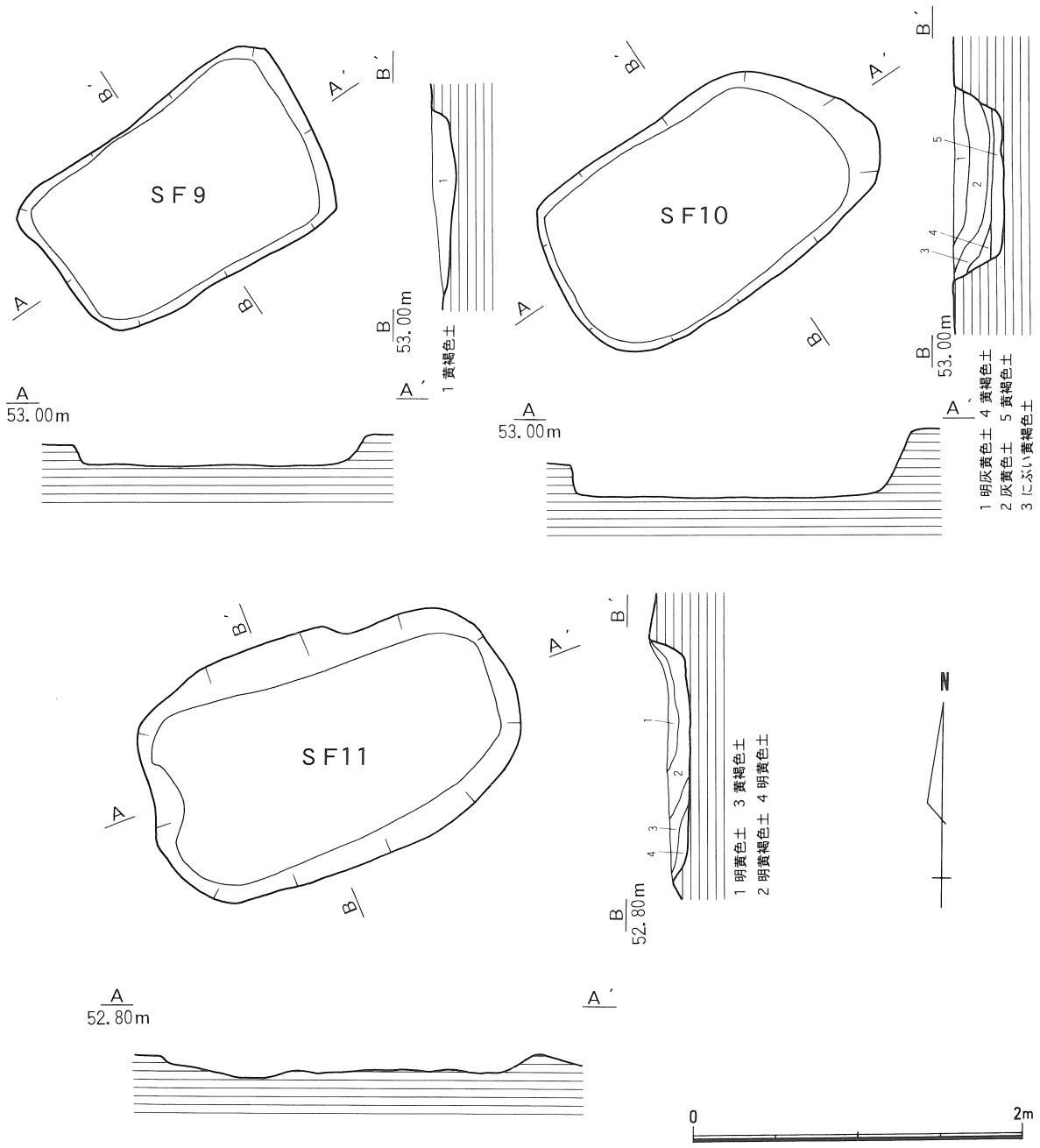
丘陵平坦部から北西斜面にかけての傾斜変換点付近で検出された、直径0.9m、深さ18cmの土坑である。覆土は暗褐色土である。覆土中より台付甕１点が出土している（第37図19）。

ＳＦ４（第28図）

丘陵頂部平坦部で検出された土坑である。長径1.45m、短径0.9mの楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは10cmと浅く、断面形は皿状を呈する。覆土中より弥生土器片が少量出土している。

ＳＦ５（第28図）

竪穴住居跡ＳＢ３の北西に近接して検出された土坑である。平面形は楕円形で長径1.05m、短径




第29図　ＳＦ９、ＳＦ10、ＳＦ11実測図

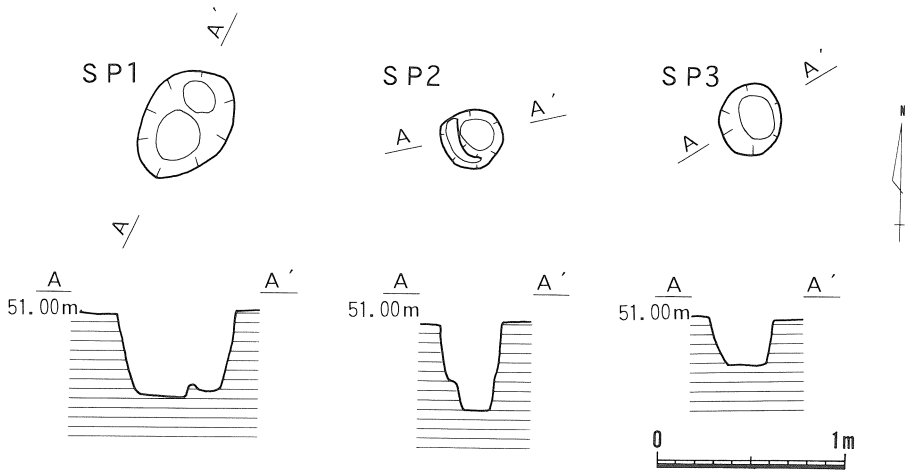
0.65mを測る、深さは検出面より13cmである。

ＳＦ６（第28図）

これもＳＢ３に近接して検出された土坑である。円形を呈し、直径0.65m、深さ25cmを測る。覆土には炭化物が混じる。

ＳＦ７（第28図）

円形を呈する断面皿状の土坑である。

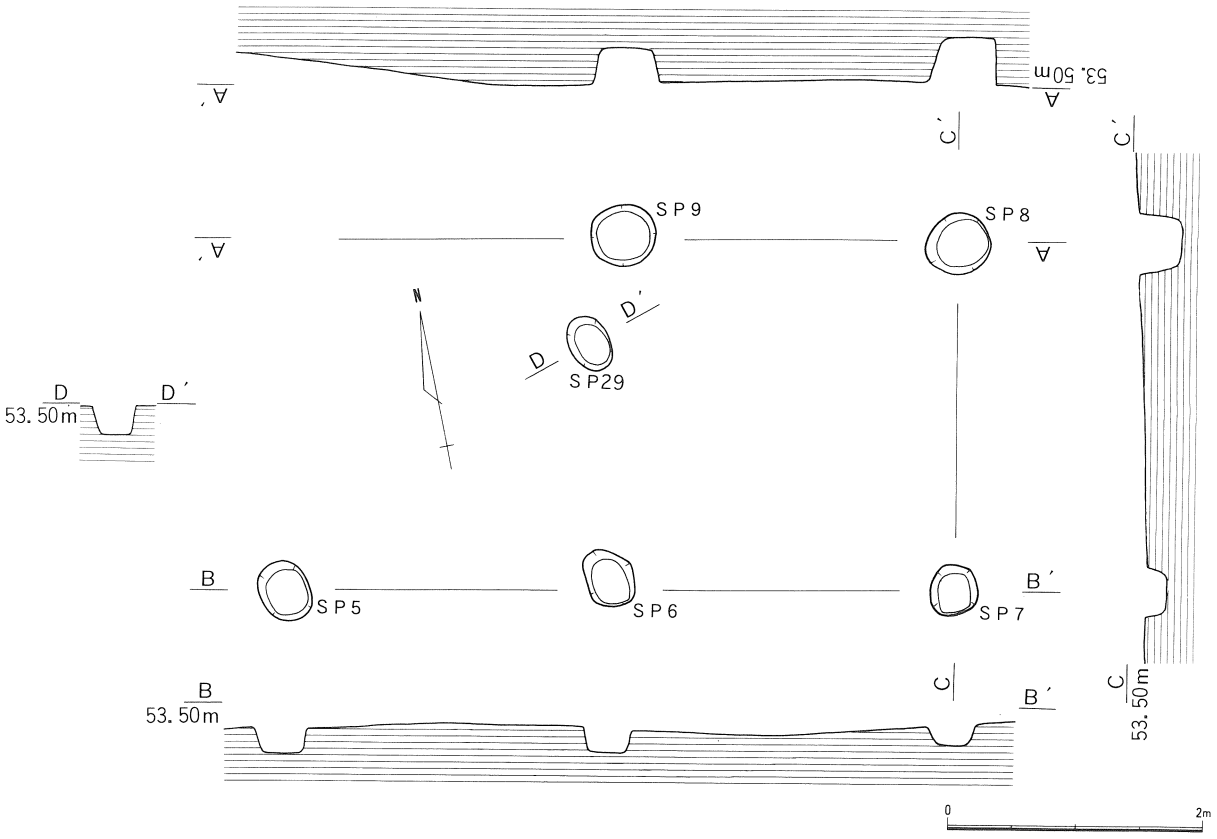



第30図　ＳＰ１、ＳＰ２、ＳＰ３実測図

北西側で検出されたＳＰ１・ＳＰ２・ＳＰ３とともに、丘陵頂部からやや降ったところの段状の平坦面に掘り込まれている。

ＳＦ８（第28図）

調査区南西端近くの、丘陵頂部で検出された土坑である。平面形は不整楕円形であり、検出面からの深さは非常に浅い。長径2.1m、短径 1.3mを測り、覆土には炭化物を多く含んでいる。




第31図　ＳＨ１実測図

ＳＦ９・ＳＦ10・ＳＦ11（第29図、図版17－２）

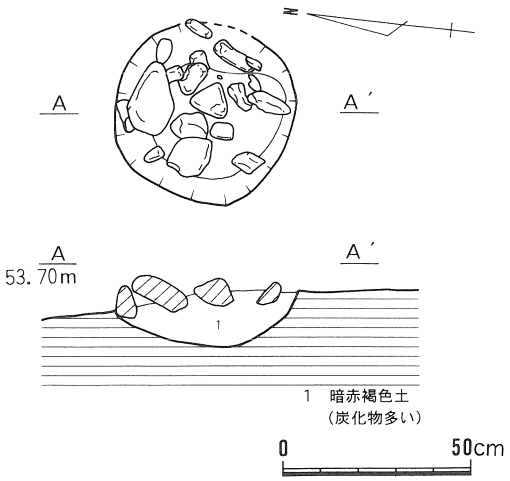
竪穴住居跡ＳＢ３の西側で検出された土坑で、３基とも方位、規模、平面形が共通しており、近接して掘り込まれている。なおＳＦ11は、居村３号墳の小石室の下層にあたる位置で検出されている。

ＳＦ９は長さ1.8m、幅1.1m、深さ15cmの長方形の土坑である。主軸方位はＮ－55°－Ｅである。覆土はやや粘質の黄褐色土である。ＳＦ10は、北側短辺がやや丸みを持つ不整隅丸長方形の土坑で、長さ2.1m、幅1.2m、深さ30cmを測る。主軸方位はＮ－56°－Ｅである。ＳＦ11は長さ2.3m、幅1.4m、深さ15cmの隅丸長方形を呈する土坑である。主軸方位はＮ－69°－Ｅである。３基とも遺物が全く検出されておらず、年代、性格等不明であるが、その形状・規模・方位を意識している点からみて土坑墓の可能性もある。

(3) 掘立柱建物跡

ＳＨ１（第31図、図版17－1）

調査区内の丘陵頂部の平坦部のうち、最も丘陵の幅が広く、平坦な位置に検出されている。桁行5.2m，梁間2.7mの２間×１間の建物跡と考えられる。棟方向はＮ－78°－Ｗを向いており、東西に長い。建物プランと対応しないＳＰ４を含め、ピットは６個検出している。径は32～52cm、深さは17～35cmである。この遺構から年代・性格を決めうる遺物の出土はみられなかったが、周辺の遺構のあり方からみて、倉庫跡であると考えられる。




第32図　ＳＸ１実測図

(4) その他の遺構

ＳＸ１（第32図）

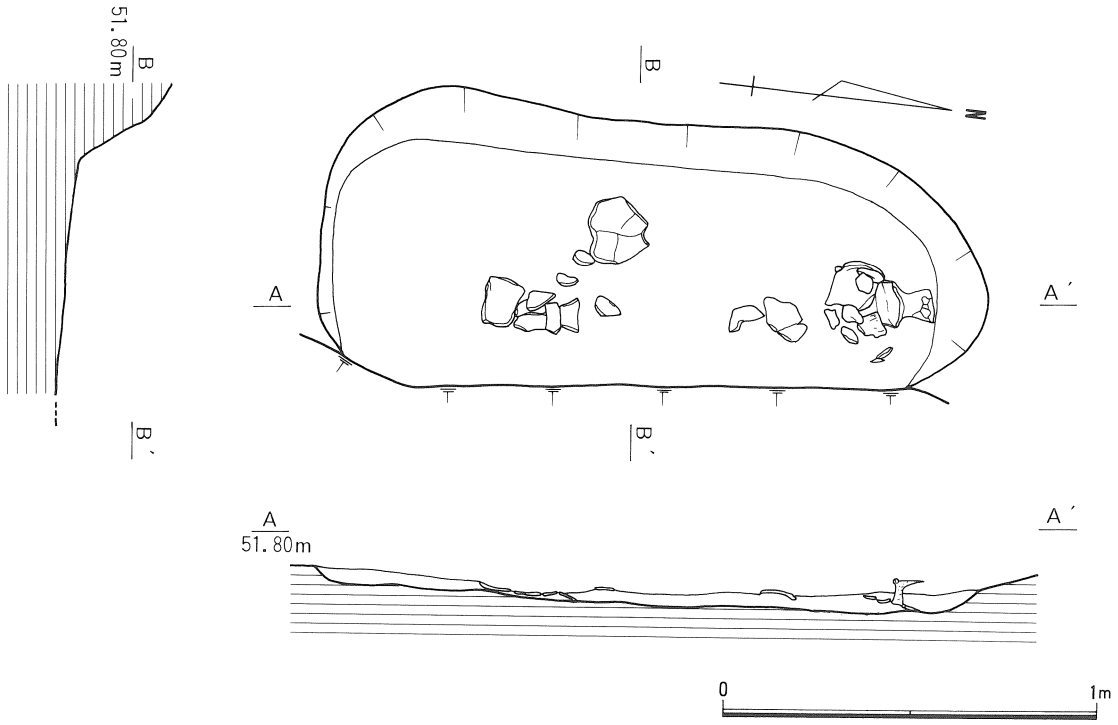
丘陵頂部平坦面で検出された集石を伴う土坑である。土坑は直径50cmの円形で、覆土は炭化物を多く含む赤褐色土である。土坑底面からはやや浮いた状態で直径約10～20cm程度の赤化した礫が18個集中して検出されている。遺物はみられないが、周辺の住居跡のあり方からして、流失した住居に伴っていた地床炉の痕跡の可能性が考えられる。

ＳＸ２（第33図）

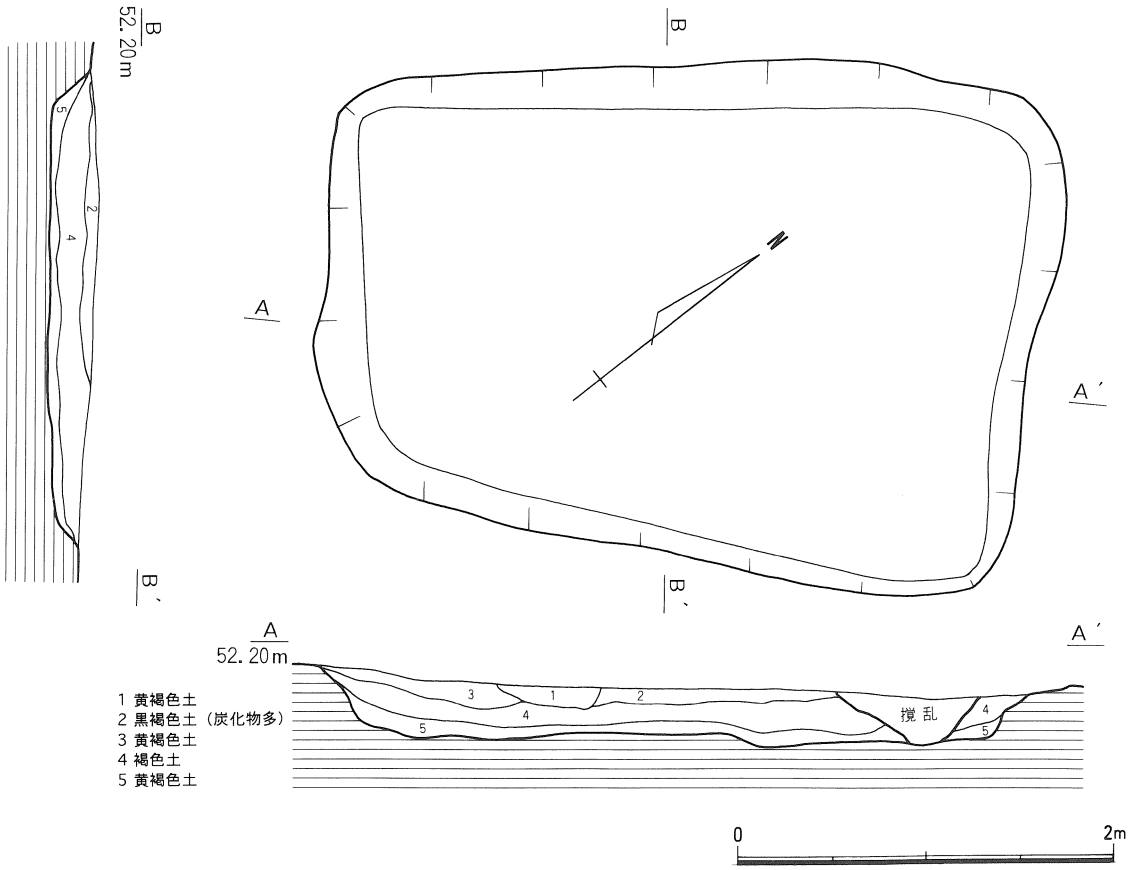
調査区南西の、頂部からやや東に傾斜する斜面で検出された不整形の遺構である。平坦に削りだされた遺構底面から、土器が２点出土している（第36図16・17）。

ＳＸ３（第34図）

丘陵頂部の平坦面は、調査区の南西にいくにしたがって次第にその幅を減じていくが、その平坦部が収束する付近で検出された隅丸長方形の平面形を呈する遺構である。長さ3.8m、幅2.6m、検出面からの深さ30cmを測り、その主軸方位はＮ－44°－Ｅである。検出当初はその規模・平面からみて、住居跡であろうと考えたが、住居跡に関連する施設や生活の痕跡を示すものがみられないことから、性格不明の遺構とした。




第33図　ＳＸ２実測図




第34図　ＳＸ３実測図

## ２．遺物

遺物は遺構および包含層中から、縄文土器、弥生土器、古式土師器、石器未製品が出土している。なお出土した土器は、遺構に伴ったものの一部を除いて全体に磨耗が激しく、調整も不明瞭なものが多い。以下、遺構に伴う遺物、包含層出土遺物にわけて記述する。

### ⑴ 遺構出土の遺物

遺構に伴う遺物は、弥生時代中期後半（白岩式）から古墳時代前期の時期のものである。

**ＳＢ１**（第35図１～３、図版41―１～３）

１の壺形土器は折り返し口縁をもつ広口壺である。形態的には若干肩が張り、胴部最大径が下方にあるものである。肩部には櫛押圧横線文がめぐる。胴部上半には斜位のハケ調整、下位には横位のミガキが施され、頸部は縦位のハケ後に軽いナデ調整がみられる。２は台付甕である。体部は球胴状を呈し、口唇部にはキザミが施される。３は完形の鉢形土器である。口縁が直口気味にたち上がる椀形を呈する。口縁内面にはヨコナデがみられる。土器は菊川式新段階（註１）の特徴をもつもので、住居跡は弥生時代後期後半の遺構であると思われる。

**ＳＢ２**（第35図４、図版41―４）

遺物は奥の壁近くの床面上で球胴状の体部をもつ壺形土器１点が出土している。土器の形態から古墳時代前期のものと考えられる。

**ＳＢ３**（第35図５）

床面上より甕形土器１点が出土している。やや内湾気味の脚台部を持つ台付甕である。弥生時代後期後半ものと思われる。

**ＳＢ４**（第35図６～８、第36図９・10、図版41―６～９・図版42―10）

６は壺形土器であるが、やや細頸のなで肩のプロポーションをもつものである。肩部に櫛刺突横線文が一条巡っている。８の壺形土器は胴部最大径付近の張りが比較的小さい形状のものである。底部は上げ底状に凹んでいる。９・10は壺形土器の底部である。いずれも上げ底状に凹んでおり、外面はハケ→ミガキが施されている。７は口縁がやや外方に立ち上がる鉢状の坏部をもつ高坏である。口縁外面には縦・斜め方向のハケ目、体部外面には縦方向のヘラミガキ、屈曲する口縁と体部の境界部には横方向のヘラミガキが施されている。出土土器は菊川様式の中でも若干古い要素を持つものであり、菊川式古段階、弥生時代後期前半期のものであると考えられる。

**ＳＢ５**（第36図11～15、図版42―11・14・15）

11は、単純口縁の細頸壺である。なで肩のプロポーションであり、頸部から胴部最大径付近にまで文様帯がめぐる。文様帯は櫛描の縦線文で五つの区画に分割され、その間に斜格子文が施されている。また、頸部には櫛描横線文が巡っている。14も細頸の壺形土器である。なで肩で、胴部最大径が器高に比して大きく、やや寸詰まりの形状である。底部は上げ底状である。肩部には平行する二本の棒状浮文が四箇所、また胴部最大径付近にも二つの円形浮文が四箇所に貼付されている。胴部上半にはハケ目調整がみられる。15も壺形土器であるが若干球胴状を呈するものである。

細頸の壺形土器の形態、文様等が、やや古相を示しており、白岩式新段階～菊川式古段階、弥生時代中期末～後期初頭のものであると考えられる。

**ＳＦ１**（第37図18、図版43―18）

18は土坑内に納められていた壺形土器で土器棺と考えられるものである。胴部最大径は器高に比して大きく、稜を持って明瞭に屈曲する。全体的になで肩のプロポーションを持つ。全面に斜位のハケ調整がみられ、胴部最大径部分には横位のハケ調整がみられる。時期は菊川式古段階、弥生時代後期

前半のものと考えられる。

ＳＦ２（第37図20、図版43―20）

器高55.9cm、最大径44.9cmを測る大型品の壺形土器で土器棺と考えられるものである。

口縁は端部に面を有するものである。器高に対して胴部最大径も大きいが、全体的になで肩のプロポーションを持つ。肩部には断面三角形の隆帯を巡らせている。頸部から胴部最大径付近までは縦方向のハケ調整を、その下の底部までは横方向のハケ調整を施している。口縁端面には櫛刺突文が縦・斜め二段に施されている。また、肩部の隆帯にも斜めに櫛刺突文が巡っている。菊川式古段階、弥生時代後期初頭のものと思われる。

ＳＦ３（第37図19）

土坑内から出土した比較的大型の台付甕である。

ＳＸ２（第36図16・17、図版42―16・17）

16はやや肩の張るプロポーションの単純口縁の壺形土器である。口縁端部には面を持つ。全面にハケ目調整がみられる。17は台付甕である。胴部最大径は若干上位にあり、口縁部の屈曲は比較的緩やかである。口唇部にキザミを有し、全面にハケ調整を施している。

土器は壺の肩部に菊川様式に特有の文様態を持たないものの、プロポーションは菊川式新段階の特徴を持つものであり、甕形土器の形態等からも、弥生時代後期後半のものと思われる。

(2) 包含層出土の遺物（第37図21～23、第38・39図、図版42―28、図版43―21・22・32・33、図版44・45）

包含層出土遺物は、縄文時代～弥生時代後期の土器と、石器未製品が１点出土している。出土土器は、丘陵斜面の包含層中で検出されたものと、遺構に伴ってはいないが、１個体分がまとまって出土したものとがある。資料整理時に復原が可能であり、かつその出土位置がはっきりとしているものについては、遺構全体図でその位置を図示した。なお、土器№21・22・32・33は、大型品であり、土器棺の可能性も考えられるものである。

**縄文時代の土器**

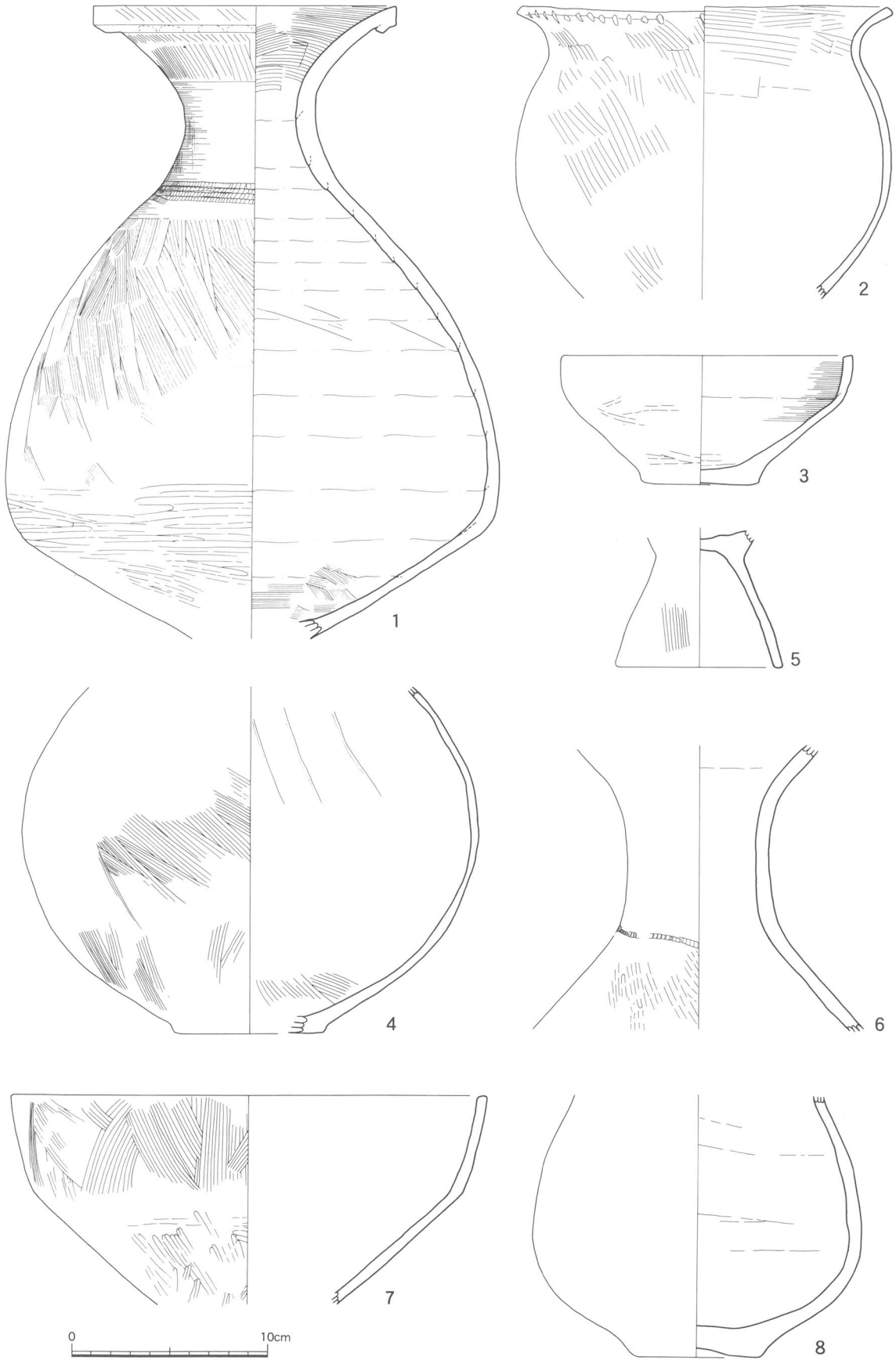
40は縄文土器の小片である。器面には縄文（ＬＲ）が施されているものであり、縄文時代中期のものと思われる。

**弥生時代中期前半の土器**

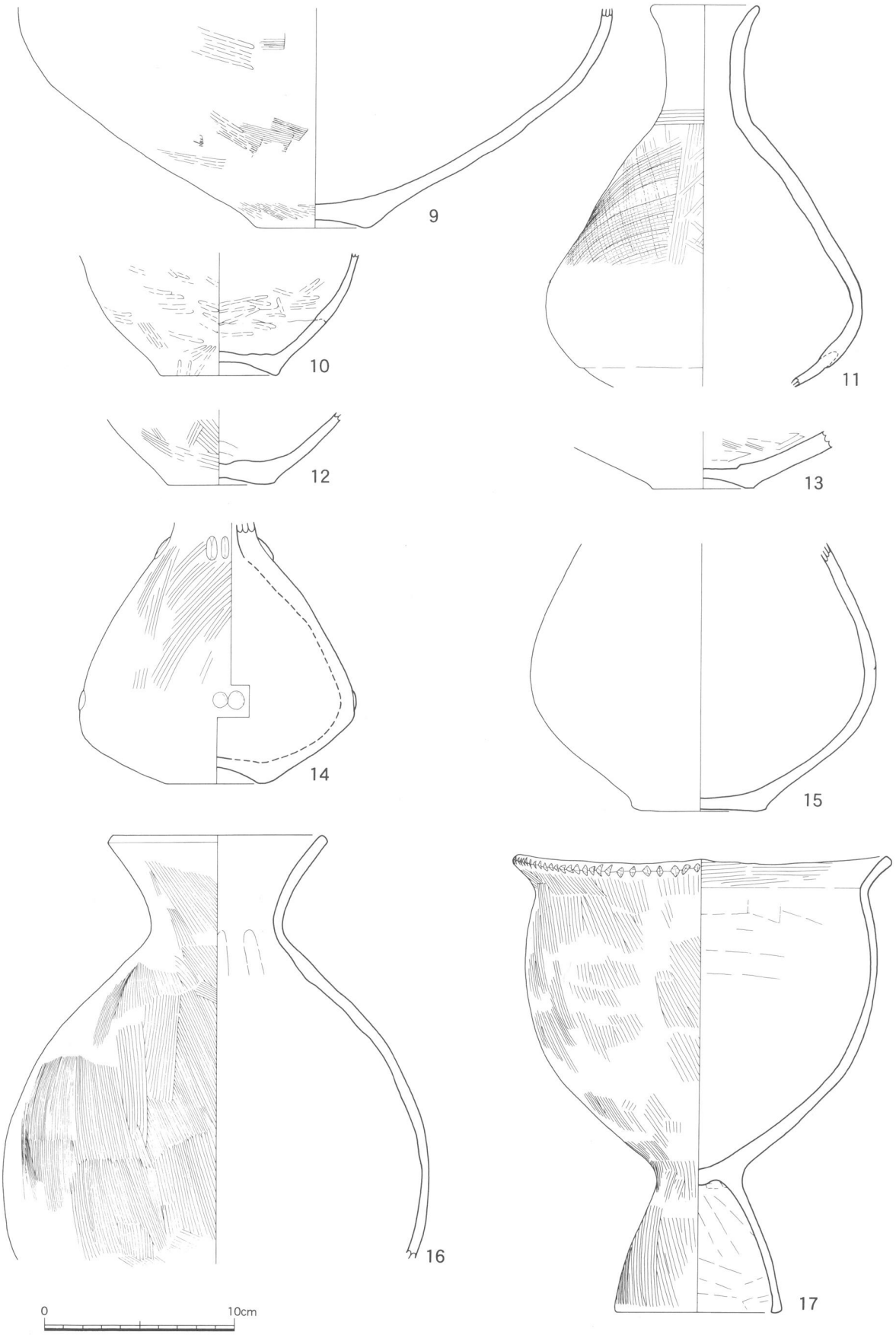
41は口縁が外反する太頸壺の口縁部である。外面には縦方向の条痕が施され、口唇部には条痕と、内側にキザミが施されている。42は壺の口縁部である。上下二段に突帯を設け、突帯にはキザミを施す。43は内湾する鉢の口縁部である。外面には太い横方向の条痕、口唇部には横ナデが施されている。樫王期の深鉢にみられるような古い形態的特徴をもつものであるが、掛川市原川遺跡、豊岡村新平山遺跡で類例が出土している。44も外面に太い横方向の条痕がみられる甕の口縁であり、口縁外面にキザミが施されている。45は横方向の条痕と、縦羽状文が縦・横の太い沈線で区画された壺の頸部の小片で、いわゆる「平沢型」土器群の長頸壺であると考えられるものである（註２）。また、39の甕は外面には横位の条痕、口縁端部の内面にキザミが施されているものである。

**弥生時代中期後半の土器**

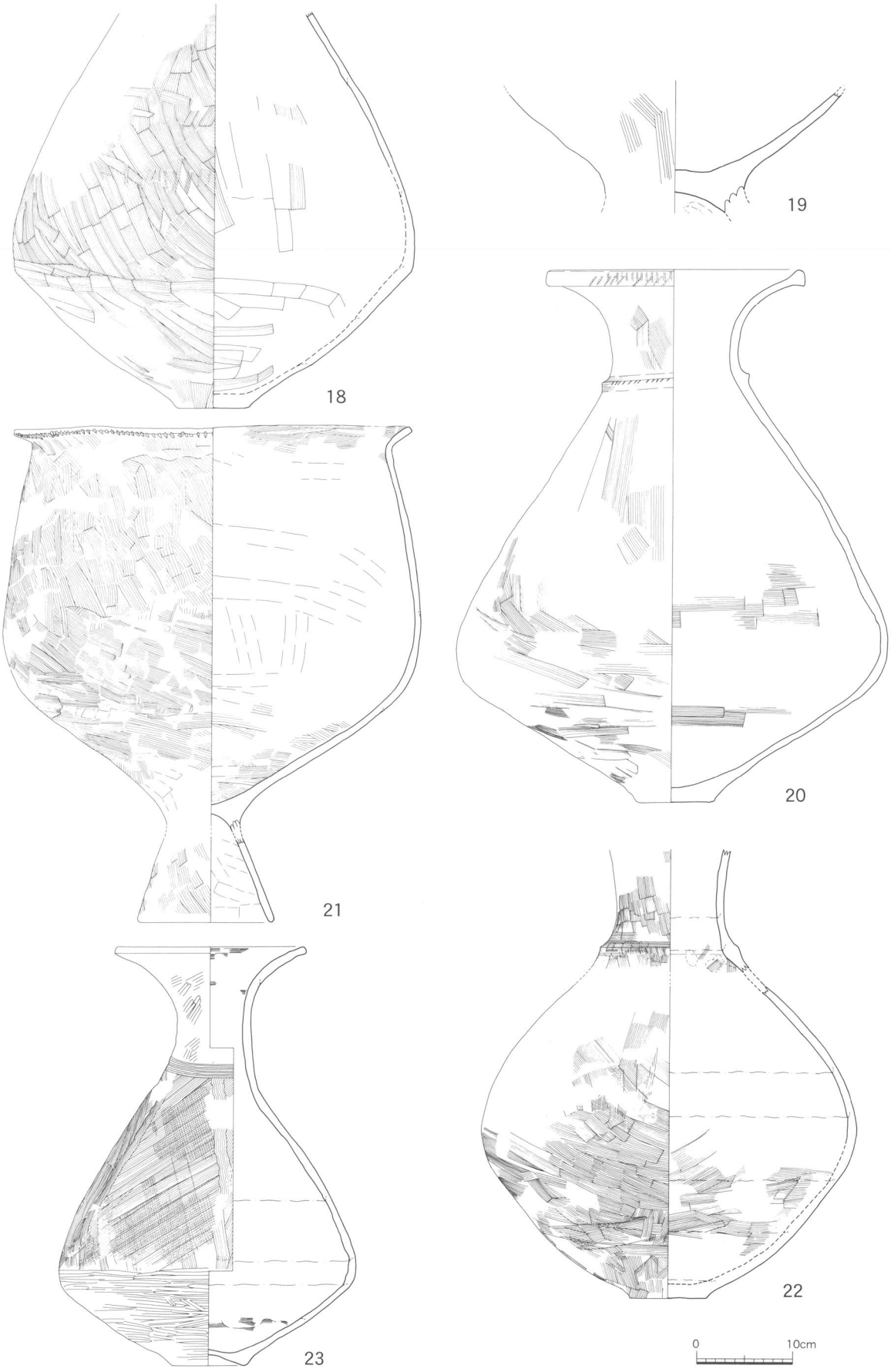
46は受口状の口縁をもつ壺である。口縁外面には櫛刺突文がめぐる。24は非常に細長い頸部をもつ、やや特異なプロポーションをもつ壺である。頸部には縦位のミガキがみられる。胴部は丸みを帯び、



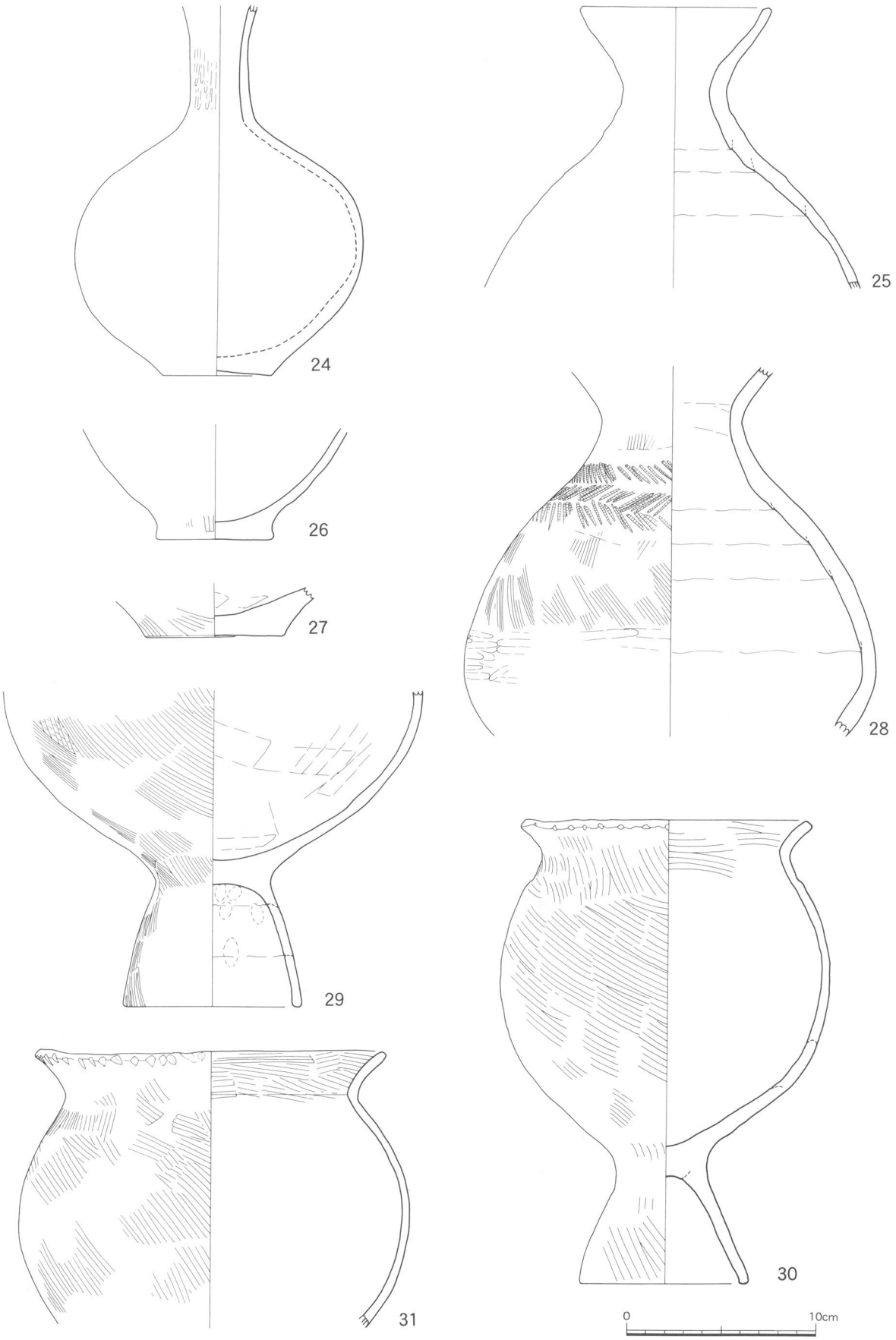

第35図　居村遺跡出土遺物(1)



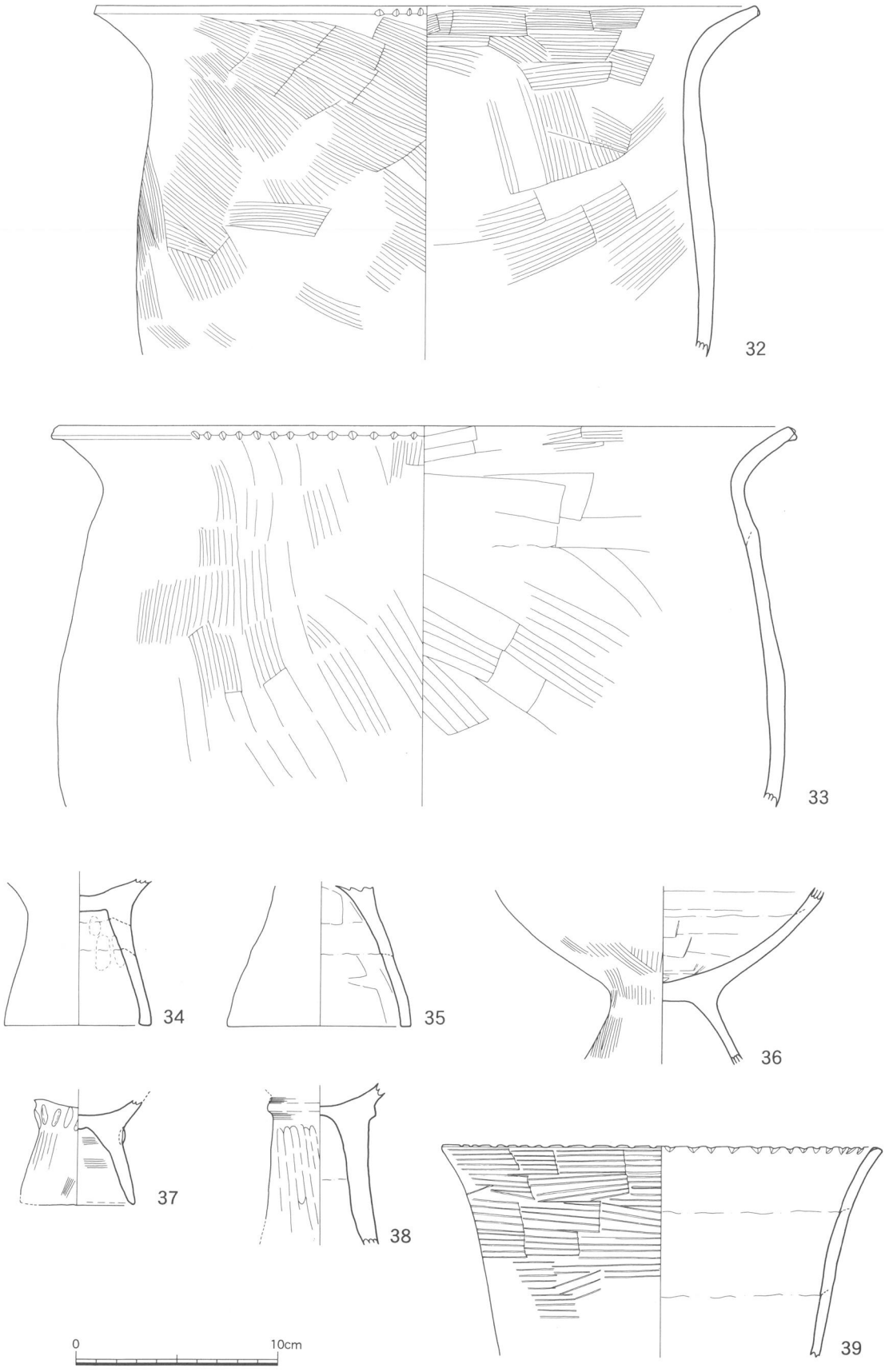

第36図　居村遺跡出土遺物(2)




第37図　居村遺跡出土遺物(3)




第38図　居村遺跡出土遺物(4)

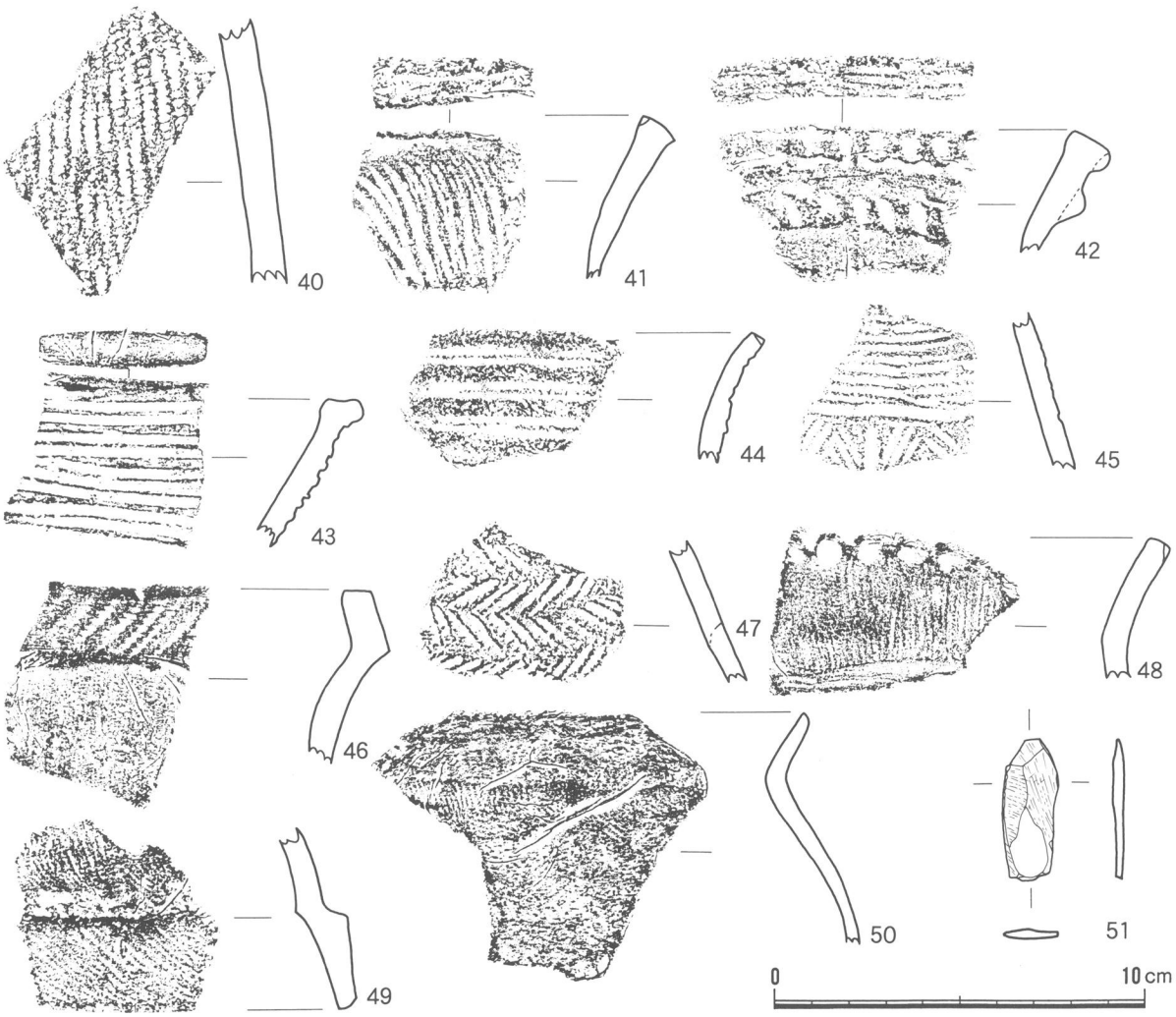



第39図　居村遺跡出土遺物(5)

最大径はやや上位にある。底部は上げ底状に凹む。

**弥生時代中期末～後期前半の土器**

21は、丘陵頂部の平坦部の表土直下で検出された大型の甕形土器である。胴部上半が直立気味に立ち上がる形態のものである。胴部外面には焼成時の黒斑が明瞭に残っており、煮沸具としての使用痕は全くみられない。口唇部外面にはキザミ目を持ち、胴部最大径より上半には6本単位の縦位～斜位のハケ目が、下半には斜位のハケ目が、また、最大径部分には横方向のハケ目が見られる。口縁部内面には横方向のハケ目が見られる。22は急斜面の地山直上で検出された大型の壺形土器である。胴部の中位に最大径がくる、丸みを帯びた算盤玉状のプロポーションを持つ土器で、肩部に稜を持った隆帯を巡らせている。頸部には縦位、胴部最大径付近には横位、その他は斜位のハケ目調整がみられる。32・33は、居村1号墳の墳丘北側裾部の斜面から検出された甕形土器の大型品である。体部が胴部最大径付近から若干内彎しながらも直立気味に立ち上がる形態のものである。23はなで肩の長い無花果形のプロポーションを持つ単純口縁の壺形土器である。底部は上げ底状で、頸部に櫛描横線文が巡り、胴部上半の斜格子文の文様帯は、縦の波状文で縦に四分割されている。38は高坏の脚部である。脚部の外面は縦方向のヘラミガキ痕がみられ、坏部と脚部の接合部の突帯部分はヨコナデで仕上げられている。34～37は台付甕であるが、脚部が直線的に開く形態のものである。37は接合部に粘土帯を貼るものである。




第40図　居村遺跡出土遺物(6)

## 表３　居村遺跡出土土器観察表(1)

| No. | 種別・器種 | 出土位置 | 計測値（cm） | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 色調・胎土 | 備　考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ１ | 口径　(15.5)<br>胴部最大径　25.2 | 折り返し口縁。若干肩が張り、胴部最大径は下方にある。 | 肩部に櫛押圧横線文がめぐる。胴部上半は斜位のハケ調整。下半は横位のミガキ。頸部は縦位のハケ後に軽くナデ調整。 | にぶい橙色<br>橙色粒子・石英・長石・灰色小礫含 | 口縁部1/2<br>胴下半部1/2<br>残存<br>焼成 良 | 41-1 |
| 2 | 弥生土器<br>甕 | ＳＢ１ | 口径　(18.7)<br>胴部最大径　(19.3) | 体部は球胴状を呈する。 | 口唇部にキザミ。 | にぶい橙色<br>橙色粒子・白色石英・透明石英多 | 口縁～体部<br>中位1/2残存 | 41-2 |
| 3 | 弥生土器<br>鉢 | ＳＢ１ | 口径　15.1<br>底径　6.0 | 口縁が直口気味にたちあがる椀型を呈する。 | 口縁内面はヨコナデ。 | 浅黄橙色　橙色粒子・礫・粗砂多 | 完形品 | 41-3 |
| 4 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ２ | 底径　(7.5) | 体部は球胴状を呈する。 | 体部下半はハケ調整。 | 浅黄橙色<br>橙色粒子・礫多<br>粗砂・白色石英多 | 底部～胴部<br>約2/3残存 | 41-4 |
| 5 | 弥生土器<br>甕 | ＳＢ３ | 台部下端径　8.6 | 器壁薄く、やや内湾気味の台部。 | 台部外面にハケ目。 | 浅黄色　橙色粒子多・白色石英含 | 台部のみ | — |
| 6 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ４ | 頸部径　7.2 | やや細頸のなで肩のプロポーションを持つ。 | 肩部に櫛刺突横線文が１条めぐる | にぶい黄色<br>雲母・礫多<br>白色石英・透明石英含 | 頸部・肩部<br>残存 | 41-6 |
| 7 | 弥生土器<br>台付鉢 | ＳＢ４ | 口径　(24.2) | 口縁がやや外方にたちあがる鉢部。 | 口縁縦、斜めハケ、体部縦ヘラミガキ、口縁・体部の境界に横ヘラミガキ | にぶい黄橙色<br>橙粒子・砂粒多<br>白色石英・黒粒子含 | 坏部1/3残存<br>脚台部欠損 | 41-7 |
| 8 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ４ | 胴部最大径　16.8<br>底径　6.0 | 胴部最大径付近の張りは小さい。底部は上げ底状にくぼむ。 | | にぶい黄橙色<br>灰色粒・礫・白色石英多 | 体部・底部<br>1/3残存 | 41-8 |
| 9 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ４ | 底径　6.3 | 底部は上げ底状 | 胴部下半は横、斜めのハケ調整後にミガキを施している。 | 外面灰褐色・内面淡黄色<br>橙色粒・礫・粗砂多<br>白色石英含 | 底部～胴下半部約4/5<br>残存 | 41-9 |
| 10 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ４ | 底径　6.2 | 底部は上げ底状 | 胴部下半の内外面ともにミガキ。 | 明褐色<br>灰色・褐色粒子・石英・長石・小礫多 | 体下部・底部<br>1/3残存 | 42-10 |
| 11 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ５ | 口径　(5.5)<br>胴部最大径　16.8 | 単純口縁の細頸壺。なで肩のプロポーション。 | 文様帯は頸部から胴部最大径まで。櫛描縦線文で５分割。斜格子文。頸部に櫛描横線文。 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・粗砂多<br>黒雲母含 | 底部欠損 | 42-11 |
| 12 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ５ | 底径　(5.6) | 底部は上げ底状 | | 浅黄色　黒粒子・砂粒多　橙粒・雲母含 | 底部1/6欠損 | — |
| 13 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ５ | 底径　5.4 | 底部は上げ底状 | 内面ハケ後ヘラナデ、底部ナデ | 橙色<br>褐色粒子・長石多<br>灰色小礫～礫含 | 底部残存 | — |
| 14 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ５ | 胴部最大径　14.4<br>底径　5.2 | なで肩で、胴部最大径が器高に比して大きく、やや寸詰まりの形状。底部は上げ底状にくぼむ。 | 肩部に平行する２本の棒状浮文が４箇所、胴部最大径付近にも２つの円形浮文が４箇所に貼付 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・雲母・白色石英・透明石英多 | 頸部～底部<br>残存 | 42-14 |

## 表４　居村遺跡出土土器観察表(2)

| No. | 種別・器種 | 出土位置 | 計測値　(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 弥生土器<br>壺 | ＳＢ5 | 胴部最大径 (18.1)<br>底径 7.1 | 若干球胴状を呈する。 | | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・礫多<br>透明石英・粗砂含 | | 42·15 |
| 16 | 弥生土器<br>壺 | ＳＸ2 | 口径 (11.6) | やや肩の張る形状。単純口縁で端部に面をもつ。 | 文様帯はもたない。全面ハケ調整。 | 灰白色　小礫多<br>橙色粒子・砂粒含 | 口縁部1/4<br>体部1/2残存 | 42·16 |
| 17 | 弥生土器<br>甕 | ＳＸ2 | 口径 (19.3)<br>胴部最大径 (18.4)<br>脚台径 8.5<br>器高 24.1 | 胴部最大径は若干上位にあり、口縁部の屈曲は比較的緩やか。 | 口唇部にキザミを有し、全面にハケ調整を施す。 | にぶい橙色<br>橙色粒子・白色石英・透明石英多<br>雲母含 | 口縁部1/4<br>体部1/2残存<br>脚部完形 | 42·17 |
| 18 | 弥生土器<br>壺 | ＳＦ1 | 最大径 (42.0)<br>底径 7.0 | 大型品。胴部最大径は器高に比して大きく、稜をもち明瞭に屈曲。なで肩肩部に断面三角形の隆帯 | 全面に斜位のハケ調整。胴部最大径部分には横位のハケ調整。 | にぶい黄橙色<br>2～5mmの黒色・褐色・灰色・長石の礫多<br>石英粒子含 | 胴部底部1/2<br>残存 | 43·18 |
| 19 | 弥生土器<br>甕 | ＳＦ3 | | 台付甕 | ハケ目調整 | にぶい黄橙色<br>4mmまでの礫多<br>橙色粒子・砂粒含 | 胴部・<br>脚台部1/3<br>残存 | — |
| 20 | 弥生土器<br>壺 | ＳＦ2 | 口径 (25.8)<br>胴部最大径 44.9<br>底径 8.2<br>器高 55.9 | 大型品。折り返し口縁。器高に対し胴部最大径が大きく、なで肩。肩部に断面三角形の隆帯。 | 頸部～胴部最大径まで縦、胴部最大径～底部まで横のハケ。口縁端面は櫛刺突文が縦・斜めに二段。肩部隆帯に斜位の櫛刺突 | 明黄褐色<br>橙色粒子・礫・白色石英・透明石英多<br>雲母・粗砂含 | 一部欠損 | 43·20 |
| 21 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径 41.1<br>胴部最大径 43.6<br>脚台径 13.8 | 大型品。坏部は球胴形をせず胴部上半は直立気味に立ち上がる。 | 口唇部キザミ。胴部最大径より上半は６本単位の縦位～斜位、下位は斜位、最大径部分は横、口縁部内面は横方向のハケ目。 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・白色石英・透明石英多<br>礫・粗砂・雲母・灰・黒・茶色粒子含 | 体部1/4欠損<br>脚台部との接合部分欠損<br>体部に黒斑 | 43·21 |
| 22 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 胴部最大径 38.0<br>底径 8.0 | 胴部中位に最大径がくる、丸みを帯びた算盤玉状のプロポーション。肩部に隆帯を有する。 | 頸部は縦位、胴部最大径付近は横位、他は斜位のハケ調整。 | にぶい黄橙色<br>灰色・茶色粒子・長石多　黒色粒子・雲母含 | 口縁欠損<br>全体の1/3欠損<br>焼成 やや軟 | 43·22 |
| 23 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 口径 (19.5)<br>胴部最大径 31.0<br>底径 7.5<br>器高 44.1 | 大型品。なで肩の長い無花果形で、頚部は細頚状。単純口縁。底部は上げ底状。 | 頸部に櫛描横線文、胴部上半に櫛による斜格子文。波状文で文様帯を縦に４分割。胴部下半横ミガキ。 | 口縁から頚部橙色<br>胴部～底部灰黄褐色<br>長石・石英・灰色粒子含 | 口縁部1/2<br>胴部1/5欠損 | 44·23 |
| 24 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 胴部最大径 15.2<br>底径 5.7 | 非常に細い頚部。胴部は最大径が上位にあり、丸み帯びる。底部やや凹む | 頸部に縦位のミガキ。 | にぶい黄橙色<br>茶色粒子・白色石英・透明石英多　礫含 | 口縁部欠損 | 44·24 |
| 25 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 口径 (10.0)<br>器高 14.8 | やや内湾気味の口縁をもつ広口壺。 | | にぶい黄橙色<br>橙・灰・褐色粒子含 | 残存率1/3 | 44·25 |
| 26 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 底径 6.2 | 平底の底部。 | 内外面ナデ | 灰黄色　砂粒多　黒色粒子・白色石英含 | 平底底部残存 | 44·26 |
| 27 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 底径 7.2 | | 底部外面ハケ目調整。底部ナデ、籾痕あり。 | 浅黄橙色　褐色・薄茶色・灰色粒子・小礫多　長石含 | 底部残存 | — |

## 表5　居村遺跡出土土器観察表(3)

| No. | 種別・器種 | 出土位置 | 計測値　(cm) | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 弥生土器<br>壺 | 包含層 | 胴部最大径 (21.7) | 肩が張り、頸部は太く短い | 肩部に櫛刺突羽状文。胴部下半は横方向のミガキ。 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・雲母多<br>白色・灰色粒子含 | 頸部～体部<br>中位2/3残存 | 42·28 |
| 29 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 底径　(9.2) | 胴部は若干球胴状を呈する。 | 器面全体にハケ調整。 | 外面明黄褐色・<br>内面橙色<br>灰色粒子・長石多<br>薄茶礫・褐色小礫含 | 体下部1/4<br>脚部1/2残存 | 44·29 |
| 30 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径　14.9<br>胴部最大径　17.3<br>底径　8.8<br>器高　24.5 | 胴部は球胴状を呈し、口縁部は「く」の字に屈曲する。 | 全面にハケ調整。口唇部にはキザミを有する。 | 口縁にぶい褐色・胴部黒褐色・脚台部にぶい橙色<br>橙色・灰色・長石含 | 口縁部1/2<br>胴部3/4<br>脚台部1/1<br>残存 | 44·30 |
| 31 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径　18.0<br>胴部最大径　20.6 | 胴部は球胴状を呈し。口縁部は「く」の字に屈曲する。 | 全面にハケ調整。口唇部にはキザミを有する。 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子多　白色石英・透明石英含 | 口縁部～体部<br>中位1/8欠損 | 44·31 |
| 32 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径　(33.0)<br>最大径　(28.8) | 大型品。体部は胴部最大径からやや内湾しながら直立気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。 | 全面に縦、斜め方向のハケ調整。 | にぶい黄橙色<br>褐色・黒色・灰色礫多　1～2㎜の長石・透明石英含 | 口縁部から胴部上半にかけて1/4<br>残存<br>焼成 やや軟 | 43·32 |
| 33 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径　(36.4)<br>最大径　(36.2) | 大型品。体部は胴部最大径からやや内湾しながらも直立気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。 | 全面に斜め方向のハケ調整。口縁内面は横方向のハケ目が見られる。 | 外面灰黄色・内面にぶい黄橙色<br>灰色・褐色礫多<br>2～4㎜の長石多 | 口縁1/8<br>胴部の上半<br>1/4残存<br>焼成 良 | 43·33 |
| 34 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 底径　(7.3) | 台付甕 | 脚部内面に指頭痕 | にぶい黄橙色　灰色・茶色粒子・雲母多 | 脚残存 | — |
| 35 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 底径　9.1 | 台付甕 | 脚部内面に横方向のヘラナデ | 浅黄橙色<br>灰色・褐色粒子多<br>長石微粒子多 | 脚残存 | — |
| 36 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 胴部、体部の接合部径　5.6 | 台付甕 | 外面ハケ目調整。<br>胴部内面にヘラナデ。 | にぶい黄橙色<br>橙色粒子・白色石英・透明石英・礫多 | | — |
| 37 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 脚台径　5.8 | 台付甕。脚台部と胴部の境を粘土帯で補強後、指で押さえる。 | 内外面ハケ目 | 浅黄橙色<br>橙色粒子多　灰色粒子・白色石英含 | | — |
| 38 | 弥生土器<br>高坏 | 包含層 | | 高坏脚部 | 坏部と脚部の接合部隆帯の上下をヨコナデ。<br>脚部外面縦位のミガキ。 | にぶい黄橙色<br>白色石英・黒色礫・灰色礫多 | | — |
| 39 | 弥生土器<br>甕 | 包含層 | 口径　(21.6) | 口縁はやや外反し、胴の張らない深鉢形を呈する。 | 器面全体に横位、斜位の幅広な条痕を施す。口唇部は内面のみにキザミ。 | 橙色<br>褐色粒子・長石多<br>灰色・茶色・薄茶粒子・石英・小礫含 | 口縁～体上部<br>1/4残存 | — |

**弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器**

25はやや内湾気味の口縁をもつ広口壺である。28はＳＢ１の覆土中から出土したもので、斜面の上位から落ち込んだものと考えられるものである。全体的に肩が張る形態のもので、頸部は太く短い。肩部に櫛刺突羽状文が巡り、胴部下半には横方向のミガキがみられるものである。47も櫛刺突羽状文の施された広口壺の肩部の破片である。50は胴部がやや丸みを帯びた広口壺である。29・30・31は胴部が球胴状を呈し、「く」の字に屈曲する口縁をもつ台付甕である。脚台部はやや内湾する。49は高坏の脚台部である。外面はナナメハケが施され、脚段部はハケ→ヨコナデで仕上げられている。

**石器未製品**

51は磨製石鏃の未製品と思われるもので、表面に研磨痕がみられるものの、刃部は作り出されていない。石材は砂質粘版岩である。

## 第３節　まとめ

居村遺跡は、居村古墳群の下層から検出された丘陵上に立地する集落遺跡であり、調査の結果、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての時期に相当する住居跡・掘立柱建物跡・土器棺墓等の遺構群が検出された。ここでは本遺跡から検出された遺構・遺物について概観し、まとめとしたい。

居住域としての遺構は、住居跡が５基、掘立柱建物が１基検出されている。住居跡は居村１号墳の盛土下で確認された１基（ＳＢ４）のほか、丘陵南側斜面を削って平坦面を造り出した４基（ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ５）が検出された。各住居跡の時期は、床面上から出土した土器から判断して、ＳＢ５が中期後葉（白岩式期）、その他のＳＢ４は後期前半（菊川式期）、ＳＢ１、ＳＢ３は後期後半（菊川式期）、ＳＢ２は古墳時代前期のものとそれぞれ考えられる。古墳時代後期の古墳築造に関わる整地によって、丘陵上の遺構が失われた可能性も考えなければならないが、いずれの時代でも遺構の数が少ない点は、平野部から南へ奥まった狭い丘陵上という立地と考え併せ、永続的な居住を目的とした集落ではなく、短期間に営まれ、廃絶された極めて小規模な集落であったことが窺える。また時期別に土器をみると、遺跡全体から出土した土器のうち、弥生時代後期後半に属するものが多く、この時期が当遺跡の盛期であったといえる。また掘立柱建物は、住居跡（ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ５）が近接して検出された位置から北側の平坦面で１棟分が検出されている。桁行２間×梁間１間（5.2×2.7m）の規模の建物であり、集落内の貯蔵施設としての高床式倉庫が想定される。年代は不明であるが、仮に弥生時代のものであるとすると、梁間が1間であるプランを持つこの建物は、弥生時代では一般的なものであり(宮本1991)、その大きさも、県内の弥生時代の掘立柱建物の検出例と比較すると平均的な規模のものといえる(松井1995)。しかし当遺跡の集落規模からみると、決して小規模な構造物とはいえないものである。

また調査では弥生時代中期末から後期前半の土器棺墓の検出がみられた。大型の土器が土坑に横位に納められたＳＦ１、ＳＦ２のほか、遺構は流失していたが土器が大型品であることから棺として利用したものと考えられるもの（No．21･22）がある。土器棺墓のタイプとしてはいずれも単棺で、器種はNo．21の非常に大型の台付甕を除いて、壺が主体となっている。静岡県内の土器棺墓については、ほぼ全県に分布がみられるが、東部・中部に比べ、西部に分布が多いこと、縄文時代終末から弥生時代中期に盛期がみられること、西部でも天竜川の東側では後期まで継続するという地域性があることが指摘されている（向坂1990)。また、掛川市･袋井市山下遺跡や浅羽町北山遺跡、浜松市角江遺

跡などのように同一遺跡の中に異なる墓制が共存する例がいくつかみられるが、当遺跡のＳＦ９、ＳＦ10、ＳＦ11については、第２節の文中で指摘したように土坑墓の可能性も考えられ、幼小児を埋葬する墓制として土器棺墓が、成人を埋葬する墓制として土坑墓がそれぞれ採用されたことも考えられよう。

その他出土した遺物について、包含層出土の土器について若干触れておく。弥生時代の土器としては、中期前半に相当する条痕文系の土器が量的には少ないものの出土している（』39、41～45)。これらの土器は条痕調整の壺形土器の口縁や、長頸壺の頸部などの文様構成や調整の特徴から、いわゆる丸子式新段階（嶺田式古段階）のものと考えられる。この段階の土器は、周辺では掛川市原川遺跡ＳＤ１０Ｂ１６出土の土器群や掛川市・袋井市山下遺跡周溝墓出土の土器が類例として挙げられる。また、』45の土器片については、東海西部から福島県域までの広範囲に分布が認められる、いわゆる「平沢型」土器群の特徴をもつ長頸壺と考えられるものである（註３)。「平沢型」土器群は、東海地方の条痕文系土器群と強い関連があるものとされ（関1983）ており、その分布は前述の通り広範であり、弥生時代中期の広域編年を行う上で指標となる役割を果たす土器と考えられているものである（石川1996)。また、段階は、土器でいえば長頸壺が出現する段階、また集落が当遺跡のような丘陵上や台地上から、集落が稲作の普及定着に伴って沖積平野の微高地などの低地に進出していく段階であると考えられており、社会や生活様式の大きな画期があった段階と考えられている。

このように居村遺跡は弥生時代後期後半を中心とした時期に丘陵上に営まれた遺跡であるが、丘陵上あるいは台地上に立地するこの時期の集落遺跡は数多く検出されている。周辺の事例としては袋井市愛野向山遺跡・一色前田遺跡、掛川市原新田遺跡、菊川町赤谷遺跡などがある。このような丘陵性の集落遺跡の性格については、畿内から瀬戸内にかけてみられるいわゆる高地性集落と同様、社会の軍事的緊張関係を背景とした防御的な性格をもつ集落であるとの考えもある。弥生時代後期の防御的な集落としてのいわゆる環濠集落の事例や、武器等の遺物を含めた検討が必要であるが、現在のところ積極的に可能性の裏付けとなる資料は少ない。防御的な性格という以外にも様々な理由は考えられるが、本遺跡はある拠点的な集落から派生した分村的な集落であったものと考えたい。愛野向山遺跡は本遺跡と同様丘陵斜面に営まれた集落遺跡であるが、規模は低地の拠点的な集落遺跡と比較しても遜色ないものである。このような拠点的な集落自体が丘陵上に立地し、やせ尾根上に分村的な集落が分布する状況は、北に広がる沖積地が逆川の氾濫原に相当し、生産域としてはこの沖積地を利用したが、居住域としては自然的要因から丘陵上を選地したものと考えられよう。

## 註

1.中嶋郁夫1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』２号

2.浜松市博物館　佐藤由紀男氏の御教示による。

佐藤由紀男1994「長頸壺の出現とその意義」『地域と考古学』

佐藤由紀男1996「長頸壺の出現に関する覚え書き」『ＹＡＹ！』

3.註２に同じ

## 引用・参考文献


静岡県1994『静岡県史　通史編１原始・古代』

静岡県1990『静岡県史　資料編１考古一』

向坂鋼二1990「静岡県下の土器棺」『静岡県博物館協会研究紀要』13

宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物―本編―』埋蔵文化財研究会

松井一明1988「静岡県における囲郭集落と高地性集落について」『マージナル』８　愛知考古学談話会

松井一明1995「古墳時代の掘立柱建物について」『静岡県考古学会シンポジウムⅧ　古墳時代の集落』

羽二生保1988「考察」『十王山砦跡発掘調査報告書・善千鳥遺跡確認調査報告書』森町教育委員会

羽二生保1993「ⅢＢ地点出土の弥生土器」『新平山遺跡（II）』豊岡村教育委員会

関　義則1983「須和田式土器の再検討」『埼玉県立博物館紀要』10

石川日出志1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『ＹＡＹ！』

岩本　貴1995「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1988『原川遺跡Ⅰ』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1992『向畑遺跡・社宮寺遺跡』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『角江遺跡』

浅羽町教育委員会1987『北山遺跡』

吉岡伸夫・松井一明1987「静岡県愛野向山遺跡」『考古学協会年報』35日本考古学協会

袋井市教育委員会1987『鶴松遺跡II』

袋井市教育委員会1991『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』

袋井市教育委員会1992『鶴松遺跡Ⅴ』

袋井市教育委員会1990『若作遺跡・若作古墳群』

掛川市教育委員会・袋井市教育委員会1984『山下遺跡』

# 第Ⅴ章　若作古墳群（Ｆ地区）の調査

## 第１節　調査の概要

### １．既往の調査

若作古墳群は袋井市愛野に所在する。袋井市・掛川市の沖積平野に向かって、南の小笠山丘陵から稜線が複雑に枝分かれしながら伸びているが、その丘陵の北端部付近に位置する古墳群である。

若作古墳群は、過去に工場新設工事に伴う緊急発掘調査として発掘調査が実施されている（昭和63年７月～平成元年６月）。この調査により古墳時代中期から後期にかけての木棺直葬の主体部をもつ古墳19基と、弥生・古墳時代前期の丘陵上に営まれた集落・墳墓の様相があきらかにされている。

若作古墳群は４つの痩せた丘陵の尾根上に分布し、古墳はそれぞれの尾根を単位にＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地区の名称が付けられている。墳丘はいずれも尾根の稜線上に立地し、そのほとんどが削り出しあるいは周溝の掘削により墳丘を区画している。墳形は円形を基本とし、楕円形・胴張方形等のバリエーションがある。確認された埋葬施設は木棺直葬が主体であり、箱式木棺や割竹形木棺、礫槨などが採用されている。

出土遺物は、玉類・鉄製武器・鉄製工具・土器類を中心とするが、副葬品の質・量ともに乏しい点が特徴である。調査された古墳のうち、副葬品を有するものは７基のみである。小型直刀・鉄鏃を副葬したＣ３号墳のほか、鉄製品や玉類を副葬した６基を除いては全く副葬品をもたない。また、分布は北に向かって扇状に開く尾根上に比較的密集して築かれている。形成時期は５世紀中頃に造墓が開始され、５世紀後半に造墓の中心があり、６世紀中頃まで継続することが明らかにされている。

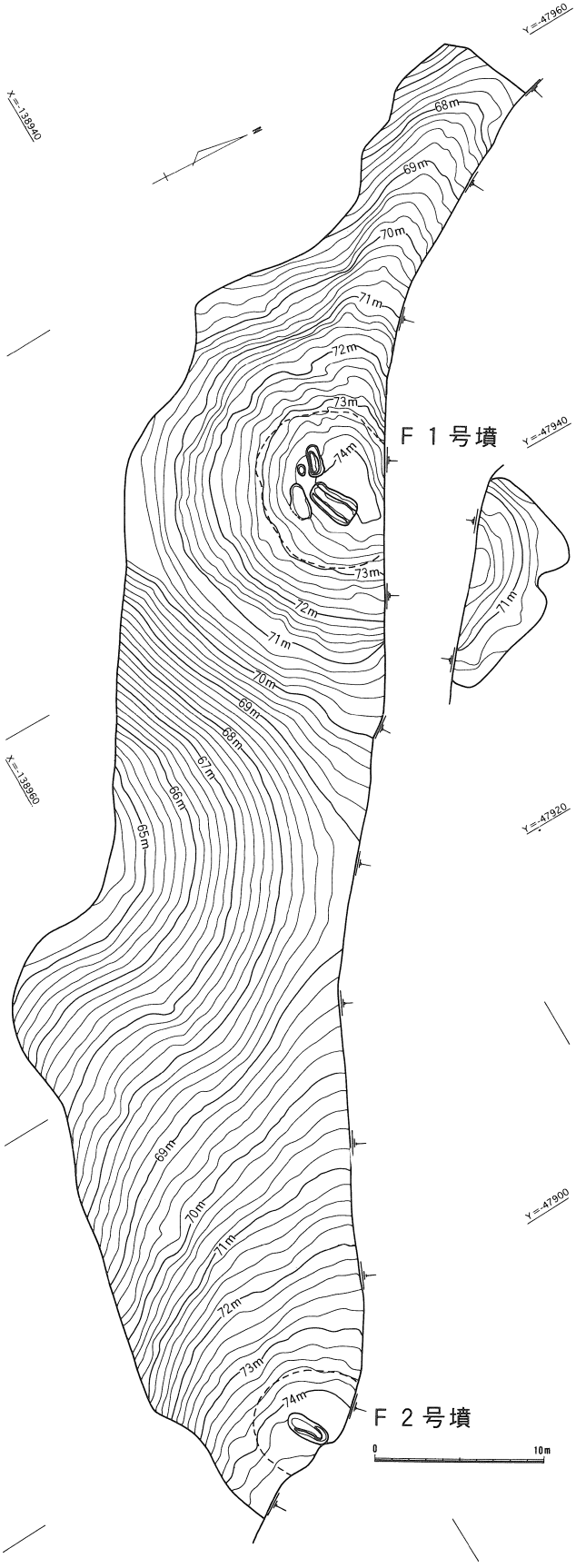
### ２．確認調査の概要

今回の調査地点は昭和63年度調査時のＣ地区のさらに南、扇状に開く小支陵の結節点の位置にあたる、標高74ｍの主尾根上である。今回の調査地点は袋井市教育委員会との協議の結果、「若作古墳群Ｆ地区」と呼ぶこととなった。

調査前の状況は山林であり、丘陵上には主軸に沿って林道が敷設されており、古墳の可能性のある高まりはこの道により切り通し状に削られていた。調査前の地形観察では、鞍部を挟んで２箇所の高まりが確認された。北側の高まりは比較的整った円墳状の明瞭な高まりであり、南側のものは丘陵頂部に僅かな高まりと平坦部がみられるのみで高まりとしては不明瞭であった。確認調査は高まりの頂部を中心に十字のトレンチを設定し、遺構の検出と土層の堆積状況の確認をおこなった。また、鞍部の南西側に若干緩やかな傾斜をもつ谷地形があり、過去の調査事例からみて、集落等の遺構の存在する可能性もあるため、この部分にもトレンチを設定し、遺構の有無の確認をおこなった。

北側の高まり部分のトレンチでは、薄い表土を除去すると、すぐに明黄褐色の小礫を含む基盤層が露出した。高まりの頂部付近で、その基盤層を掘り込む形で砂礫混じりの暗黄褐色土を覆土とする遺構を１基検出した。これが検出された位置からみて古墳の主体部に相当するものであろうことが推定されたため、高まりの斜面において、古墳の墳丘の範囲の確認をおこなった。しかし周溝状の落ち込み等、墳丘範囲を区画するような施設は何ら確認されなかった。

南側の高まりでは、トレンチ内に直径30～50cm程の硬質砂岩の円礫がいくつも検出され、場所によってはそれが集中している状況もみられたため、この礫が人為的に置かれたものである可能性もあり、トレンチを拡張して礫の広がりを確認することにした。特に高まりの頂部において礫の集中する状況




第41図　若作古墳群Ｆ地区調査区全体図

が顕著であることを確認、これが何らかの古墳の施設等、人為的に配された石であると判断した。

２つの高まりの間の斜面に設定したトレンチでは、遺構は何ら確認されなかったが、トレンチ内の土層を観察すると、比較的大きな円礫が基盤層とその上の再堆積層中に多く含まれていることが確認された。鞍部よりも南側についてはこの大きな礫を基盤層に含む層が広がっており、先述の南側の高まりに置かれた円礫はこの基盤層中の礫を用いたものであることを確認した。

## 第２節　遺構と遺物

### １．若作Ｆ１号墳

⑴ 墳丘（第42図）

Ｆ１号墳は丘陵の瘤状の高まりを利用して築かれた標高74ｍに位置する古墳である。墳丘の北東部分を道により大きく削られてはいるが、残存する南西側の墳丘の形状をみると、墳丘の中心から外へ約4.5ｍの付近で、墳丘の傾斜がより急斜面となり、さらに下るとほぼ平坦な緩斜面となる箇所がある。そのラインを墳丘削り出しによる整形のラインと捉え、墳裾に相当する部分で墳丘の規模を復原すると直径約12ｍの円墳となる。墳丘に盛土はみられない。ただし、表土から基盤層までの堆積は非常に薄く、盛土が流失してしまった可能性もある。墳丘の高さは残存する検出時の墳丘ラインで1.6ｍを測る。周溝等の墳丘の範囲を画する施設等はみられないが、地山削り出しによって墳形を造り出していたものと考えられる。なお、自然地形の形状に制約されたものと考えられるが、墳形は若干東西方向に長い楕円形を呈している。

⑵ 主体部（第43図）

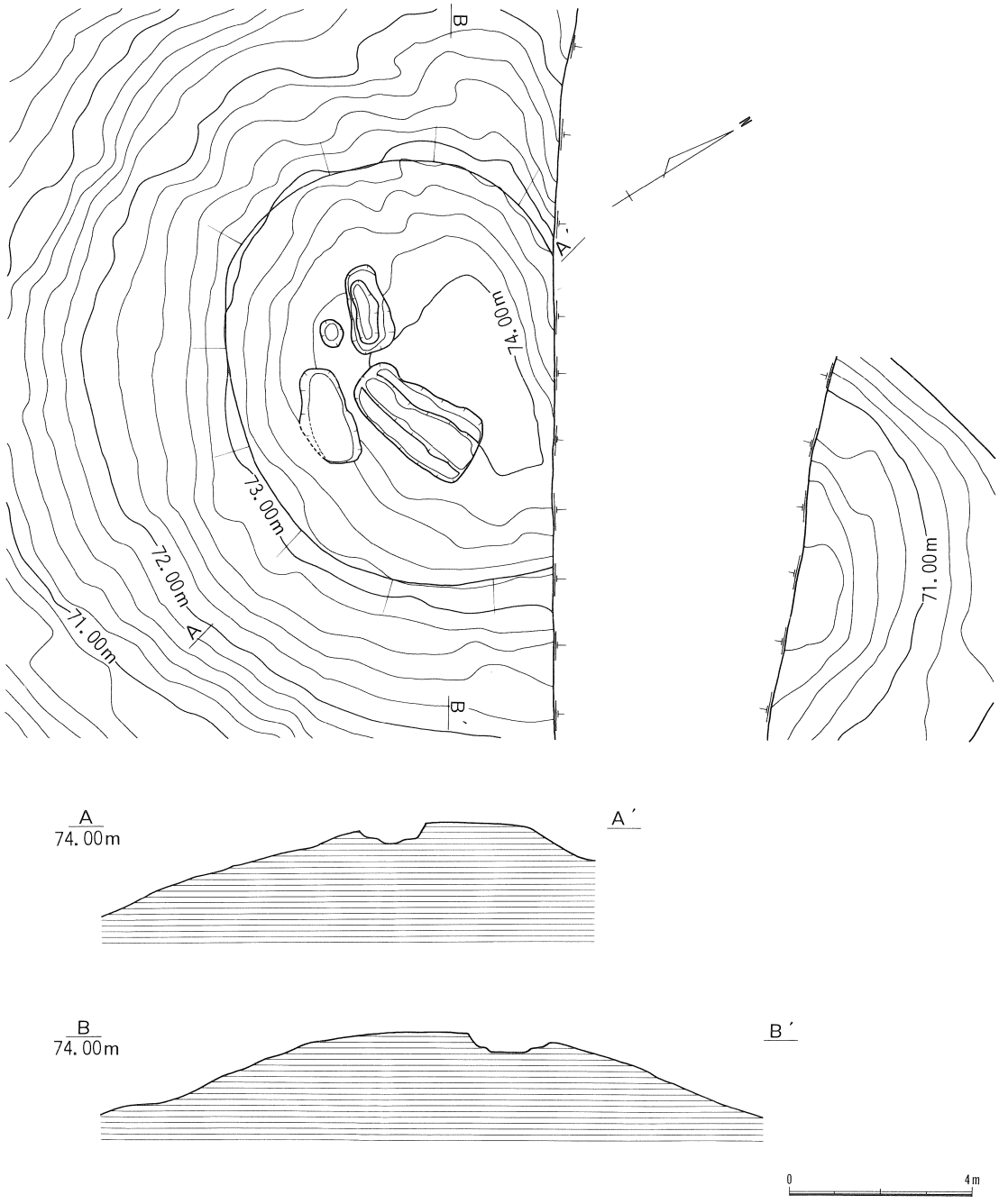
墳丘頂部には、木棺直葬の主体部が３基検

出された。表土の堆積が薄いこともあり、検出は基盤層直上でおこなった。各主体部は、切り合いはみられないものの、それぞれ主軸方位が異なる。また、最も規模の大きい第１主体部は墳丘の中心から若干南へずれた位置に墓坑が掘り込まれている。北側に何も遺構の掘られていないスペースが存在する一方で、第２、第３主体部が南側の斜面にかかる位置に掘削されている。

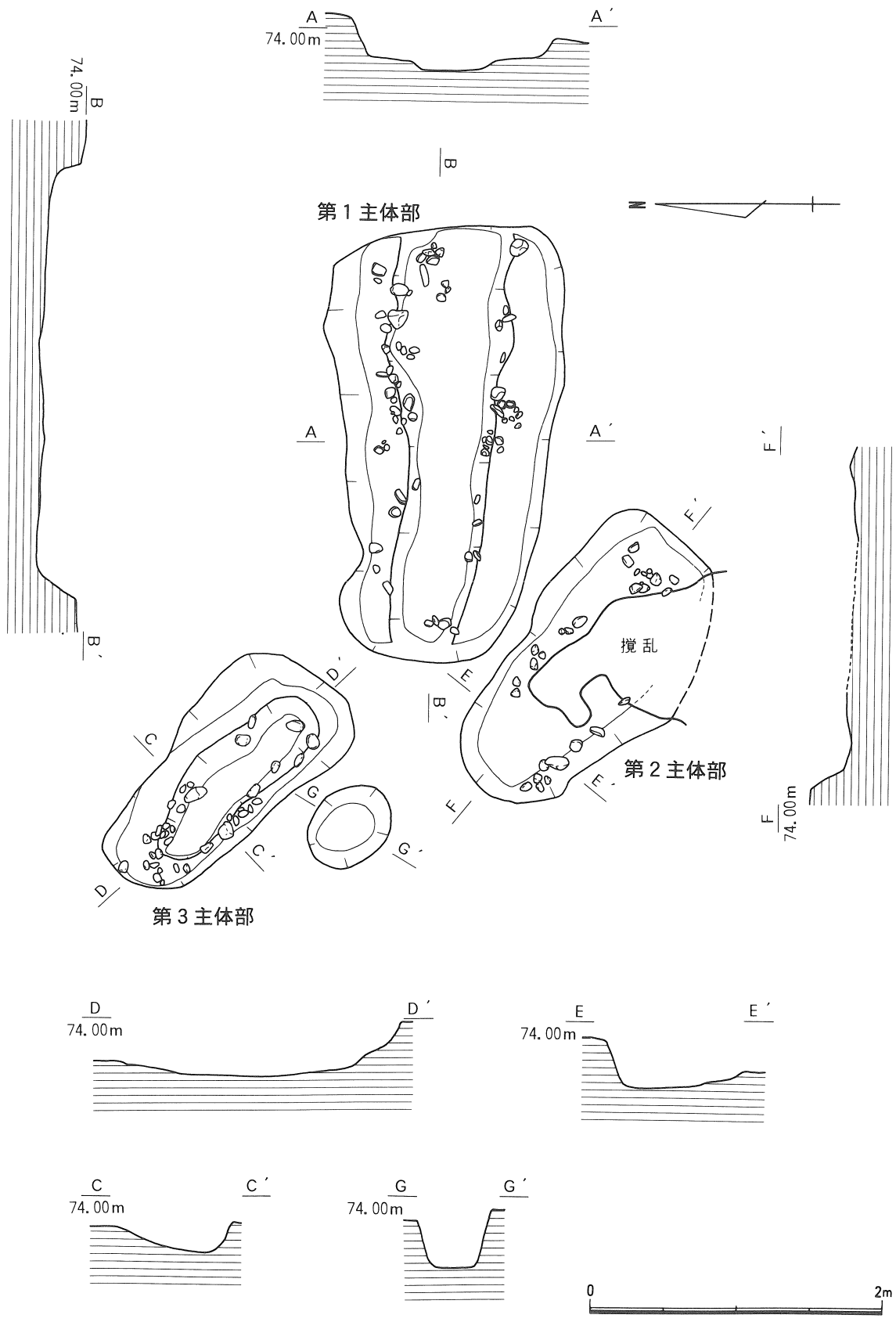
なお、墓坑内、墳丘周辺からは何ら遺物は検出されていない。

**第１主体部**

第１主体部の墓坑平面形は角が若干丸みをもつ長方形をなす。主軸方位はＮ―91°―Ｅとほぼ東西方向を向いている。検出面における墓坑の規模は主軸方向の長さ2.9m，幅は1.1～1.6mであり、西側

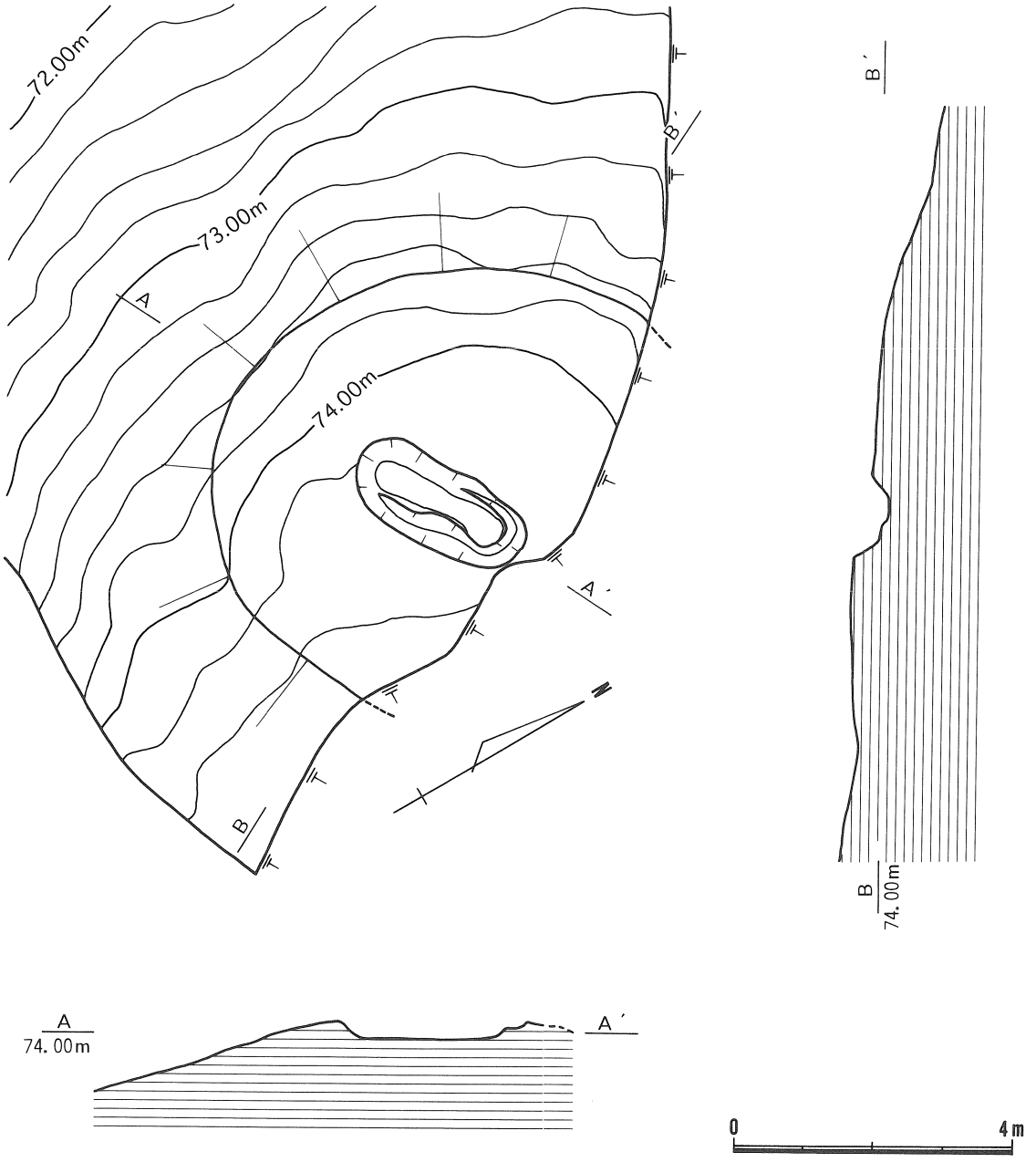



第42図　若作Ｆ１号墳墳丘図




第43図　Ｆ１号墳主体部実測図

に比べ東側の短辺が長い形状を呈する。検出面から床面までの深さは、最も深いところで0.35mを測る。床面の形状は長軸方向の床面中央をさらに掘りくぼめた二段掘り状となっている。木棺の痕跡は確認できていないが、おそらく、内側の掘り込みが木棺の置かれた部分に相当するものと考えられる。この内側の掘り込みの幅はおよそ0.7mである。墓坑内の覆土は暗黄褐色土であり、大きさの不揃いな礫を多く含んでいる。内側の床面の掘り込みの肩部には、直径15cm程度の比較的大きな礫が連続してみられたが、おそらくは棺を納める際の裏込め、あるいは棺の側板を押さえる目的で充填された礫が、棺のラインに沿って検出されたものと考えられる。先述の通り短辺が西側よりも東側の方が幅広となっている点、床面の傾斜が若干東から西へ傾斜している点から、被葬者の頭位は東向きであった可能性が想定される。なお、覆土中その他から粘土は検出されていない。



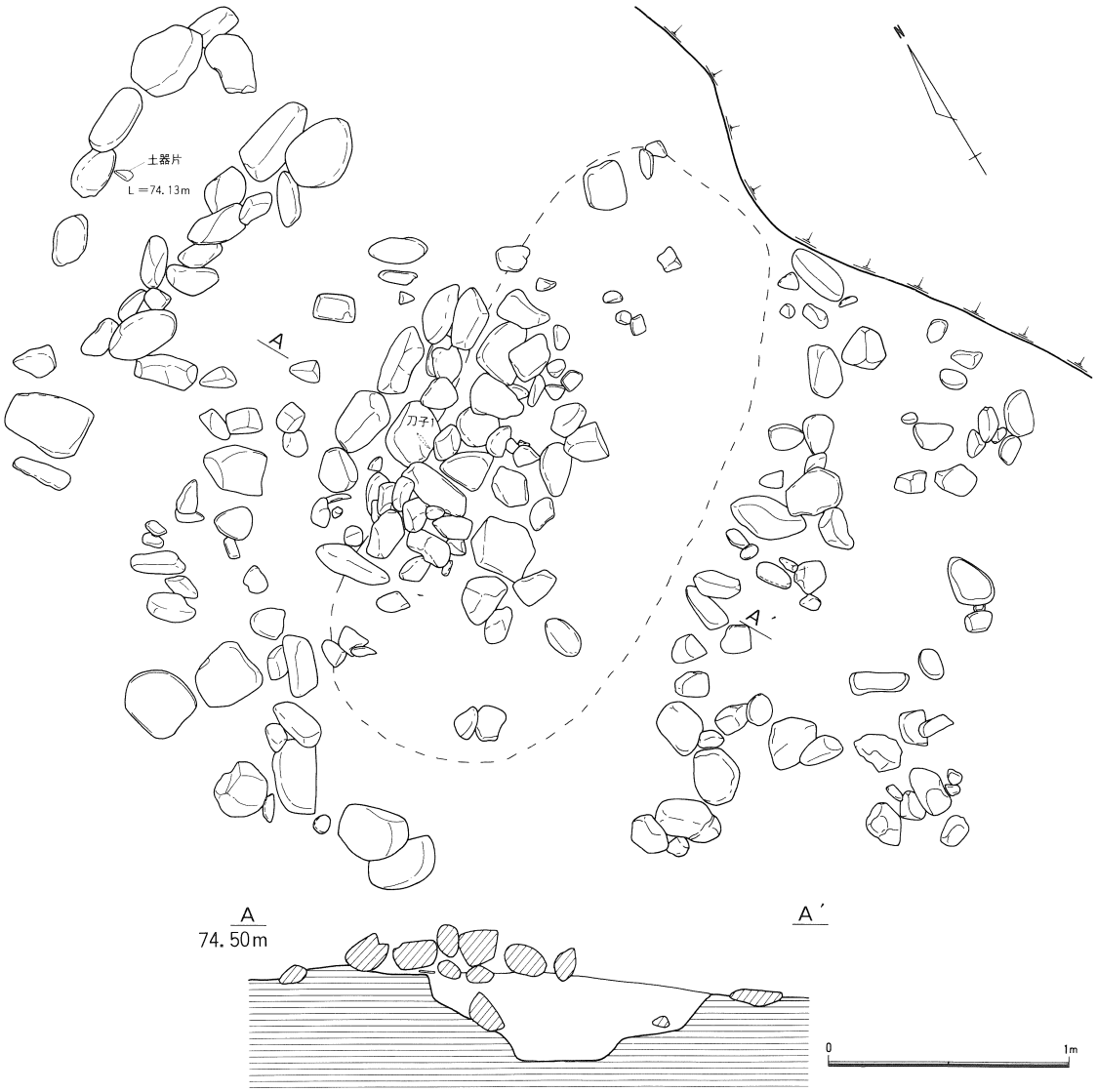

第44図　若作Ｆ２号墳墳丘図

### 第２主体部

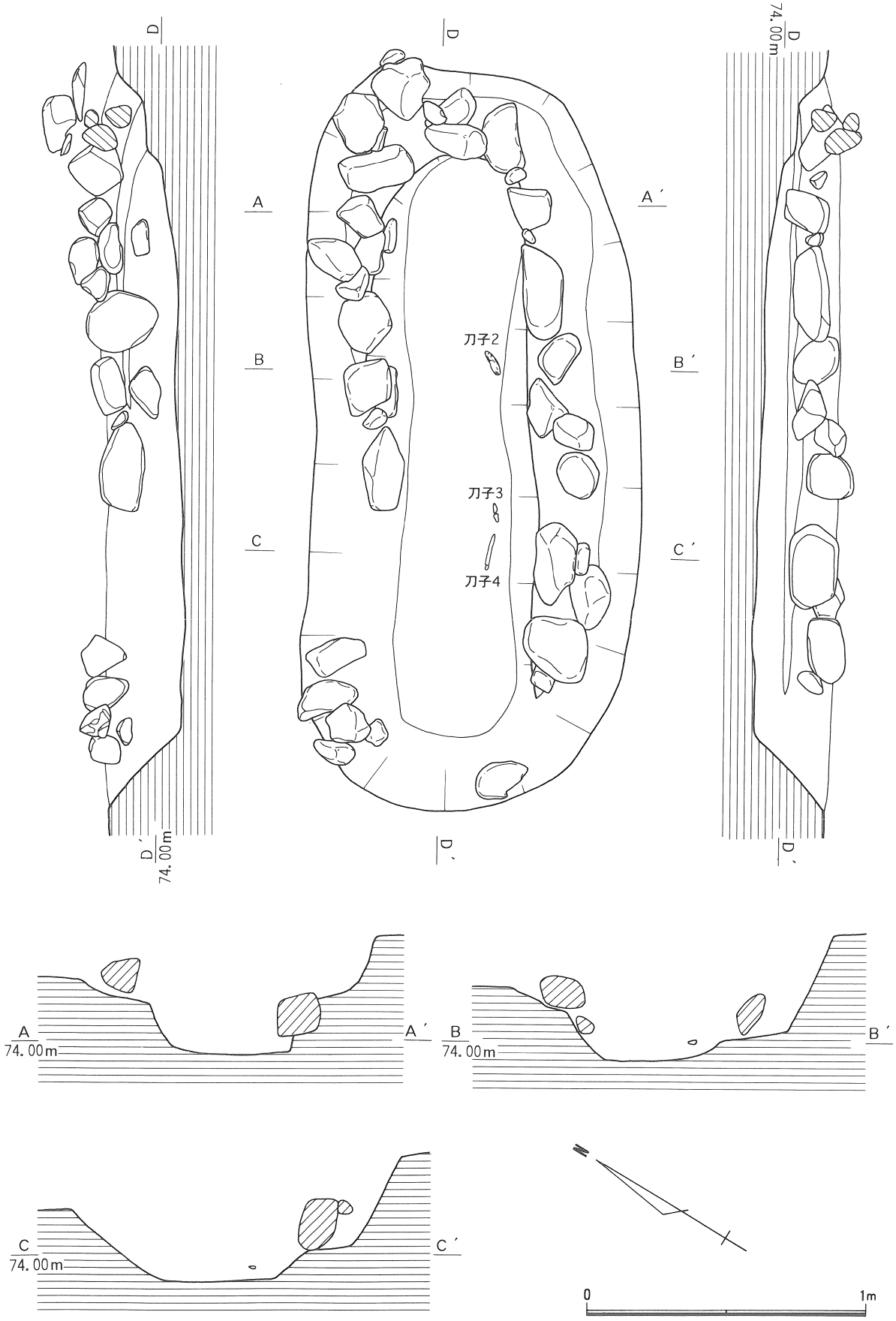
第１主体部の南西隅に近接して掘り込まれている。一部攪乱を受けており明瞭ではないが、平面形は短辺が若干丸みをもつ長方形を呈しており、第１主体部と同様東側の短辺の方が若干幅広な形状をなしている。主軸方位はＮ－129°－Ｅをとる。検出面での残存規模は長さ2.2m，幅は西側短辺で0.8mを測る。床面には棺の置かれた状況を推定できるような掘り込み等はみられない。

### 第３主体部

第１主体部の北西隅に近接して掘り込まれている。平面形は隅が丸みをもつ長方形を呈し、東側短辺の方が若干長い形状である。床面は二段掘り状の掘り込みがみられ、第１主体部同様に掘り込みの肩部に礫が連続して並んだような状況で検出されている。墓坑の規模は長さ1.9m，幅0.5～1.0m、内側の掘り込みの幅は約0.45mを測る。主軸方位はＮ－137°－Ｅである。なお、墓坑の南側には深さ40cmのピットが検出されているが、遺構の性格は不明である。




第45図　Ｆ２号墳　主体部上面集石実測図




第46図　F 2 号墳主体部実測図

## 2．若作Ｆ２号墳

(1) 墳丘

Ｆ２号墳はＦ１号墳から南へ鞍部を挟んだ位置、Ｆ１号墳とほぼ同じ標高に立地する。墳丘は東側が道路により削られてしまっているが、墳丘は直径約８ｍ，高さ約１ｍの円墳である。墳丘は削り出しによって整形されていたと思われるが、墳丘の区画は明瞭でない。

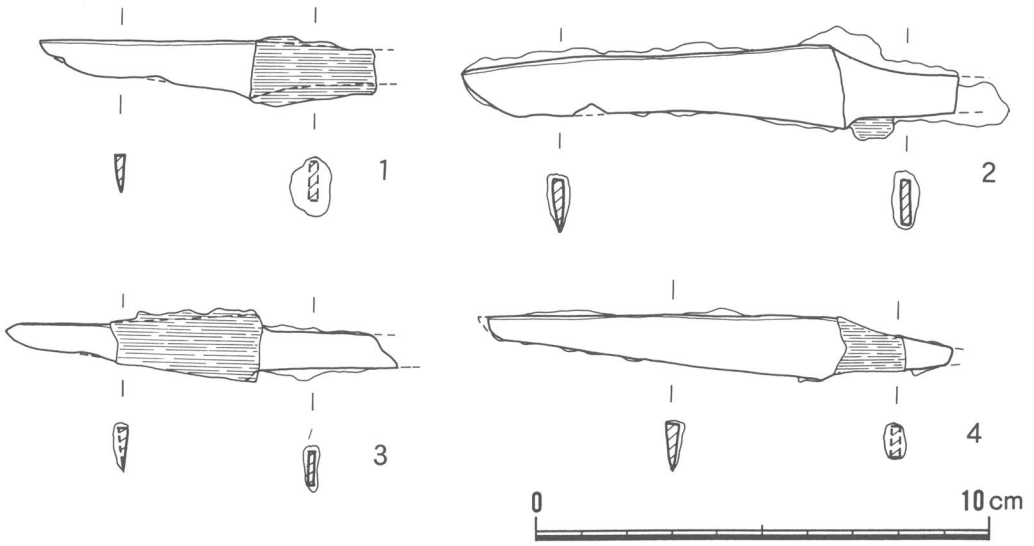
確認調査時には墳丘頂部に直径30cmほどの円礫が露出しており、平面的に検出したところ、これが1.1ｍ×1.4ｍほどの範囲に集中する状況が確認されている(第45図)。その位置が主体部の上面に相当する部分であること、礫のレベルが揃っていること、礫の直下より鉄製刀子１点が出土したことから、人為的に置かれた礫であると判断した。ただ、葺石や積石塚のように墳丘の広い範囲に置かれていたものではなく、周辺の基盤層中に含まれていた礫を、主体部の上面を覆う程度に置いたものと考えられる。

(2) 主体部

礫の下層で、基盤層を掘り込んだ主体部を検出した。墓坑は主軸をＮ―59°―Ｅに向けた、短軸が丸みを帯びた長方形を呈している。検出面での規模は長さ2.6ｍ，幅は1.2ｍを測る。墓坑内はさらに掘り込みがみられ、二段掘り状になっており、その中段のテラス部分には一見石室状に比較的大型の円礫が配されている。墓坑上面で検出された礫と同様、付近の基盤層中の礫を、棺の固定のための裏込めとして用いたものであると考えられる。覆土は礫混じりの赤褐色土であり、粘土はみられない。内側の掘り込みは長さ2.1ｍ，幅0.4ｍであり、検出面から床面までの深さは45cmである。

(3) 遺物（第47図、図版46上段１～４）

Ｆ２号墳では、先述の通り墳丘上面の礫の下より刀子１点が、また、墳丘上において土師器の小片が１点、墓坑底部の南辺沿いに刀子が３点検出されている。土器片は坏あるいは高坏坏部であると思われるが、小片であるため、図示できなかった。鉄製刀子は無関のもの(１・４)と、両関のもの(２・３)とがある。１は、無関であり、茎部には木質が残る。２は両関のもので、４点の中では比較的大型のものである。茎部の先端を欠損しているが、刃部長8.5cmを測るもので、茎部に僅かに木質が残る。３は両関のもので、刃部長は5.8cmを測る。刃部には木製鞘が残る。４は、無関、刃部長7.7cmを測るもので、茎には木質が残る。




第47図　Ｆ２号墳出土遺物

# 第3節　まとめ

若作古墳群Ｆ地区の調査では、二基の木棺直葬の埋葬施設を持った円墳の検出をみた。過去の若作古墳群の成果を踏まえ、調査の成果についてまとめておきたい。

検出された二基の古墳は、南東から北西の方向に向かって延びる尾根の頂部に位置する。これまでに調査の行われた地区の古墳は、北側に広がる沖積地に近い丘陵上の、標高20ｍから57ｍに立地しているが、今回調査したＦ地区はさらに高い標高76ｍに位置する。また、標高の低い平野に面した丘陵部分の古墳は、比較的密集して分布するのに対し、Ｆ地区は二基のみが点在する。

Ｆ１号墳、Ｆ２号墳ともに墳丘平面形は円形である。墳丘は地山削り出しによるもので、明確に墳丘を区画する施設はない。墳丘規模は、Ｆ１号群が直径12ｍ、Ｆ２号墳が８ｍであり、他の調査区の事例の平均的な墳丘規模の直径が約６～９ｍであるのと比較すると、Ｆ１号墳は若干大型の墳丘をもっているといえる。しかし、幅が狭く両側の斜面が急傾斜である尾根上に立地することから、墳形・墳丘規模は自然地形に左右されるものと考えられ、その規模の大小に特別な意味があるものでは無かろう。

Ｆ１号墳では墳丘頂部付近で、３基の地山を掘り込んだ木棺直葬の主体部と思われる遺構が検出された。３基とも礫混じりの暗黄褐色土を覆土としており、いずれの遺構にも全く遺物は伴っていない。若作古墳群では過去の調査で５基の古墳で複数の主体部をもつものが見られるが、いずれも２基の主体部をもつものである。Ｆ１号墳の主たる埋葬施設であると思われる第１主体部は、長さが2.9ｍであるが、過去の調査事例で検出された主体部の長さの平均が約2.0ｍであることを考えると、規模の大きな埋葬施設といえる。主軸方位は尾根の主軸に対して直行するものである。墓坑掘り方の形態は平面長方形をなし、底面は平坦である。

Ｆ２号墳は直径８ｍの円墳で、Ｆ１号墳同様地山削り出しによるものである。埋葬施設は尾根に直行する方向に木棺直葬と思われる墓坑が掘り込まれており、墓坑の中段には周辺の地山中にみられる礫が配されていた。また墓坑の埋め戻し後に置かれたと思われる円礫が墳丘頂部にみられた。遺物は墳丘上で刀子１点と土師器片、主体部内からは刀子３点が出土している。

若作古墳群では、これまで調査された21基のうち副葬品を有する古墳は８基しかなく、またそのいずれの主体部にも土器を伴わない。全く副葬品をもたないものが一般的であるという点から、今回調査を行った２基の古墳の築造の時期について言及するのはきわめて困難である。５世紀後半から６世紀前半と、幅をもって捉えておく必要があろう。ただ先述のとおり、このＦ地区の２基は他の比較的密集した古墳よりも、若干南に離れた位置に点在する分布状況を考えると、やや時代的に降ることも考えられる。

若作古墳群の周辺では、小型の木棺直葬墳からなる群集墳の調査事例が比較的多い地域である。これらの古墳群については、５世紀代に造墓の中心があるいわゆる初期群集墳とされるものである。横穴式石室墳や横穴墓といった６世紀後半以降に盛行する、いわゆる後期群集墳に先行するこのような古墳群は、極めて在地的な性格を持った古墳群であると考えられている。これら小型古墳群が小地域集団に属する者達の墓域であるとすれば、各古墳群の内容的な違いは、これら集団の性格や階層的な差異を示しているものと考えられる。当古墳群の西側に谷を隔てて隣接する上石野古墳群（第Ⅵ章）では副葬品として馬具や鉄製武器が、さらに西に立地する愛野向山古墳群では鏡や馬具、鉄製武器等がそれぞれ出土する古墳を含んでおり、若作古墳群とは被葬者集団に明確な差異を認めざるを得ない。このような古墳群の状況については、当地域の首長墓の動向や被葬者集団の居住域である集落遺跡の

状況と有機的な関係があるものと思われるが、当時の社会的・政治的背景をふまえたこれら初期群集墳の動向について、様々な角度から検討していく必要があろう。

## 引用・参考文献


吉岡伸夫・松井一明1985「静岡県愛野向山遺跡」『考古学協会年報』35　日本考古学協会

利根川章彦1986「群集墳をのこした人々」『季刊考古学』第16号

袋井市教育委員会1990『若作遺跡・若作古墳群』

中嶋郁夫1990「東海東部（静岡）」『古墳時代の研究11　地域の古墳・東日本』

松井一明1994「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』

松井一明1996「原野谷川中流域における初期群集墳の終末と後期群集墳（横穴群）の成立について」『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』

# 第Ⅵ章　上石野古墳群の調査

## 第１節　調査の概要

上石野古墳群は、袋井市愛野に所在する。袋井市の南東部、小笠山丘陵は南から派生し、平野に臨むあたりで複雑に枝分かれするが、その分岐した痩せ尾根の頂部に遺跡は立地している。

遺跡周辺は5世紀後半以降に形成された群集墳の調査事例が近年増加してきており、遺跡の西方では愛野向山古墳群(註１)、東方では大きな谷を隔てて隣接する若作古墳群（註２）の調査が実施されている。また、周辺の北面する斜面および丘陵頂部では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡（註１・２）も調査されており、これらの集落に関連すると思われる墓域も発見されている。上石野地区では、この弥生時代後期の方形周溝墓が１基調査されており、上石野１号墓の名称が与えられている（註３）。

調査区は、南から北に向かって伸びる丘陵の結節点から、２つに分岐した小支陵の頂部２箇所である。１・２号墳の所在する東側の尾根は最高点で標高86m、３・４号墳の所在する西側の尾根は最高点で標高76mを測るものである。調査前の地形をみると、古墳の所在する部分はいずれも尾根頂部が円墳状に高まっており、確認調査は、この墳頂部に十字のトレンチを設定・掘削することによって実施した。なお、３・４号墳の所在する西側の尾根については、古墳の間の鞍部の東側斜面が比較的緩斜面となっているため、時代を異にする遺構の存在も想定し、地形に合わせたトレンチを設定、遺構の有無を確認することとした。

確認調査では、上石野１号墳の頂部

第48図　上石野１・２号墳周辺地形図

トレンチ内で、基盤層を掘り込んだ区画を、また2号墳では頂部トレンチ内で、大きさの揃った石列と主体部と考えられる区画を確認することができた。4号墳の墳頂部トレンチ内では覆土内に灰色粘土を含む遺構を確認、また、3号墳では主体部と思われる区画を確認した。

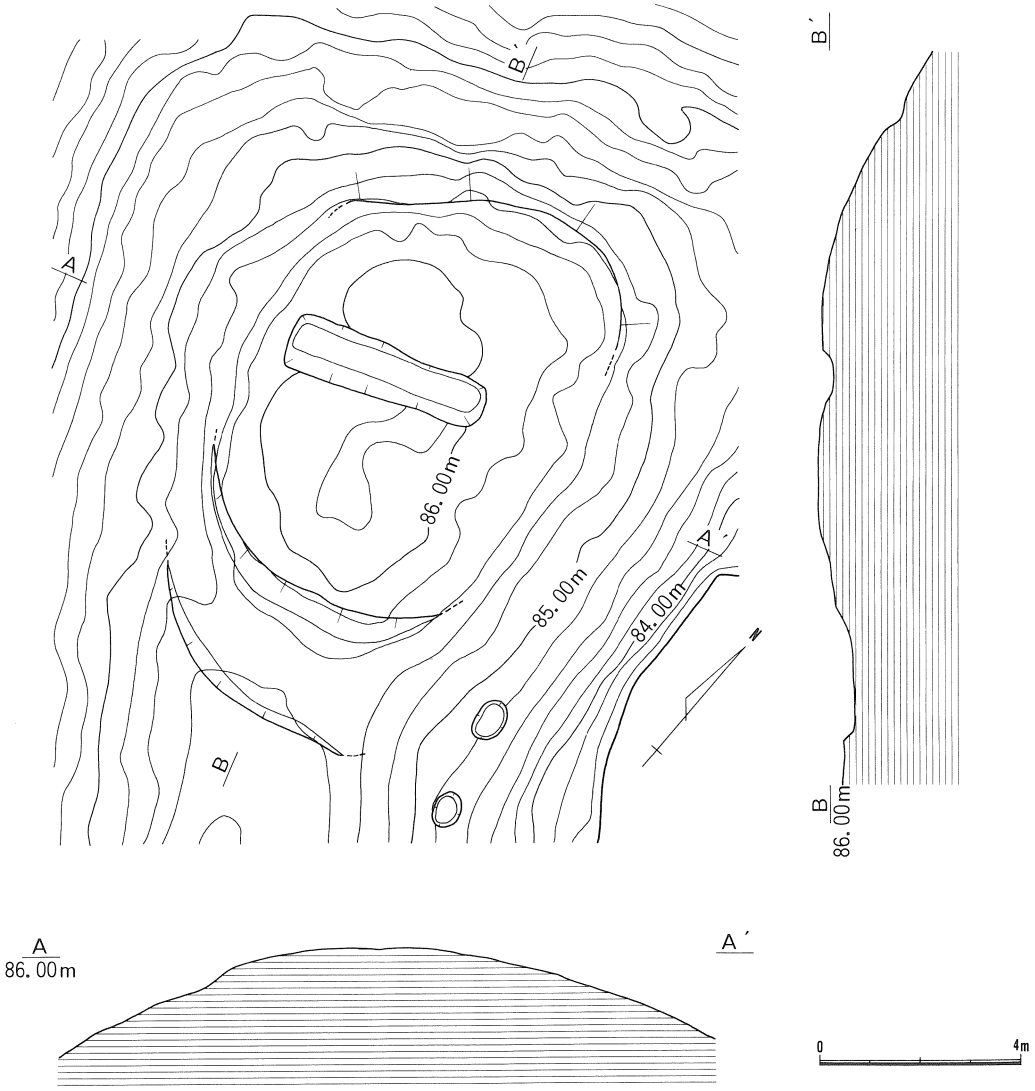
いずれの古墳においても、表土除去後、土層帯を残しながら、墳頂部の主体部のプラン確認と、墳丘および周溝等の確認を平面的におこなった。なお、古墳以外に設定したトレンチにおいて、他の時代の遺構は確認されなかった。

## 第2節　遺構と遺物

### 1．上石野1号墳

(1) 墳丘（第49図）

調査を実施した4基の古墳のうち、南側に所在する2号墳とともに最も標高の高い位置、かつ北側に広がる沖積地を広く見渡せる位置に立地する古墳である。墳丘頂部から周辺の尾根の地形をみると、




第49図　上石野1号墳墳丘図

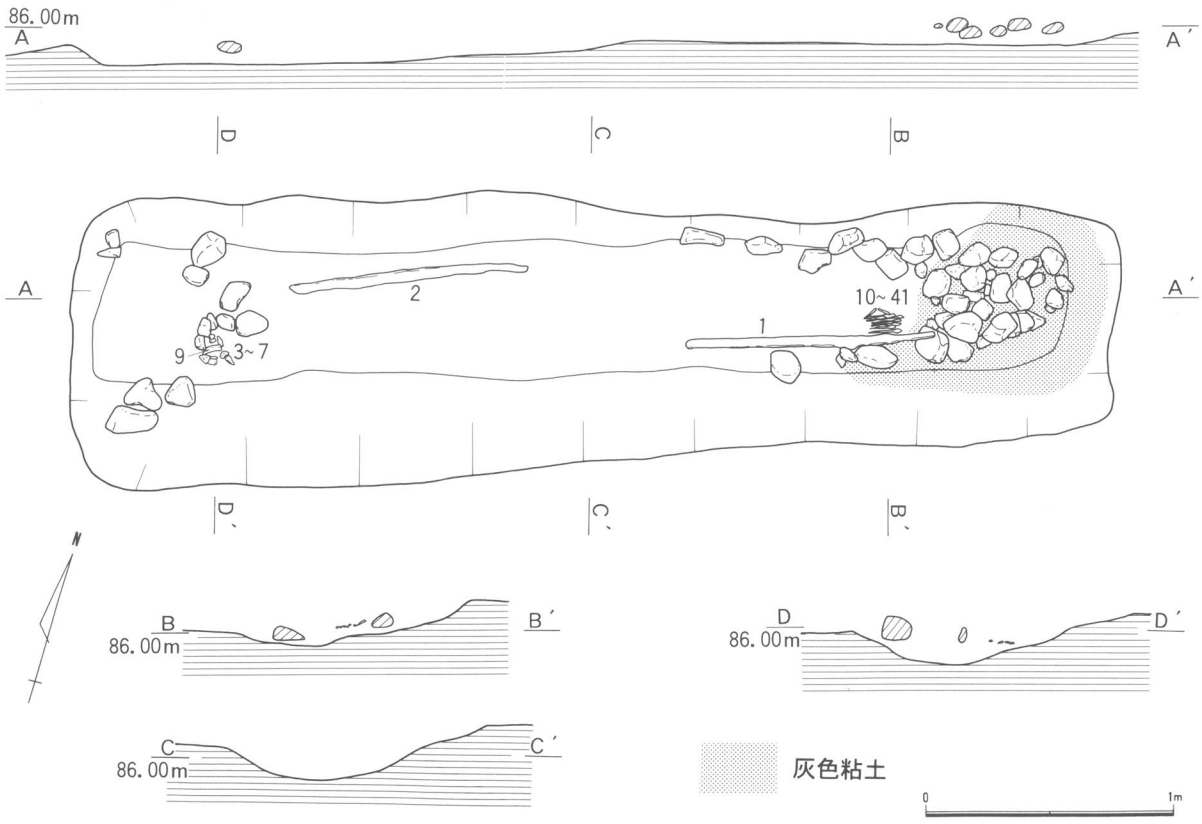
東西斜面、北側斜面ともに急傾斜であるが、２号墳との間の南側の尾根頂部は、明瞭な起伏もなく、狭い平坦面が続いており、２号墳へと連続している。

腐植土、表土を除去すると、小笠山礫層の基盤層があらわれた。後世の土砂流失も考えられるが、盛土は確認されていない。また墳丘の東西斜面、つまり尾根の東西斜面側は傾斜が急なこともあり、墳丘も流失が激しいものと考えられるが、尾根の主軸に沿った北側、南側斜面については比較的築造当時の形状を留めているものと考えた。

墳形は基本的には円形であるが、若干南北に長い楕円形を呈している。墳丘の南側は、尾根の主軸に対して直交する方向に幅広な溝が掘られ、墳丘を画している。この溝は幅2.6m、検出面からの深さ0.3mを測るもので、覆土は礫混じりの赤灰褐色土である。この周溝は墳丘の周囲を全周するものではなく墳丘を造りだすため尾根を分断する形で掘削されている。また、墳丘斜面の北側部分では、斜面途中で傾斜が緩やかになる箇所がみられるが、ここが墳丘の裾部に相当するものと考えられる。以上のことから、１号墳の墳丘は若干楕円形を呈する円墳であること、径は南北12m，東西9.5mで、周溝底部から墳頂部までの墳丘の高さが1.2mの規模をもつ古墳であること、墳丘は基本的に自然の丘陵上の高まりを削りだして整形していることが確認された。

(2) 主体部（第50図）

墳丘頂部において、木棺を直葬したものと思われる主体部１基が検出された。主軸方位はN－74°20′－Eをとる。墓坑の検出面は基盤層直上あたりまで掘り下げて初めて確認することができた。おそらく墓坑上面の掘り方のラインはすでに流失していたものと考えられる。墓坑は長さ4.2m、幅は比較的残りの良い墓坑西半部で1.1mを測り、やや角の丸い長方形を呈する。墓坑の横断面形をみると、床




第50図　１号墳主体部実測図

面部分は平坦ではなく、緩やかな丸みをもって立ち上がる。棺の形状については棺材等が遺存しておらず、推定するほかないが、床面の緩いU字形のカーブは棺底部分が納まる部分であり、棺の形状を示唆するものであろう。また、床面は主軸に沿って東から西に向かって若干傾斜している。検出面から墓坑床面までの深さは最も残りの良い墓坑西半部分で0.23mを測る。

東西両小口には棺の安定を図るためのものと考えられる拳大の礫がみられる。特に東側に顕著であり、一見礫床状に並べられている。また、この礫の上面をはじめ、東側小口には灰色粘土の広がりがみられるが、棺の安定・固定を図ったものであろう。後述する遺物の出土状況と、墓坑床面の傾斜、また小口の状況からみて、被葬者の頭位は東向きであったと推定される。

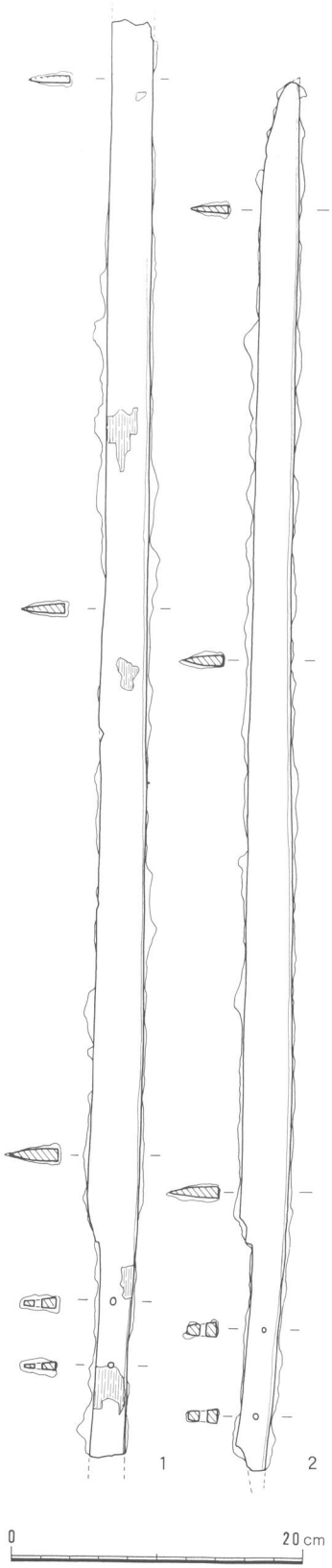
(3) 遺物の出土状況

上石野1号墳で検出された遺物は、墓坑のプラン確認時に墓坑覆土上面で土師器小片が確認されているほかは、すべて墓坑内の棺内遺物と考えられる。

東側小口部分では、大刀が1振と、鉄鏃が束の状態で32本出土している。墓坑の床面南側長辺に沿って置かれ、いずれも小口の礫の上に乗る形で検出されている。大刀は刃部を内側に、鋒を西に向けて置かれていた。また、墓坑底面の形状に沿い、墓坑の中央に向かってやや内傾した状態で出土している。表面には一部木質が遺存しており、木鞘に納められて置かれていたことがわかる。鉄鏃はいずれも細根系のいわゆる長頸鏃であり、大刀と並行して置かれていた。鉄鏃の茎部には木質が残っており、矢柄に装着された状態で納められたものと推定される。また、鏃身部の先端を東に向けて置かれていた。鏃束の本数は破片になったものの鏃身部および篦被関部の数から32本と判断した。

墓坑西半部では大刀が1振置かれていた。北側長辺に沿って置かれており、東側小口のものと同様、鋒を西側に、刃部を内側に向けて置かれていた。また、やはり墓坑床面の形状に従って、墓坑中央に向かい内傾した状態で出土している。こちらは表面に木質はみられない。

墓坑西側小口部分には、鉄鎌と5点の平根系の鉄鏃が置かれていた。木の根による攪乱のため、配置の細部については明確ではないが、1箇所にまとめられて配置されていた。また、小口に粘土等もみられず、構造がはっきりしないため、これら鉄器の出土位置が、棺内に納められていたかは明確ではない。しかし東小口でみられたような礫の墓坑底部の礫の上面に置かれており、この礫が棺の安定をはかるものであるとの認識から、これら鉄器も棺内に納められた遺物であると判断した。鉄鏃については矢柄の木




第51図　1号墳出土大刀

質が遺存するものの、折り重なるように出土していることから、矢柄が長いまま納められていたとは考えられず、東側の一群のように整然と並べられていたものではないと考えられる。

(4) 遺物

主体部内から出土した遺物は、すべて鉄器類である。大刀２振、鉄鏃37本、鉄鎌１本および不明鉄器１点である。

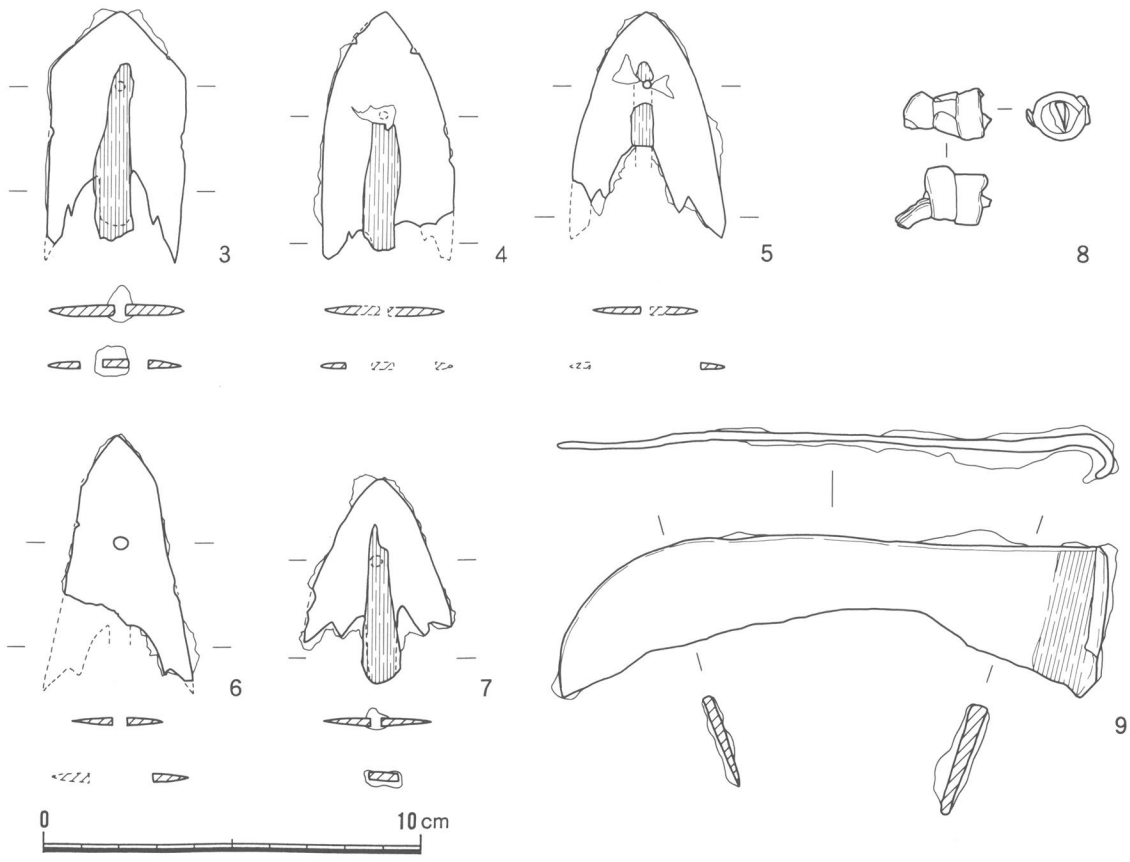
**大刀**（第51図１・２、図版46下段１・２）

１は鋒、茎尻の先端部分を失っているが、現存長99.6cm、刃幅2.7～3.5cm、茎幅は関付近で2.7cm、背厚0.8cmを測る直刀で、やや内反りである（註4）。刃部は平造りによるものである。関の形態は片関・斜角関であり、茎との境には小さな段の付くものである。茎部には目釘孔が２箇所にあけられている。刃部・茎部表面には僅かに木質が遺存している。２も若干内反りを呈する直刀であり、現存長95.5cm、刃幅2.7～3.3cm、茎幅は関付近で2.3cm、背厚0.8cmを測るものである。刃部は平造り、関の形態は撫角関であるが、１と同様茎との境には小さな段が付く。茎尻の形態は隅抉尻である。茎部の目釘孔は２箇所にあけられている。

**鉄鏃**（第52図３～７、図版46中段３～７、第53図、図版47）

完形品、破片を含め、37本が出土している。形態的に細根系のものと平根系のものとの２種に大別できる。

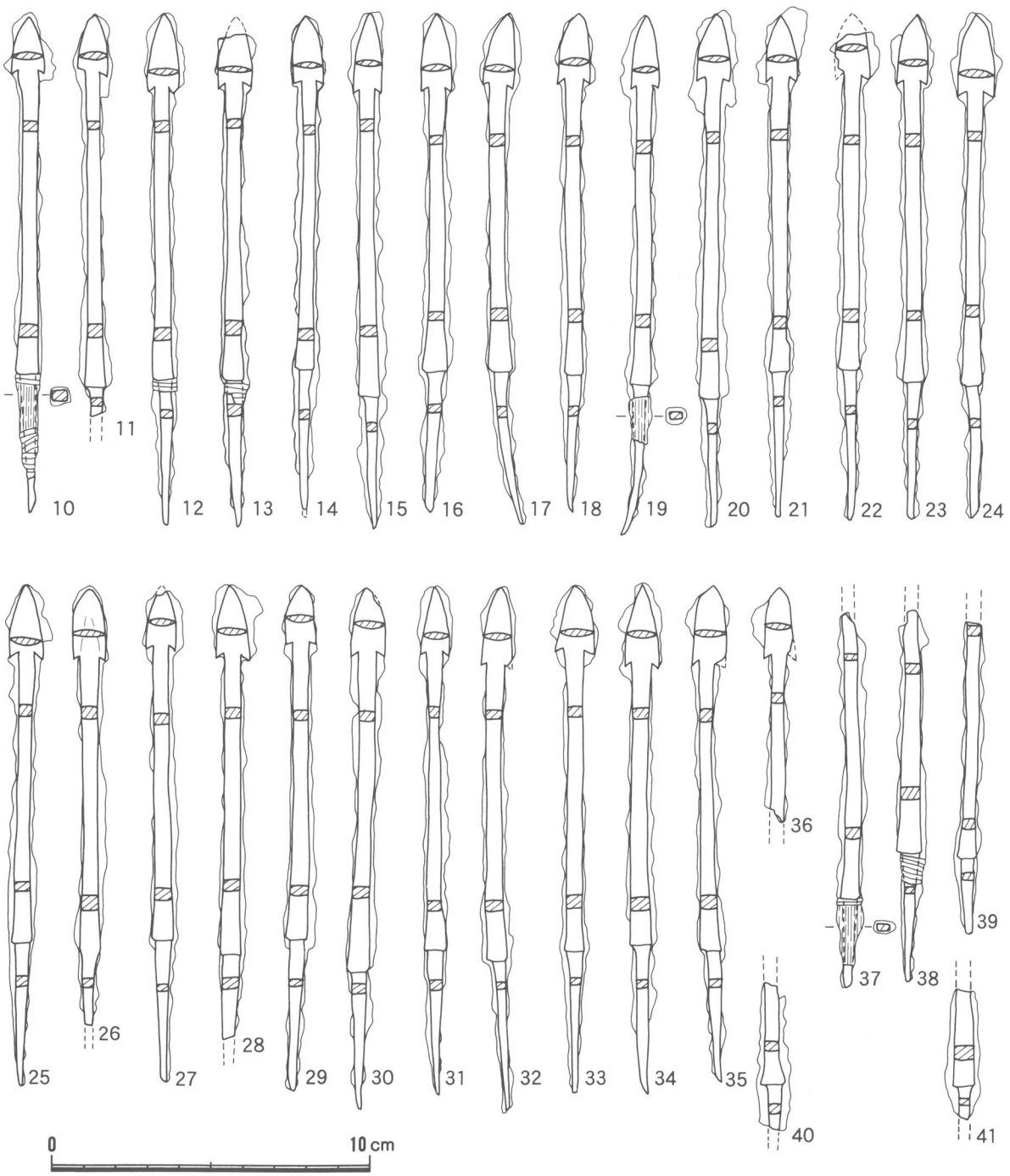
平根系のもの（第52図３～７）は５点が出土しており、形態的に２形式に分類できる。短茎腸抉五




第52図　１号墳出土鉄製品

角形式（３・６）と短茎腸抉三角形式（４・５・７）である。５点とも重抉（二段抉り）を有し、鏃身部中央には矢柄を装着するための穿孔がなされている。３は鏃身長6.7cm、鏃身幅3.7cmを測り、矢柄の木質が明瞭に遺存する。６は全体的な形状が長三角形状であるが、上方に僅かに角を持ち五角形を呈する。４は鏃身長6.7cm、鏃身幅3.6cmを測るもので、鏃身部のふくらが明瞭である。５は４と比べ腸抉が深い形態である。７は全体的に正三角形に近い形状で、鏃身長5.5cm、鏃身幅3.9cmを測る。

細根系のもの（第53図10～41）は、箆被関・鏃身部の個体数から判断して32本が出土しており、すべて同一の形式である。鏃身部はふくらをもつ腸抉三角形であり、断面形はレンズ状をなす両丸造で




第53図　１号墳出土鉄鏃

ある。篦被関部はいわゆる台形関である。茎部および篦被部の断面形は方形をなす。篦被部には矢柄の木質と、矢柄装着のために巻かれた口巻きが遺存するものがある。

**鉄鎌**（第52図９、図版46―９）

いわゆる曲刃鎌である。背は直線的で、先端が急角度で曲がる形態のものである。残存部分の計測値は、刃弦長（刃部先端と刃部基部とを結んだ距離）11.0cm、刃幅2.7cmを測る。また基部の折り曲げの延長線と刃弦の角度は81°であり、やや鋭角に柄が取り付くものである。

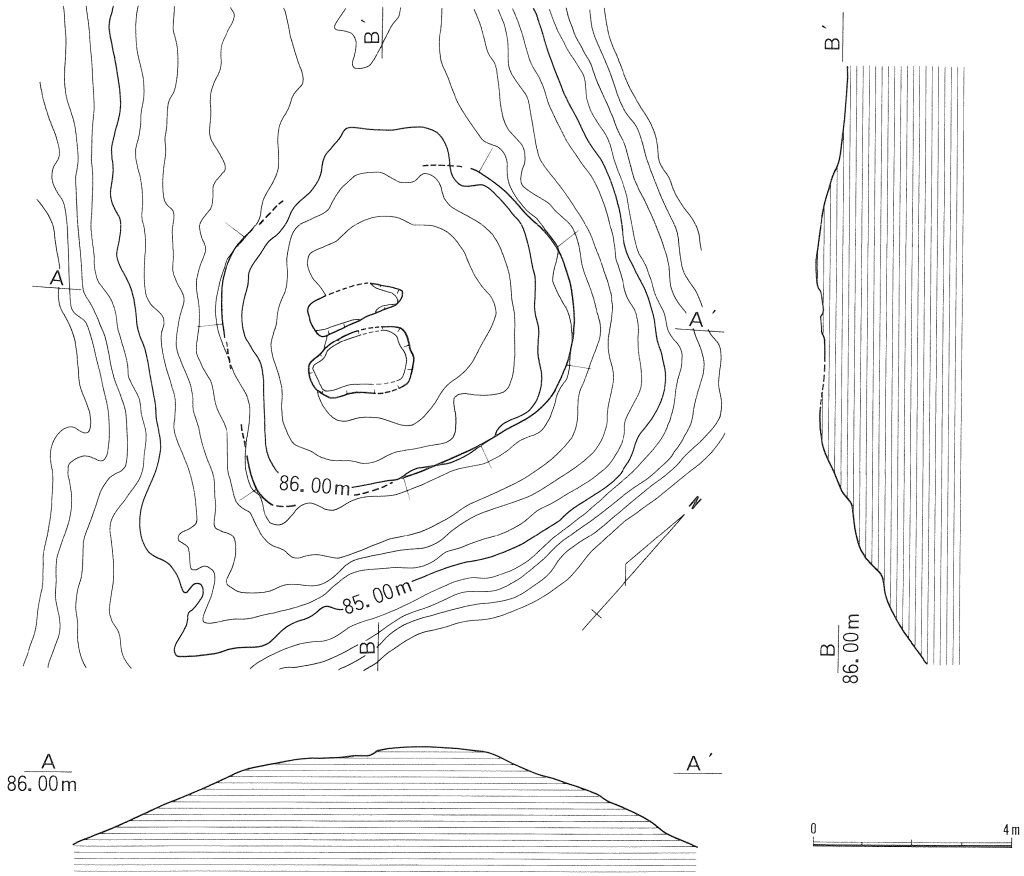
**不明鉄器**（第52図８、図版46―８）

断面三角形の細長い帯状の鉄の板二枚に、幅７mm程度の鉄の帯を螺旋状に巻き付けたものである。東側小口の大刀・鉄鏃束と同じ位置から出土しているものであるが、関連するような他の遺物もみられず、用途は不明である。

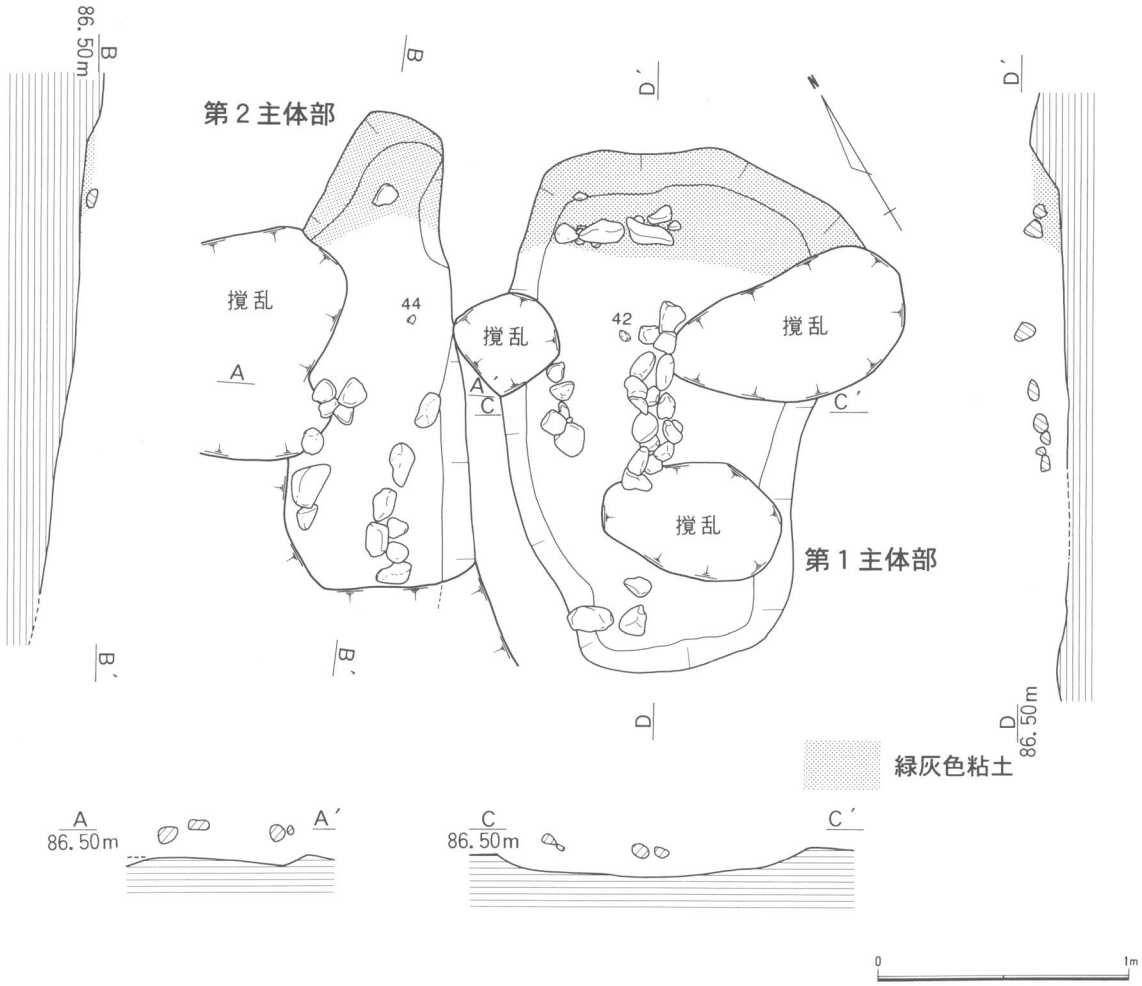
## ２．上石野２号墳

(1) 墳丘（第54図）

２号墳は１号墳の南、丘陵頂部の稜線が一段低くなる手前の、瘤状に高まった箇所に造られている。墳丘上の表土は薄く、これを除去するとすぐに基盤層である小笠山礫層があらわれた。墳丘には盛土は確認できず、築造時に存在したとしても、完全に流失してしまっている。おそらくは地山削りだしによって墳丘を整形していると思われる。標高は検出面墳頂部で86.2mを測る。墳丘東側斜面において、墳丘削りだしによるものと思われる段が比較的明瞭に残っており、この段の下端を墳裾と捉えた。また、墳丘北側では、１号墳南側の周溝状遺構ほど明瞭ではないが、尾根の主軸方向に直交する方向




第54図　上石野２号墳墳丘図




第55図　２号墳主体部実測図

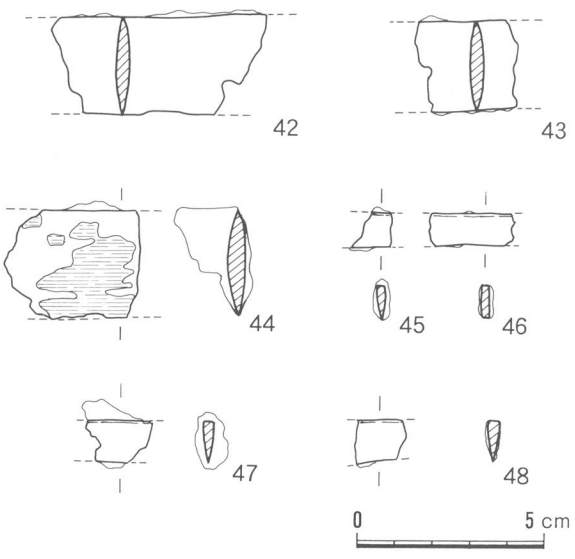
に幅約1.8mほどの僅かな凹みがみられ、これが人為的に掘削された周溝である可能性もある。先述の削りだしの下端と、この凹みの外側を墳丘の範囲と捉えれば、直径８mの、南側に若干張り出す不整形の円墳となる。また、墳裾のレベルから墳頂部までの墳丘の高さは約１mである。

(2) 主体部（第55図）

墳丘頂部で、並列する２基の木棺直葬の主体部を検出した。主軸方位は、南東側の第１主体部がN－31°－E、北西側の第２主体部がN－37°－Eを測るものである。

**第１主体部**

墓坑は1.9m×0.8mの不整長方形を呈する。北東側の小口部分の幅が最大で、南西側小口に向かうにつれてその幅を減ずる。また北東側は比較的方形に近いが南東側は若干丸みを帯びる。土砂流失と攪乱により、検出面から墓坑底面までの深さは約10cmである。床面は主軸に沿って




第56図　２号墳出土遺物

緩く北東から南西に向かって傾斜している。北東側の小口部分には比較的大きな礫とともに、緑灰色粘土がブロック状に詰められている。また、南西側小口付近にも小礫混じりの粘土がみられた。墓坑の横断面形は、平坦な底面から緩やかに立ち上がっている。墓坑中央の主軸ライン付近と墓坑北辺付近に10～20cm程度の礫が列状に検出されている。この石列は墓坑底面よりも浮いた状態で検出されていること、墓坑区画の長辺と並行に検出されていることから、木棺埋置時の裏込め、あるいは棺上に入れられた礫が、棺の腐朽に伴い内側に落ち込んだものと考えられる。

**第２主体部**

第１主体部ほど残存状況は良好ではないが、残存部分で1.8m×0.6mを測る長方形を呈する墓坑である。検出面から墓坑底面までの深さは約10cmである。墓坑内北西小口部分には緑灰色粘土ブロックがみられる。南西側小口の立ち上がりは失われているが、北西から南西に向かって床面が緩く傾斜している。また、第１主体部同様に墓坑内に石列がみられるが、底面から浮いている点も共通しており、棺の側板を押さえる裏込めかあるいは棺上面に置かれた石が棺の腐朽により内側に落ち込んだものと考えられる。

(3) 遺物出土状況（第56図、図版48―42～44）

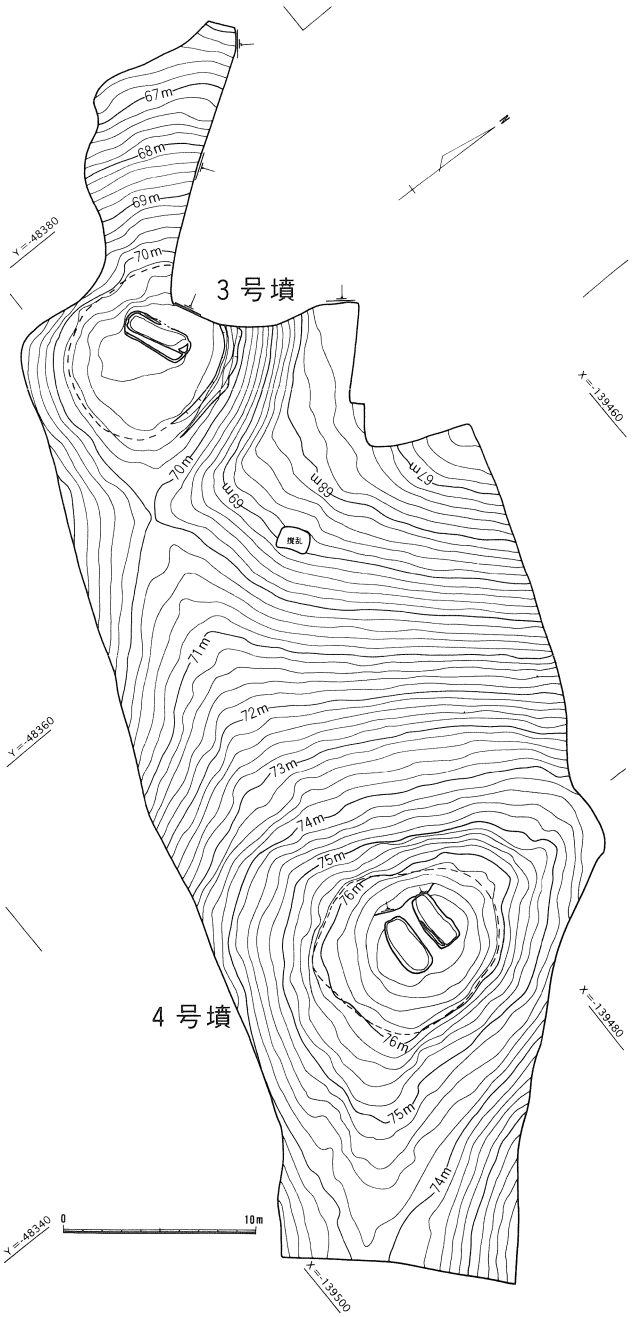
遺物は墓坑底面および墓坑区画内の攪乱土中より出土している。１は第１主体部の墓坑底面上で検出された鉄剣の破片で、鎬をもたない横断面形が凸レンズ状を呈する剣の刃部片である。２は攪乱土中から出土した鉄剣片である。３も断面が凸レンズ状をなす剣の刃部の破片で、表面に鞘の木質が遺存している。これは第２主体部床面上から出土している。４・５・６は攪乱土中から出土した刀子片である。

**３．上石野３号墳**

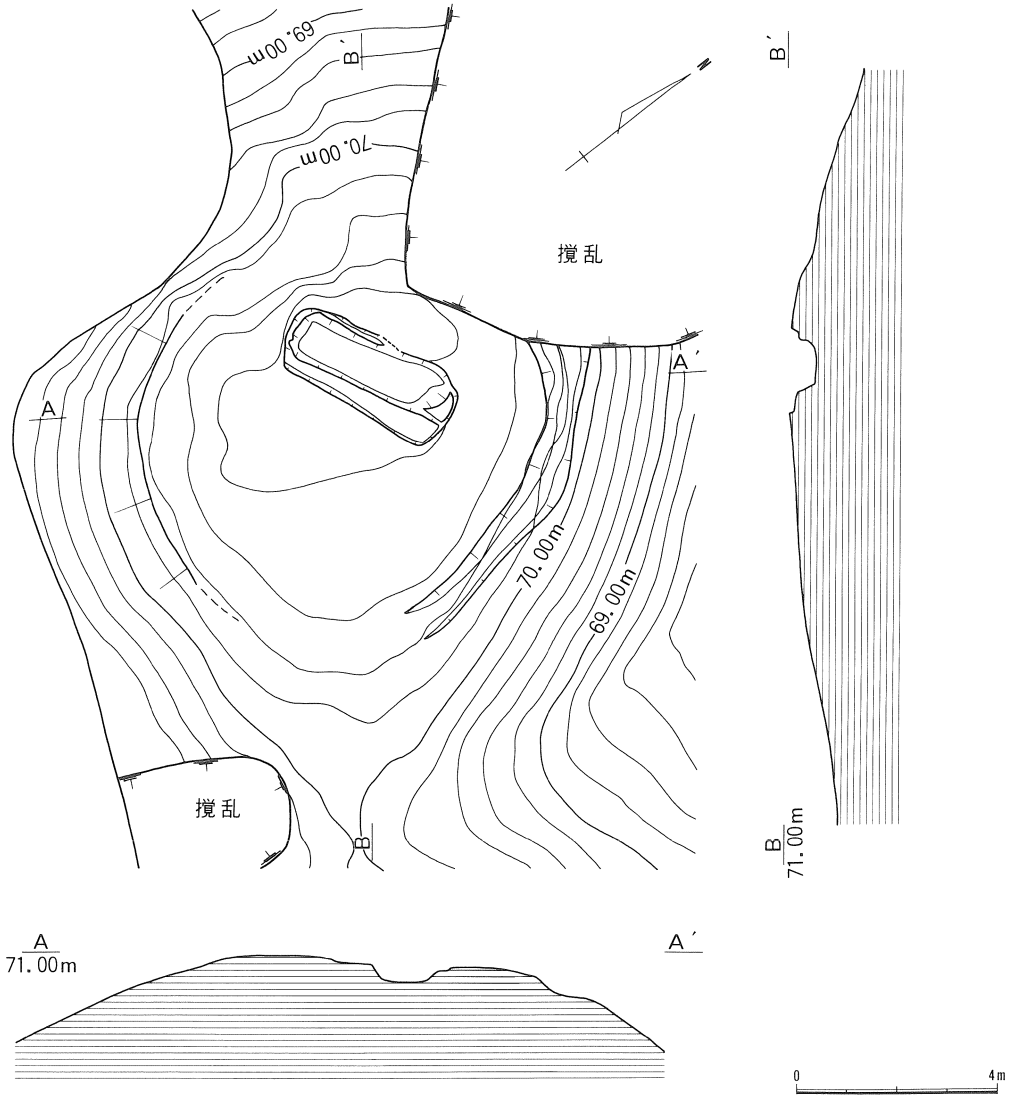
(1) 墳丘（第58図）

３号墳は１・２号墳の立地する尾根の谷を挟んだ西側の尾根上に立地している。墳丘の北側は、茶畑の開墾による削平を受けており、墳丘のおよそ1/5を失っている。同一尾根上の南側に位置する４号墳からはややレベル的に降ったところであるが、他の古墳の立地と同様、瘤状に高まった箇所に築造されている。墳頂部の標高は70.8mを測る位置である。

墳丘部分の基盤層は、墳丘の西半分は斜行した小笠山礫層がみられるが、東半分は、礫層の上に乗るしまりの強い褐色の粘土質シル




第57図　上石野３・４号墳周辺地形図

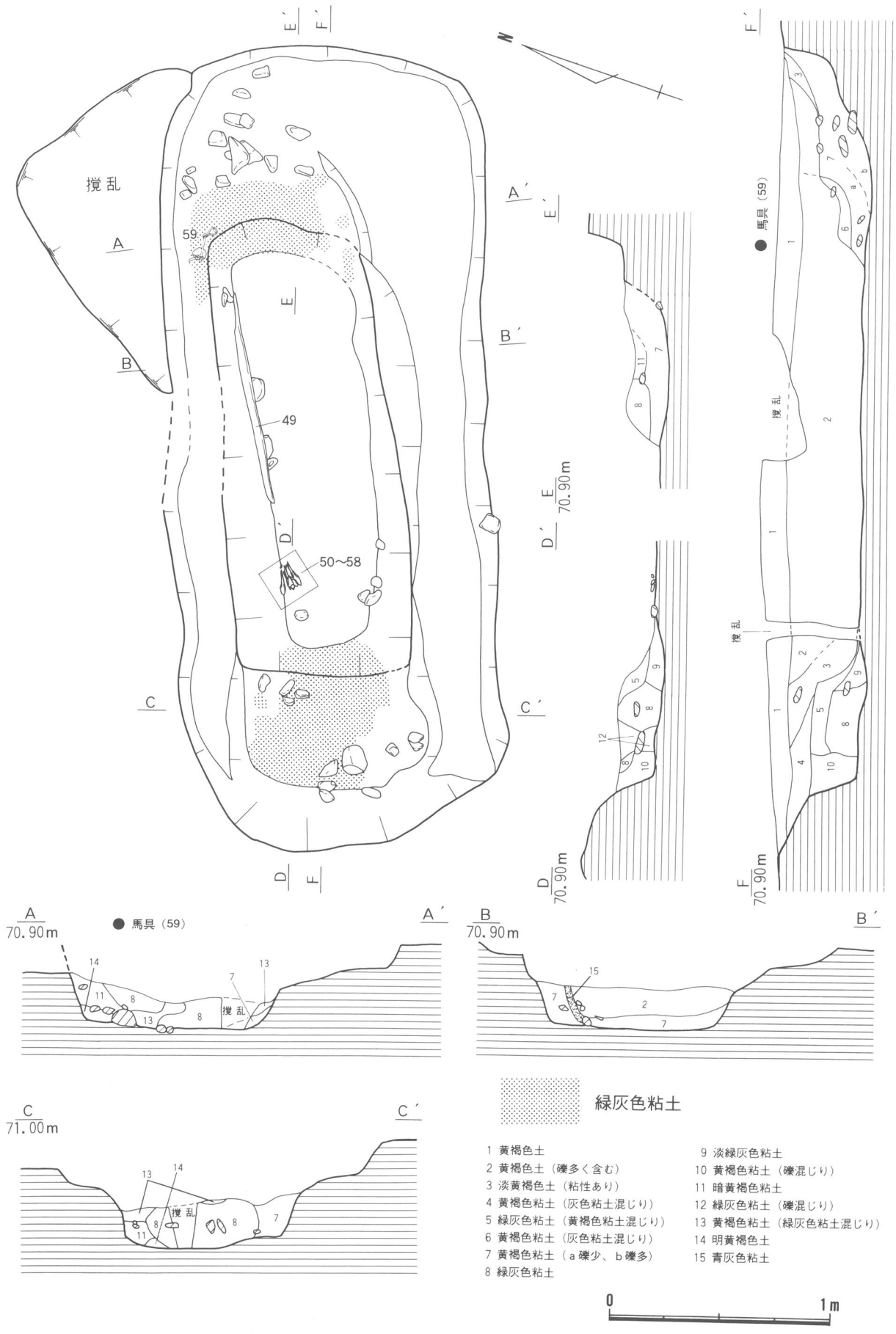



**第58図　上石野３号墳墳丘図**

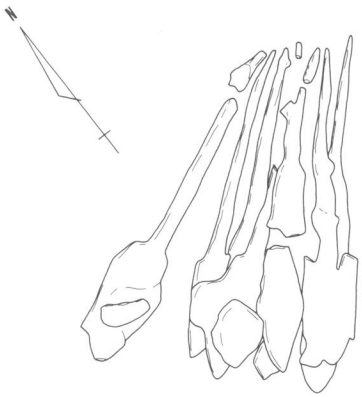
ト層が露出している。墳丘には盛土はみられない。墳丘の整形は、基本的に基盤層の削りだしによるものと考えられるが、墳丘東側においてこの墳丘を画したと思われる削りだしの痕跡が、溝状の落ち込みとして検出されている。この削りだしの痕跡は幅約0.8mを測るものである。墳丘南側および西側の墳丘斜面には、このような明瞭な施設はみられないが、傾斜角度の変換点の段状になった部分の下端を墳丘裾部のラインと捉えた。以上の点から、３号墳の墳丘の平面形、規模をみてみると、直径９mの円墳となる。また、自然地形を利用して墳丘を整形しているため、墳丘西側および北側の傾斜が比較的急なのに対して、尾根主軸方向である南側および東側は比較的緩やかな斜面となっている。この傾斜の違いにより、墳丘の最高点が、円の中心よりもやや北西に偏っており、主体部の墓坑も中心から偏ったこの最高点部分に掘削されている。

⑵ 主体部（第58図）

３号墳の主体部は墳頂部に掘削された木棺直葬によるものである。墓坑は段掘りで、棺を置いたのち、棺小口に粘土・礫を充填するという構造をもつものである。


攪乱
59
49
50～58
馬具（59）
70.90m
71.00m
緑灰色粘土
1 黄褐色土
2 黄褐色土（礫多く含む）
3 淡黄褐色土（粘性あり）
4 黄褐色粘土（灰色粘土混じり）
5 緑灰色粘土（黄褐色粘土混じり）
6 黄褐色粘土（灰色粘土混じり）
7 黄褐色粘土（a礫少、b礫多）
8 緑灰色粘土
9 淡緑灰色粘土
10 黄褐色粘土（礫混じり）
11 暗黄褐色粘土
12 緑灰色粘土（礫混じり）
13 黄褐色粘土（緑灰色粘土混じり）
14 明黄褐色土
15 青灰色粘土
0
1m

第59図　3号墳主体部



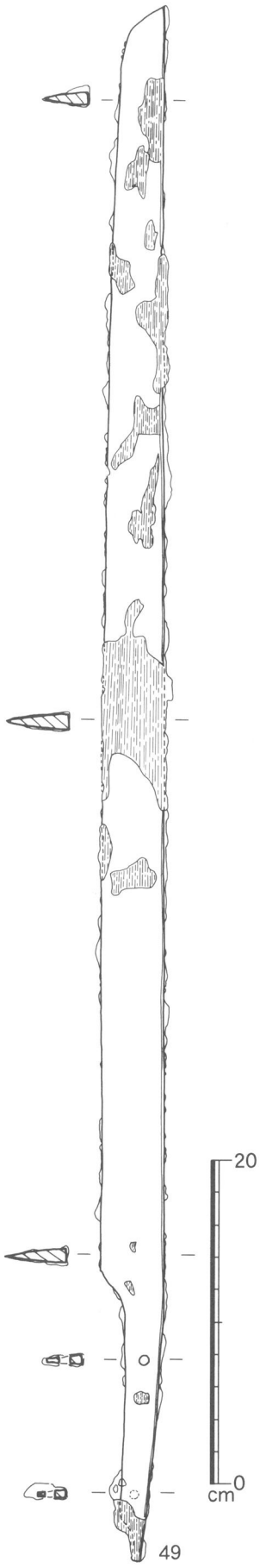
第60図　3号墳主体部鉄鏃出土状況図

主軸方位はN－65°－Eを測る。墓坑は基盤層を掘り込む形で検出されているが、検出面から約15cm下で一旦平坦面をなす。そこからさらに棺を埋置する部分を掘りくぼめており、段掘りの墓坑となっている。墓坑は平面長方形を呈し、検出面での規模は長さ3.6m、幅1.48mを測る。棺を安置するために掘られた部分の掘り方は、墓坑上面の主軸からやや北に振った方向で掘削されており、その長さ3.2m、幅0.8mを測るものである。また、検出面から墓坑底面までの深さは約0.45mである。なお墓坑床面はほぼ水平であり、傾斜はみられない。

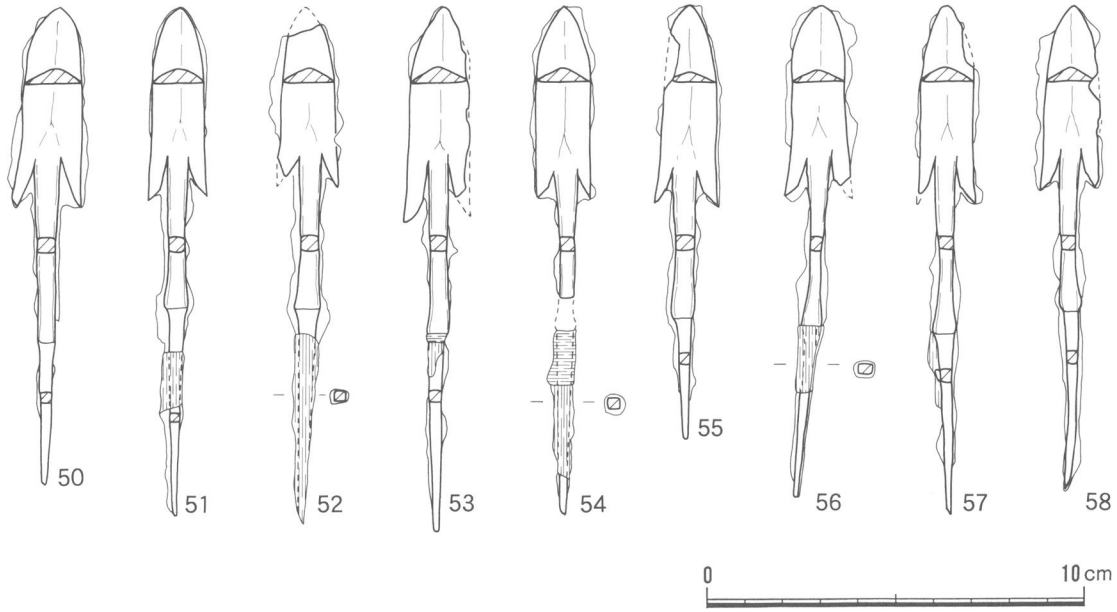
墓坑底面にはしまりの弱い小礫・灰色粘土混じりの黄褐色土が置き土として薄く敷かれ、その上に棺が置かれたものと考えられる。棺の小口部分には直径10～20cm程度の礫と、緑灰色の粘土ブロックが詰められているが、棺の小口を押さえ、棺を安定させるためのものと考えられる。また、粘土は棺の側辺部の裏込め土中にも小ブロック状に混じっていたほか、出土した棺内遺物の上面にも、棺の腐朽に伴い上から落ち込み薄く被覆したと考えられる粘土が確認されており、量的には少量であるが、棺の上面および側面の埋め土にも粘土を用いていたことがわかる。棺の掘り方の覆土横断面をみると、棺の裏込め土に混じった灰色粘土ブロックが弧状に立ち上がる部分が確認されている。このことから木棺の底部から側辺にかけての断面の形状が曲面をなすものと考えられ、割竹形木棺あるいは舟形の木棺が納められたことが想定できる。しかし小口部分の長軸方向の立ち上がりが明瞭でなく、構造を明らかにすることはできなかった。

(3) 遺物検出状況

墳丘斜面下からは土器片が、主体部からは鉄製品が出土している。




第61図　3号墳出土大刀




第62図　3号墳出土鉄鏃

主体部から出土した遺物は、棺内遺物と棺外遺物とに分けられる。棺内遺物には大刀、鉄鏃がある。大刀は棺の北側の長辺に沿って置かれていた。鋒を西に、刃部を外側に向けて、やや内側に傾斜した状態で出土している。鉄鏃（第60図）は大刀の鋒の延長線上、棺の北側長辺上に鏃身を西に向けた9本が束で納められていた。棺外遺物としては馬具がある。鉄製楕円鏡板付轡と、面繋に付随する責金具等である。馬具は主体部の東側小口付近、墓坑底面からは約48cm上の褐色の墓坑内埋土中に浮いた状態で検出されている。出土状況から棺を埋置した後に墓坑内に納められたものと考えられる。

なお、墳丘上および墳丘斜面下からは、須恵器、土師器の小片が出土しており、この3号墳に伴うものと考えられる。

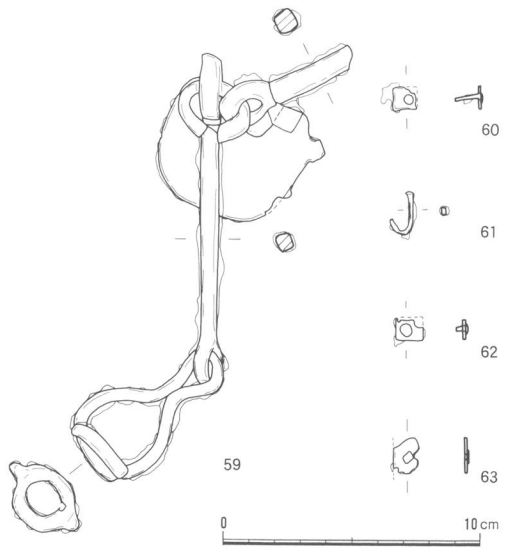
(4) 遺物

**大刀**（第61図、図版49—49）

鋒から茎尻までほぼ完全に残っている。全長96.2cm、刃部幅2.7～3.9cm、茎幅は関付近で2.3cm、刃部の背厚0.9cmを測るやや内反りを呈するものである。刃部は平造り、関の形態は片関の撫角関であり、関から茎尻にかけてやや幅を狭める中細の茎胴部をもつ。茎尻は隅抉尻となっている。茎には目釘孔が2箇所穿たれている。また、刀身部、茎尻付近には木質が遺存する。

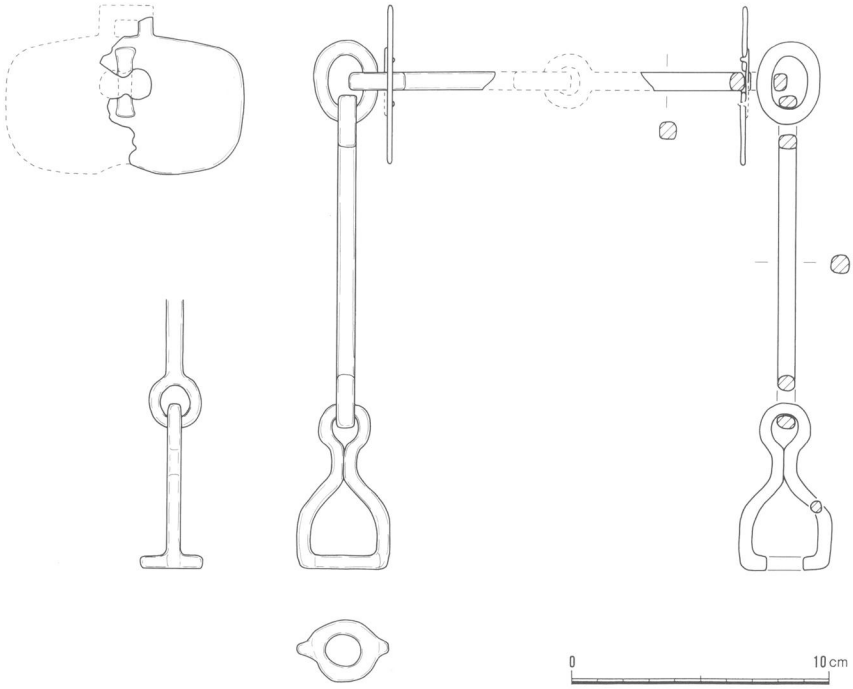
**鉄鏃**（第62図50～58、図版48—50～58）

9本が束の状態で出土している。形態的にはすべて同一のもので、尖根系の腸抉三角形式に分類できるものである。鏃身部の平面形は比較的深く腸抉が




第63図　3号墳出土馬具

切れ込む長三角形を呈する。鏃身部の造りは鎬が比較的明瞭な片平鎬造である。篦被部はいわゆる台形関であり、篦被部には矢柄の木質が遺存する。9点とも全長は14cm前後を測る。



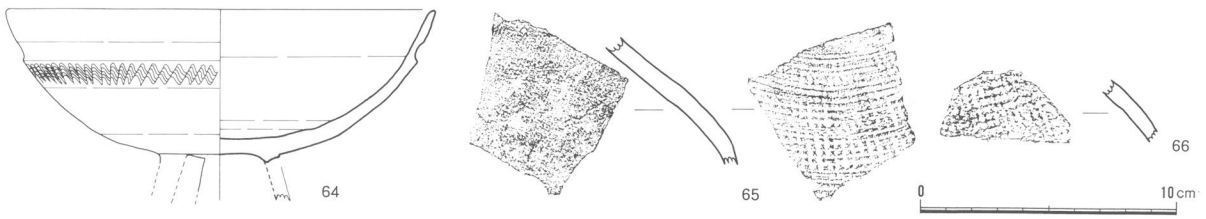

第64図　3号墳出土馬具(復原図)

**馬具**（第63図・第64図、図版48—59～63）

鉄製楕円鏡板付轡と、面繋のものと思われる責金具（61）・辻金具（60・62・63）が出土している。鏡板は下縁を小さく抉りとった楕円形を呈している。引手は外側連結で、別造りの引手壺が取り付く。類例は愛野向山B12号墳、雲座D1号墳（註7）、地蔵ヶ谷1号墳（註8）、高尾向山3号墳（註9）などで出土している。

**須恵器**（第65図、図版48—64）

高坏の破片が墳丘東側斜面下より、甕の破片が墳丘東西斜面下より出土している。高坏は長脚一段透かしの無蓋高坏である。坏部の直径は16.9cmを測り、外面には櫛状工具による波状文がめぐる。脚部の透かしは三方に開けられている。胎土は粗く、焼成は灰褐色を呈する。胎土から、在地の窯で焼かれたものと考えられる。形態的には陶邑編年のMT15型式併行（湖西編年第II期第1小期前）のものと考えられる。

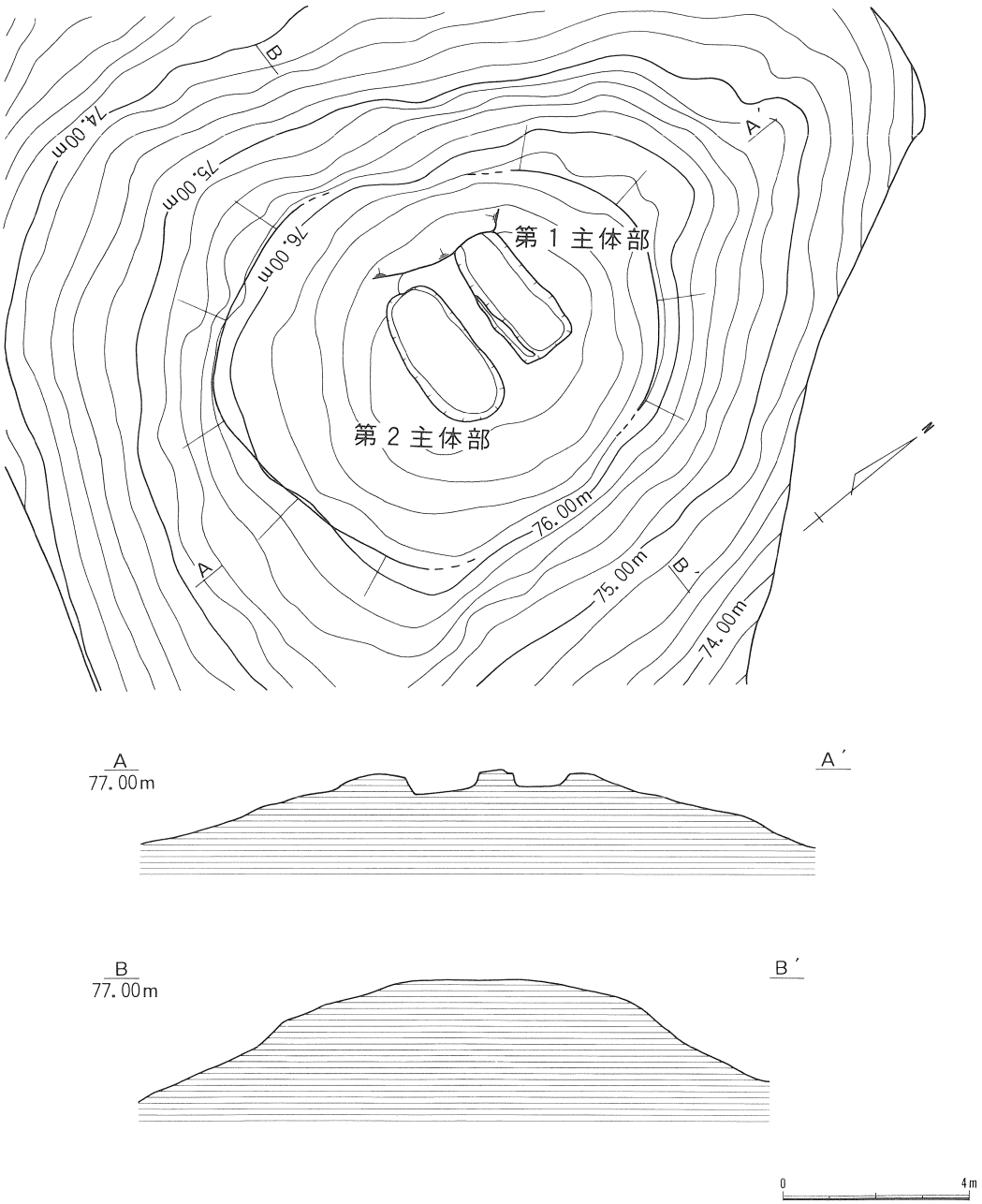



第65図　3号墳墳丘周辺出土土器

### 4．上石野4号墳

(1) 墳丘（第66図）

4号墳は3号墳と尾根続きの南側、標高76.8m，3号墳よりも約6m高い位置に造られている。墳丘は瘤状の高まりを利用し、基盤層を削りだして整形されている。周溝はみられないが、削りだしによるものと思われる傾斜の変換点の下端を墳裾と捉えると、墳形はほぼ円形の円墳、規模は直径11.5mとなる。



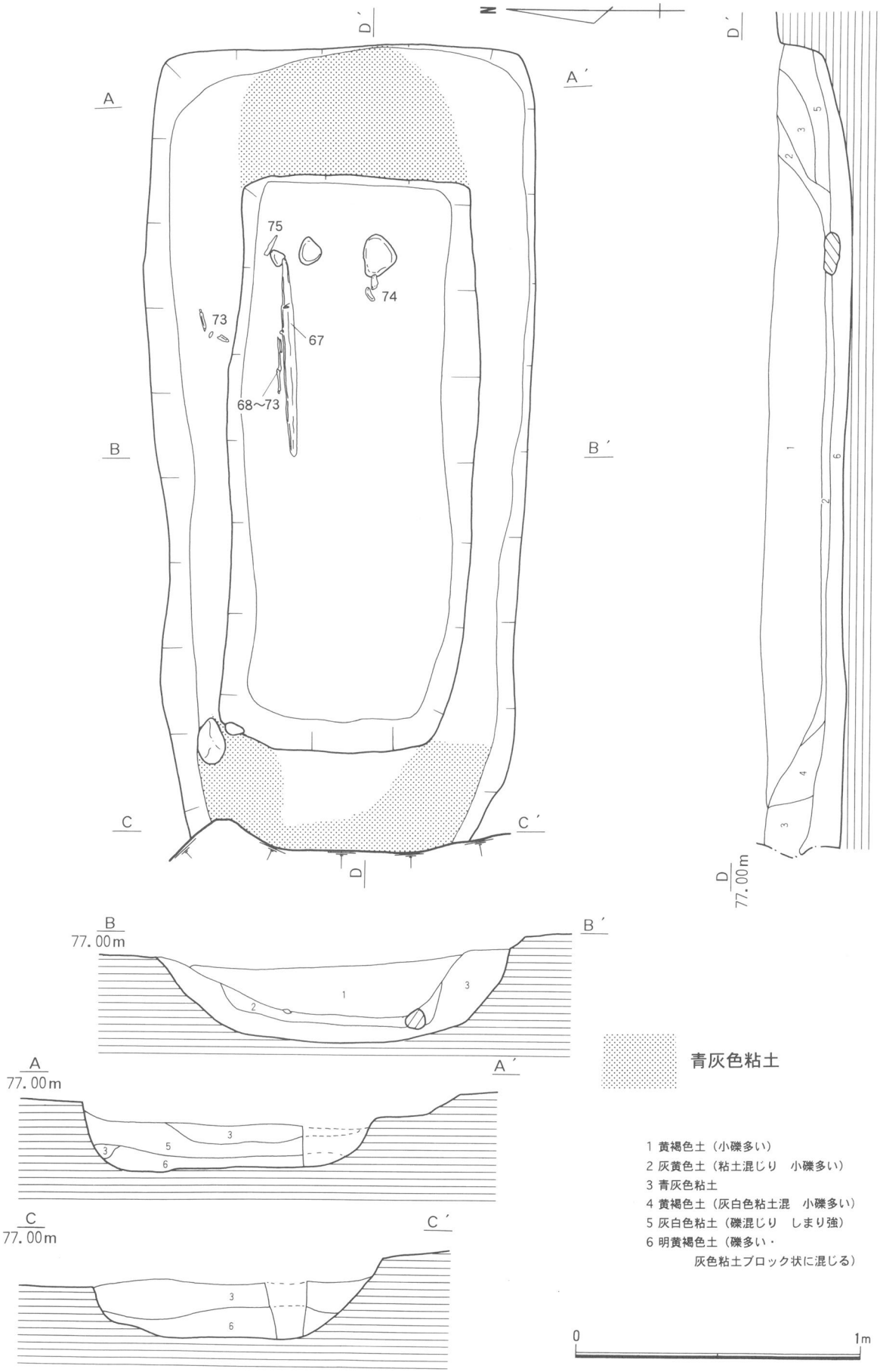

第66図　上石野４号墳墳丘図

(2) 主体部

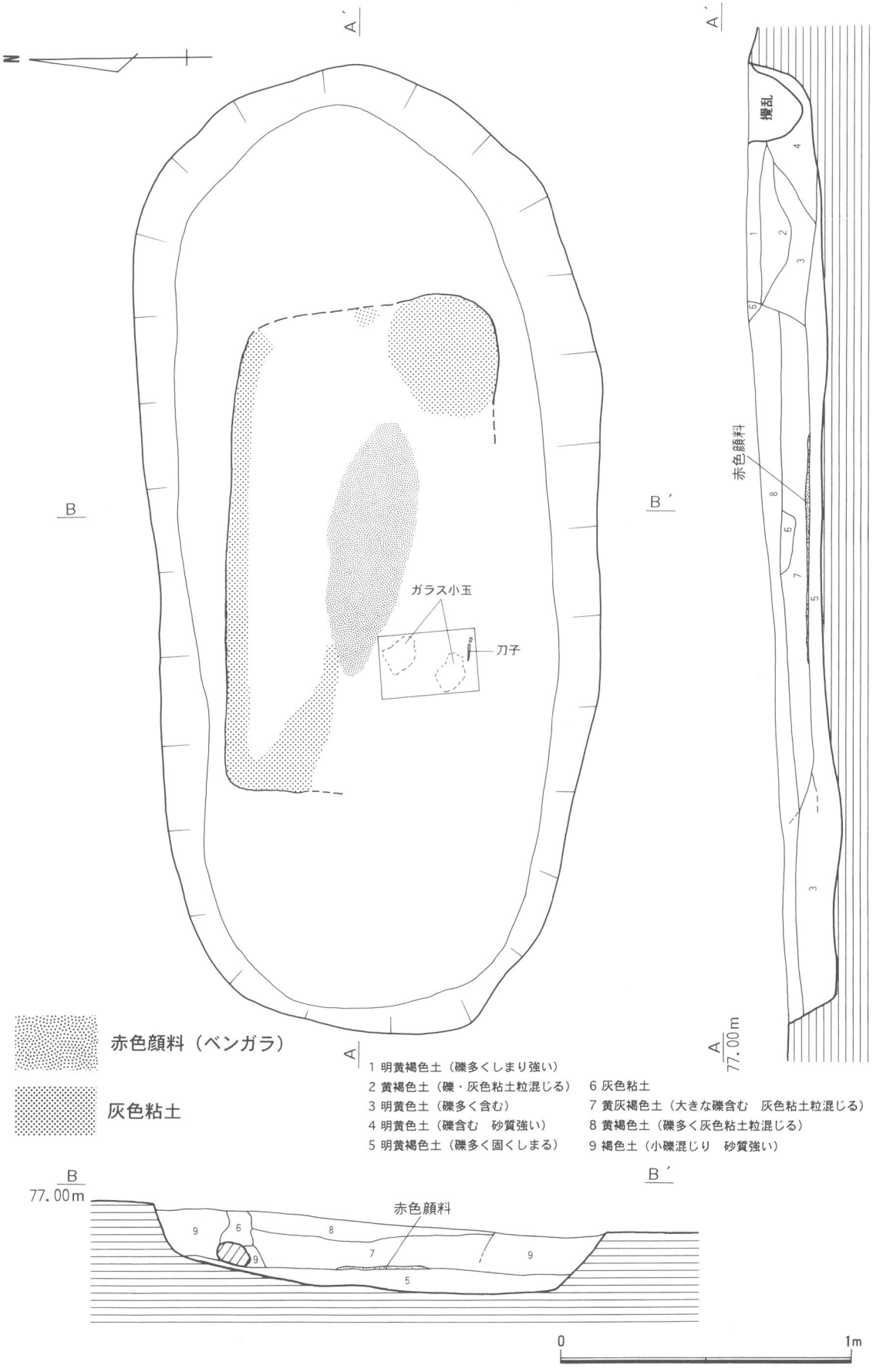
４号墳の主体部は、墳頂部で２基検出されている。いずれもほぼ東西方向に主軸をとり、南北に並列している。北側のものが第１主体部、南側のものが第２主体部である。

**第１主体部**（第67図）

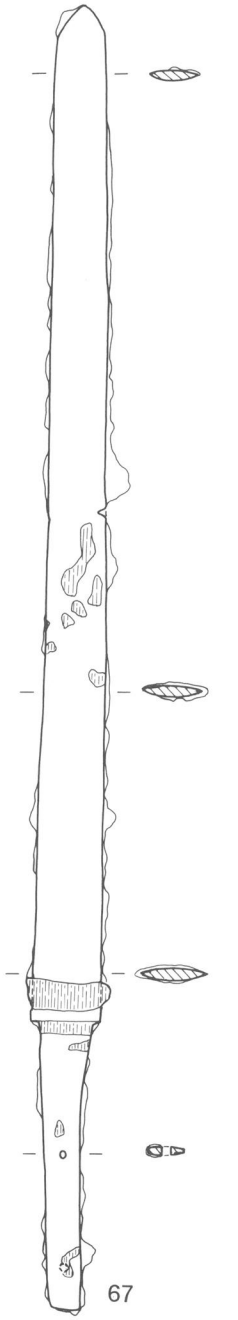
主軸方位はＮ―　90°　―Ｅとほぼ東西を向いており、墓坑は基盤層を掘り込んでいる。平面形は長方形で、検出面での規模は長さ2.9m，幅1.0～1.37mを測るものである。検出面から墓坑底面までの深さは0.33mを測る。東西の小口部分には、明瞭な灰色粘土のブロックがみられる。墓坑底面に置き土（小礫・粘土混じりの明黄褐色土）をしたのち、棺を納め、墓坑埋土とともに、棺小口に粘土を充塡したものと考えられる。棺の痕跡および棺の形状を推定しうるものは確認されていないが、墓坑の




第67図　4号墳第1主体部実測図




第68図　4号墳第2主体部実測図




第69図
4号墳第1主体部
出土鉄剣

底面は比較的平坦で、東側小口の主軸方向および側辺側の裏込め土の立ち上がりは比較的直立的に立ち上がっている。

**第2主体部**（第68図）

主軸方位はN—93°—Eをとる。墓坑の平面形は小口側の短辺が丸みをもつ長楕円形を呈するものである。規模は検出面で長さ3.35m、幅1.6mを測る。検出面から墓坑底面までの深さは0.32mである。墓坑内の北側長辺に沿って、長さ1.6mにわたって灰色粘土が帯状に検出されている。また、東側小口付近でも灰色粘土が塊状に検出されている。これらの灰色粘土は木棺を納めたのち充填した粘土であると考えられるが、東側のものは棺小口を押さえるためのもの、北側長辺のものは棺の側辺に裏込めとして入れられたものと考えられる。また、墓坑中央部分にも粘土がみられたが、これは棺の腐朽に伴い、棺の南側板が裏込めの粘土とともに内側に倒れ込んだものであろう。床面には棺の安定をはかるため、直径10cm程度の礫と置き土（明黄褐色土）がなされており、この上面には赤色顔料（ベンガラ）が90×30cmの範囲で検出されている。

(3) 遺物出土状況

**第1主体部**

墓坑上面では、土師器の小片が散乱した状態で検出されている。墓坑内からは、鉄器が出土しているが、墓坑北側辺から出土したものは棺外遺物、墓坑床面で出土したものは棺内遺物であると考えられる。棺外遺物は刀子1点、鉄鏃1点である。棺内遺物は鉄剣1点、鉄鏃5点、刀子1点である。鉄剣は棺の北側長辺に沿って置かれており、剣先を西に向けている。鉄鏃はこの剣の上面に置かれており、鏃身部の先端を西側に向けている。刀子は床面中央からやや南東寄りで出土している。

**第2主体部**

墓坑上面には、第1主体部同様、土師器片が数点検出されている。墓坑の中心から南西に寄った箇所で、床面上にガラス小玉67点、刀子1点が出土している（第71図）。ガラス小玉は集中する状況が二箇所みられ、その数は第1群が32点、第2群が35点である。

(4) 遺物

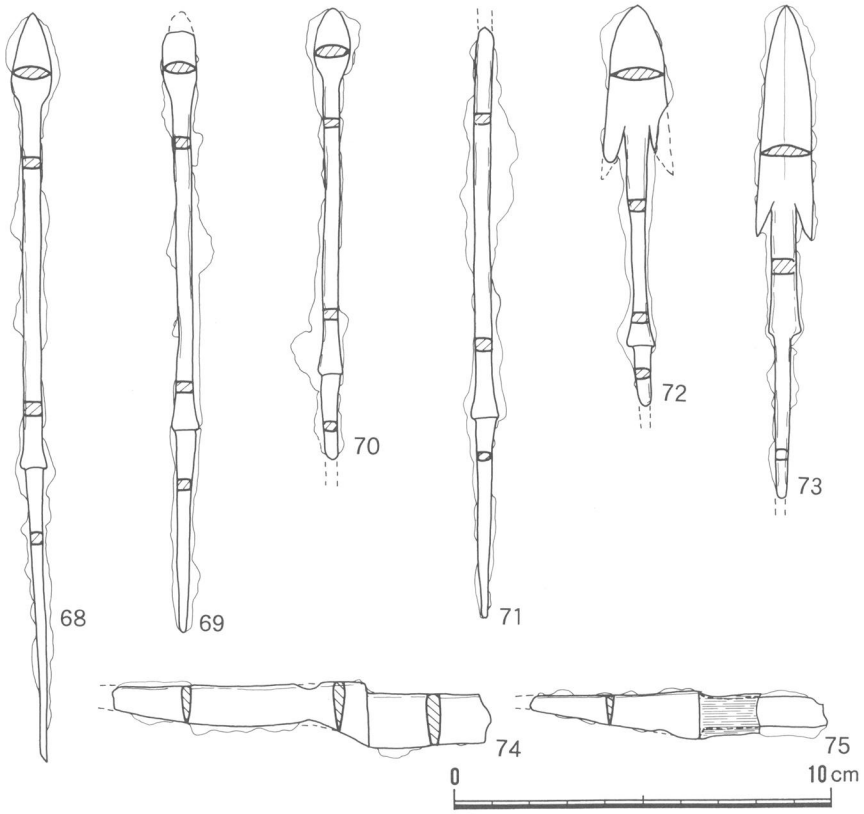
**第1主体部**

**鉄剣**（第69図、図版49—67）

全長69.6cm、最大剣身幅（関部幅）3.8cmで、剣身部の厚さ7 を測る。剣身部には鎬はみられず、断面凸レンズ形を呈するものである。関は極めて浅く切れ込み、茎胴部にほぼ左右均等に取り付いている。また、茎胴部は関部から茎尻に向かい少しづつその幅を減じる形態をなしている。茎胴部の目釘孔は2つあけられており、剣身部および茎胴部の表面には木質が一部残存している。

**鉄鏃**（第70図、図版49—68～73）

尖根系のものと、細根系のものとに分類できる。尖根系のものは2点出土している。72は腸抉長三

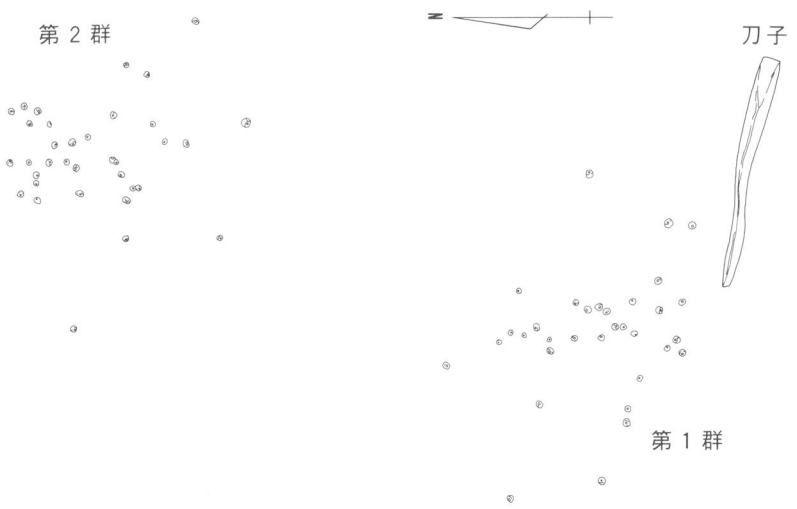



第70図　4号墳第1主体部出土鉄鏃・刀子

角形式である。鏃身部の腸抉は比較的深く、若干外反気味に開きながら逆刺端に至る。鏃身部の大きさに対して、細く比較的短い頸部が付く。篦被関部は台形関である。鏃身部の断面形はやや偏平な両丸造ある。73も腸抉長三角形式に分類できる鉄鏃である。鏃身部の長さは幅に比して細長く、腸抉は比較的深く切れ込む。中央片側に鎬をもつ片丸鎬造である。頸部は72に比べて短く、篦被関部は斜関となっている。68～71はいわゆる細根系の鉄鏃であるが、4号墳出土のものは茎部が長い特徴がある。鏃身部は関のない鏃箭式であり、篦被関部は台形関である。大きさはほぼ完形の68で、長さ20cmを測る。

**刀子**（第70図、図版49—74・75）

いずれも小型の両関の鉄製刀子で、茎部に木質が遺存し、また刃部の研ぎ減りが顕著である。74は残存長10.1cm、残存刃部長6.9cm、75は残存長8.0cm、残存刃部長4.5cmを測る。



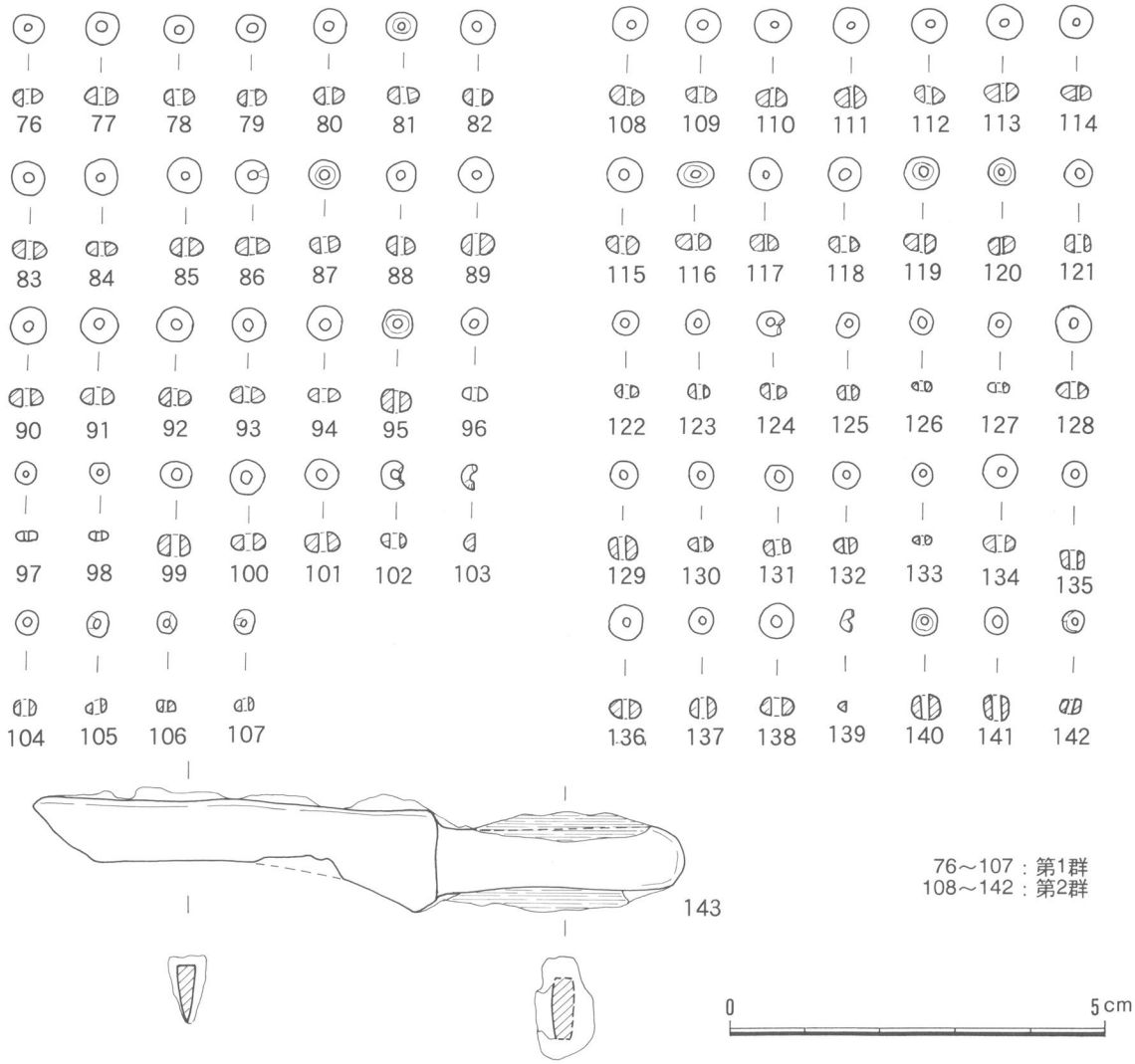

第71図　4号墳第2主体部ガラス小玉・刀子出土状況図

**第2主体部**

ガラス小玉（第72図76～142、図版49—76～142）

・刀子（第72図143、図版49—143）

76～142のガラス小玉は、76～98と108～138が紺色、99～103と139～141が青色、104・105・142が緑色、107が青白色を呈する。蛍光X線による成分分析によると、いずれもアルカリ石灰ガラスであると考えられ、発色元素




第72図　4号墳第2主体部出土ガラス小玉・刀子

の違いにより、色調の差が生じている。紺色のものはコバルト、青色のものは銅、緑色のものは銅と鉛を発色元素としている。なお、青白色のものは発色元素は銅であり、ガラス中に細かい気泡が含まれているためにやや白濁して見えるようである。143は両関の刀子であり、残存長8.8cm、残存刃部長5.5cmを測る。

## 第3節　まとめ

上石野古墳群は、今回の調査で新たに発見された古墳群であり、4基の木棺直葬の埋葬施設をもった古墳の調査を実施した。調査の成果について整理し、簡単なまとめとしたい。

当古墳群は、南から北へ延びる舌状の丘陵頂部に築造された古墳群で、枝分かれした小支陵に2基ずつ立地している。第Ⅴ章で報告した若作古墳群とは、大きな谷を挟んで南西側に隣り合う位置にある。古墳は非常に眺望の良い位置に築かれており、北側に広がる逆川・原野谷川の沖積平野を広く見渡す

ことができる。４基の古墳は、いずれも丘陵頂部のもともと高まった自然地形を利用して築かれている。基本的には地山を削り出して墳丘を造っているが、１号墳では尾根の主軸に直交する周溝状の掘り込みをすることで、墳丘を区画している。墳丘は、最大の１号墳で直径12m程度と、いずれも10m前後の小規模なもので、平面形は自然地形に制約された不整円形となっている。

４基とも木棺直葬の埋葬施設を持った古墳であり、１号墳・３号墳は各１基、２号墳・４号墳は各２基の主体部が検出されている。墓坑の掘り方の形態は、いずれも四隅がやや丸みを持つ長方形であるが、１号墳は、若干長軸方向に細長いプランとなっている。木棺の痕跡が確認された３号墳、底面が丸みを持つ１号墳は、割竹形木棺あるいは舟形木棺を納めていたものと推定される。各主体部の主軸方位は、ほぼ東西方向、丘陵の主軸に対し直交する方向となっている。また、１号墳から４号墳のすべての主体部墓坑内の埋土中で、粘土が検出されている。粘土は小口部分で、塊状に検出されており、木棺を固定するために小口部分に充塡されたものと考えられる。また、１号墳では小口部分の粘土とともに、拳大の礫が部分的に敷き並べられたように検出されており、これも木棺の安定を図るためのものと考えられる。

上石野古墳群では副葬品として鉄製武器・農工具・馬具・装身具が出土している。武器類はいずれの古墳にも副葬されており、種類としては刀・剣・鉄鏃がある。刀は１号墳から２振、３号墳から１振が出土しており、いずれも刀装具を伴わないやや内反りの直刀である。剣は完形のものが４号墳から、残片が２号墳から出土している。１号墳の刀１振、３号墳の刀、４号墳の剣は表面に木質が遺存しており、木装であったことがわかる。鉄鏃は１号墳・３号墳・４号墳から出土している。１号墳の鉄鏃は、平根系のものと細根系のものがある。このうち細根系のものは32本すべてが腸抉三角形式で、全長や鏃身部・篦被部・茎部の長さの割合もほぼ同じであり、ある規格のもとに造られた製品であると思われる。一方平根系の５本は大きさ・形態ともに個体毎にばらつきがある。出土状況も刀と揃った状態で出土している細根鏃に対して、平根鏃は鎌とともに小口付近から出土していることから、本来の武器としての用途をもつ細根鏃と、それとは異なる副葬の意義を平根鏃にみることができる。平根鏃の類例としては、掛川市各和金塚古墳（註10）や磐田市堂山古墳、袋井市若作Ｃ３号墳などで出土しており、年代的にはやや古相の中期的な鉄鏃といえる。３号墳からも規格の揃った尖根系の鉄鏃が９本束で出土した。形態的には鏃身部が大きく、片鎬造とやや古い要素を持っているもので、県内ではあまり類例のみられないものである。４号墳の鉄鏃は、３号墳出土の尖根系に近い形態のもの１点が棺外から、その他細根系４、尖根系１がセットで出土している。農工具は、鎌と刀子が出土している。鎌は１号墳の平根系の鉄鏃と一括で出土したもので、曲刃鎌である。刀子は２号墳・４号墳で出土している。馬具は３号墳の主体部の墓坑内、棺外から出土している。小さな抉りの入った鉄製楕円鏡板付の轡で、鏡板は鋲列などの装飾のみられないものである。轡の連結の構造は、引手と銜との連結に、間に遊環を介するタイプのもので、県内の類例として愛野向山Ｂ12号墳や高尾向山３号墳出土のものがある。装身具は、４号墳第２主体部でガラス小玉が出土している。最後に、土器についてであるが、基本的に主体部内の土器副葬は見られない。しかし、１号墳・４号墳で墓坑埋土内に、破砕された状態の土師器片が認められ、葬送にあたり、棺上ないしは埋土後の墓坑上面に破砕され置かれたものと考えられる。また、３号墳の墳裾からも、須恵器の砕片が認められた。

各古墳の築造された時期は、上記の各遺物の検討から行うこととなるが、普遍的にどの古墳からも出土している遺物もなく、また年代決定に最も有効であると考えられる須恵器もわずか１点の出土であり、にわかに決定し難い。しかし出土遺物の組成や３号墳墳裾出土の須恵器片、鉄鏃の形態等から、当古墳群は５世紀末から６世紀前半にかけて築造された古墳群であると考えられる。最も古い段階のものと考えられるものは１号墳で、副葬品に農具を含む点や、細根鏃とともに平根鏃を副葬している

点など、副葬品の組成がやや古相を示しており、5世紀末頃の築造であると考えられる。また鉄製楕円鏡板付轡や須恵器片の出土をみた3号墳は、6世紀第1四半期頃の年代を与えられよう。3号墳のものと同型式の鉄鏃を含む4号墳は6世紀前半、また1号墳に隣接した位置にある2号墳は、1号墳と時期的に大きく差があるものではなく、6世紀前半の築造としておきたい。

以上のように、当古墳群は5世紀末に造墓が開始され6世紀前半まで造営された古墳群であり、木棺直葬墳の調査事例の多い小笠山北西麓で、愛野向山古墳群や若作古墳群などとともに、いわゆる初期群集墳のあり方を考える上での新たな資料を提供することができた。当古墳群をはじめ周辺の初期群集墳は、古墳群ごとにその群構成や保有する副葬品の質や量、同一群集墳内の階層の有無などが異なっており興味深いものとなっている。これらの古墳群の特徴が被葬者集団の性格を反映していると考えれば、当時の社会構造のもとで、被葬者集団がそれぞれどのような階層に対応するものであるのか、また、初期群集墳がどのような系譜上から出現し、首長墓の系譜とどう関わり、石室墳や横穴墓を主体とするいわゆる後期群集墳にどのように繋がっていくのかなど、今後検討していかなければならない課題は多く残されている。

最後に、小笠山総合運動公園内遺跡群の現地調査・報告書作成にあたり、浅学の担当者に対して、多くの御教示・御助言を賜った。末尾ながらここで御芳名を挙げさせていただき、深く御礼申し上げたい。また、小笠山総合運動公園建設事務所の方々には、文化財調査に対する御理解と御協力をいただき、袋井市教育委員会、掛川市教育委員会の方々には、多くの有益な御助言・御協力をいただいた。併せて感謝申し上げる。

池淵俊一　川江秀孝　後藤建一　佐藤由紀男　柴田 稔　白澤 崇　鈴木敏則　戸塚和美
永井義博　松井一明　松本一男　（五十音順・敬称略）

## 註

1．吉岡伸夫・松井一明1987「静岡県愛野向山遺跡」『考古学協会年報』35　日本考古学協会
吉岡伸夫1987『愛野向山A－2・3・4号墳－昭和61年度緊急発掘調査概報』
2．袋井市教育委員会1990『若作遺跡・若作古墳群』
3．袋井市教育委員会1988『上石野1号墓』
4．刀剣類の各部名称、分類等については以下の文献によった。また細部の観察についてはX線撮影の成果によるものである。
a．末永雅雄1941『日本上代の武器』
b．臼杵　勲1984「日本古代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号
c．池淵俊一1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』第1号
5．鉄鏃の分類、部位の名称は以下の文献による。
a．末永雅雄1941『増補　日本上代の武器　本文編』
b．杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8
6．平野吾郎1994「稲刈り鎌の出現」『地域と考古学』
7．袋井市教育委員会1972『袋井市雲座D単位群発掘調査概報』
8．静岡県教育委員会1963『袋井市地蔵ヶ谷古墳群及び横穴群発掘調査略報』
9．袋井市教育委員会1996『高尾向山古墳群II』
10．平野吾郎1980「原野谷川流域の古墳群について」『古代探叢』

## 引用・参考文献

静岡県1992『静岡県史　資料編３考古三』

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

川江秀孝1994「潰された飾大刀について―飾大刀を副葬する静岡県の後期古墳―」『地域と考古学』

後藤健一1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡　本文編』静岡県教育委員会

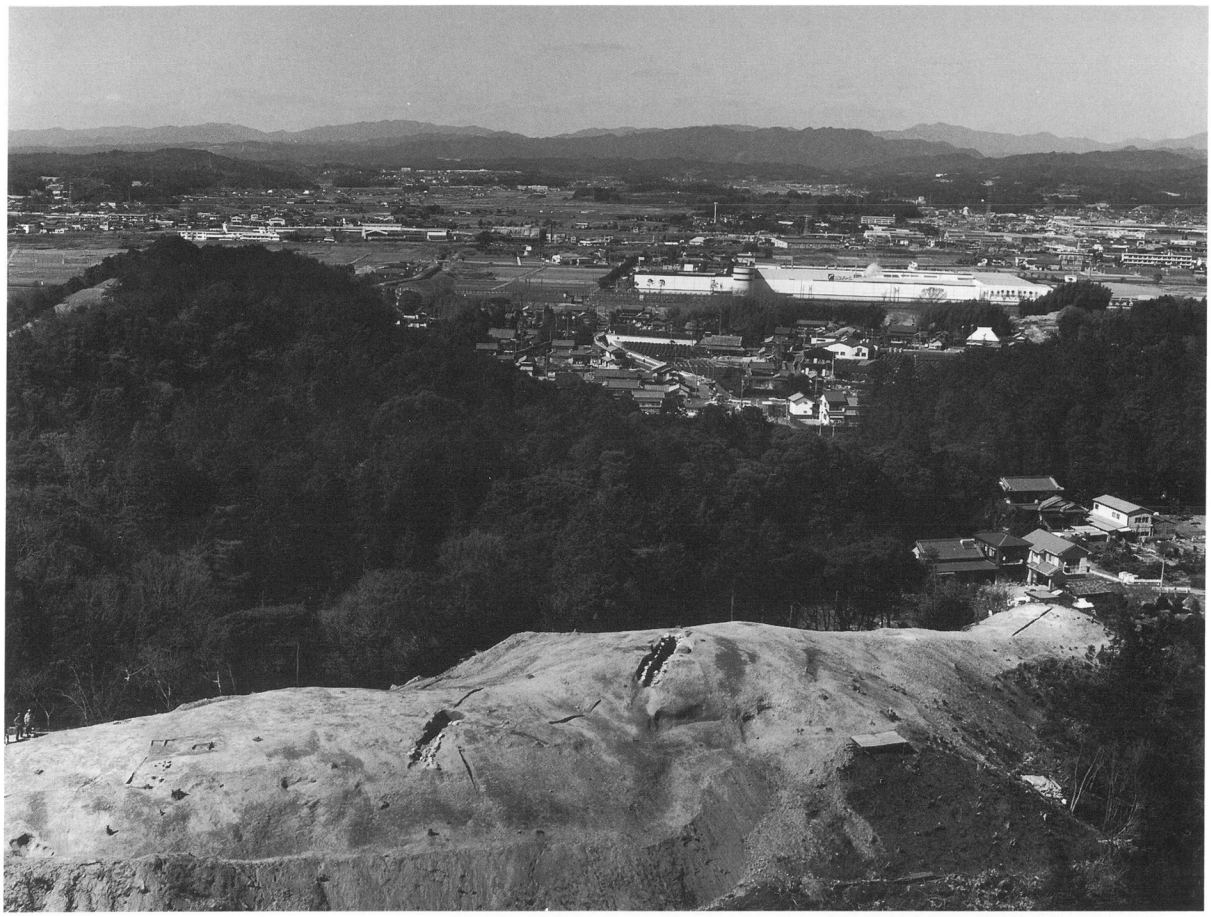
後藤健一1995『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』雄山閣

奈良県立橿原考古学研究所1993『後出古墳群―18号墳―』

磐田市教育委員会1995『遠江堂山古墳』

# 図　　版

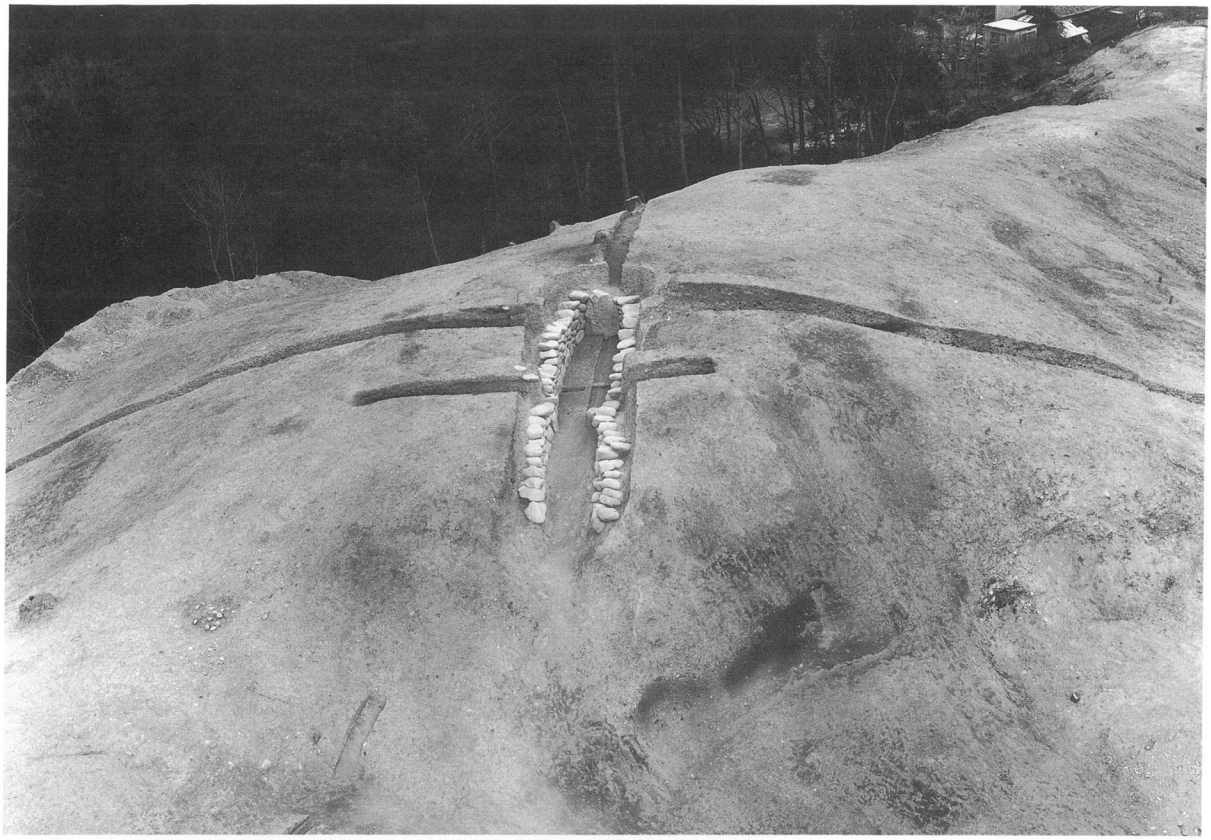
# 図版１　居村古墳群



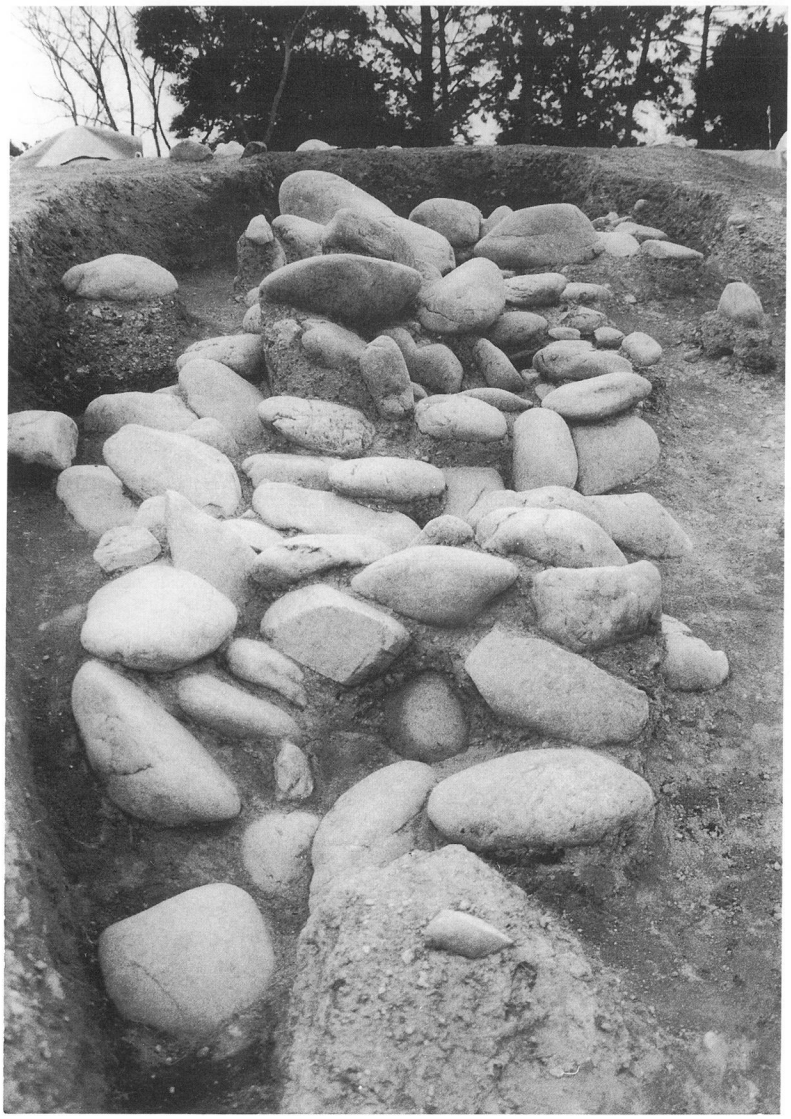
１．　居村古墳群調査区全景（南より）

２．　１号墳墳丘調査前（南西より）

図版２　居村古墳群



1.　Ⅰ号墳墳丘全景（南より）

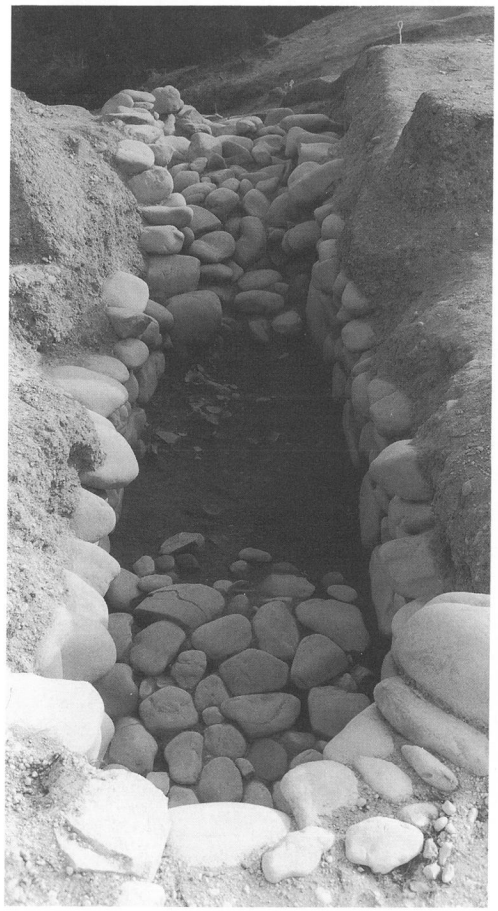


2.　Ⅰ号墳天井石検出状況（南より）

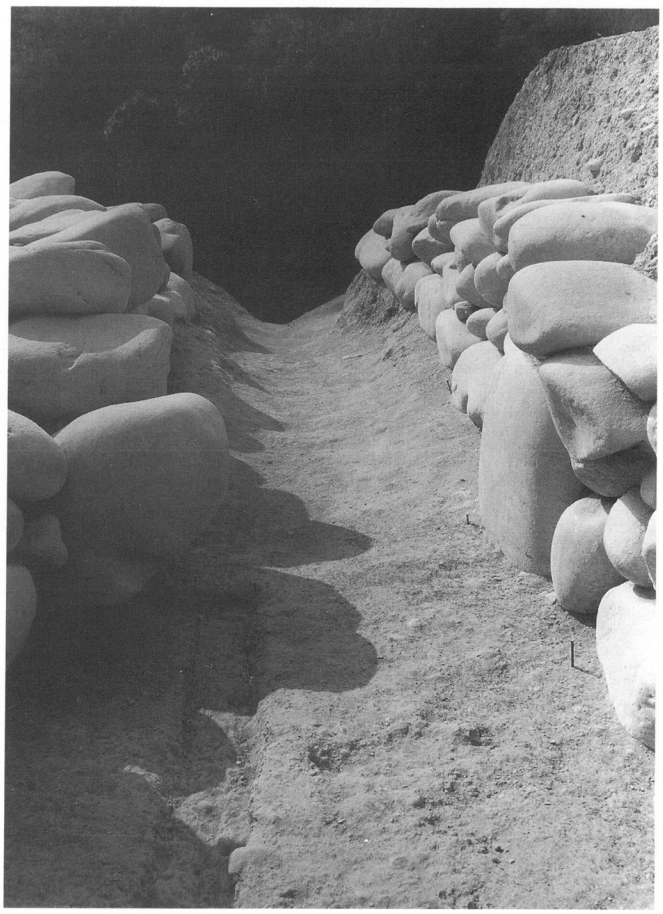
１号墳石室全景（南より）

図版 4　居村古墳群

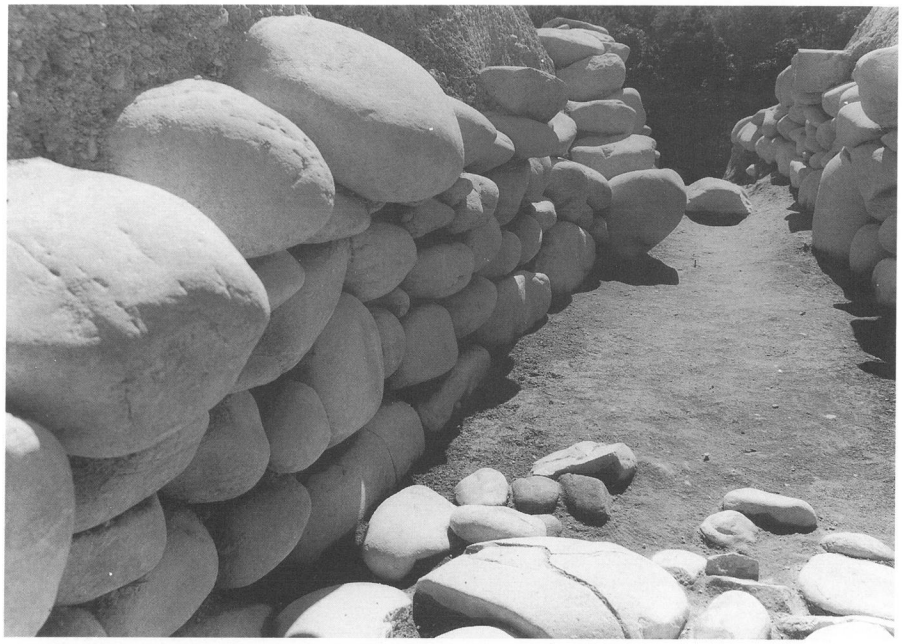
1.　1 号墳玄室内（奥壁付近・南より）



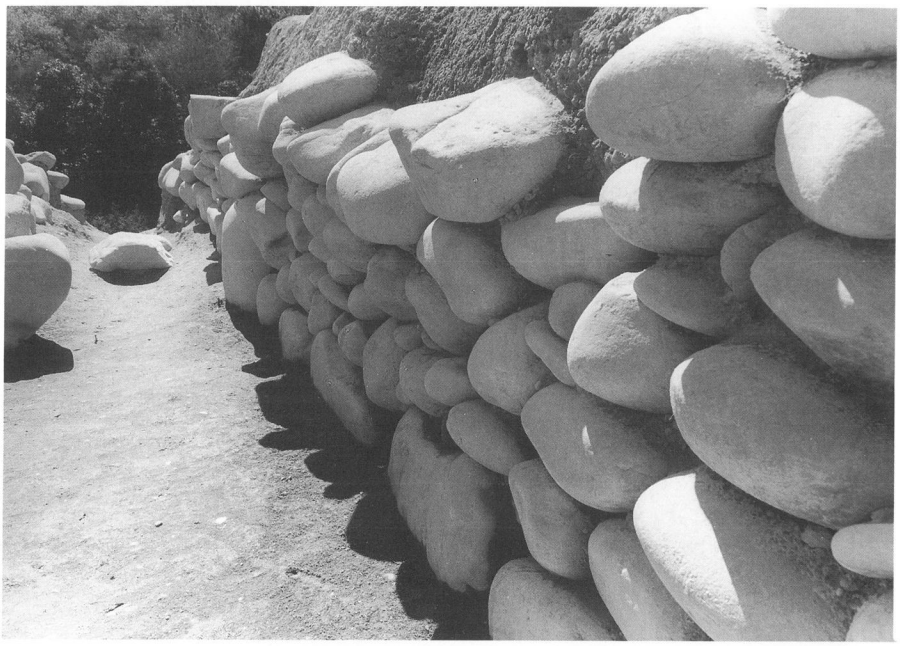
2.　1 号墳石室（奥壁付近より）



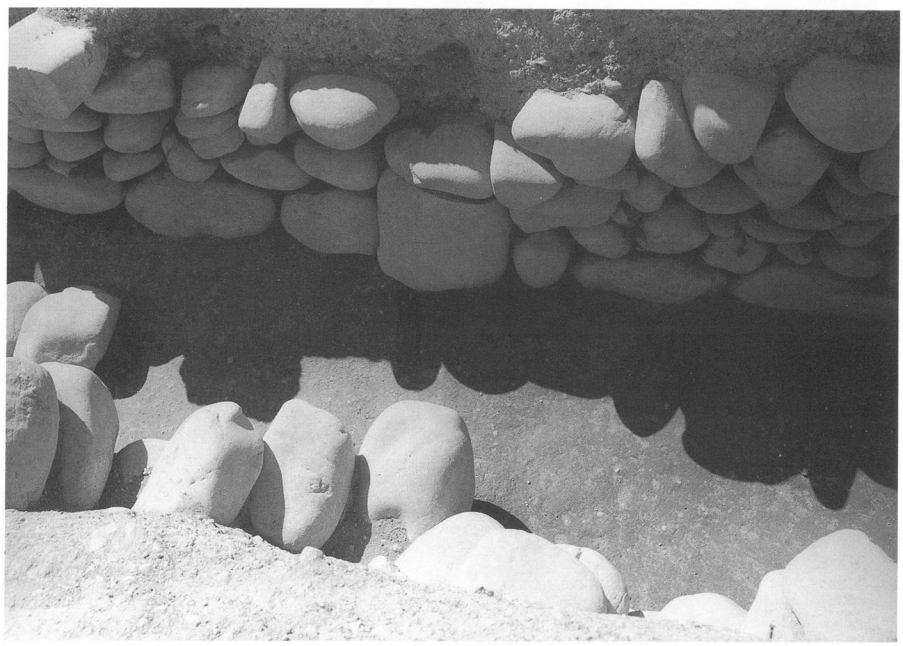
3.　1 号墳羨道部(玄室より)



１．　玄室内左壁
石積みの状況
（奥壁より）

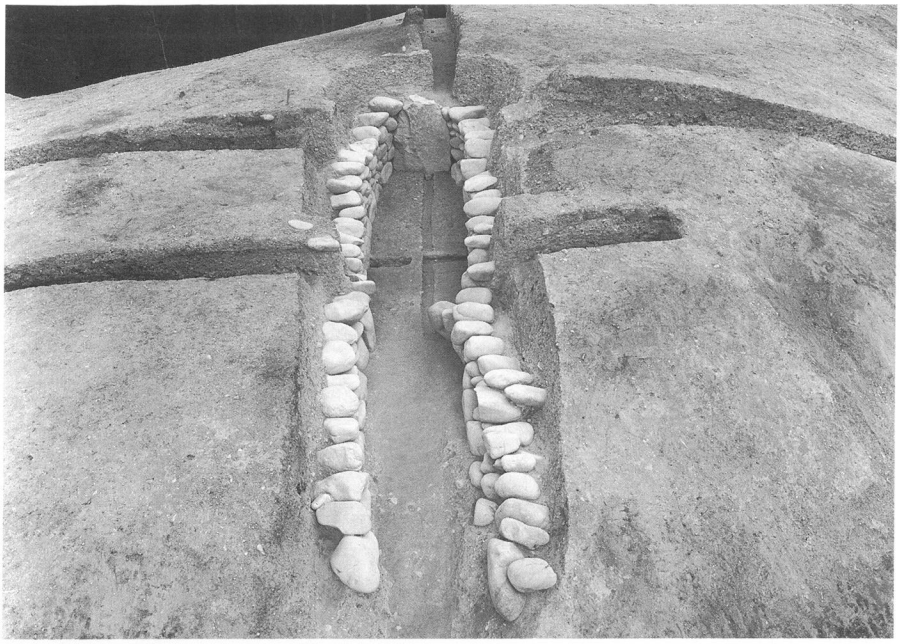


２．　玄室内右壁
石積みの状況
（奥壁より）

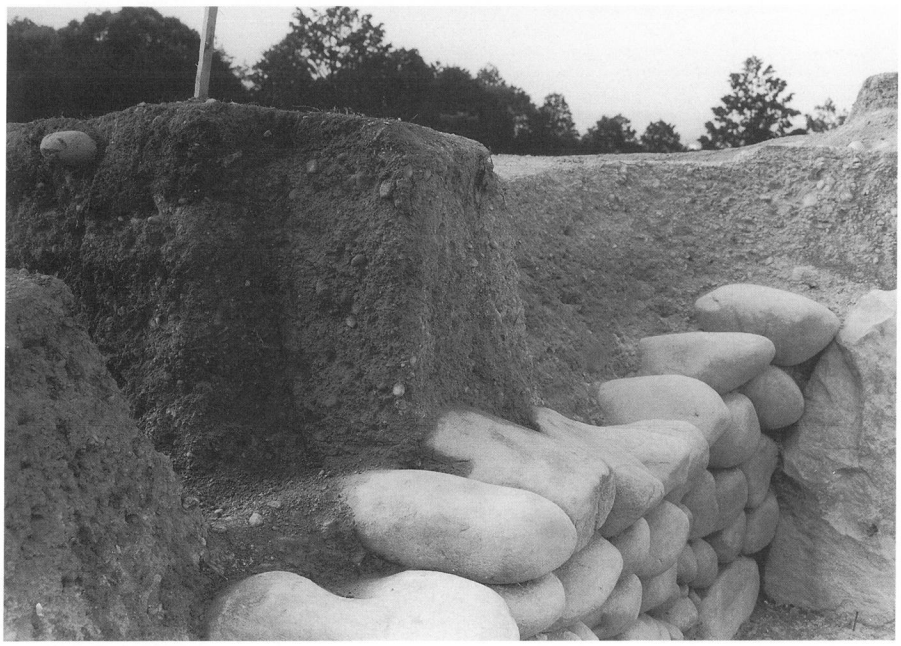


３．　立柱石および
石室右壁石積み
（東より）

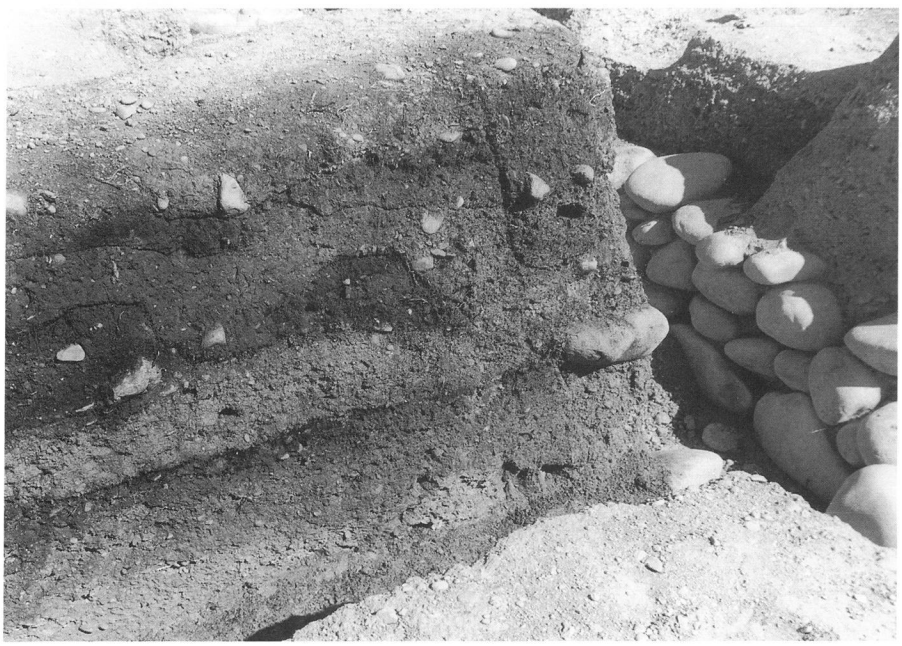
# 図版6　居村古墳群



1.　1号墳石室全景
および墳丘断面
（南より）



2.　1号墳
石室裏込めの状況
（玄室右壁・南より）



3.　1号墳
墳丘盛土の状況
（右壁立柱石付近
・南西より）

1.　1号墳玄室
遺物出土状況
（玄室中央より左壁
立柱石付近）

2.　1号墳玄室
須恵器坏出土状況
（南より）

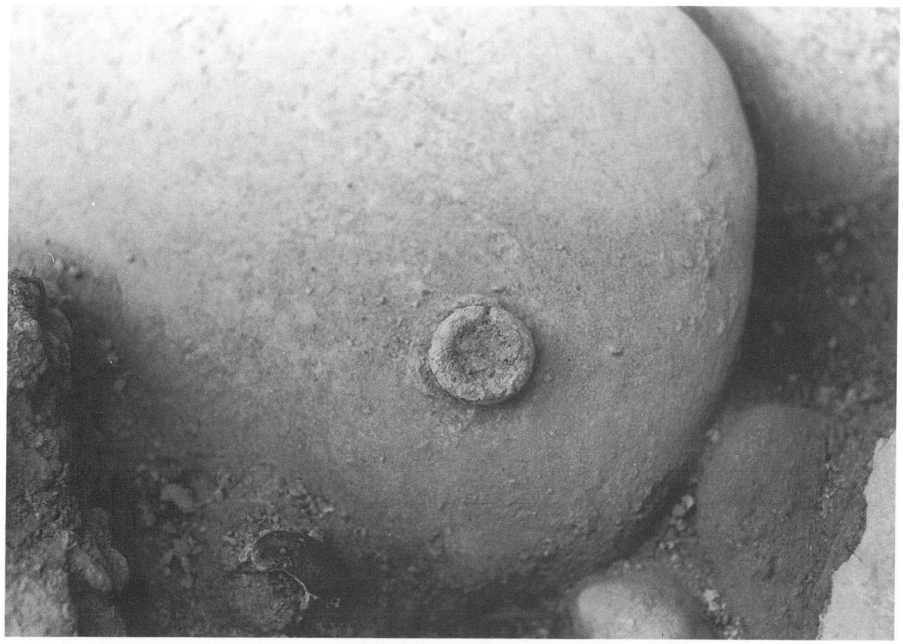
3.　1号墳玄室
平瓶・勾玉出土状況
（南東より）

# 図版８　居村古墳群

1.　Ⅰ号墳玄室
刀子出土状況
（南より）

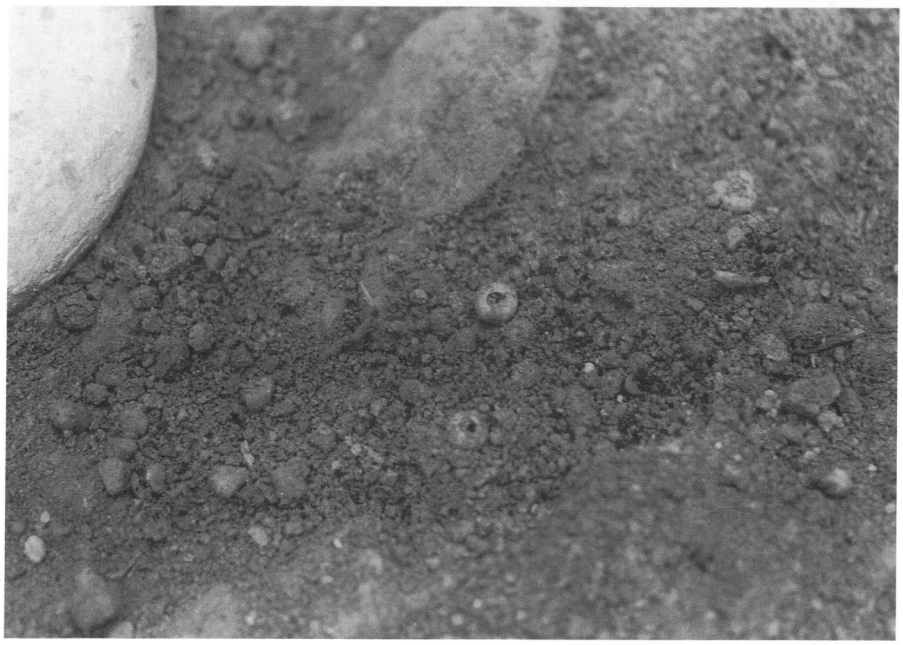
2.　Ⅰ号墳玄室
大刀出土状況
（南西より）

3.　Ⅰ号墳玄室
装身具類出土状況
（南東より）



1.　1 号墳玄室
耳環出土状況

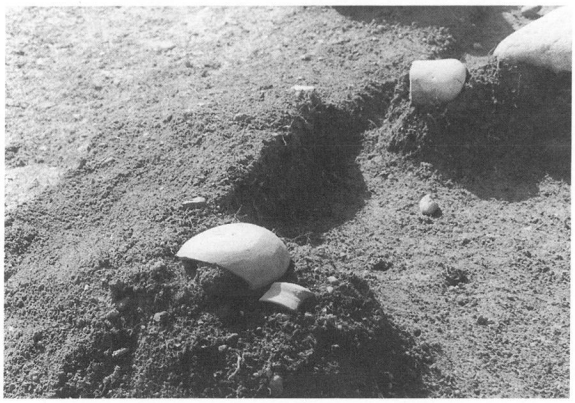
2.　1 号墳玄室
棗玉出土状況



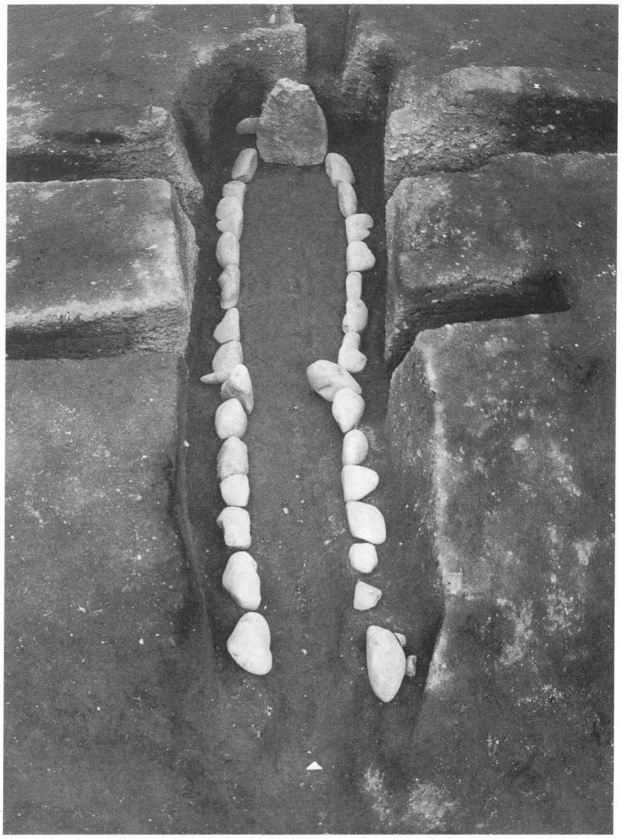
3.　1 号墳玄室
ガラス小玉出土状況

# 図版10　居村古墳群

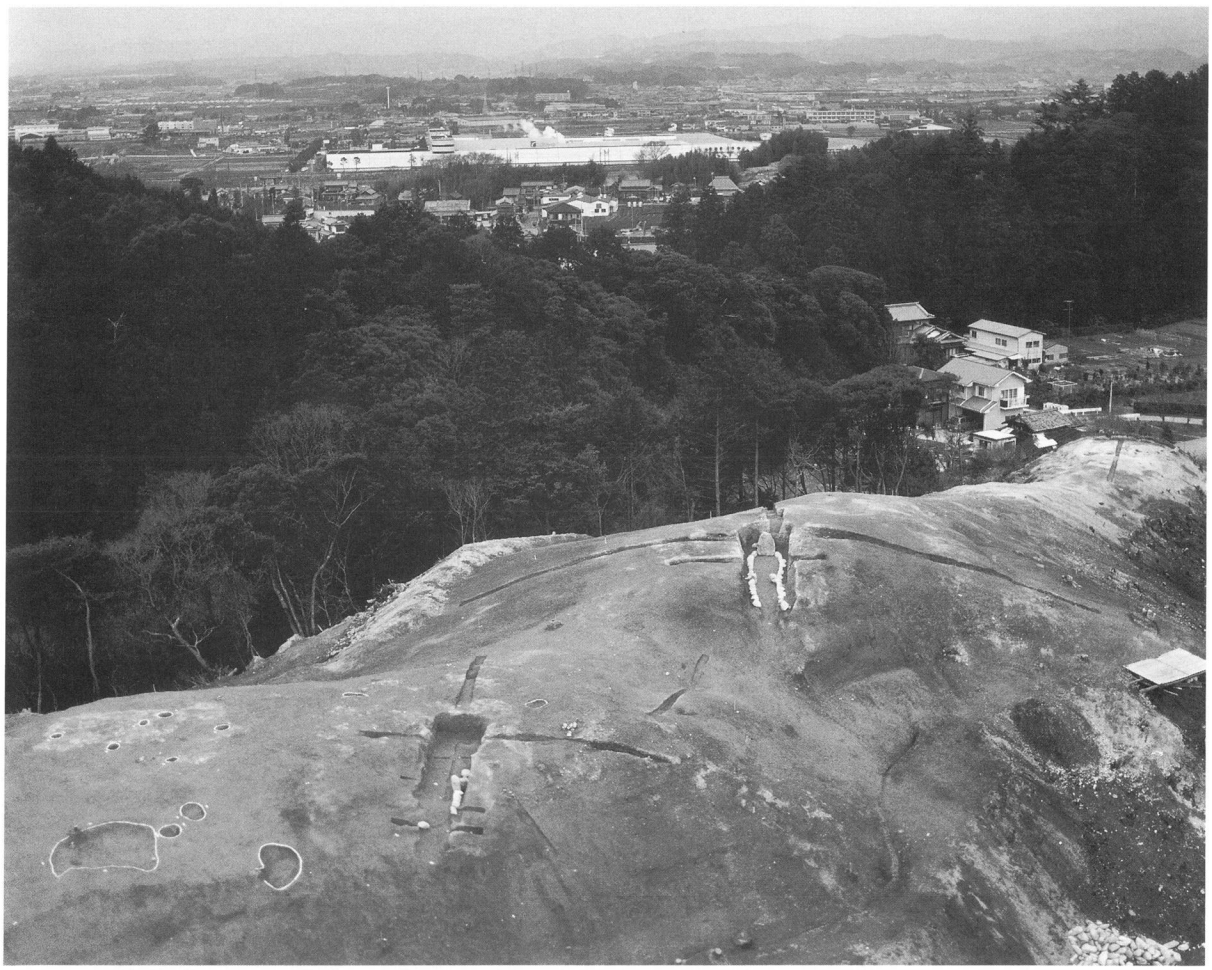
1.　1号墳玄室切子玉出土状況(南東より)



2.　1号墳墳丘南斜面須恵器出土状況
(南東より)



3.　1号墳石室墓坑および基底石(南より)



4.　1・2号墳墓坑および基底石検出状況（南より）

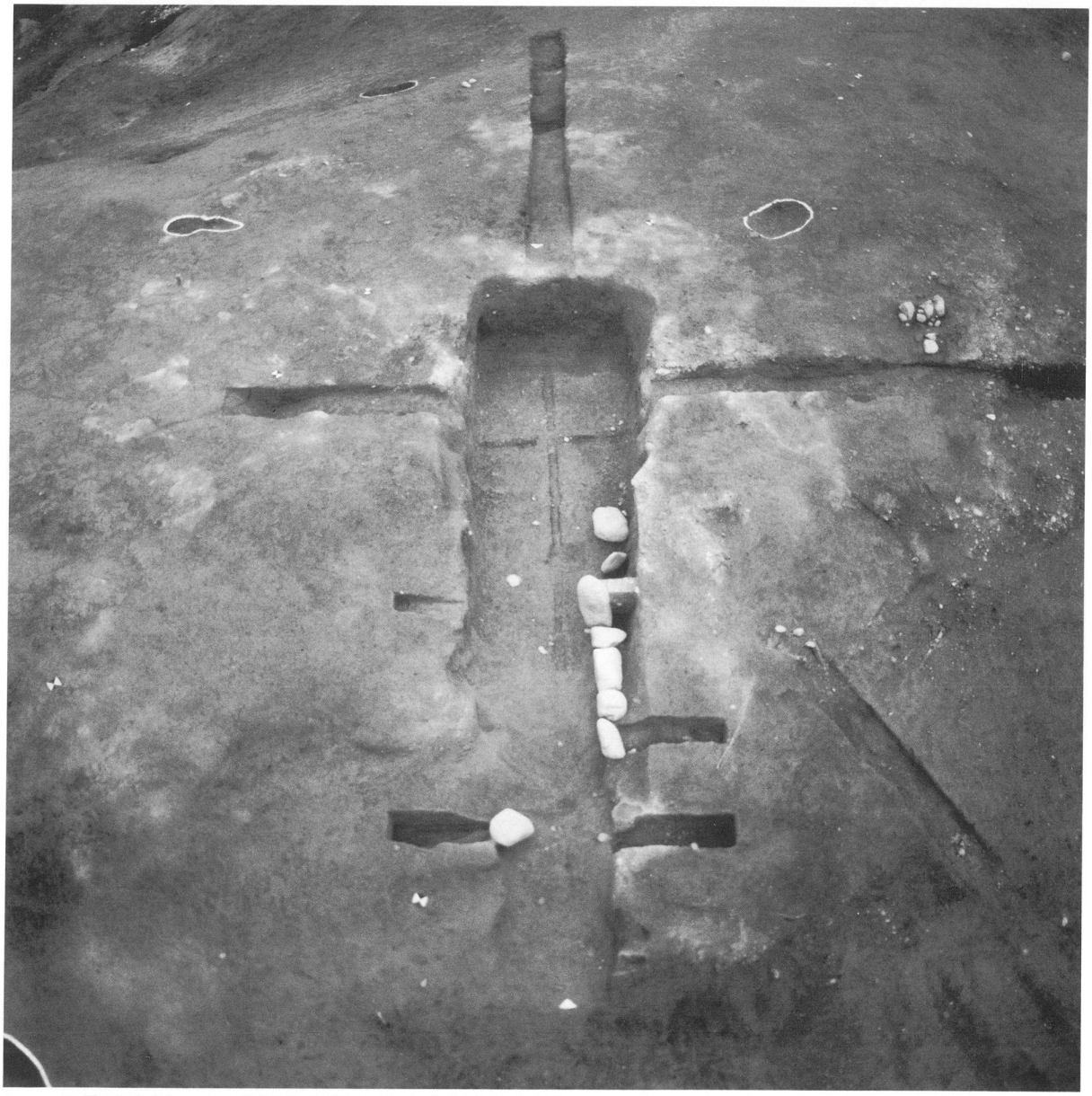
1.　2号墳石室全景(西より)

2.　2号墳左壁石積みの状況(西より)

# 図版12　居村古墳群

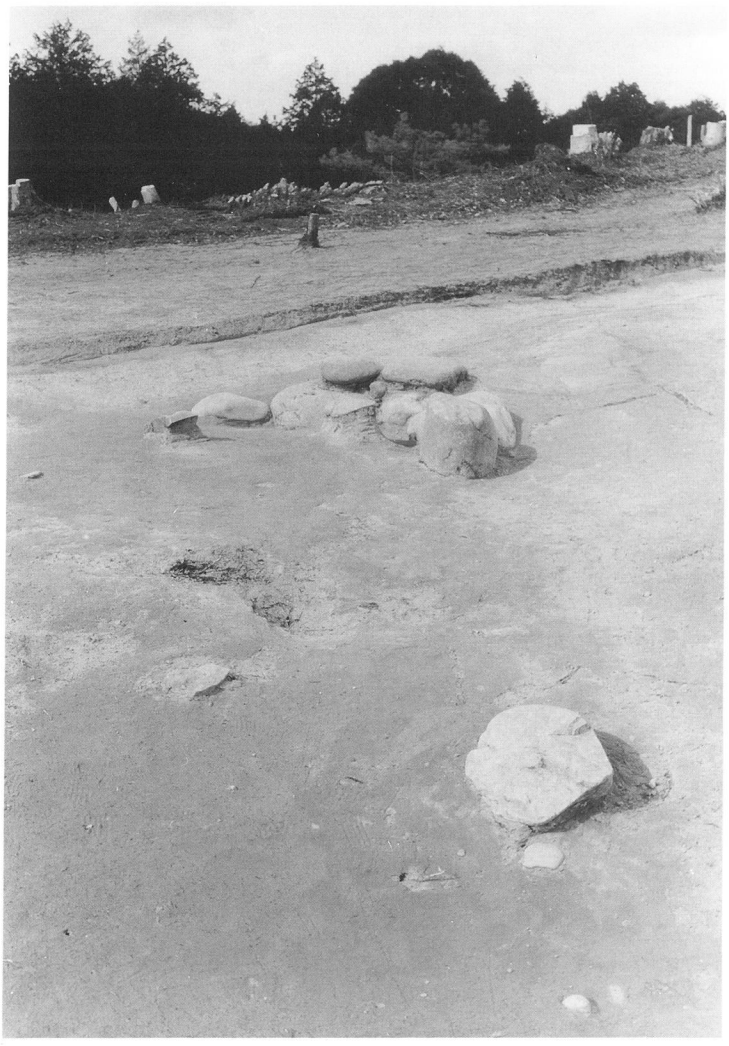
1.　2号墳玄室内耳環出土状況（南東より）

2.　2号墳石室内土器出土状況（西より）

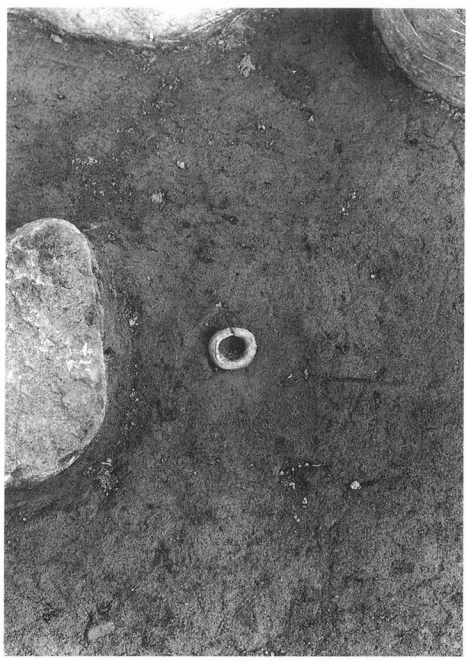


3.　2号墳全景および基底石・墓坑検出状況（南より）

1．　2号墳完掘状況(南より)



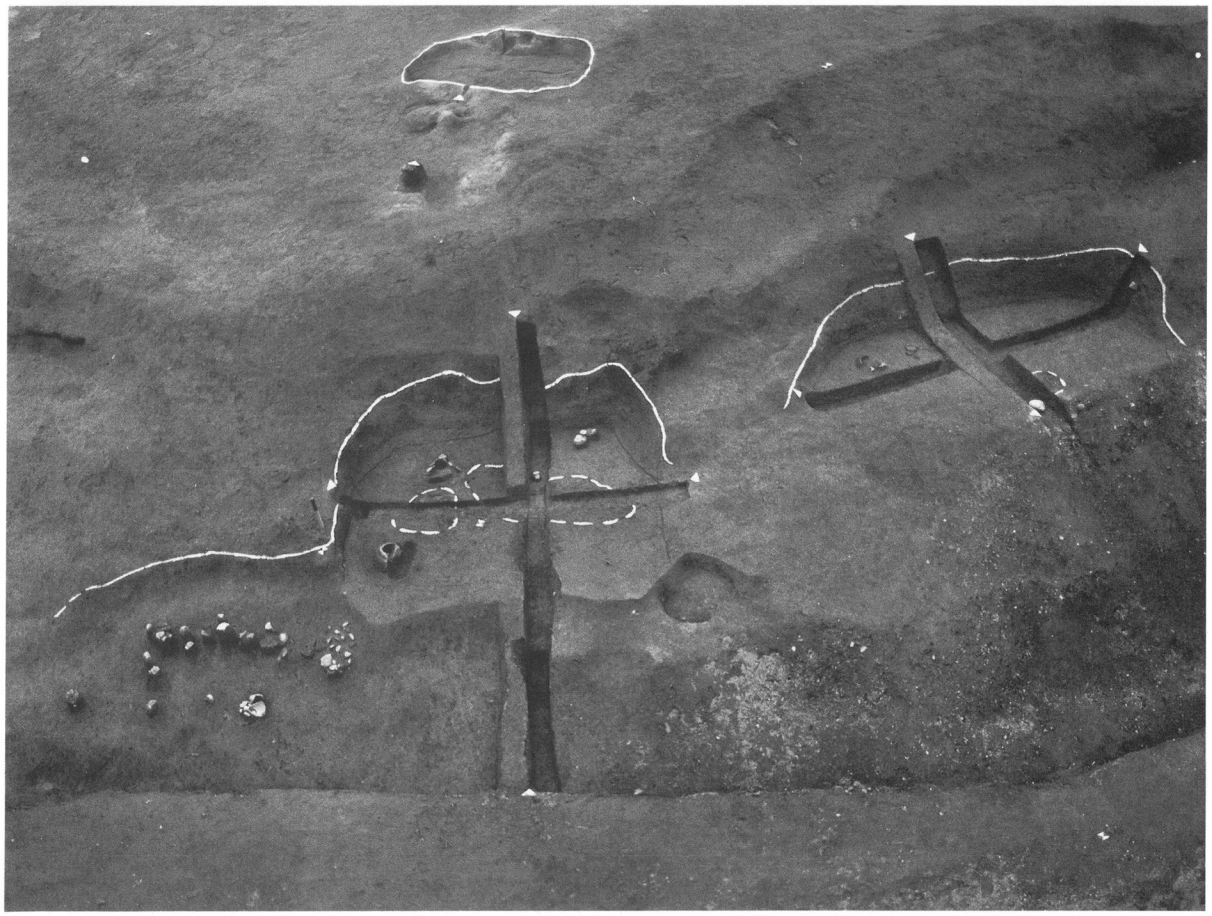
2．　3号墳石室検出状況(南より)



3．　3号墳石室耳環出土状況
(西より)

# 図版14　居村遺跡

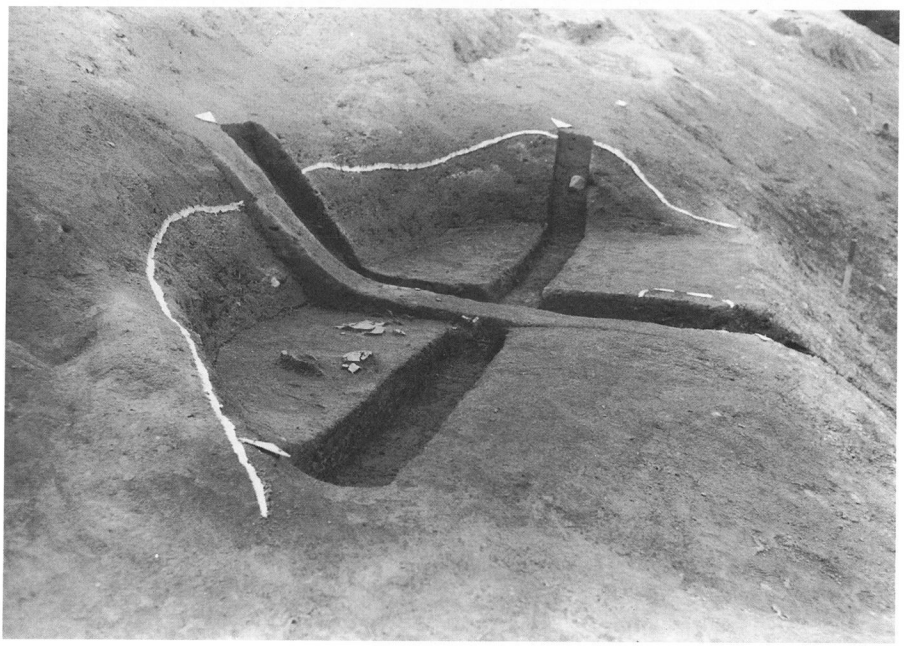
1．　調査区全景



2．　SB1・SB2・SB5検出状況（南より）

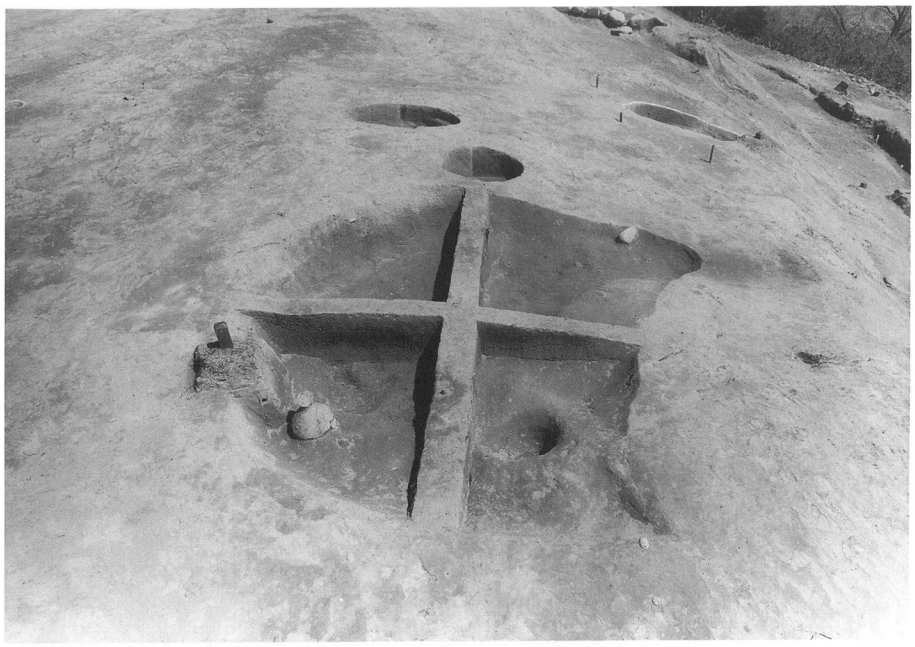
1．　ＳＢＩ検出状況
（東より）

2．　ＳＢＩ土器出土状況
（東より）

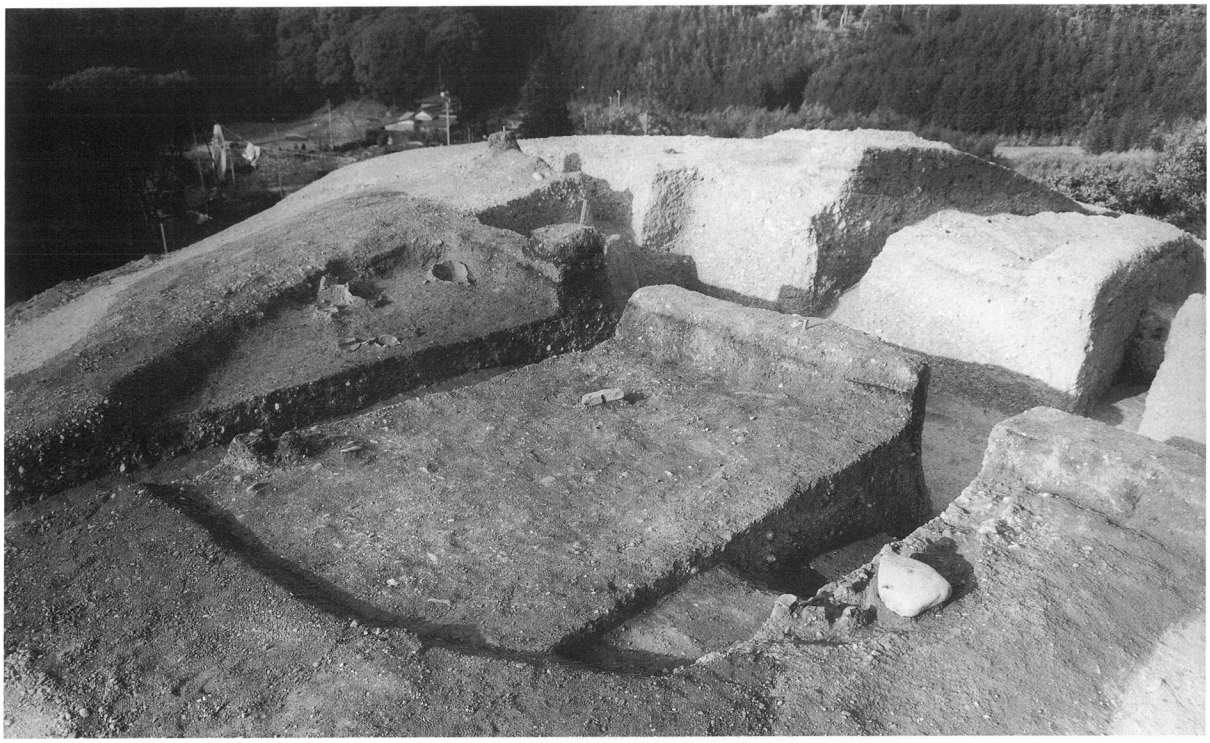


3．　ＳＢ２検出状況
（南西より）

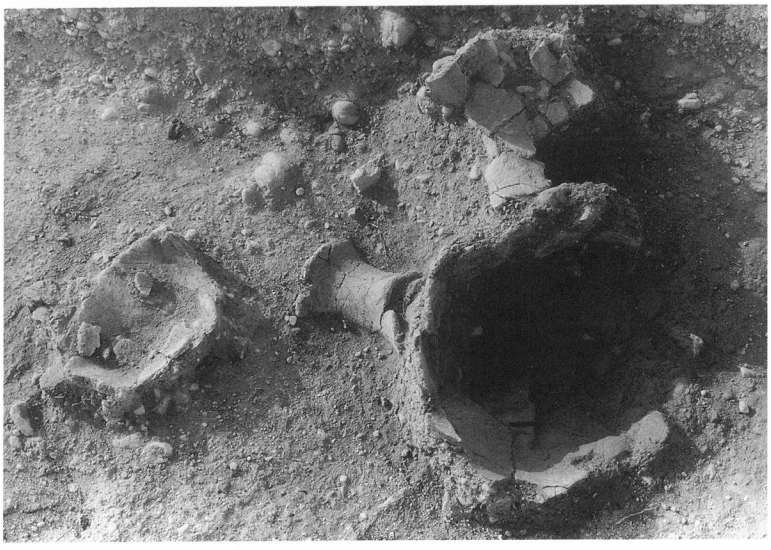
# 図版16　居村遺跡



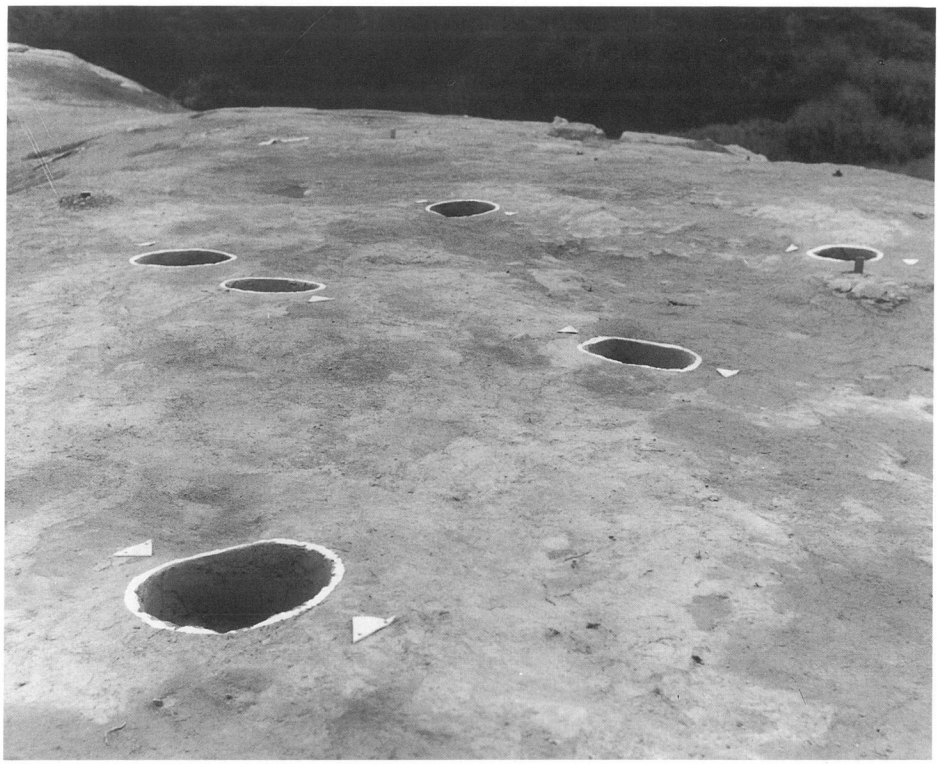
1．　ＳＢ３検出状況
（南西より）



2．　ＳＢ４検出状況（南より）



3．　ＳＢ４土器出土状況
（南東より）

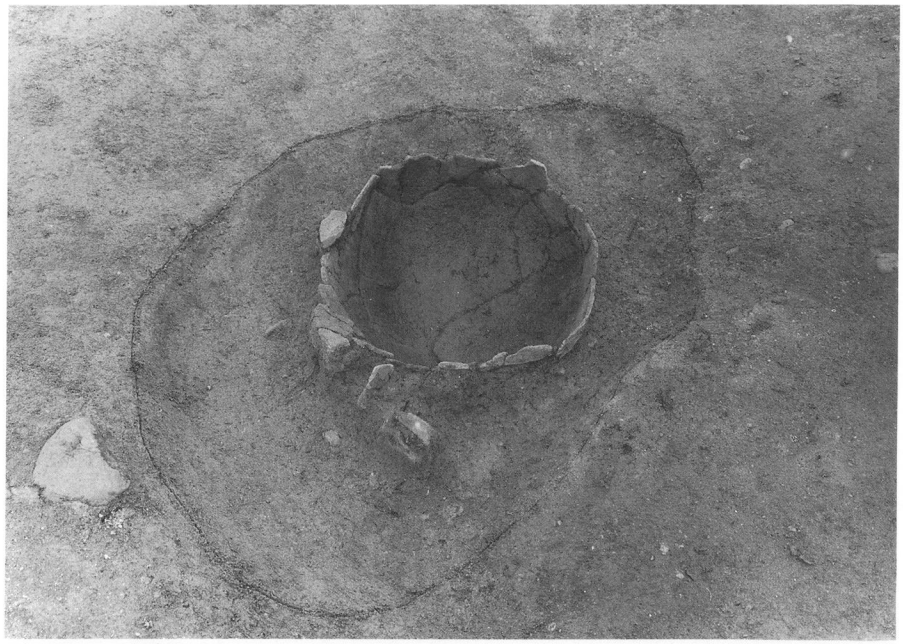


1.　ＳＨＩ検出状況
（西より）

2.　ＳＦ９・ＳＦ10・ＳＦ11
検出状況（南西より）

3.　壺形土器No.23出土状況
（南東側斜面、西より）

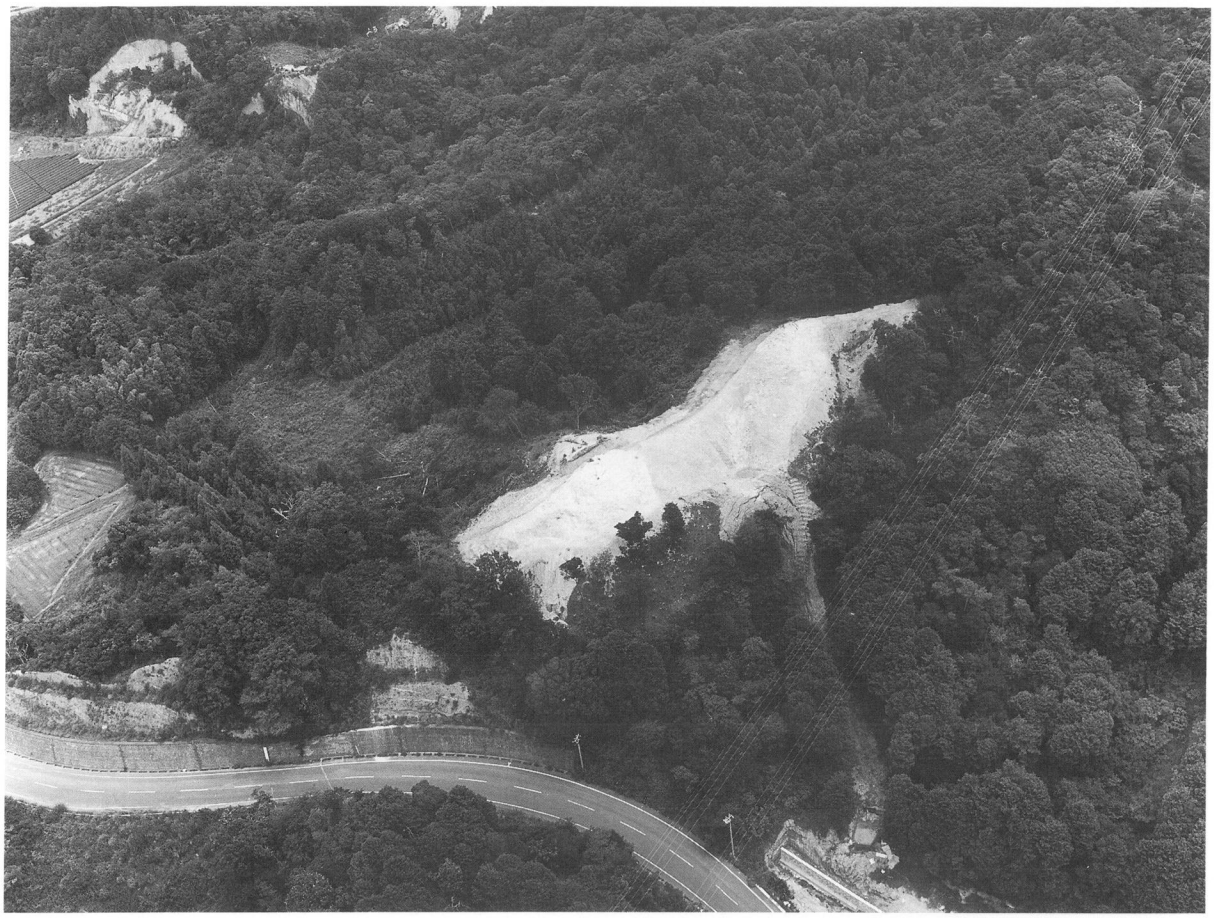
# 図版18　居村遺跡



1.　ＳＦＩ検出状況
（南より）

2.　ＳＦ２検出状況
（西より）

3.　甕形土器No.21検出状況
（南より）

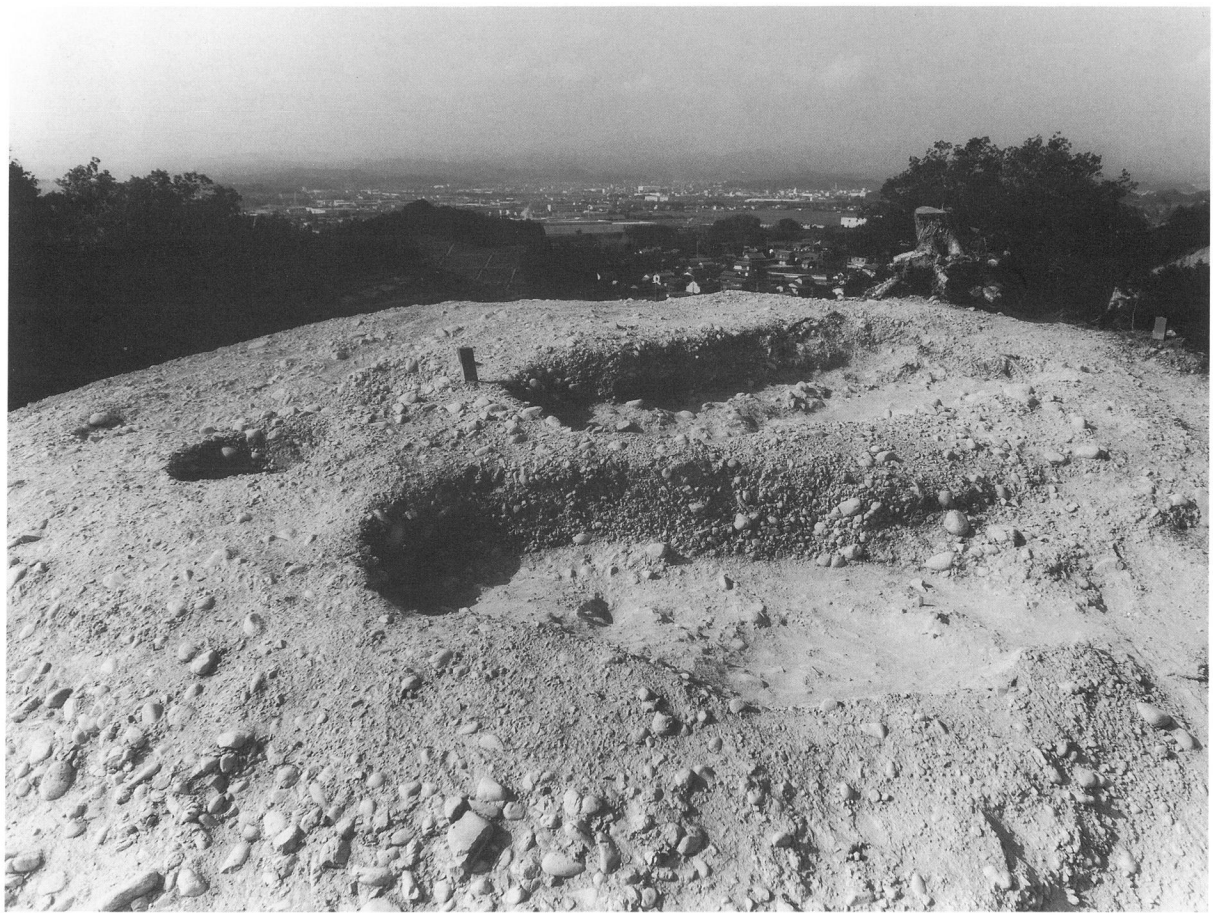


1．　若作古墳群（F地区）調査区全景（北西より）

2．　F1号墳墳丘全景（南より）

# 図版20　若作古墳群

1.　Ｆ１号墳墳丘全景(東より)



2.　Ｆ１号墳主体部(南西より)

1.　F 1 号墳第 1 主体部(東より)

2.　F 1 号墳第 2 主体部(南東より)

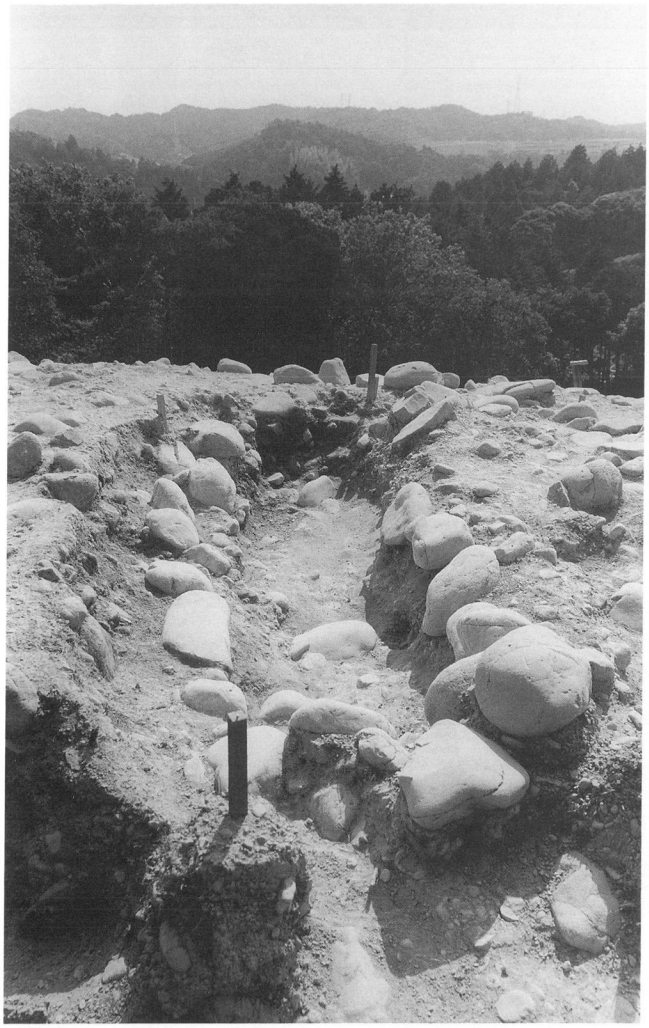
3.　F 1 号墳第 3 主体部(東より)

# 図版22　若作古墳群

1.　F 2 号墳墳丘全景
（北西より）

2.　F 2 号墳主体部
上面集石の状況
（南より）

3.　F 2 号墳墳丘全景
（南より）



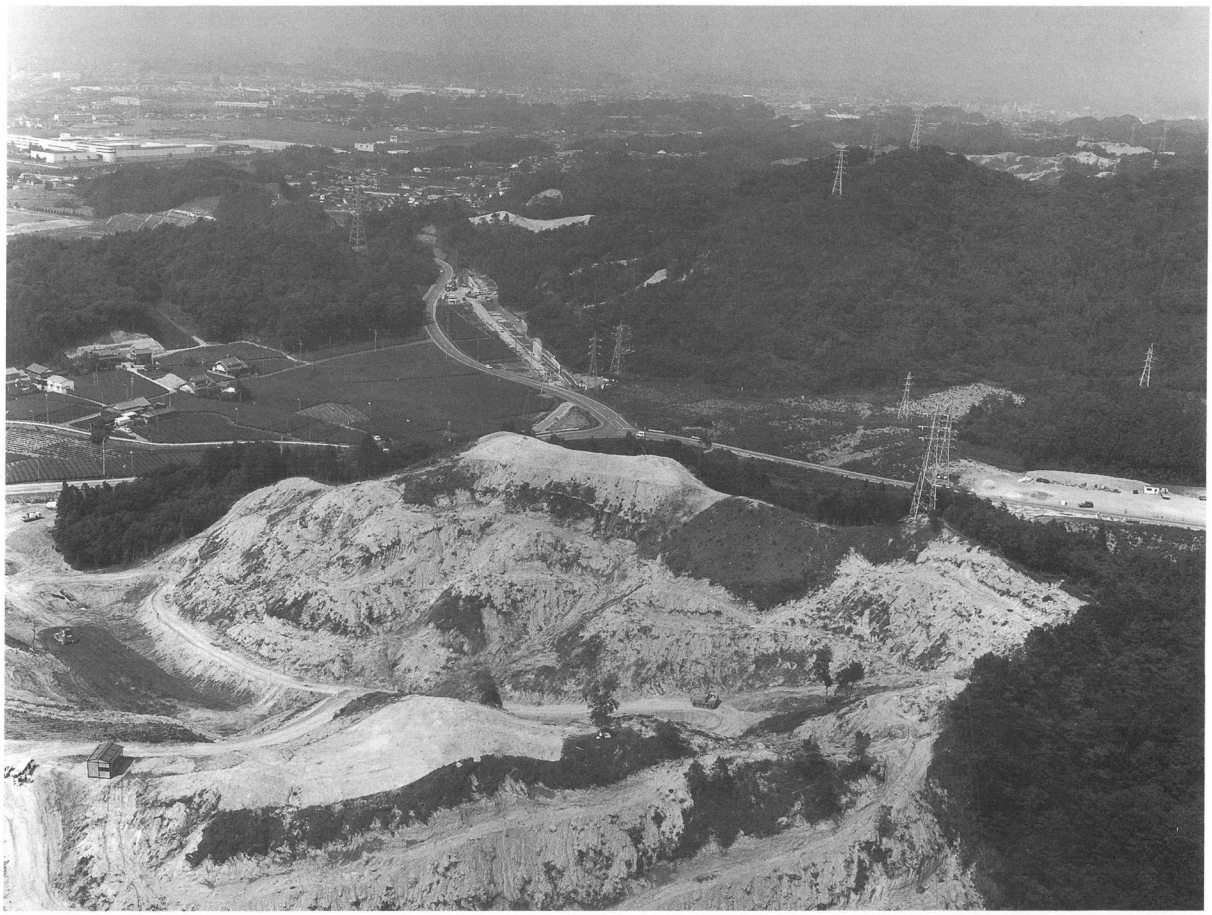
1．　F 2 号墳主体部検出状況(北東より)

2．　F 2 号墳刀子出土状況
(主体部上面集石下、西より)

3．　F 2 号墳刀子出土状況
(主体部床面、北より)

4．　F 2 号墳主体部完掘状況(南より)

# 図版24　上石野古墳群



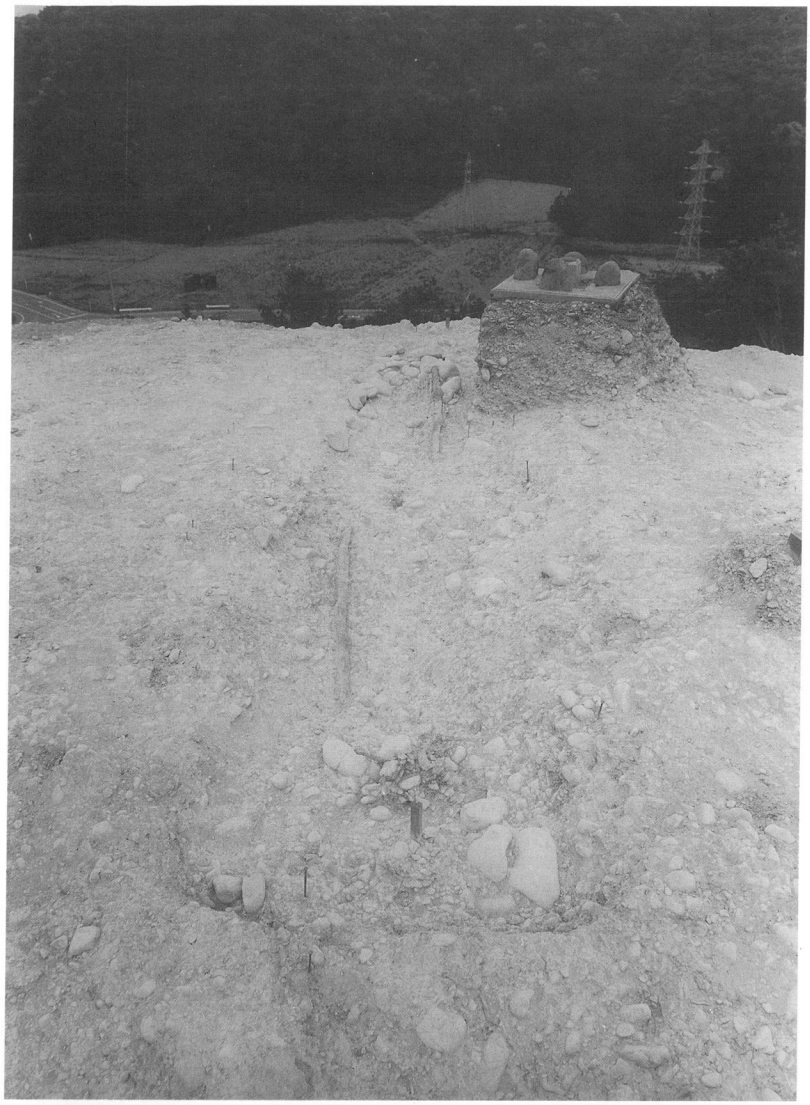
1．　上石野古墳群調査区全景（南西より）

2．　上石野古墳群調査区全景（北より）

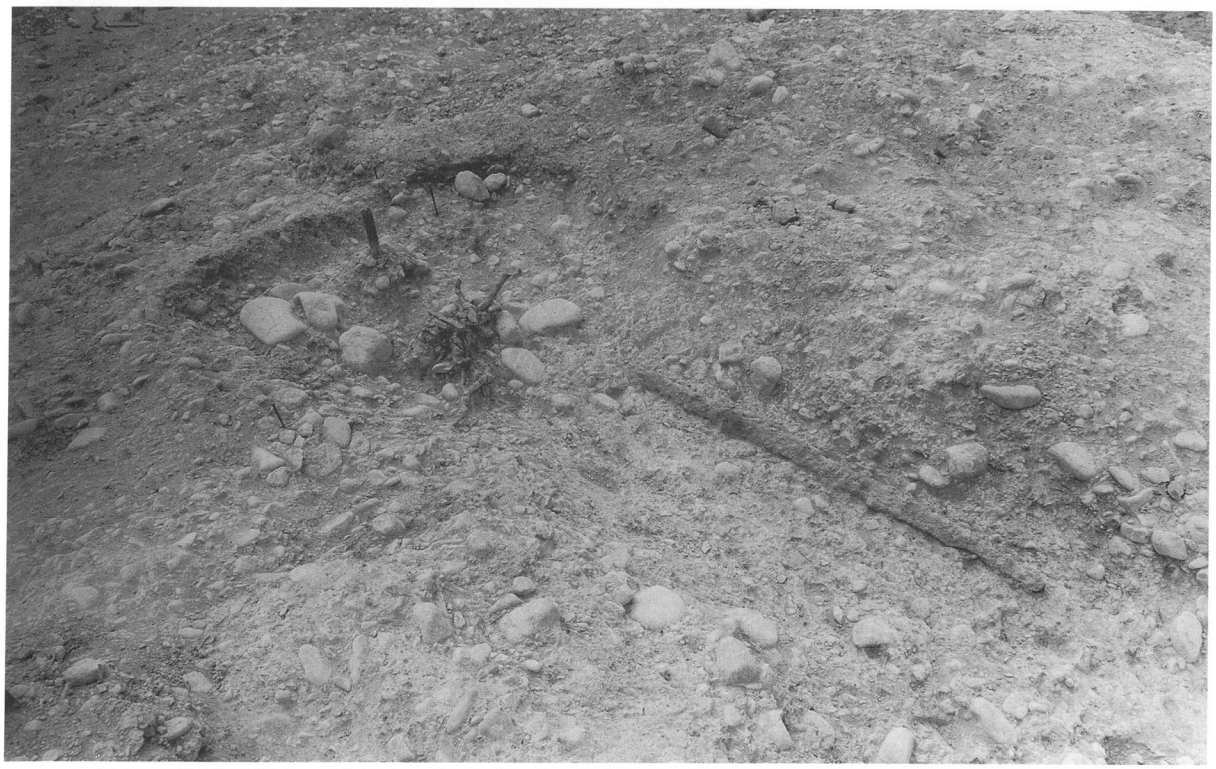
1.　1号墳墳丘全景(北東より)

2.　1号墳主体部検出状況(北東より)

# 図版26　上石野古墳群

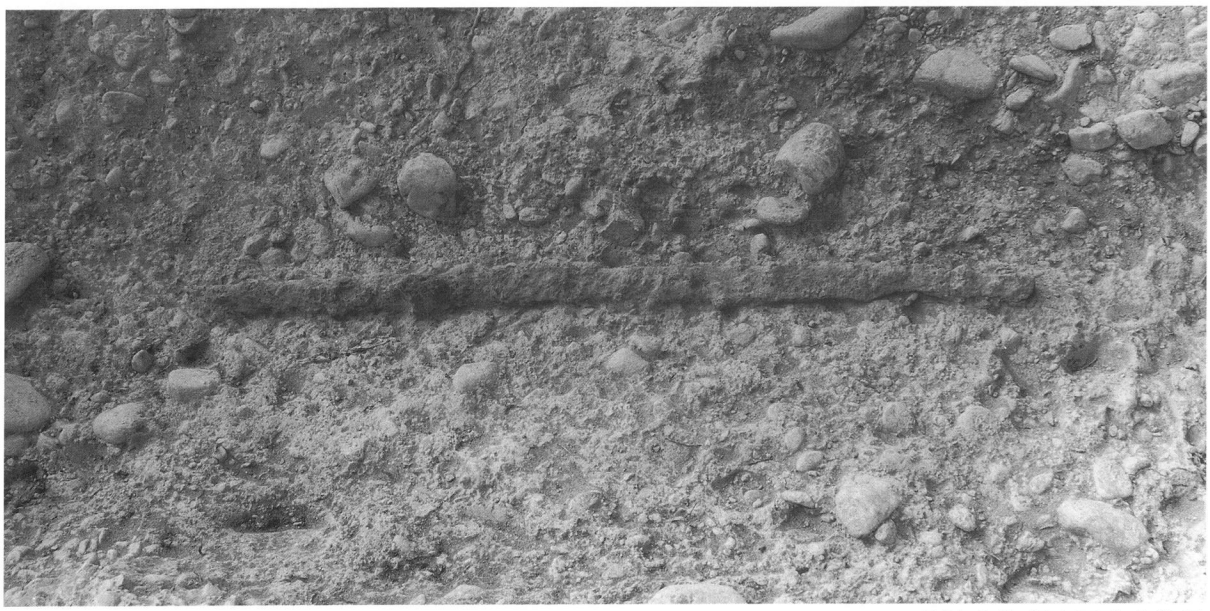


1.　1号墳主体部検出状況
（西より）



2.　1号墳主体部西側小口遺物出土状況（南東より）

1.　Ⅰ号墳主体部大刀・鉄鏃出土状況
（主体部東側、北より）



2.　Ⅰ号墳主体部大刀出土状況
（主体部西側、南より）

3.　Ⅰ号墳主体部鉄鏃・鎌出土状況
（東より）

4.　Ⅰ号墳墳丘南側周溝状遺構
（東より）

# 図版28　上石野古墳群

1.　2号墳墳丘全景(北より)

2.　2号墳主体部検出状況(北より)

3.　2号墳第Ⅰ主体部完掘状況
(南東より)

4.　2号墳主体部完掘状況
(南より)

1.　3号墳・4号墳調査区全景(北西より)

2.　3号墳墳丘全景(西より)

# 図版30　上石野古墳群

1.　3号墳墳丘全景(南東より)

2.　3号墳主体部全景(南東より)

1.　3号墳主体部全景
（南西より）

2.　3号墳主体部
東側小口の状況
（北西より）

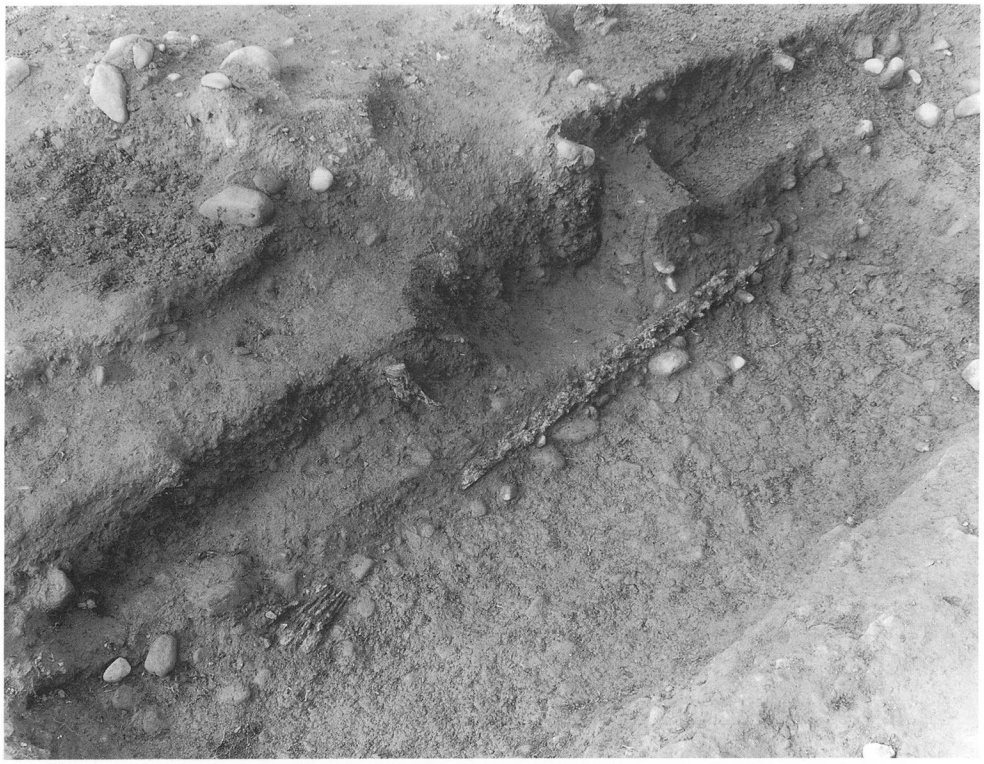
3.　3号墳主体部
西側小口の状況
（南より）

図版32　上石野古墳群

1．　3号墳主体部木棺痕跡
（西より）

2．　3号墳主体部
東側小口断面（西より）

3．　3号墳主体部
西側小口断面（東より）



1.　3号墳主体部
遺物出土状況
（南より）

2.　3号墳大刀出土状況（南東より）

3.　3号墳鉄鏃出土状況
（南より）

4.　3号墳主体部完掘状況
（北東より）

# 図版34　上石野古墳群

1.　4号墳墳丘全景(西より)

2.　4号墳墳丘全景(南より)

1．　4号墳主体部検出状況
（北西より）

2．　4号墳第Ⅰ主体部検出状況
（東より）

# 図版36　上石野古墳群

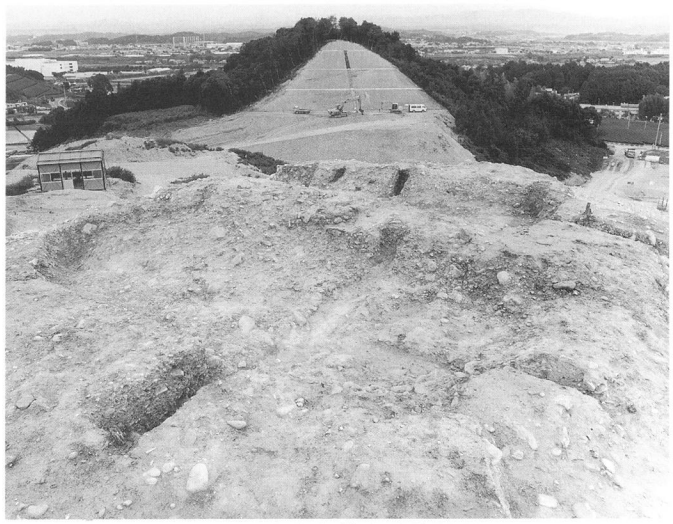
1.　4号墳第Ⅰ主体部
鉄剣・鉄鏃出土状況
（南西より）

2.　4号墳第Ⅰ主体部
鉄鏃出土状況
（南より）

3.　4号墳第Ⅰ主体部
東側小口断面
（西より）

1.　4号墳第2主体部検出状況
（西より）

2.　4号墳第2主体部
刀子・ガラス小玉出土状況（北より）



3.　4号墳主体部完掘状況
（東より）

4.　4号墳墳丘断面
（北側斜面・西より）

図版 38　居村古墳群

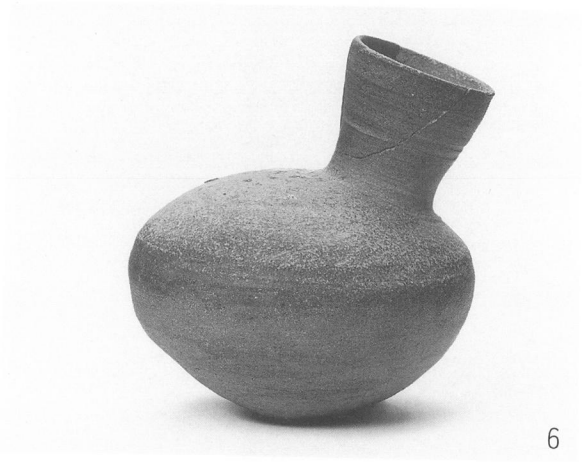
1

2

3

4

5


6

7

9

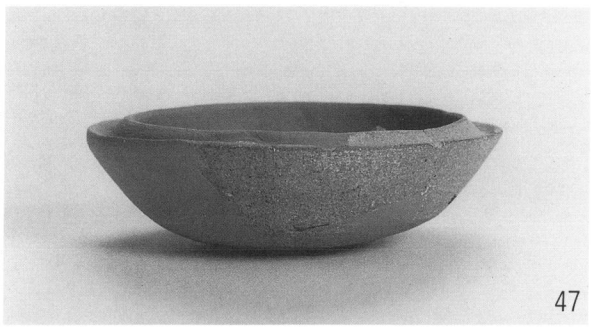
10

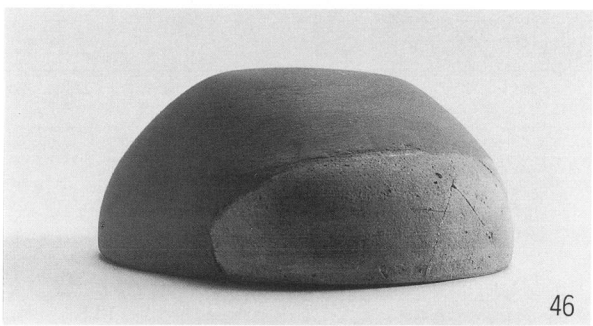
11

12

13

14


47

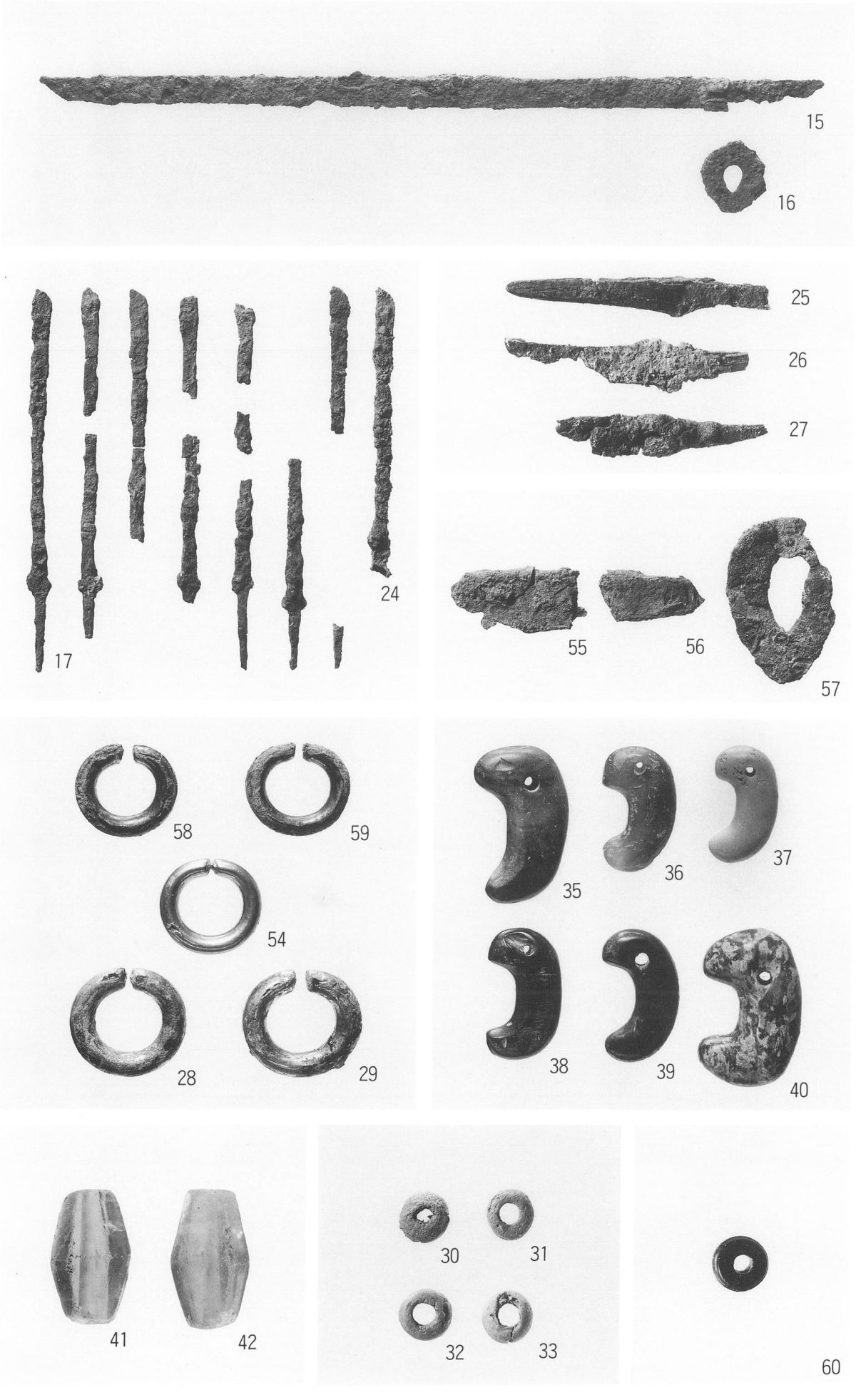

46

51

52

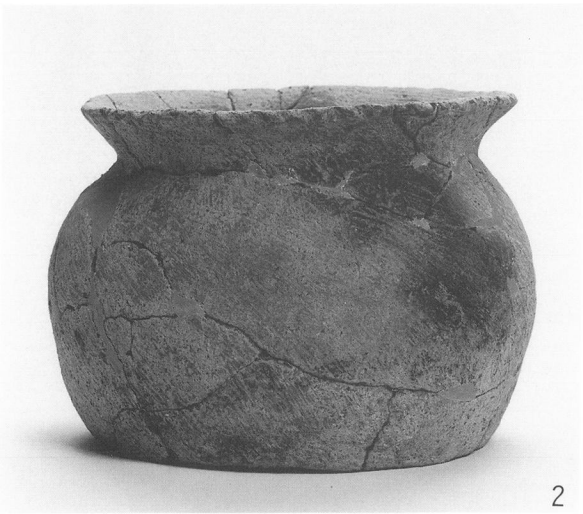
1～7，11～14

図版40　居村古墳群


15
16
17
24
25
26
27
55
56
57
58
59
54
28
29
35
36
37
38
39
40
41
42
30
31
32
33
60

1

4

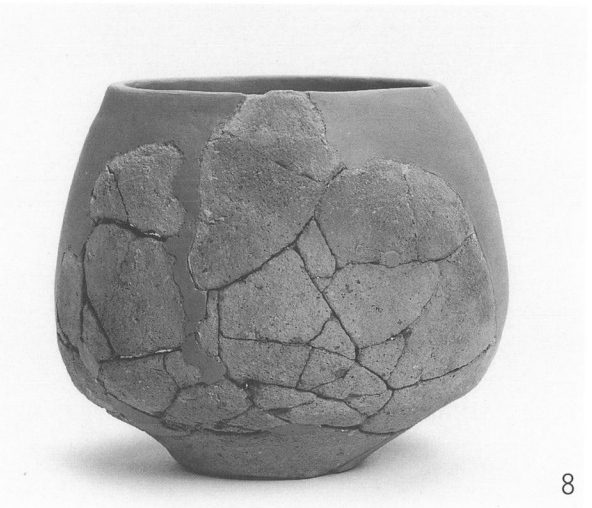

2

6

7

3

9


8

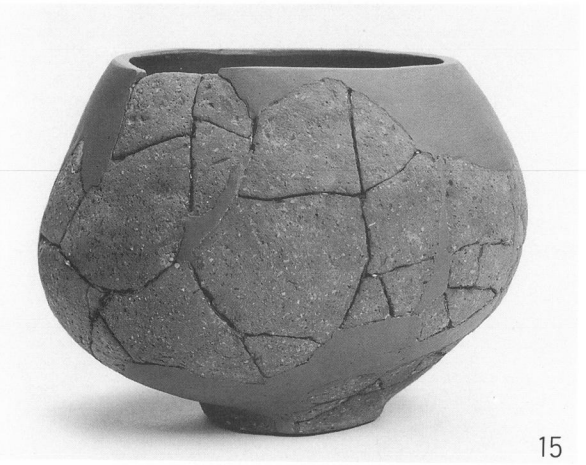
図版42　居村遺跡

11

16

14

17


15

10

28

18

22

20

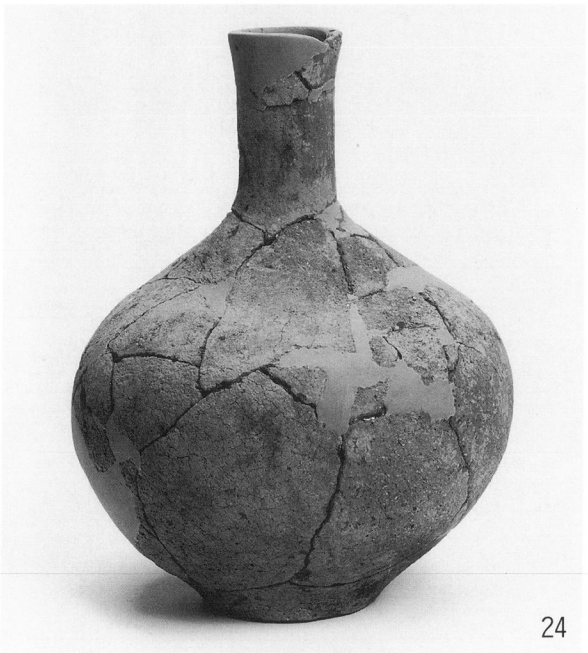
21

32

33

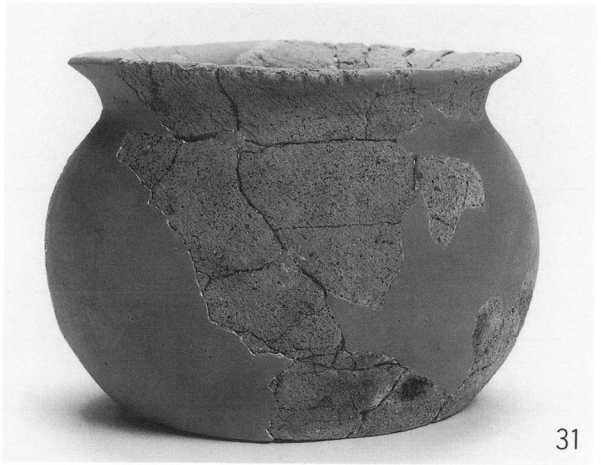
図版44　居村遺跡

23

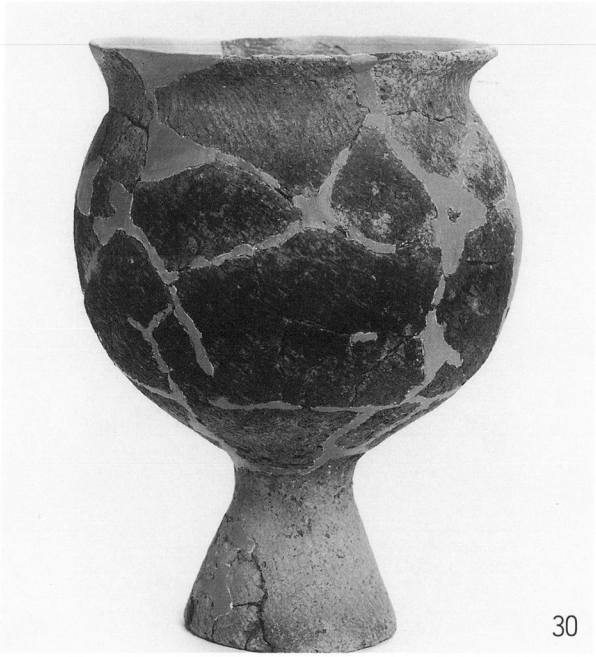

24

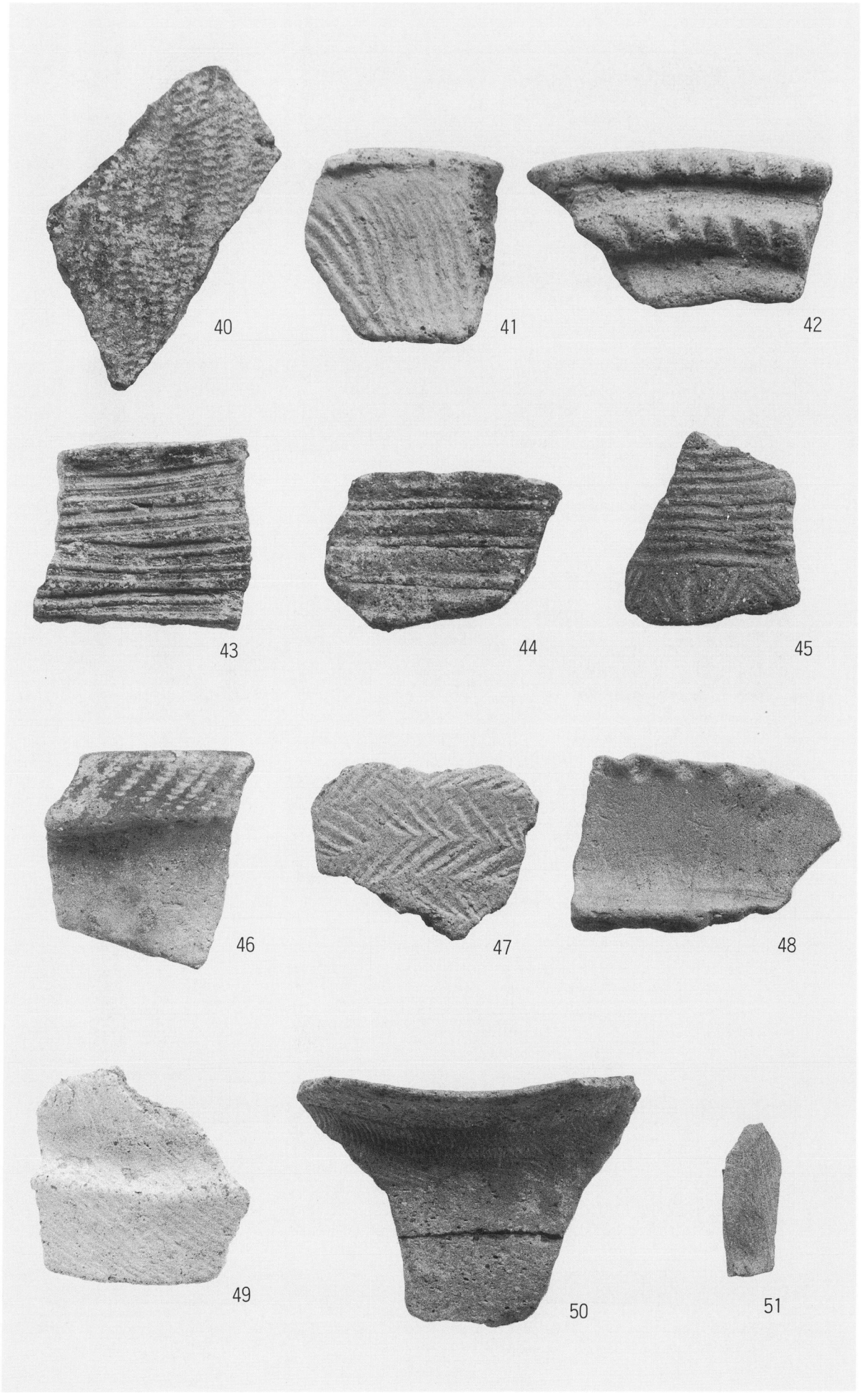
25

26

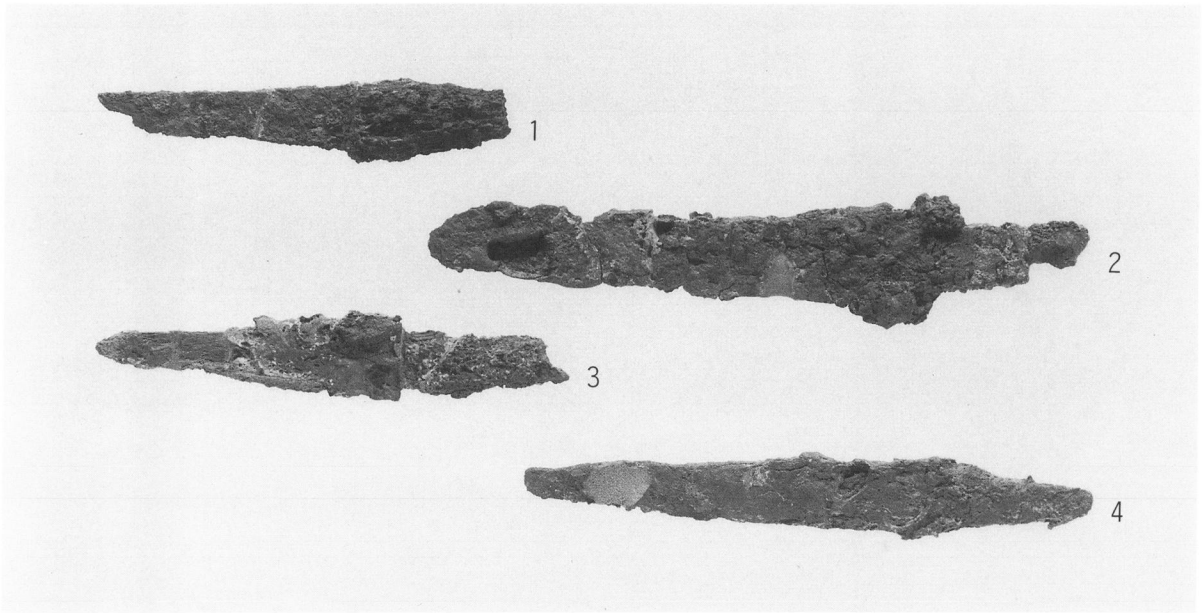

31

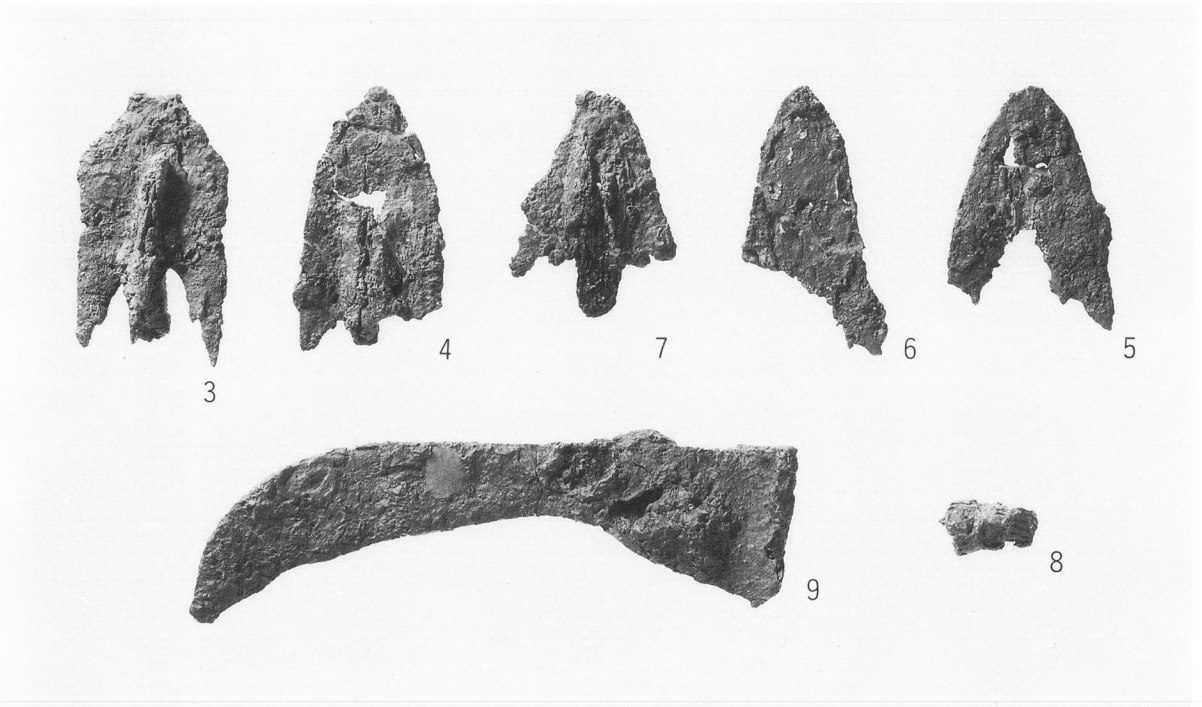
29

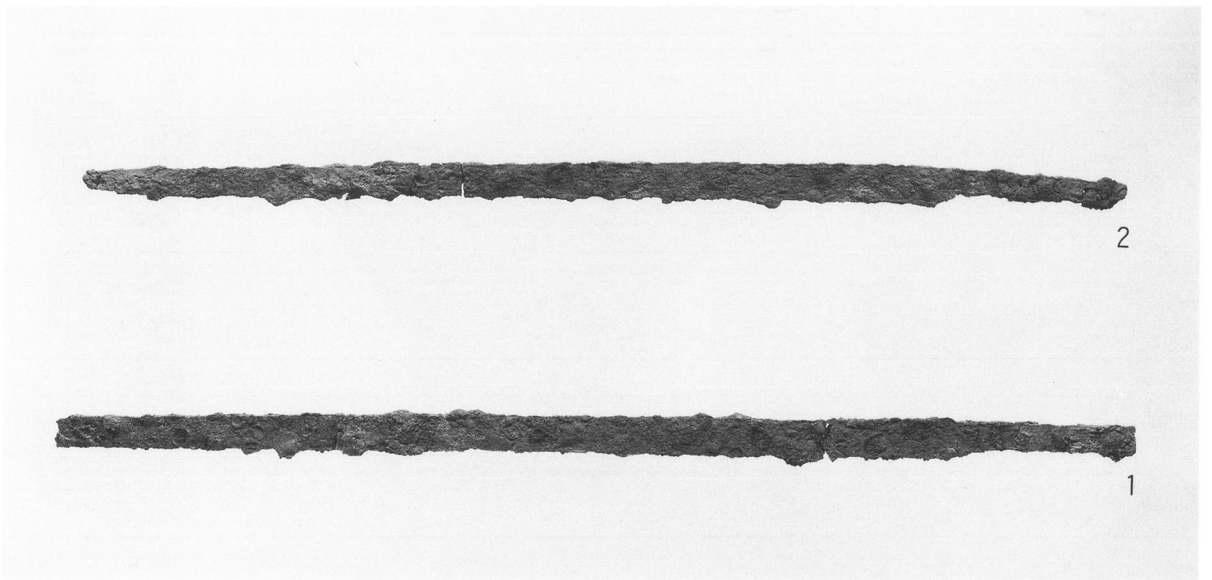

30


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

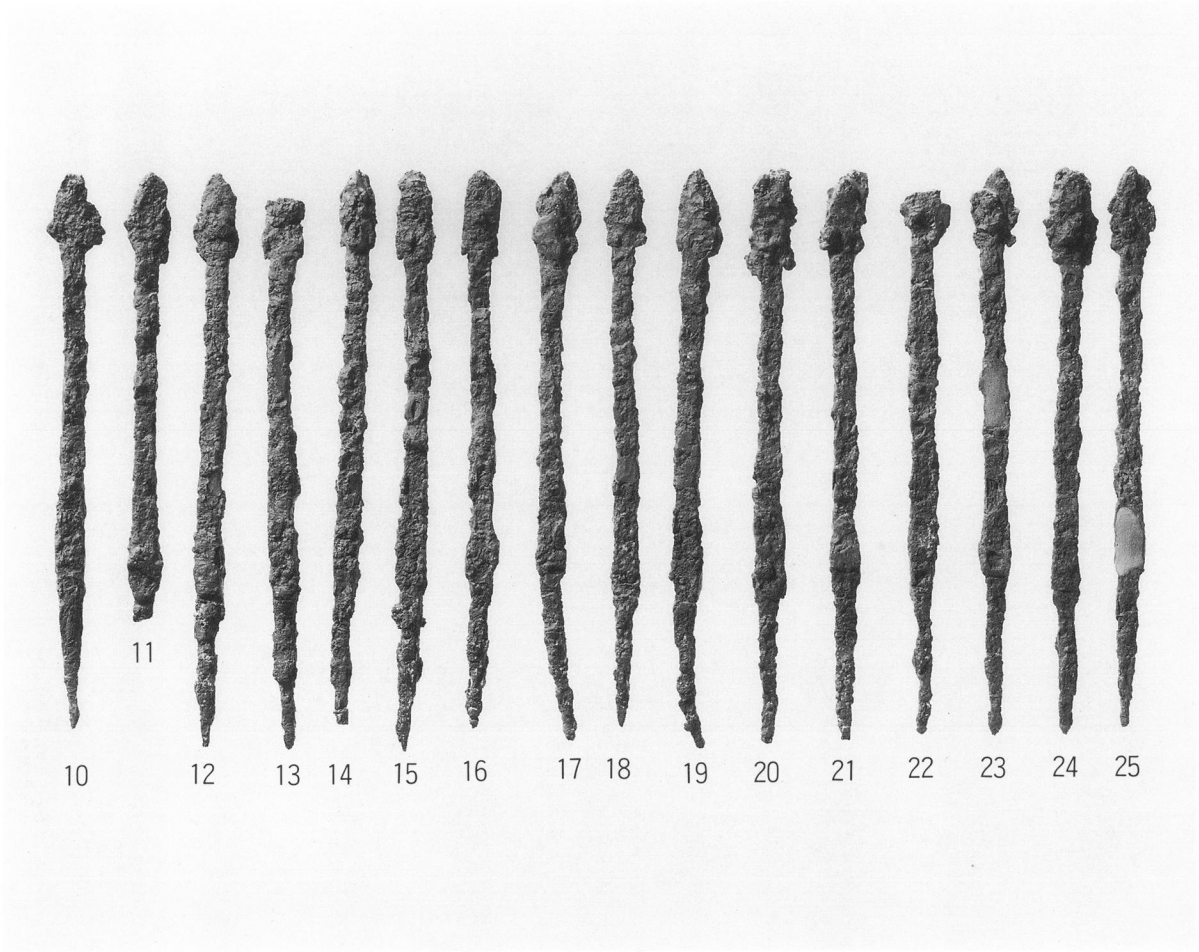
# 図版46　若作古墳群・上石野古墳群

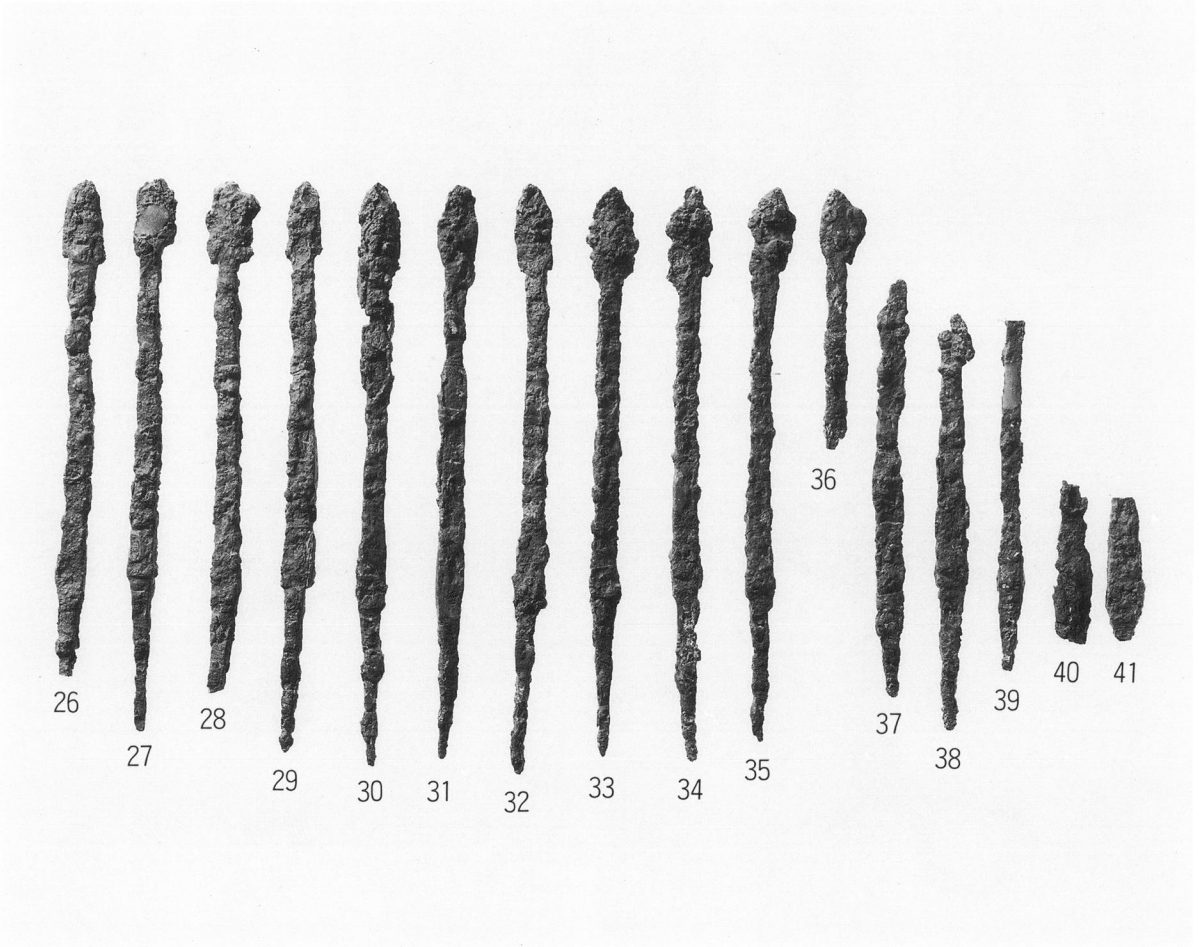


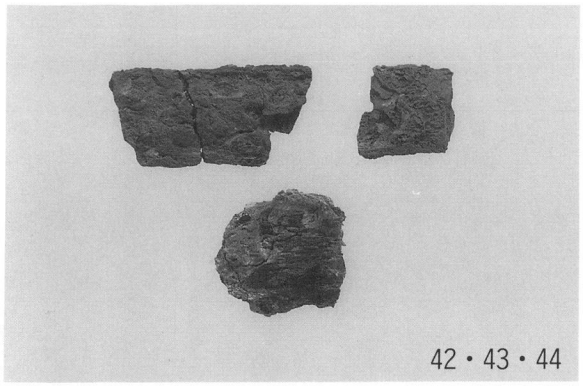



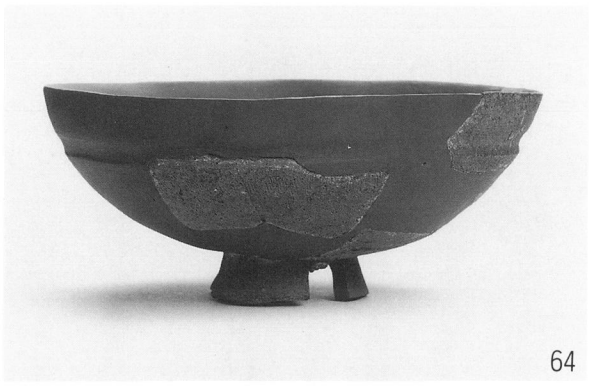

上段：若作古墳群　中・下段：上石野古墳群

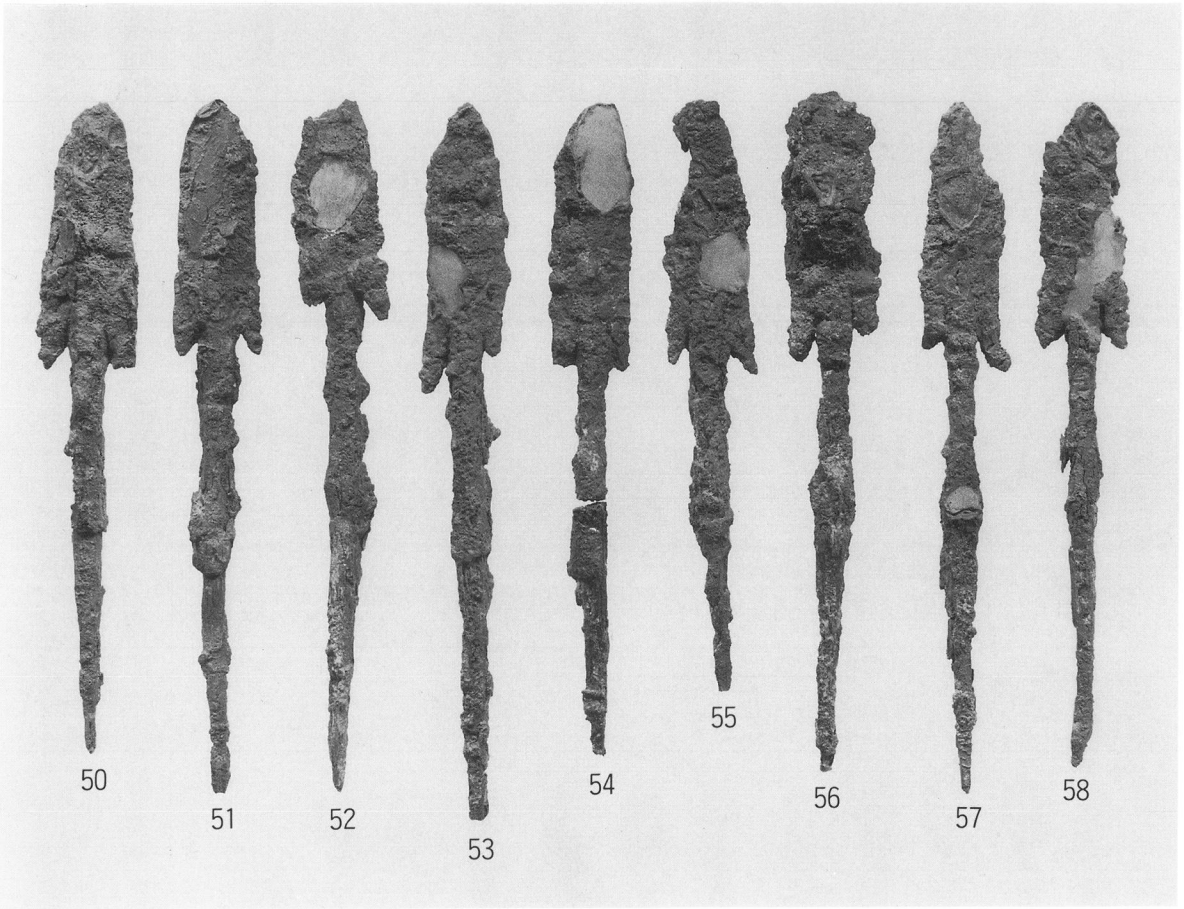

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

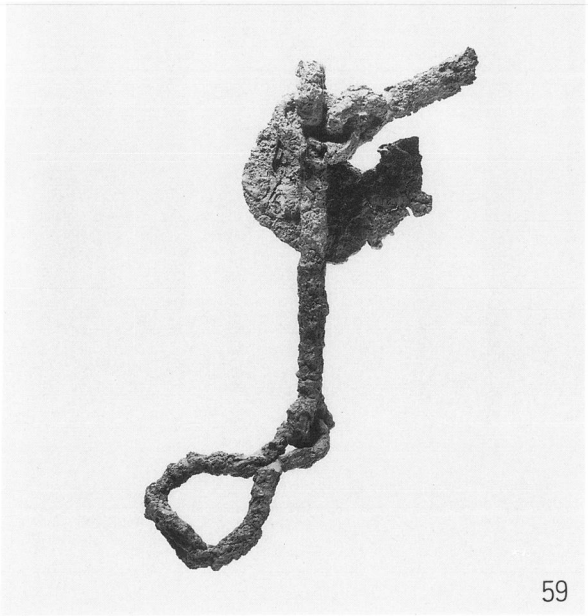

26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

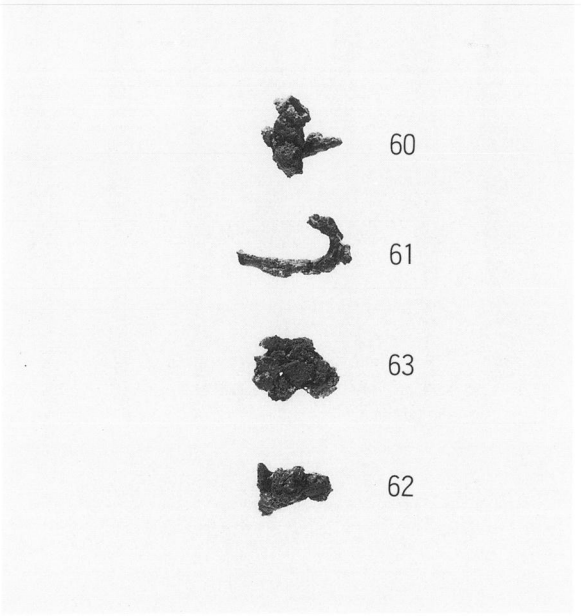
図版48　上石野古墳群

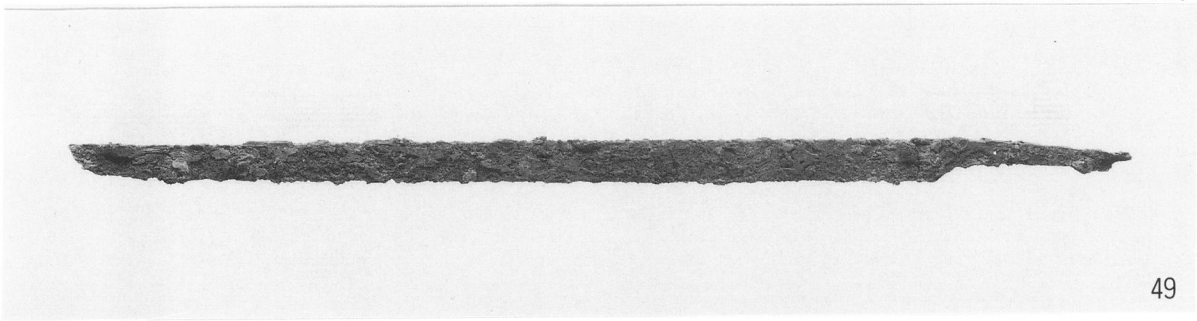

42・43・44

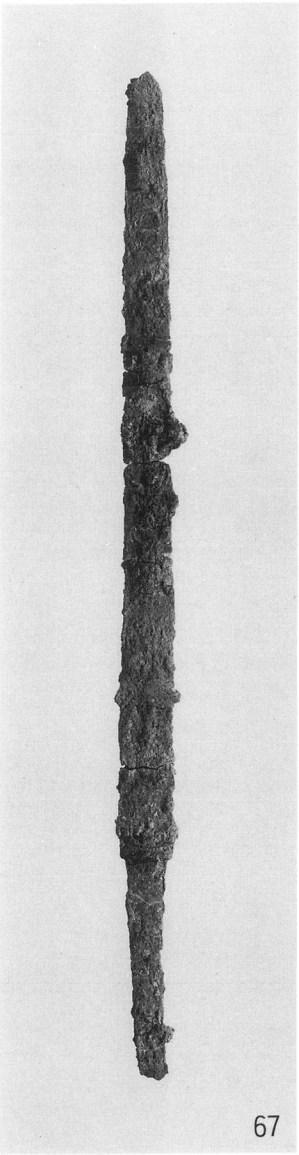

64

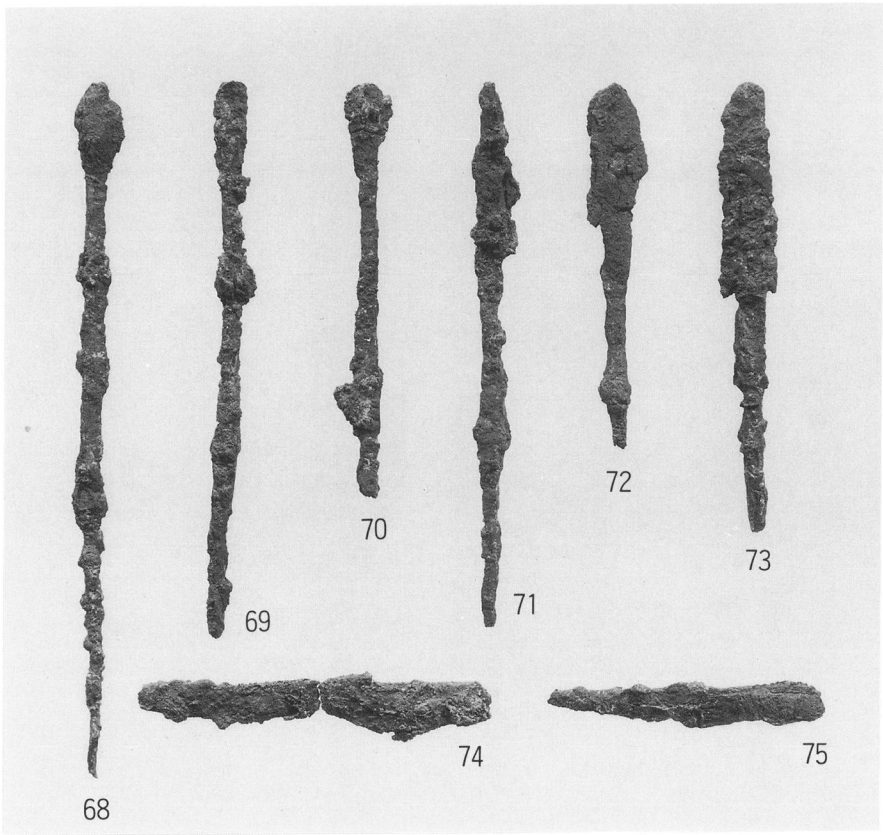


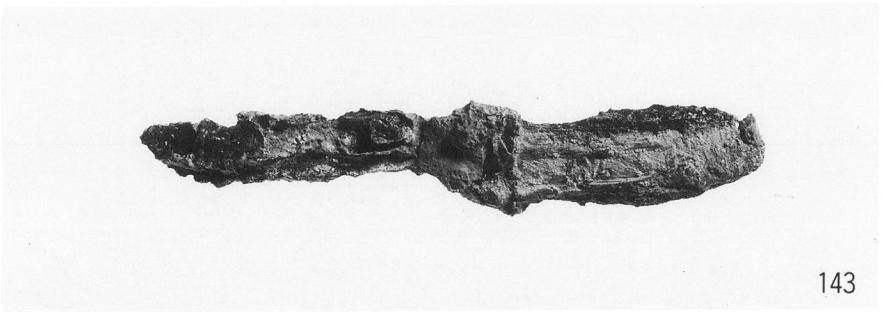


59

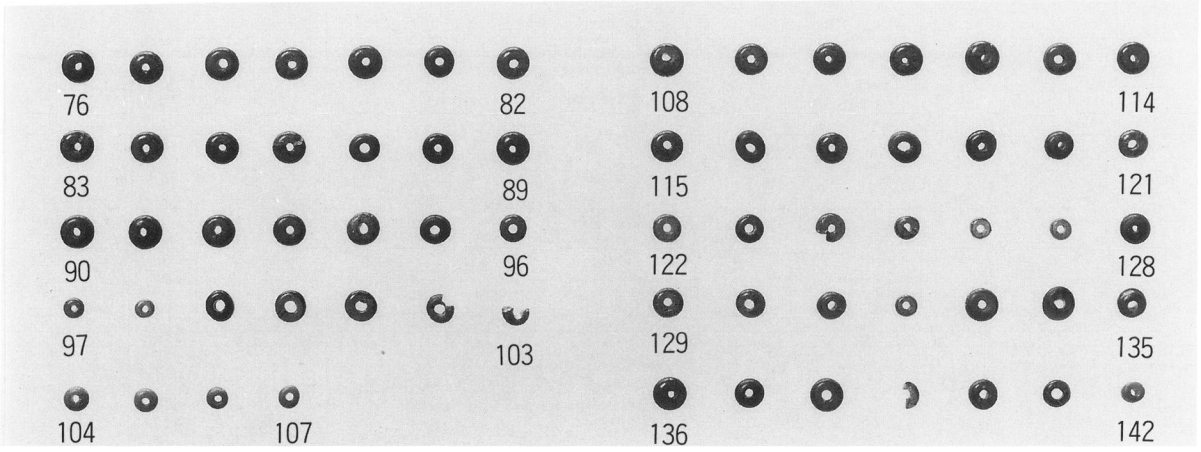



49


67


68
69
70
71
72
73
74
75


143


76
82
83
89
90
96
97
103
104
107
108
114
115
121
122
128
129
135
136
142

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | おがさやまそうごううんどうこうえんないいせきぐん |
| 書名 | 小笠山総合運動公園内遺跡群 |
| 副書名 | 平成6・7・8年度小笠山総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 |
| シリーズ番号 | 第95集 |
| 編著者名 | 長谷川　睦 |
| 編集機関 | 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 |
| 所在地 | 〒422　静岡県静岡市谷田23—20　　Tel054—262—4261 |
| 発行年月日 | 1997年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 居村古墳群<br>・居村遺跡 | 静岡県<br>掛川市平野 | 22213 | — | 34度<br>44分<br>50秒 | 137度<br>58分<br>48秒 | 19950901<br>～<br>19960331 | 3,310 | 小笠山総合運動公園建設 |
| 若作古墳群 | 静岡県<br>袋井市愛野 | 22216 | 187 | 34度<br>44分<br>45秒 | 137度<br>58分<br>35秒 | 19960601<br>～<br>19960630 | 1,417 | |
| 上石野古墳群 | 静岡県<br>袋井市愛野 | 22216 | — | 34度<br>44分<br>30秒 | 137度<br>58分<br>23秒 | 19960401<br>～<br>19961003 | 2,444 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な年代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 居村古墳群<br>・居村遺跡 | 集落<br>・古墳 | 弥生中期<br>～古墳後期 | 竪穴住居跡・土坑<br>掘立柱建物跡<br>横穴式石室 | 弥生土器<br>須恵器・土師器<br>鉄鏃・耳環・玉類 | 丘陵立地の弥生集落<br>円礫積み横穴式石室 |
| 若作古墳群 | 古墳 | 古墳中期～<br>古墳後期 | 木棺直葬墳 | 刀子 | 初期群集墳（木棺直葬墳） |
| 上石野古墳群 | 古墳 | 古墳中期<br>～古墳後期 | 木棺直葬墳 | 大刀・剣・鉄鏃・鎌・馬具・須恵器・土師器・ガラス小玉・刀子 | 初期群集墳（木棺直葬墳） |

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第95集

# 小笠山総合運動公園内遺跡群

平成6・7・8年度小笠山総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

居村古墳群
居村遺跡
若作古墳群（Ｆ地区）
上石野古墳群

1997年３月31日

編集
発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422　静岡市谷田23番20号
TEL（054）262-4261（代）
FAX（054）262-4266

印刷所　黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目４番25号
TEL（054）286-0236